日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XXVI

松 蔭 東 遺 跡 中曽根遺跡 Ⅱ 大 館 跡 Ⅰ

2 0 0 8

新 潟 県 教 育 委 員 会 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XXVI

2 0 0 8

新 潟 県 教 育 委 員 会 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

日本海沿岸東北自動車道は、新潟市の新潟空港インターチェンジから日本海に沿って北上し、山形県を経て秋田自動車道と接続し、秋田県河辺ジャンクションに至る高速自動車道です。新潟県内では胎内市の中条インターチェンジまでが平成14年度に完成しています。

高速自動車道建設を取り巻く状況は厳しいものがありますが、平成15年末の国土開発幹線自動車道建設会議(国幹会議)において、日本海沿岸東北自動車道の中条-朝日間は、旧日本道路公団が有料道路として建設を進めることになりました。その後、公団の分割・民営化に伴い、平成17年10月に設立された東日本高速道路株式会社に引き継がれましたが、平成18年2月の国幹会議において、荒川-朝日間については国土交通省が新直轄道路として建設することになりました。日本海沿岸東北自動車道は、この地域内外の経済的な交通・流通を促すだけでなく、救急患者の搬送・災害時の緊急輸送などの「命の高速道」としての役割も期待されており、早期の開通が望まれます。

本書は、この日本海沿岸東北自動車道建設に先立って発掘調査を実施した「松蔭東遺跡」、「中曽根遺跡」、「大館跡」の報告書です。松蔭東遺跡は中世主体の遺跡で、掘立柱建物などの遺構が見つかり、周辺の同時代の遺跡との関連が注目されます。中曽根遺跡は古代の遺跡で、掘立柱建物や井戸などの遺構、須恵器・土師器などの遺物から、古代の集落の様子をかいま見ることができます。大館跡は中世と縄文・弥生時代の遺跡です。強固な防御施設として機能した館北側の土塁や堀の数々は、15世紀以降に築かれたことが分かりました。旧地形を巧みに改変した大規模な普請の様子を今に伝えると共に、大館跡の成立年代を考える上でも貴重な調査事例となりました。今回の発掘調査が、考古学研究者はもとより、地域の歴史を知り、学ぼうとする多くの方々に活用されることを願っております。

最後に、この調査に参加された地元の方々や区長並びに荒川町・神林村・村上市教育委員会には多大なる御協力と御援助を賜りました。また、国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所並びに同羽越河川国道事務所、東日本高速道路株式会社新潟管理局村上工事事務所、荒川沿岸土地改良区には、調査に際して格別のご配慮をいただきました。ここに厚くお礼申し上げます。

平成 19 年 12 月

新潟県教育委員会

教育長 武 藤 克 己

- 1 本書は新潟県岩船郡神林村大字牧目字松蔭 1292 ほかに所在する松蔭東遺跡、同郡荒川町大字金屋字中曽根 725 ほかに所在する中曽根遺跡、同県村上市大字天神岡字大館ほかに所在する大館跡の発掘調査記録である。
- 2 本発掘調査は、日本海沿岸東北自動車道(以下、日沿道とする)建設に伴い、新潟県教育委員会(以下、県教委とする)が国土交通省から受託したものである。調査は県教委が主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団(以下、埋文事業団とする)に委託し、埋文事業団の管理・監督のもと加藤建設株式会社が平成18年度に行った。
- 3 整理作業および報告書作成に係る作業は、平成 18 年度に埋文事業団指導のもと、加藤建設株式会社がこれにあたった。本書は、本文、遺構・遺物観察表、遺構・遺物実測図版、写真図版からなる。図版の縮尺はそれぞれの図版に記した。また遺物写真については原則として実測図と縮尺を合わせた。
- 4 出土遺物および調査・整理・自然科学分析に係る各種資料(含観察データ)は、一括して県教委が新潟県埋蔵文 化財センターにおいて保管・管理している。
- 5 遺物の註記は、松蔭東遺跡の省略記号「06 マツカ」、中曽根遺跡の省略記号「06 中ソネ」、大館跡の省略記号「06 大タテ」として、出土位置や層位を続けて記した。
- 6 本書で表記している国家座標は、測量法改正(平成14年)以前の日本測地系の数値を使用している。また標高 については東京湾平均海面(T-P)を使用している。
- 7 本書で示す方位はすべて真北である。また本文で述べる軸方位は真北に対する東西方向の傾きである。
- 8 本書に掲載した遺物番号は遺跡ごとに種別に係りなく通し番号とし、本文および観察表・実測図版・写真図版の番号は一致している。
- 9 本文中の註は脚注とし、引用文献は筆者および発行年を文中に[]で示し、巻末に一括して掲載した。
- 10 航空写真撮影は、J.T 空撮に委託した。
- 11 自然科学分析は、すべて株式会社パレオ・ラボに委託した。
- 12 大館跡出土の石器の石材は竹之内耕氏(糸魚川市立フォッサマグナミュージアム)にご教示いただいた。
- 13 遺構・遺物図の各種図版作成・編集に関しては以下の通りである。遺構図は Adobe 社 Illustrator を用い、遺構 写真はリバーサルフィルムで撮影したものをスキャニングし、遺物写真はデジタルカメラで撮影し、入稿を行った。 また遺物図版に関してもスキャニングし入稿した。
- 14 平成 17 年度以前に刊行した報告書には、法定路線名の日本海沿岸東北自動車道 < 略称、日沿道 > と東日本高速 道路株式会社の営業路線名である日本海東北自動車道 < 略称、日東道 > が、事業者の意向により使用され、結果 として両路線名称が一冊の報告書に混在していた。しかし平成 17 年度末に高速自動車国道法第 6 条により荒川イ ンターチェンジの北側については、新直轄方式を導入し国土交通省の建設区間となったため、この区間の路線名称 は日本海沿岸東北自動車道 < 略称、日沿道 > に統一することとした。
- 15 本書の執筆は、青木 学 (加藤建設株式会社調査担当)、松井政信 (同社調査担当)、千喜良淳 (同社調査員)、 北村和穂 (同社調査員)、佐野知美 (同社補助調査員)、石川智紀 (埋文事業団調査課班長) がこれにあたり、編集 は青木が行った。執筆分担は以下の通りである。

I 章 1(石川)

I章 2A·B·C 1)·3、Ⅲ章 1·2A·B·3A·B·C 1)·2)·5、Ⅳ章 1·2A·B·3·5、

V章 3C 1)·5A 2) (青木)

I 章 2C 2)、V章 3C 4)·5B 2)(松井) Ⅱ章 (千喜良) Ⅲ章 2C·3C 3)·4)、N章 2C (佐野)

V章1·2·3A·B·C 2)·3)·5A 1)·B 1) (北村)

Ⅳ章4A(野村敏江)

 ${ { \mathbb I } }$ 章 $4 \cdot { { \mathbb V } }$ 章 $4 { \mathbb V }$ 章 4 (小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・瀬谷薫・Zaur Lomtatidze・

Ineza Jorjoliani·孔智賢·野村敏江)

16 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々および機関から多くのご教示・ご協力をいただいた。ここに記し、厚く御礼申し上げる。(敬称略、五十音順)

金子拓男 関 雅之 高濱信行 田中耕作 田中真吾 田辺早苗 鶴巻康志 中島栄一 野田豊文 水澤幸一 矢田俊文 横山勝栄

目 次

第上	草 序 草				1
1	調査に至る経緯				1
2	調 査 経 過				9
	A 松蔭東遺跡				
	1) 試掘調査				
	B 中曽根遺跡				
	1) 試掘調査				
	3) 平成 18 年度本発掘調査				
	C 大 館 跡				5
	1) 確認調査				
3	調査·整理体制				7
	A 松蔭東遺跡・中曽根遺跡				7
	B 大 館 跡				8
笠π.	章 遺跡の環境				
-					
1	地理的環境				
2	歴史的環境				
	A 周辺の遺跡				11
	B 中世の遺跡				12
第Ⅲュ	章 松蔭東遺跡				14
•					
1					
	A 遺跡の概要				
	B グリッドの設定 ····································				
2					
	A 遺構の概要				
	B 記述の方法				
	C 遺構各説			· ·	
	1) 掘立柱建物・柱穴列・ピット			井 戸	
	3) 土 坑		4)	溝	19
	5) 性格不明遺構	20			
3	遺 物				20
	A 遺物の概要 ····································				
	B 記述の方法 ····································				21
	C 遺物各説				
	1) 須 恵 器	21	2)	中近世陶磁器・土師質土器	21
	3) 木 製 品			銭 貨	
4	自然科学分析				23
	A 松蔭東遺跡における放射性炭素年付	弋測定			23

1) はじめに	23	2) 試料と方法	23
3) 結果	23	4) 考 察	24
5 ま と め			26
第Ⅳ章 中曽根遺跡 ────			27
C 基本層序			27
2 遺 構			29
A 遺構の概要			29
C 遺 構 各 説 ·································		2) # 🛱	
3) 土 坑		2) 井 戸 4) 溝	
5) 性格不明遺構		6) 自然流路	
3 遺 物			35
B 記述の方法 ······			35
 3) その他の時代···································		2) 古 代	36
4 自然科学分析			
A 中曽根遺跡出土木製品の樹種同定 1) は じめ に		2) 方 法	
3) 結果と考察		2))] (Δ	42
B 中曽根遺跡における放射性炭素年代測			46
1) はじめに	46	2) 試料と方法	
3) 結 果	46	4) 考 察	47
5 ま と め			49
¢⟨₹ ₹ 7 π ² 72 . Ι. δρ ² μ . Π-ξε-			
第V章 大館跡			51
1) 中世の遺構		2) 縄文・弥生時代の遺構	57
3) その他の時代の遺構	58		
3 遺 物			58
A 遺物の概要 ······			58

			縄 文 土 器	
	3) 弥生土器	· 60 4)	石 器	·· 61
4				
	A 大館跡における放射性炭素年代測定			
	1) はじめに		試料と方法	
	3) 結 果	· 64 4)	考 察	65
5				
			構築年代および構築者	
	B 縄文・弥生時代			
	1) 遺構について	· 68 2)	下層出土の石器について	69
«	《要 約≫			70
«	《引用・参考文献≫			72
	《観 察 表≫			74
	、既 宗 久/			14
	挿 図	目次		
第 1 図	松蔭東遺跡試掘調査位置および本調査範囲図	第 13 図	中曽根遺跡 器種分類	37
	2	第 14 図	中曽根遺跡 出土木製品の材組織の	
第 2 図	中曽根遺跡試掘調査位置および本調査範囲図		光学顕微鏡写真(1)	44
	······ 4	第 15 図	中曽根遺跡 出土木製品の材組織の	
第 3 図	大館跡確認調査位置および本調査範囲図 … 5		光学顕微鏡写真 (2)	45
第 4 図	地形概念図9	第 16 図	中曽根遺跡 暦年較正結果	48
第 5 図	遺跡の位置と周辺の遺跡 10	第 17 図	中曽根遺跡における遺構の変遷	50
第 6 図	阿賀北地域の主な中世城館および生産遺跡 13	第 18 図	大館跡周辺の地名	51
第 7 図	松蔭東遺跡 グリッド設定図 14	第 19 図	大館跡 グリッド設定図	52
第 8 図	松蔭東遺跡 基本層序 15	第 20 図	大館跡 基本層序	53
第 9 図	松蔭東遺跡 暦年較正結果25	第 21 図	大館跡 土塁計測凡例	55
第 10 図	中曽根遺跡 グリッド設定図 27	第 22 図	大館跡 堀計測凡例	55
第 11 図		第 23 図	大館跡 曆年較正結果	66
第 12 図				
	表	目 次		
第1表		第 6 表	中曽根遺跡 放射性炭素年代測定および	
第 2 表	松蔭東遺跡 測定試料および処理 23		暦年較正の結果	
第 3 表	松蔭東遺跡 放射性炭素年代測定および	第 7 表	大館跡 測定試料および処理	64
	暦年較正の結果 24	第 8 表	大館跡 放射性炭素年代測定および	
第 4 表	中曽根遺跡 出土木製品の樹種同定結果 43		暦年較正の結果	65
第 5 表	中曽根遺跡 測定試料および処理 46			

図版目次

[図 版]	
図版 1 松蔭東遺跡 遺構全体図	図版 19 中曽根遺跡 土坑・溝・性格不明遺構実測図
図版 2 松蔭東遺跡 遺構分割図(1)	SK339 · 382 · SD2 · 3 · 375 · SX29
図版 3 松蔭東遺跡 遺構分割図(2)	図版 20 中曽根遺跡 性格不明遺構実測図・自然流路
	断面図 SX272・278・394・SR1・2
図版 5 松蔭東遺跡 掘立柱建物遺構実測図 SB11	図版 21 中曽根遺跡 遺物実測図(1)
図版 6 松蔭東遺跡 柱穴列・ピット実測図 SA6・	図版 22 中曽根遺跡 遺物実測図(2)
P9 · 15 · 18 · 21 · 34 · 36	図版 23 中曽根遺跡 遺物実測図 (3)
図版 7 松蔭東遺跡 井戸・土坑実測図 SE10・22・	図版 24 大館跡 地籍図
$SK12 \cdot 19 \cdot 25 \cdot 32$	図版 25 大館跡 調査区全体図 (1)
図版 8 松蔭東遺跡 土坑・溝・性格不明遺構実測図	図版 26 大館跡 調査区全体図(2)
$SK33 \cdot SX5 \cdot SD13 \cdot 16 \cdot 20 \cdot 24 \cdot 31 \cdot 35$	図版 27 大館跡 土塁 1 断面図・2 区東西トレンチ・南
図版 9 松蔭東遺跡 遺物実測図 (1)	北トレンチ 1・2・南北セクション
図版 10 松蔭東遺跡 遺物実測図 (2)	図版 28 大館跡 土塁 2・空堀 1・2・堀 1 断面図
図版 11 中曽根遺跡 遺構全体図	図版 29 大館跡 堀 1 断面図 東西セクション 1・3・4
図版 12 中曽根遺跡 遺構分割図 (1)	図版 30 大館跡 中世以前遺構実測図 SK1001・1003・
図版 13 中曽根遺跡 遺構分割図 (2)	1036・ピット
図版 14 中曽根遺跡 遺構分割図 (3)	図版 31 大館跡 その他遺構実測図 土坑 1・SX2・3
図版 15 中曽根遺跡 遺構分割図 (4)	図版 32 大館跡 遺物実測図 (1)
図版 16 中曽根遺跡 掘立柱建物・土坑・溝実測図	図版 33 大館跡 遺物実測図 (2)
SB106 · SK338 · SD334	図版 34 大館跡 遺物実測図 (3)
図版 17 中曽根遺跡 掘立柱建物・柱穴列実測図	図版 35 大館跡 遺物実測図(4)
SB366 · SA5 · 397	図版 36 大館跡 遺物実測図(5)
図版 18 中曽根遺跡 ピット・井戸・土坑実測図	図版 37 大館跡 遺物実測図 (6)
P329 · 340 · 345 · 354 · 376 · 389 · 395 ·	四次的 大阳网 这两人阴阳 (0)
SE277 · 323 · SK281 · 282 · 331	
	ENTER OF LOCATION AND THE COMMENT OF
	図版 52 中曽根遺跡 遺構写真 (7) SK382・SD2・3・
図版 38 松蔭東遺跡 全景・基本層序	334 · 375
図版 39 松蔭東遺跡 遺構写真(1) SB11	図版 53 中曽根遺跡 遺構写真(8)SX29・272・278・
図版 40 松蔭東遺跡 遺構写真 (2) SA6 · P9 · 15 · 18	394
図版 41 松蔭東遺跡 遺構写真(3)P21・34・36・SE10	
図版 42 松蔭東遺跡 遺構写真 (4) SE10・22・SK12・	図版 55 中曽根遺跡 遺物写真(1)
$19 \cdot 25 \cdot 32 \cdot 33$	図版 56 中曽根遺跡 遺物写真(2)
図版 43 松蔭東遺跡 遺構写真 (5) SD13・16・20・	図版 57 大館跡 全景 (1)
$24 \cdot 31 \cdot 35 \cdot SX5$	図版 58 大館跡 全景 (2)
図版 44 松蔭東遺跡 遺物写真	図版 59 大館跡 土塁 1・基本層序
図版 45 中曽根遺跡 全景・基本層序	図版 60 大館跡 土塁 1・2・空堀 1
図版 46 中曽根遺跡 遺構写真(1) SB106	図版 61 大館跡 土塁 2・空堀 2・堀 1・2
図版 47 中曽根遺跡 遺構写真 (2) SB366	図版 62 大館跡 縄文·弥生時代遺構写真(1) SK1001・
図版 48 中曽根遺跡 遺構写真 (3) SA5・397	1003 · SX1002 · P1004
図版 49 中曽根遺跡 遺構写真 (4) SA397 · P329 ·	図版 63 大館跡 縄文・弥生時代遺構写真 (2) P1005・
$340 \cdot 345 \cdot 354 \cdot 376 \cdot 389$	1017 · 1021 · 1029
図版 50 中曽根遺跡 遺構写真 (5) P395·396·SE277·	
SX272 · 278	SK1036 · P1039 · 土坑 1 · SX2 · 3
図版 51 中曽根遺跡 遺構写真 (6) SE323 · SK281 ·	図版 65 大館跡 遺物写真 (1)
282 · 331 · 338 · 339	図版 66 大館跡 遺物写真(2)
202 331 330 333	
	図版 67 大館跡 遺物写真(3)

第1章 序 章

1 調査に至る経緯

法定路線名「日本海沿岸東北自動車道(以下、「日沿道」)」は、新潟市の新潟空港インターチェンジ(以下、「IC」)を起点に、日本海に沿って北上し、山形県、秋田県を経て青森市に至る高規格幹線道路である。また新潟中央ジャンクション(以下、「JCT」)~秋田県河辺 JCT 間は、営業路線名「日本海東北自動車道(以下、「日東道」)」とも呼称される。日沿道の新潟~朝日間における基本計画は、平成元年および平成3年に決定し、平成10年に施工命令が出された。これを受けて、日本道路公団(以下、「道路公団」)と新潟県教育委員会(以下、「県教委」)との間で、道路法線内の埋蔵文化財の取り扱いに関する協議が本格化した。

中条 IC ~朝日 IC 間の分布調査は、県教委から委託を受けた財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団(以下、「埋文事業団」)が平成 11 年度に実施した。調査の結果、道路法線上には 8 か所の周知遺跡と 27 か所の遺跡推定地が存在し、これらについて試掘・確認調査が必要である旨を県教委に報告した。

松蔭東遺跡にかかる試掘調査は、「周知遺跡 2 (田屋道)」として平成 14 年 6 月から 10 月にかけて実施した。中世主体の遺構・遺物を検出し、松蔭東遺跡として新規登録した。中曽根遺跡にかかる範囲は、「周知遺跡 2 (道端)」として平成 14 年 5 月から 7 月にかけて調査した。古代主体の集落跡を検出し、小字名から中曽根遺跡として新規登録した。大館跡にかかる調査は、橋脚範囲に限定して平成 17 年 11 月に実施した。溝、土塁状の遺構を検出し、館の一部であることを確認した。この時点で推定された本発掘調査面積は、松蔭東遺跡が 6,000 ㎡、中曽根遺跡が 12,000 ㎡、大館跡が 310 ㎡である。

試掘・確認調査終了後、平成 14 年 12 月 18 日の道路公団、県教委および埋文事業団との協議で、日沿道早期開通のため、当面は暫定二車線分に調査範囲を限定することを決定した(以下、「限定協議」)。その結果、本発掘調査対象面積を松蔭東遺跡は 3.440 ㎡、中曽根遺跡は 8.810 ㎡に修正した。

平成 16 年 1 月 8 日の国土開発幹線自動車道建設会議(以下、「国幹会議」)が終了後、民営化を控えた道路公団から、膨大な調査量を短期間に終了することが要望された。それに対応するため、県教委と埋文事業団は調査体制などの協議を行い、日沿道建設に限り、平成 16 年度以降の調査を埋文事業団職員の管理・監督の下に民間調査機関に全面委託することとした。その後、日沿道の事業は、道路公団の分割民営化に伴い、平成 17 年 10 月 1 日に設立された東日本高速道路株式会社(以下、「東日本高速道路」)に引き継がれた。また平成 18 年 2 月 7 日の国幹会議により、荒川 IC 以南は東日本高速道路が「有料道路方式」で、荒川IC 以北は国土交通省(以下、「国交省」)が「新直轄方式」で整備することになった。

平成18年度の本発掘調査か所は、最終的に平成18年3月3日の国交省、県教委、埋文事業団による協議で決定した。また平成14年12月の限定協議内容も、国交省に引継がれることが確認された。調査対象は神林村・村上市内の7遺跡、調査面積約54,240㎡である。松蔭東遺跡は4月3日から調査を開始した。同年5月、荒川町内の一部に追越し区間を設けて四車線とする計画変更が示され、中曽根遺跡が追加調査対象となった。年度内調査が可能か検討した結果、調査着手を決定し、7月10日から調査を開始した。大館跡は4月から着手予定だったが、設計変更があり、併せて調査面積が大幅に増加した。調査工程・調査体制などを見直し、8月1日からの調査開始となった。

2 調查経過

A 松蔭東遺跡

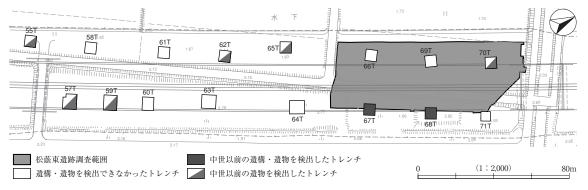
1) 試掘調査

松蔭東遺跡の試掘調査は、県教委から委託を受けた埋文事業団が平成14年6月17日から10月11日の期間に実施した。対象範囲は本遺跡を含めた神林村大字南田中から九日市にかけての延長約1,800mであり、この範囲には周知の遺跡である田屋道遺跡が存在することから、「周知遺跡2」として行った。なお試掘トレンチは合計104か所であり、うち66~71トレンチが本遺跡内に該当する。

調査の結果、南田中集落の北西に位置する67・68・70トレンチにおいて遺構および遺物を検出した。この部分は、周知の遺跡である田屋道遺跡から南へ約100m以上、また本遺跡と同様に新たに確認した窪田遺跡から北へ約450m離れていることから別遺跡と考えられ、小字名から「松蔭東遺跡」と呼称することとした。

検出した遺構は、67トレンチでピット1基、68トレンチで土坑2基、溝1条、ピット6基となっており、そのうち68トレンチ検出の礎板を持つピットは、建物跡の柱穴と考えられる。遺物は上記のトレンチのほかに70トレンチにおいても中世陶磁器・須恵器などが出土している。中世の遺物は3か所のトレンチで出土しているが、須恵器は70トレンチのみである。

以上のことから、松蔭東遺跡は中世の集落と考えられ、遺構・遺物を検出したトレンチ周辺を含めた範囲について本発掘調査が必要と判断した(第1図)。



第1図 松蔭東遺跡試掘調査位置および本調査範囲図

2) 本発掘調査

本発掘調査は、試掘調査結果および日沿道工事内容に基づいて 3,416 ㎡を対象に行った。調査期間は、4月3日から7月7日までである。遺構確認面は現水田面より標高が低くなることから、調査区の周囲に開渠を掘削し、本発掘調査を行うこととした。調査区内には南北に縦断する農道が存在しており、農道を田植え前後の農繁期まで使用したいとの地元からの要望があったため、農道部分は5月中旬以降に調査を行うこととした。また調査対象範囲南端にも農道が存在しており、その部分に関しては周囲の遺構・遺物の分布状況などから調査を行うか判断することとした。なお調査区内を縦断する農道の東側には埋め立てられた水路があり、トレンチを数本入れて確認したが、遺構確認面から深さ1m以上攪乱されており、表土を除去するのみとした。

掘削開始は4月10日からであり、試掘調査で確認した土層の堆積状況、遺構確認面までの深さ、遺物

の出土量などを再確認するために調査区内にトレンチを任意に十数か所設定し、人力で掘削を行った。その結果、遺物包含層は削平を受けていることが確認でき、遺物も耕作土(Ⅱ層)から散発的に出土する状況を把握した。遺構確認面までの深さは約30~40cmであるが、調査区南東側は5cm前後と非常に浅くなっている。4月11日から重機による表土除去を開始し、19日に終了した。作業員を動員した本格的な作業は、表土除去と並行した17日からである。Ⅱ層の掘削は、6月18日まで行った。その作業と平行して遺構検出を行い、5月16日に調査区北側の13A・B区で井戸(SE10)および掘立柱建物(SB11)を確認した。遺構精査、遺構掘削は5月18日にⅡ層掘削が終了した範囲から開始し、SE10の断ち割りを除いて6月28日に終了した。県教委による終了確認を受けた後、航空写真撮影を7月5日に実施し、その後 SE10の最終確認作業および基本層序の確認を行い、現地でのすべての作業が終了した。国交省への現地引渡しは、7月13日に行った。

B 中曽根遺跡

1) 試掘調査

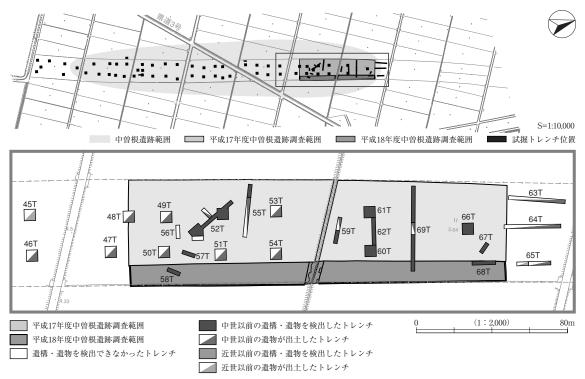
中曽根遺跡の試掘調査は、県教委から委託を受けた埋文事業団が平成14年5月7日から7月31日の期間に、周知の遺跡である道端遺跡として実施した。遺物は縄文時代から近世までのものが調査範囲のほぼ全域で出土し、道端遺跡以外にも遺構が集中して検出される部分が確認できた。この部分は道端遺跡から北側に約800m離れており、別遺跡と考え、小字名をとって「中曽根遺跡」と呼称することとした。遺構を集中して検出したトレンチ周辺では、古代の遺物が主に出土した。このことから本遺跡は古代を中心とした集落と考えた。その中でも遺構・遺物が多く認められ、集落の中心と考えられる部分を本発掘調査範囲とすることとした(第2図)。その後、日沿道早期供用のため、暫定二車線分に範囲を限定することとなった。なお詳細については、『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第168集 中曽根遺跡』[青木ほか2006]で述べているので、そちらを参照されたい。

2) 平成 17 年度本発掘調査

平成17年度の本発掘調査は、4月19日から10月21日の期間に、暫定二車線分8,810㎡について行った。 整理作業は現場作業と一部並行して、7月1日から平成18年3月30日まで行い、報告書は平成18年3 月31日に『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第168集 中曽根遺跡』として刊行した「青木_{ほか}2006]。

主な遺構は、弥生時代の住居(SI)2棟、土器集中2か所、土坑(SK)1基、古代の掘立柱建物(SB)4棟、井戸(SE)1基、土坑(SK)24基、溝(SD)13条であり、そのほか、古代の自然流路(SR)2条も調査した。弥生時代の住居・土坑は、調査区内において周辺より標高がやや高い19・20D・E区、21・22 D・E区に立地している。住居は中央に炉を持ち、その周囲にピットが不規則に廻り、範囲は遺物の分布から推定したものである。土器集中は、住居から離れた7B・C区に位置し、2個体の土器がそれぞれ単独で出土したもので、掘り込みなどは確認できなかった。遺物包含層は上記の住居周辺にのみ存在し、土器集中を除きそれ以外の場所では遺物は出土しなかった。弥生時代の遺物は、東北系の天王山式土器を主体としており、時期は中期終末~後期前葉と推定した。出土石器も、それに伴うものと考えた。

古代の掘立柱建物は、調査区の D ラインより東側にすべて分布している。土坑は調査区内に散在しており、いくつかは自然流路内およびそれに近接して構築され、形態は今年度検出された井戸に似たものもみられる。井戸は 1 基のみの検出で、SB4 に伴うと考える。掘り込みのしっかりした溝は、等高線に



第2図 中曽根遺跡試掘調査位置および本調査範囲図

沿って構築されている。自然流路は遺跡を横断する形で2条検出し、出土遺物から遺跡と同時期に存在したものである。古代の包含層は削平されており、遺物は遺構内および耕作土から出土している。遺構では SD3 および SR1・2 でまとまったが、それ以外の遺構ではほとんど出土しない状況であった。遺物の種別は須恵器・土師器が中心で、そのほか木製品・石製品・鉄滓などがわずかに出土した。遺物の時期は8世紀~10世紀のものが中心となっている。

そのほか中世・近世の遺物も出土したが、遺構は確認できなかった。

3) 平成18年度本発掘調査

平成18年度の本発掘調査は、7月10日から10月11日までの期間に行い、調査面積は2,294㎡を測る。 今年度の調査区は平成17年度の調査区の東側で暫定二車線分の本線外に該当するが、計画変更により片 側二車線区間となったため、本発掘調査を実施することになった。

本発掘調査は、松蔭東遺跡の調査終了後から行った。7月10日から重機による表土掘削を開始し、天候不良の影響もあり、28日に終了した。本格的に調査を開始したのは26日からで、作業員を動員して遺構確認が十分行える面まで掘削を行った。遺構確認面は本来IV層上面であるが、近・現代の耕作による攪乱(踏み抜き痕)が多く見られることから、IV層上部を3~5cm掘削し、その面を確認面とした。遺構精査は、掘削作業と並行して8月1日から行い、お盆明けから本格的に遺構掘削を開始した。8月24日、調査区中央15F区に位置するSX272から漆器盤が出土し、9月8日に発砲硬質ウレタンを使用して取り上げを行った。9月以降は、確認した遺構を随時調査していき、13日に井戸(SE277)から斎串が出土した。9月中頃には遺構掘削の目処がつき、21日に航空写真撮影を行った。その後17年度調査で検出した弥生時代の遺構・遺物の有無を確認するため、下層の調査を開始した。下層の調査は古代の確認面のグリッドにあわせて5mごとにトレンチを入れ、遺構・遺物が確認された所を拡張する方針とした。トレンチは昨

年度遺構・遺物が検出および出土している 19・20・21 区を幅 1m、それ以外を幅 20cm として、深さは弥生時代の遺物包含層を掘り抜くことができる 50cm とした。19F 区において弥生土器が 2 点出土したためその周囲を拡張したが、遺物はこれのみであった。下層の調査が順調に進み、9月 27 日に県教委による終了確認を受けた。10月 4・5 日に基本層序を確認するため重機による深掘りを実施し、その後記録作業などを行い、10日に発掘調査に係る作業がすべて終了した。その後 10月 17 日に、国交省への引渡しを行った。

C大館跡

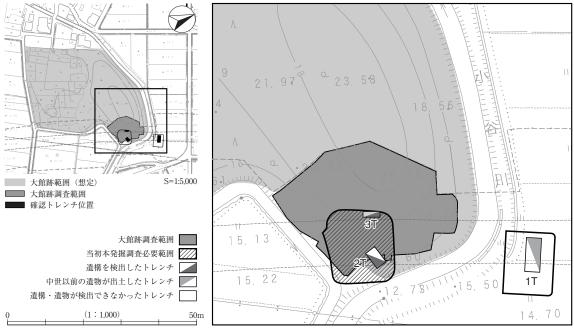
1) 確認調査

大館跡の確認調査は、県教委から委託を受けた埋文事業団が平成 17 年 11 月 18 日から 22 日の期間に周知の遺跡である大館跡として実施した。確認調査は、小谷川に架かる橋の橋脚部分に限定したものであり、川を挟んで北側に 1 か所、南側に 2 か所の計 3 か所のトレンチを設定した。なお北側が 1 トレンチ、南側の 2 か所のトレンチがそれぞれ 2 ・ 3 トレンチである。

これらのトレンチのうち、遺構を検出したものは南側の2・3トレンチである。2トレンチは独立丘陵の裾部にあたる沖積地にあり、溝を検出した。3トレンチは独立丘陵上に位置し、土塁と考えた高まりを確認した。遺物は、1・3トレンチから出土している。1トレンチからは中世の可能性もある陶磁器が3点、土師質のものが2点の計5点出土したが、いずれも客土中からである。3トレンチでは、盛土と考えた黒色土層から古墳時代の可能性がある土師器1点が出土している。

以上のことから、遺構を検出した 2・3 トレンチ周辺の 310 ㎡を本発掘調査が必要な範囲と判断した (第3図)。 なお 1 トレンチからも中世の可能性のある遺物が出土しているが、客土中であり、本発掘調査は必要ないと判断した。

平成 18 年度に入ってから橋脚工事の施工方法の変更により、調査対象面積が大幅に増加して 1,270 ㎡ となった。なお当初は松蔭東遺跡の調査終了後、中曽根遺跡と並行して本発掘調査を行う予定となってい



第3図 大館跡確認調査位置および本調査範囲図

たが、大幅な面積増加であり中曽根遺跡の調査体制では対応できないことから、急遽調査工程・調査体制などを見直し、対応することにした。

2) 本発掘調査

本発掘調査は平成18年8月1日より、1,270㎡を対象に行った。調査区は山林のため、草木伐採作業から開始した。8月7日より掘削前の地形測量を行い、10日には現況の航空写真撮影を実施した。丘陵上に位置する土塁1を基準とし、それと平行する東西トレンチと直交する南北トレンチを任意に設定して、17日より掘削を開始した。なお調査区は中央を東西に伸びる空堀1とそれに接する土塁2の間を境にして北側を1区、南側を2区とした(図版25参照)。掘削は1区から始め、南北トレンチで空堀1、土塁2を確認し、空堀1の5層から珠洲焼の甕片が出土した。21日から作業員を増員し、1区全体の表土除去を行い、加えて2区の南北トレンチの掘削を開始した。1区で空堀2を確認中に18C区付近でウマと考えられる獣骨が出土し、24日にそれに伴う土坑を検出し、獣骨は人為的に埋められたと推測した。1区の表土除去の結果、土塁2が「コ」の字状に存在し、その北側の土塁に沿って空堀2が東西に延びることを確認した。31日に2区の北側斜面を精査し、土塁1の盛土とその下位の黒色土層(II層)を確認した。

9月4日に空堀1中央より西側を完掘し、その写真撮影を行った。11日より2区全面の表土除去を開始し、珠洲焼や瀬戸焼などが出土した。21日に2区南端でⅡ層より縄文土器が出土した。完形ではないが、木の根の間に正位の状態で出土した。25日から堀1の確認のため2区東西トレンチを延長し、調査区東側の掘削を始めた。これにより東端からは堀1とは異なる川跡を検出した。また、2区南側のⅡ層のサブトレンチから石鏃、石核等が出土し、古代以前の遺物包含層であることを確認した。

10月4日に1区中世面の遺構図および地形図を作成し、5日にローリングタワーから1区全体写真の撮影を行った。17日に空堀1の掘削が終了したことによって、中世面の遺構検出はほぼ終了した。22日には現地説明会を実施し、来場者は209人を数え、地元の関心の高さを改めて示す結果となった。27日に中世面での航空写真撮影を行い、これより土塁の半裁・掘削作業および中世以前の遺構・遺物の検出に入ることとなった。30日から2区土塁1の構築状況確認のため、半裁を開始した。また31日より2区北側斜面に露出していたフラスコ状土坑の調査を開始した。

11月6日に2区土塁1の半裁作業が終了し、断面の写真撮影を行い、その後急ピッチで盛土の掘削を進め10日に終了した。13日より下層包含層掘削を開始した。遺物は石器を中心に弥生土器、縄文土器が出土し、遺物の総点数は1,098点となった。なお11月は天候不順のため、斜面地での十分な安全が確保できないことから、調査を中止する日が多かった。

12月は作業量が減少したため、人数を調整して作業を行うこととした。12月5日より下層の遺構検出作業を開始し、また県教委による現場視察が行われた。下層の遺構は、丘陵頂上部の平坦面で土坑を2基、ピットを35基検出した。12日にローリングタワーから、2区下層の全体写真撮影を行った。13日には基本層序の作成のため深掘りを行い、同時に遺構再検出をした。19日で発掘調査を終了し、国交省への引渡しを行った。

調査期間は8月1日から12月19日までであり、そのうち実作業日数は102日であった。中世以降の調査面積が1,270 m、下層が265 m、総調査面積が1,535 mにおよんだ。

3 調査・整理体制

各遺跡の試掘・確認調査と平成18年度の本発掘調査の調査・整理体制は以下のとおりである。

A 松蔭東遺跡・中曽根遺跡

【試掘調査】

調査期間 平成14年6月17日~10月11日(松蔭東遺跡)

平成14年5月7日~7月31日(中曽根遺跡)

調査主体 新潟県教育委員会(教育長 板屋越 麟一)

調 查 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 (理事長 板屋越 麟一)

管 理 黒井 幸一 (財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 専務理事・事務局長)

長谷川司郎 (同 総務課課長)

岡本 郁栄 (同 調査課課長)

庶 務 高野 正司(同 総務課班長)

調査指導 寺﨑 裕助 (同 調査課課長代理)

松蔭東遺跡

調査担当 澤田 敦(同調査課班長)

調査職員 佐藤 優一(同調査課主任調査員)

後藤 孝(同調査課主任調査員)

阿部 友晴(同調查課文化財調查員)

中曽根遺跡

調査担当 石川 智紀(同調査課班長)

調査職員 片岡 千恵(同 調査課嘱託員)

【本発掘調査・整理作業】

現地調査 平成18年4月3日~7月7日(松蔭東遺跡)

平成 18 年 7 月 10 日 ~ 10 月 10 日 (中曽根遺跡)

整理作業 平成 18年5月11日~平成19年3月31日

調査主体 新潟県教育委員会(教育長 武藤 克己)

調 查 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団(理事長 武藤 克己)

管 理 波多 俊二 (財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 専務理事・事務局長)

斉藤 栄(同総務課課長)

藤巻 正信 (同調査課課長)

監督鈴木俊成(同調査課課長代理)

石川 智紀(同調査課班長)

杉田 和宏 (同 調査課主任調査員)

庶 務 長谷川 靖(同 総務課班長)

調査組織 加藤建設株式会社

現場代理人 川上 浩 (加藤建設株式会社新潟支店)

調 査 担 当 青木 学 (同調査担当)

調査員千喜良淳(同調査員)

松田 重治 (同調査員)平成18年4月10日から平成18年10月31日まで

補 助 員 佐野 知美 (同調査補助員)

長谷川 寿樹 (同調査補助員)

B 大館跡

【確認調査】

調査期間 平成 17 年 11 月 18 日~ 22 日

調査主体 新潟県教育委員会(教育長 武藤 克己)

調查財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団(理事長武藤克己)

管 理 波多 俊二 (財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 専務理事·事務局長)

長谷川二三夫(同総務課課長)

藤巻 正信 (同調査課課長)

庶 務 長谷川 靖 (同 総務課班長)

調査指導 寺﨑 裕助 (同調査課課長代理)

調査担当 滝沢 規朗 (同 調査課班長)

調査職員 斉藤 準 (同調査課嘱託員)

【本発掘調査・整理作業】

現地調査 平成 18 年 8 月 1 日~ 12 月 19 日

整理作業 平成 18 年 10 月 1 日~平成 19 年 3 月 31 日

調査主体 新潟県教育委員会(教育長 武藤 克己)

調 查 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団(理事長 武藤 克己)

管 理 波多 俊二 (財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 専務理事・事務局長)

斉藤 栄(同総務課課長)

藤巻 正信(同調査課課長)

監督鈴木俊成(同調査課課長代理)

石川 智紀(同調査課班長)

杉田 和宏(同調査課主任調査員)

庶 務 長谷川 靖 (同 総務課班長)

調查組織 加藤建設株式会社

現場代理人 中村 龍三郎 (加藤建設株式会社新潟支店)

調 査 担 当 松井 政信 (同調査担当)

調査員北村和穂(同調査員)

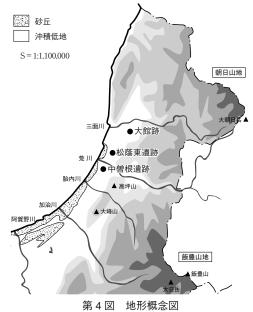
補助員佐野知美 (同調査補助員)

長谷川 寿樹 (同調査補助員)

第Ⅱ章 遺跡の環境

1 地理的環境

松蔭東遺跡・中曽根遺跡・大館跡が所在する地域は新潟県の北部に位置し、下越地方、阿賀(揚)北地域と呼称され、北に大朝日岳(1,870m)を主峰とする朝日山地、東に飯豊山(2,105m)を主峰とする飯豊山地がひろがる。阿賀北地域は、大きく見ると越後平野と周囲の山地からなる。このうち越後平野は約18,000年前以降に形成された若い沖積層で[鴨井2000]、新発田-小出構造線と柏崎-千葉構造線の地溝が沖積低地化したものである。越後平野の範囲は、いくつか見解があり、三面川低地を含むものと含まないものがみられる。また日本海沿いには、新潟砂丘と呼ばれる砂丘・砂堆列が海岸線から内陸へ10kmの地点まで認められ、角田山北麓〜岩船港まで約70kmに渡っており、最大で10列を数える[新潟古砂丘グループ1974]。

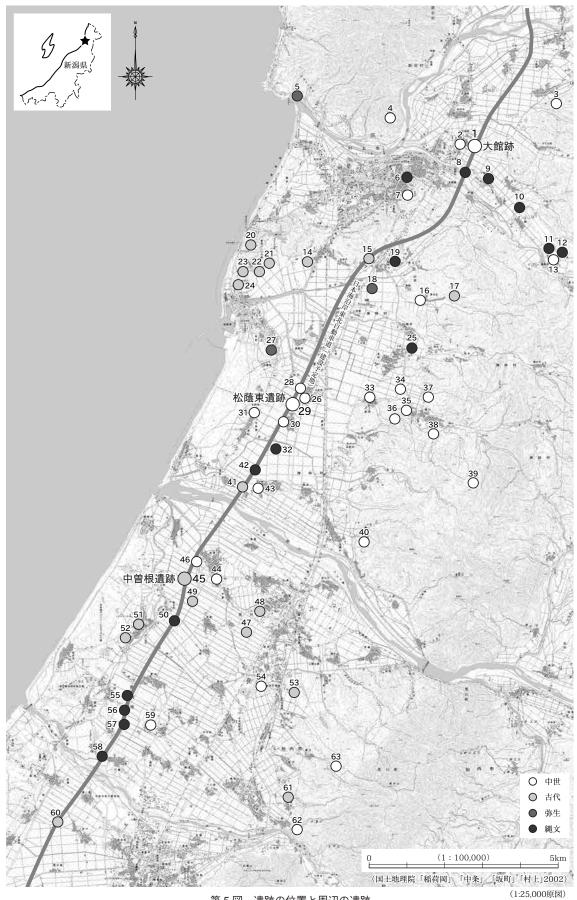


今回調査した松蔭東遺跡・中曽根遺跡は、砂丘列の後背地に位置し、自然堤防などの微高地に立地する。 松蔭東遺跡と中曽根遺跡の間を流れる荒川は、飯豊山地に源をもち、砂丘を分断して日本海に注いでいる。 この荒川は慶長 2 (1597) 年の「瀬波郡絵図」ではすでに河口が現在の位置にあるが、周辺の砂丘は自然 の力だけでは形成不可能なほど規模が大きく、古代・中世の遺跡の立地や『日本書紀』の「越国奏上」か ら、大化 4 (648) 年の磐舟柵造営に伴う放水路であると推測されている [金子 1996]。これに対し、近年、 西部遺跡の調査によって現在の自然堤防が 7 世紀以前には出来上がっており、「荒川放水路以前にも」「現 在の荒川と方向を同じくする流れの存在が想定でき」、「新たに遺跡が発見される可能性が高」いとする見 解もある [小林_{ほか} 2006]。

一方、大館跡は、三面川流域に位置している。三面川は朝日山地に源をもち、右岸は丘陵・山地、左岸には標高 14m 未満の河岸段丘が発達する。大館跡は、大きくみると三面川左岸に位置しており、門前川と山田川支流小谷川に挟まれている。地形的には大館跡は河岸段丘上に立地するが、北側部分に小谷川によって丘陵から切り離された独立丘が存在する。

2 歴史的環境

越後国は持統朝 690 年頃、阿賀北地方が越後国として成立した [米沢 1980]。当時の越後平野は、信濃川・阿賀野川などの河川による内水面交通が発達していたと考えられる [坂井 1993、1995]。この内水面交通は中・近世まで引き継がれ、岩船津一荒川一胎内川一紫雲寺潟(塩津潟)一蒲原津の交通路が想定されている [水澤 2005a]。12 世紀半ばになると越後国にも各地に荘園が成立してくる。現在の岩船郡内に成立



第5図 遺跡の位置と周辺の遺跡

_			_			_		
No.	遺跡名	時 代	No.	遺跡名	時 代	No.	遺跡名	時 代
1	大館跡	中世	22	三十刈・堂の下	古代	43	牛屋館跡	中世
2	御所館	中世	23	三角点下	古代	44	馬場館跡	中世
3	大葉沢城	中世	24	宮の上	古代	45	中曽根	古代
4	下渡嶋城	中世	25	城田	縄文(中~後期)	46	桜林	古代・中世
5	滝ノ前	弥生	26	牧目館跡	中世	47	田屋	古代
6	二之町	縄文(晩期)・近世	27	砂山	弥生	48	坂町宮ノ腰	古代
7	村上城(本庄城)	中世	28	田屋道	古代・中世	49	鴨侍	古代
8	下相川	縄文(後期)	29	松蔭東	古代・中世	50	道端	縄文(後期)・弥生・古墳
9	長割	縄文(後期)	30	窪田	古代・中世・近世	51	乙宝寺	古代
10	高平	縄文(中期)	31	長松	古墳・中世	52	城山	古代
11	大関上野	縄文(中期)	32	衣田	縄文・古墳・古代	53	元山窯跡群	古代
12	山崎	縄文(中期)・中世	33	飯岡館跡	中世	54	韋駄天山	中世
13	館ノ腰	中世	34	石川	古代・中世	55	江添	縄文(後期)
14	六百地	古代	35	草田	中世	56	昼塚	縄文(晩期)
15	山元	弥生	36	桃川古城	中世	57	道下	縄文(晩期)
16	内御堂C	中世	37	千眼寺跡	中世	58	野地	縄文(後〜晩期)
17	里本庄 B	古代	38	桃川館	中世	59	古館館跡	中世
18	金曲	弥生・古墳	39	桃川城	中世	60	沢田	古代
19	八幡山	縄文(前~中期)	40	平林城	中世	61	松山窯	古代
20	清水沢	古代	41	西部	古代・中世	62	黒川城跡	中世
21	はげ	古代	42	中部北	縄文(中~後期)	63	蔵王権現	中世

第1表 周辺の遺跡一覧

した小泉荘は「中右記」保安元(1120)年に初出し、当時は中御門家の免田三○町に過ぎなかったとされ る [荻野 1983]。仁平 3 (1153) 年に周辺の国衙領を付け加えて金剛心院領小泉荘が成立し、免田三○町 を中心に小泉本庄、岩船潟とその南方に広がる平野部の国衙領や粟島を加納とした。その後、鎌倉時代の 初めに地頭となった平姓秩父季長は建永元 (1206) 年に嫡子の行長に小泉本庄、庶子の為長に加納を与え た。行長は小泉氏を名乗り、為長は加納の色部の地から色部を名乗る。13世紀終わりに現地支配に乗り 出した両氏は、小泉荘の領家である一条家から地頭請所の廃止を求め、幕府の裁判所に訴えられた。この 事件により、色部氏は存続が認められたものの、小泉氏は地頭請所を廃止され小泉本庄は幕府の直轄地で ある関東御領とされてしまう。室町時代に入って康永2年に武蔵国の青木武房が小泉荘の所領を獲得しよ うとした事件が起きた。かつて関東御領として幕府首脳によって知行され、鎌倉幕府崩壊に伴い没収され ていた領域である。建武新政まで小泉氏を称していた持長は初めて本庄持長と称してこれに抵抗した。こ の後も領土争い、境界争いは激しさを増し下克上の戦国時代に突入していく。ただ、守護代長尾為景に対 した永正の乱以後、状況に応じて阿賀北の国人衆は同一歩調を取るようになる。守護方からは連合体を形 成しているように見えたのか、阿賀北の国人衆を「揚北衆」と呼ぶようになった。小泉荘内では鮎川氏が 勢力を増し、天文 20 (1551) 年には本庄繁長と鮎川清長が対立し、これを色部勝長が調停している。永禄 11 (1568) 年には、本庄繁長は上杉謙信に叛乱を起こしたが、翌年伊達、芦名氏の仲介で和議を結んでい る。天正6(1578)年の上杉謙信急死に伴う御館の乱では、色部氏、本庄氏が味方した上杉景勝側が勝利 している。やがて豊臣秀吉によって九州が平定され、景勝は直江兼続や色部長真らを伴って上洛した。そ の間、繁長には新発田氏を滅亡させた後の戦後処理と庄内領の最上勢を駆逐させることを任せている。し かし、繁長の庄内制覇は秀吉の私戦禁止令に触れたことから、本庄領は大国実頼が知行することになり、 春日元忠が代官として入城している。その後、繁長は浪人として上洛するが、再び越後の地に戻ることは なかった。慶長3(1598)年、景勝は秀吉から会津への国替えを命じられた。これに伴い本庄繁長は福島 城(福島市)へ、色部光長は金山城(南陽市)へ移った。代わって越後には新国主が堀秀治に、現在の村上 の地には村上頼勝が入り近世を迎えることになる。

A 周辺の遺跡

今回の調査では、松蔭東遺跡は中世、中曽根遺跡は古代、大館跡では中世および縄文・弥生時代の遺構・遺物が中心となっている。そこでここでは縄文時代と中世を中心に見ていくこととする。なお弥生時代と

古代に関しては、17年度報告書を参考にされたい。

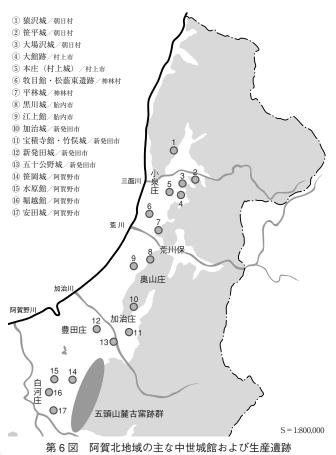
縄文時代の遺跡としては、村上市内ではその多くが海岸部の上海府地区、山間部の山辺里地区に分布す る。山辺里地区では門前川右岸に形成された河岸段丘上に立地する例が多い。門前川の上流域には大関上 野遺跡と山崎遺跡があり、鋳物師集落の北西に位置する。山崎遺跡からは遺構は未検出だが、大関上野遺 跡からは中期前葉の新保・新崎式に伴うフラスコ状土坑6基が検出されており、出土した石器のうち半数 以上は打製石斧であった。両遺跡は同一の集落跡と考えられている。また、大関上野遺跡では旧石器時代 終末〜縄文時代草創期前半と推定される尖頭器が1点出土している「塩原ほか2000]。門前川の中流域に位 置する高平遺跡は高平集落の周辺に広がる集落遺跡で、中期の大木7b~8b式並行期の土器が出土して いる「塩原ほか2001]。下流域には長割遺跡、下相川遺跡があり、両者とも後期で長割遺跡からは南三十稲 場式の土器が出土している。同じく下流域で門前川左岸の河岸段丘面に位置する二之町遺跡は、晩期の大 洞 A 式の完形壺や深鉢が出土しており、かなり大規模な集落の一部であった可能性がある。一方、三面 川上流域には後期旧石器時代〜縄文時代晩期後葉に渡る奥三面遺跡群が存在する。アチヤ平遺跡では、中 期末~後期前葉の遺物に伴って敷石住居、配石遺構、掘立柱建物などが検出されている[富樫ほか2002]。 また、元屋敷遺跡からは後期前葉〜晩期末葉の土器に伴って、土偶、岩版、線刻礫などが出土している[滝 沢ほか2002〕。旧岩船潟を望む丘陵上には志田平遺跡や八幡山遺跡がある。八幡山遺跡はフラスコ状土坑が 6基検出されており、前期末頃の遺構と推定されている [田辺 1994]。旧岩船潟の東には中期末葉〜後期 後半の城田遺跡が存在する。後期前葉の集落と後期後半の集落が検出されており、三十稲場式・南三十稲 場式土器や加曾利B式土器を伴っている[田辺ほか2001]。 荒川右岸には衣田遺跡、中部北遺跡などが存在し、 中部北遺跡は 2006 年に調査が実施され、中期~後期の土器、石錘・石鏃・打製石斧などが出土している [継 2006]。旧胎内川である、乙大日川の自然堤防縁辺の後背湿地には道端遺跡が存在する。道端遺跡では後 期後葉~晩期前葉の土器が出土し、生業関係の作業場であると推測されている「渡邊ほか2003」。胎内川が 形成した扇状地の扇端部には江添遺跡、昼塚遺跡、道下遺跡、野地遺跡が位置している。江添遺跡は後期 前葉~中葉の集落跡で、三十稲場式・加曾利B式の土器などが出土している。昼塚遺跡は晩期前葉~中 葉の集落跡で、大洞 B 式、BC 式の土器が出土している。両遺跡は植物の炭化物や動物骨などが豊富に出 土しており、当時の植生や生業の様子が窺える[折井ほか2005]。道下遺跡は2005年に調査が行われ、大 洞 BC 式並行期の小規模な集落遺跡と考えられている [折井 2006]。野地遺跡は後期中葉から晩期前葉の 拠点集落と推測され、途中何度か洪水に見舞われているものの長期継続型拠点集落と推測されている「渡 邊 2006]。

B 中世の遺跡

大館跡は村上市天神岡に所在する。付近には御所館という館跡も存在したという [横山_{ほか}1987]。大館跡から周辺の城館を概観してみると、長津川と山田川に挟まれた東西に伸びる丘陵上に大葉沢城がある。この城は根小屋式の城郭と考えられており、鮎川氏の拠点であった。本庄氏とは常に両者の入合地が紛争の火種となっていたという。大葉沢城の北西、高根川右岸には猿沢城が存在し土塁、堀などが残っている。南西には三面川河口から約3km上流に、臥牛山に対置するように下渡嶋城が存在する。この城は上杉謙信と本庄氏の攻防の舞台となった所である。村上市街の東、標高135mの臥牛山の頂に「瀬波郡絵図」では「村上ようがい」と記載されている村上城(本庄城)が存在する。江戸時代に大きく改修されたため中世の「村上ようがい」を知ることは難しいが、大家健氏、千田嘉博氏、金子拓男氏などの論考がある。

その中で、金子氏は「実城郭群、東腰郭群、 東麓出郭群での構成が思考される」とする [金子 2002、2003]。

松蔭東遺跡が所在する神林村では、里本 庄地区に里本庄川により形成された河岸段 丘上に里本庄遺跡群が存在する。里本庄遺 跡群には内御堂C遺跡があり、「コ」の字 形の土塁と堀が残存している。調査の結果、 精巧な造りの井戸組が検出され、13~15世 紀に渡って存続した館あるいは寺院の可能 性が高いとされる [田辺ほか2001]。色部氏 の本貫地と思われるのが小色部地区であり、 近接する牧目地区には色部氏の拠点のひと 阿賀野 つと考えられている牧目館跡が存在し、西 側に松蔭東遺跡が所在する。牧目館跡から は15世紀前半~16世紀前葉に渡る遺物と 土塁、掘立柱建物、井戸が検出された「田 辺 1992]。松蔭東遺跡の北に近接する田屋道 遺跡では、18年度の調査で12世紀末~13



世紀中心の集落跡と 16 世紀以降の屋敷墓が検出されている [大島 2007]。牧目館跡から東方には、百川を遡ったところに桃川遺跡群が存在する。桃川遺跡群には石川遺跡、草田遺跡などがある。このうち石川遺跡は中世の集落跡の一部と思われ、また、草田遺跡は中世の屋敷もしくは居館と考えられている [田辺ほか 2002]。荒川右岸に位置する要害山とその麓に、色部氏の居城であった平林城がある。慶長 3 (1598) 年、色部氏は上杉景勝とともに会津へ移奉され、平林城は廃城となった。この城は 15 世紀末には築造され、16 世紀後半に大きく改修されたことが判明している [田辺ほか 2005]。

荒川から阿賀野川間は、北から荒川保・奥山庄・加治庄・豊田庄・白河庄となっている。荒川保は荒川流域に存在し、当初地頭は河村氏であった。鎌倉時代には南に接する奥山庄との境界をめぐって争いが起こり、その時に「荒川保・奥山庄堺相論和与絵図」(国指定重要文化財『越後文書室翰集』「三浦和田氏文書―巻九号」新潟県立歴史博物館所蔵)が作られたと考えられているが、その境界は韋駄天山遺跡と乙室寺を結ぶものであったと推定されている [青山 1994、水澤 2004]。中曽根遺跡の北に位置する金屋集落は中世に遡る古い集落であり、集落内に馬場館跡がある。館は主郭と副郭に分かれ、15世紀代に存在し 16世紀初頭には廃絶した可能性が高いという [吉井 2002]。奥山庄には江上館跡・鳥坂城・下町坊城遺跡・古館館跡・韋駄天山遺跡・黒川城・蔵王権現遺跡などがある。江上館跡は、調査の結果 13~16世紀に渡る遺構・遺物が確認されたことから、下町坊城遺跡とともに地頭の三浦和田一族の拠点であったと考えられている [水澤 1997a・b、2005b]。加治庄は、佐々木加治氏が治めた所である。佐々木加治氏は戦国期には加治氏をはじめ竹俣氏、新発田氏、五十公野氏に分かれ、それらに関連する遺跡として加治城、宝積寺館跡、竹俣城、五十公野城、新発田城が存在する。阿賀野川右岸の白河庄は大見氏が地頭であり、その後安田氏・水原氏に分かれる。この地域には水原館、安田城、そのほか堀越館・笹岡城などがみられる。

第Ⅲ章 松蔭東遺跡

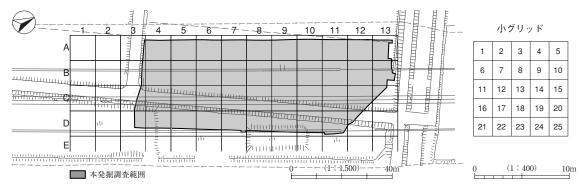
1 概 要

A 遺跡の概要

本遺跡は荒川右岸に位置し、荒川支流によってできた自然堤防上に立地する古代・中世の集落である。 遺構は、調査区北端と調査区中央東端に集中し、両部分とも調査区外へ続くものと推測する。遺物は、包 含層が削平を受けていたため、ごく少数を除き耕作土からの出土である。遺物の分布傾向としては、古代 の遺物は調査区北側にやや集中するが、中世を中心とするそのほかの時代の遺物は調査区全域から少量出 土している。なお本発掘調査面積は、3.416 ㎡を測る。

B グリッドの設定

グリッドは遺跡の南西部分に基点を作り、拡張や今後の発掘調査のことを考慮に入れ、南北および東方向に余裕を持つように設定した。基点(1A 杭)はX=240989.375、Y=83419.911の座標とした。南北軸は真北より 25° 15' 35'' 東偏している。大グリッドは10m 四方であり、名称は東西方向をアルファベットの大文字、南北方向を算用数字として、両者の組み合わせで「1 A区」などと表し、グリッドを示す杭はグリッド南西隅に設置した。また小グリッドは大グリッドを2m 四方に25 等分して $1\sim25$ の算用数字で表し、南西隅を1、北東隅を25 とした。表記は大グリッド表示に続けて、1A10」のように付して呼称した。



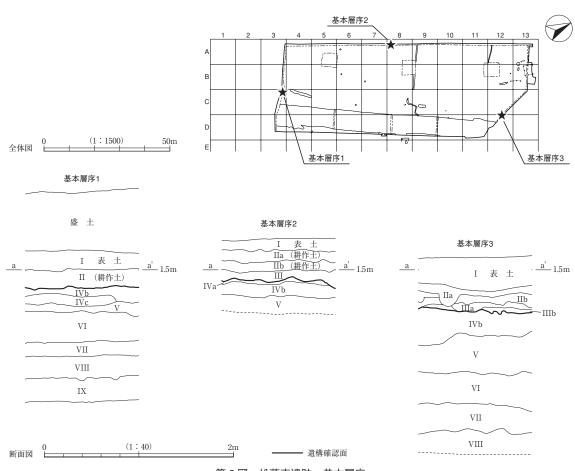
第7図 松蔭東遺跡 グリッド設定図

C基本層序

- よび中世の遺物包含層が存在したと推定されるが、ほ場整備などによって削平されたものと考えられる。 以下基本層序を記していく。
- I層 灰オリーブ色土層 (5Y4/2) など。しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化物 $(1 \sim 10 mm)$ を含む。
- II 層 黒褐色土 (2.5 Y3/2)。しまり普通〜強く、粘性強い。黒色シルトブロック $(10 \sim 15 \text{mm})$ ・灰オリーブ色シルトブロック $(5 \sim 10 \text{mm})$ を含む。しまりおよび内容物によって細分される。水田床土層。
- 皿層 黒褐色土 (2.5 Y 3/2)。しまり普通〜強く、粘性強い。黒色シルトブロック $(10 \sim 15 \text{mm})$ ・灰オリーブ色シルトブロック $(5 \sim 10 \text{mm})$ を含む。鉄分沈着。しまりおよび内容物によって細分される。
- IV a層 灰オリーブ色シルト質土 (5Y4/2)。しまり普通、粘性強い。斑状に黒色土ブロックを含む。
- IV b層 灰オリーブ色シルト質土 (5Y4/2)。しまり普通、粘性強い。黄灰色シルトブロック $(5\sim 20\text{mm})$ を多量に含む。鉄分沈着。
- \mathbb{N} c 層 オリーブ黒色シルト質土 (5Y3/2)。しまり普通、粘性強い。灰オリーブ色シルトブロック (5 ~ 20mm) を多量に含む。

基本層序 1・2

- V層 オリーブ黒色粘質土 (5Y3/2)。しまりやや弱く、粘性強い。灰オリーブ色シルトブロック (2~5 mm) を少量に含む。
- Ⅵ層 オリーブ黒色砂質土 (5Y3/2)。しまり普通、粘性弱い。以下基本層序1のみ確認。
- Ⅲ層 黒色粘質土 (5Y2/1)。しまり普通、粘性強い。この層の上面より湧水がみられる。
- ™層 黒色シルト質土 (5Y2/1)。しまり普通、粘性強い。灰色シルトブロック (5~10mm) を少量含む。



第8図 松蔭東遺跡 基本層序

区層 灰色粘質土 (5Y2/1)。しまり普通、粘性強い。黒色シルト (10 ~ 20mm) を斑状に含む。

基本層序3

Ⅵ層 灰色シルト質土 (5Y4/1)。しまり普通、粘性強い。砂粒を微量含む。

Ⅲ層 黒色粘質土 (5Y2/1)。しまり普通、粘性強い。

Ⅲ層 黒色粘質土 (5Y2/1)。しまり弱く、粘性強い。未分解の植物質を少量含む。

2 遺 構

A 遺構の概要

松蔭東遺跡は調査の結果、掘立柱建物 1 棟、柱穴列 1 列、井戸 2 基、土坑 5 基、ピット 13 基、溝 6 条、性格不明遺構 1 基を検出した。これらの遺構の時期は、遺物から古代・中世・近世と考えられるが、包含層が削平されており、同一面での検出となった。検出層位は、Ⅲ層上面で検出できた一部の遺構を除きⅣ層の上面である。この検出層位の差は、古代・中世の時期差を表すものではない。なお本来の遺構掘り込み面は、Ⅲ層上面かそれよりも上位と考える。

遺構は調査区全体にみられるが、2か所にやや集中する部分がある。1つが13A・B区であり、掘立柱建物1棟、井戸1基、柱穴列およびピットなどで、北側調査区外へ若干延びる可能性がある。もう1か所は7D、8D・E区で一部今回の調査範囲外に伸びており、井戸1基、ピットなどを検出した。後者は、試掘調査で遺構を集中して検出した68トレンチ周辺に該当する。遺構の時期は、掘立柱建物の柱根およびピット出土の礎板の年代測定によって、中世前半と推測する。なお上記の場所以外にも、土坑・溝・ピットなどを検出したが、配置など規則性はみられない。

遺構の覆土は 2 種類に分類することが可能である。うち 1 種類は耕作土に類似するものであり、溝と一部の土坑でみられる。また P21・SE22 は今回の調査区外に位置するが、日沿道の工事によって作られた排水路の法面に断面が現れ、破壊される恐れがあったため、調査対象とした。

検出した遺構は極力報告する方針としたが、ピットに関しては代表的なものを紹介することとし、その ほかは分割図などに掲載するに留めた。

B 記述の方法

本遺跡で検出した遺構は掘立柱建物、柱穴列、井戸、土坑、溝、性格不明遺構、ピットとなっており、それぞれ「SB」、「SA」、「SE」、「SK」、「SD」、「SX」、「P」の略号とした。遺構番号は時代・種別に関係なくすべて通し番号とし、遺構略号の後に付した。なお検出段階で遺構番号をつけたプランなどで調査の結果遺構ではないと判断したものは、そのまま番号を残し欠番とした。掘立柱建物や柱穴列の柱穴は、調査段階でその所属が判明したため「SB17-P1」・「SA6-P1」のように番号を付けた。

前述のとおり古代から近世までの遺構が存在する可能性があるが、すべて同一面での調査となったため、 遺構の記載は時代に関係なく種別ごとに行った。

掘立柱建物

掘立柱建物は柱穴の多い方向(原則として長軸)を「桁行」、少ない方向を「梁間」とし、建物の向きは 桁行方向を主軸として真北からの東西方向への角度を表した。また建物を構成することが推定できるが、 複数の構成方法が考えられる場合は、併せて記述することとした。柱穴のうち、柱根が残存しているもの に関しては、柱芯間の数値を計測した。また柱穴と柱根の関係は、青田遺跡 [荒川_{ほか}2004] の以下の分類を参考にした。

A類:柱穴の底面より上に柱根が位置するもの

B類:柱穴の底面より柱根の底面が低いもの

C類:柱穴としての掘形が確認できないもの

井戸・土坑・性格不明遺構・ピット

規模の記述は円形・楕円形については径(長径・短径)を用い、方形・不定形のものについては長軸・ 短軸として最大値を表している。深さは、遺構確認面からの最深部を計測している。また長軸を主軸と仮 定して、真北からの東西方向への角度で表した。

なお土坑とピットの区別については、原則として径(長軸)50cmを超えるものを土坑と認定した。ただし柱痕や礎板を確認したものに関しては、50cmを超えているものもピットとして扱うこととした。

溝

全長は確認できる最長の距離とし、途中で角度が変わるものは変換点ごとに計測してそれらを合計した 数値を記した。また攪乱などを挟んで両側に位置し、方向などから同一遺構と認定できるものは、検出で きない部分も含めて計測した。軸方向は真北からの東西方向への角度とし、角度が変わるごとに表した。

C遺構各説

1) 掘立柱建物・柱穴列・ピット

SB11 (図版 5·39)

SB11 は調査区北端 13B 区で検出した側柱式の掘立柱建物である。調査区外北側に延びると思われるため、建物の全容は明らかではない。ここではそれをふまえた上で記述する。

本遺構は、桁行 2 間以上 (約 3.17m 以上)、梁間 2 間 (約 3.88m) の掘立柱建物で、残存面積は約 11.5 ㎡である。 主軸方向は N-14°-E を測る。平面形は桁行の P4・7 が他の柱穴に比べると、やや西側に位置する。柱間寸法は $1.34 \sim 2.08$ m とばらつくが、梁間が桁行に比べて長い傾向にある。柱の掘形は径約 $20 \sim 30$ cm の円形もしくは楕円形を呈し、深さ $17 \sim 27$ cm で、断面形は概ね U 字状や半円状となっている。 P7 からは柱根を検出したが、腐食が進んでおり詳しい観察はできなかった。柱痕は黒褐色土となっており、掘形の埋土は、暗灰黄色砂質土を主体としている。柱穴と柱根の関係は、A 類に該当する。遺物は P1・2 から礫が 1 点ずつ出土している。なお P7 の柱根に関して放射性炭素年代測定を行い、12 世紀中頃~ 13 世紀中頃という結果が得られた(第11章 4 参照)。

SA6 (図版 6·40)

 $12\cdot 13$ B 区に位置する。4 基の柱穴が南北方向に並んでおり、P2 を中心とした「く」の字状を呈している。ピット間隔は $0.95\sim 1.57$ m と不規則で、南に向かうにつれ狭くなっていく。全長は 3.9m である。主軸方位は $N-25^\circ$ -E を測る。ピットの平面規模は長軸が $23\sim 32$ cm で、P1 が円形で $P2\cdot 4$ が方形、P3 が楕円形を呈している。深さは $10\sim 21$ cm であり、断面形は U 字状および半円状となっている。柱根は検出できなかったが、P1 においてオリーブ黒色土の柱痕を観察することができた。遺物は出土していない。

P9 (図版 6·40)

6B6・12 区に位置するピットである。円形で長径 46cm、短径 42cm、深さ 13cm であり、断面形は弧状となっている。覆土は単層で、オリーブ黒色土を主体としている。

P15 (図版 6 · 40)

13A22 区に位置するピットである。楕円形で長径 32cm、短径 24cm、深さ 31cm であり、断面形は斜位の V 字状となっている。覆土は 4 層で、柱痕はオリーブ黒色土、掘形の埋土は灰オリーブ色土を主体としている。

P18 (図版 6·40)

13A22 区に位置するピットであり、P15 のほぼ真北にあたる。円形で長径 27cm、短径 25cm、深さ 28cm であり、断面形は V 字状となっている。覆土は 3 層で、いずれもオリーブ黒色土である。

P21 (図版 6 · 41)

7D20 区に位置するピットである。本遺構の北には SK33 が、南には SD35 が隣接している。長方形で長軸 31cm、短軸 25cm、深さ 16cm であり、断面形は半円状となっている。灰オリーブ色砂質土の柱痕を確認した。

P36 (図版 6·41)

4D20、5D16 区に位置するピットである。長方形で長軸 69cm、短軸 47cm、深さ 61cm であり、他のピットと比べると、かなり深く掘られている。また南東側に一部浅い掘り込みを確認した。断面形は U 字状となっている。覆土は 4 層で、オリーブ黒色土を呈する柱痕は検出面まで到達していない。

2) 井 戸

SE10 (図版7·41·42)

 $13A21 \cdot 22$ 、 $13B1 \cdot 2$ 区に位置する素掘りの井戸である。上面の平面形は確認面で径 1.26m のやや不整な円形、底面は径 0.35m ほどの楕円形を呈する。底面は上方から見て、上面のやや北側に位置している。深さは確認面より 1.52m 掘り込まれており、底面標高は-0.15m である。断面形は漏斗状を呈し、底面からほぼ垂直に立ち上がり、確認面下約 0.3m のところで、約 40° 大きく外傾する。覆土は 6 層で、レンズ状に堆積し、黒褐色砂質土を主体としている。またすべての層に炭化物を含む。地山は確認面下 1m 付近で厚さ約 25cm の砂層となっており、そこから水が湧出する。遺物は最下層からトチノキの実が 2 点、礫が 5 点、底部に穿孔のあるヒョウタンが 1 点出土した。ヒョウタンに関しては人為的に加工されたと思われるが、遺存状態が悪く用途は明らかでない。

SE22 (図版 7·42)

8E4 区に位置し、試掘調査時に検出した素掘りの井戸である。上面の平面形は確認面で径 1.25m ほど、底面は径 0.86m ほどで、西側に広がりをもつ楕円形を呈する。深さは確認面より 0.61m 掘り込まれており、底面標高は 0.62m である。断面形は箱状だが、平面形から西側が漏斗状を呈するものと思われる。壁面と底面の境界は明瞭である。覆土は 4 層で、水平に堆積しており、上 2 層が黄灰色を基調とし、下 2 層が黒褐色を主体としている。またすべての層に炭化物を含む。地山は確認面下約 0.3m 付近で厚さ約 30cm の砂層となっており、そこから水が湧出する。遺物は 4 層から礫が 1 点出土している。

3) 土 坑

SK12 (図版7·42)

6A6・11 区に位置する楕円形の土坑である。長径 0.68m、短径 0.48m、深さ 23cm である。断面形は弧状を呈し、南壁が上面に向かって大きく外傾するのに対し、北壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は 3 層で、レンズ状に堆積し、ほかの土坑と異なり、灰色土を主体としている。遺物は出土していない。

SK19 (図版7·42)

6C14・19 区に位置する円形の土坑である。長径 0.52m、短径 0.47m、深さ 19cm である。断面形は箱状を呈する。覆土は炭化物を含んだ黒褐色土の単層である。遺物は出土していない。

SK25 (図版7·42)

9C17・18 区に位置する長方形の土坑である。長軸 2.85m、短軸 0.95m、深さ 20cm である。本遺構の南側には SD31 が隣接する。断面形は台形状を呈す。底面は平坦ではなく、やや凹凸がある。東壁が上面に向かって外側に開くのに対し、西壁はやや内傾気味に立ち上がる。覆土は炭化物を含んだ黒褐色土の単層で、Ⅱ層に近似する。遺物は出土していない。

SK32 (図版7·42)

7B16 区に位置する円形の土坑である。長径 0.50m、短径 0.48m である。深さは 10cm と非常に浅い。 断面形は台形状を呈し、西壁に比べ東壁はやや垂直気味に立ち上がる。覆土は炭化物を少量含んだオリー ブ黒色土の単層である。遺物は出土していない。

SK33 (図版8·42)

7D20・25 区に位置する円形の土坑である。長径 0.52m、短径 0.51m、深さ 17cm である。断面形は台形状を呈し、南壁がほぼ垂直に立ち上がる。覆土は炭化物を含んだ 2 層で、レンズ状に堆積しており、下層は砂質土になっている。遺物は出土していない。

4) 溝

SD13 (図版 4·8·43)

12B 区に存在する溝で、平面形はやや弧を描くように北に走る。主軸方向は N-6 \sim 17°-E であり、本遺構北側の SB11 とほぼ共通する。全長は 3.3m、幅は $0.34 \sim 0.68$ m で北から約 0.7m のところから急に広がりをみせる。深さは $9 \sim 20$ cm でやや一定せず、南側に向かって深くなる。断面形は弧状を呈す。覆土は地点により、単層および 2 層で、レンズ状に堆積する。全層がオリーブ黒色土を主体としているが、 2 層にのみ炭化物が含まれる。遺物は出土していない。

SD16 (図版 4·8·43)

12A 区に存在する溝である。平面形は調査区外の北西側から緩く蛇行しながら南東方向に走り、試掘坑によって切られている。主軸方向は N-86°-E、N-52~63°-W を測る。調査区内での全長は 7.1m、幅は 0.16m ~ 0.38m と不規則である。深さは 6 ~ 10cm で一定している。 $11 \cdot 12$ B 区において、溝の痕跡が確認できないことから、本遺構は試掘坑内で収斂すると思われる。断面形は弧状を呈し、北壁がやや緩やかに立ち上がる傾向にある。 覆土はすべての地点で炭化物を含んだ単層である。 遺物は出土していない。

SD20 (図版 2·8·43)

4C 区に存在する溝である。平面形は南西側から北東方向へ直線的に走り、主軸方向は N-42°-E を測る。

全長は 8.92m、幅は $0.7 \sim 1.14$ m と非常に不規則である。深さは確認面で $8 \sim 14$ cm である。断面形は弧状を呈すが、中央部分がやや落ち込んでいる。覆土は地点により、単層および 5 層に分けた。 1 層にのみ炭化物が含まれる。遺物は出土していない。

SD24 (図版 3·8·43)

9A・B区に存在する溝である。平面形は 9A21 区から 9B11 区間を試掘坑によって切られているが、調査区外の北西側からほぼ直線的に走る。主軸方向は N-60°-W を測る。調査区内の全長は 12.34m、試掘部分を入れると 18.34m となる。幅は $0.32 \sim 0.52$ m と不規則である。深さは $4 \sim 13$ cm と浅いが、北東方向でほぼ並走している SD16 の土層観察結果から、上層部分が削平されていると考える。断面形は弧状を呈し、やや凹凸のある底面から緩やかに立ち上がる。覆土は地点により、単層および 2 層に分けた。遺物は出土していない。

SD31 (図版 3·8·43)

8C、9C・D 区に存在する溝である。平面形は東端を水路によって切られているが、西方向に向かって蛇行しながら走る。主軸方向は N-51°-W、N-54~57°-E を測る。調査区の全長は 10.12m である。幅は確認面で $0.2 \sim 0.65$ m と不規則である。深さは $10 \sim 13$ cm とほぼ一定している。断面形は弧状を呈す。覆土は地点により、単層および 2 層に分けた。遺物は出土していない。

SD35 (図版3·8·43)

7D 区に存在する溝である。検出範囲が限られたので、詳しい形状を知ることができなかった。主軸方向は N-65°-W を測る。調査区の全長 0.39m、幅 0.25m、深さ 14cm である。断面形は弧状を呈し、南壁が階段状に立ち上がっている。覆土は 3 層で、一部を攪乱によって壊されている。黒褐色土を主体とし、2 層にのみ炭化物を含む。遺物は出土していない。

5) 性格不明遺構

SX5 (図版8·43)

13B1・2・6・7 区において検出した遺構である。本遺構の北側に SB11 があり、西側に SE10 が隣接する。 平面形は歪な長方形を呈し、主軸方向は N-53°-W を測る。長軸 1.3m、短軸 0.57m、深さは 10cm である。 断面形は W 字状を呈す。 覆土は 2 層で、上層は Π 層主体の焼土である。

3 遺 物

A 遺物の概要

遺物は、中・近世を中心に古代から近代までの幅広い時代のものが平箱(54 × 34 × 14cm)で5箱出土した。 これらの遺物は包含層が削平を受けており、ごく少数の遺構出土のものを除き、ほとんどが耕作土からの 出土となっている。遺構出土の遺物は、井戸出土の不明木製品やピット出土の柱根・礎板などの木製品主 体であり、時期の特定できるものは出土していない。

古代の遺物には須恵器・土師器があり、調査区全域から出土するが、12・13 B・C区にやや多く分布している。中世の遺物は珠洲焼・瀬戸美濃焼・越前焼などの国産陶器、白磁・青磁・青花・天目茶椀などの中国製品や朝鮮半島の製品などの輸入陶磁器、そのほか土師質土器・銭貨などがあり、調査区全域に分布している。近世・近代の遺物は陶磁器・銭貨などであり、調査区を縦断する農道周辺に多く出土した。

B 記述の方法

遺物は、上記のとおり木製品などを除いて遺構出土のものがなく、古代から近世・近代まで耕作土からの出土となっている。このことから、時期ごとに分けて、その中で遺構に関係なく遺物の大別ごとに記述することとした。

中世の遺物の年代については、珠洲焼は吉岡康暢氏の編年区分[吉岡 1994] に、瀬戸美濃焼は藤澤良 祐氏の編年区分[藤澤 2005] に従った。また白磁・青磁・青花の記述は森田勉氏 [1982]、上田秀夫氏 [1982]、 小野正敏氏 [1982]、山本信夫氏 [2000・2005] を参考にした。

C遺物各説

1) 須 恵 器 (図版 9-1 ~ 4 · 図版 44)

 $1 \sim 4$ は須恵器無台杯であり、胎土・調整などから 2 グループに分類できる。 1 つは、石英・長石を多量に含む粗い胎土で体・底部境が明瞭ではない器形を持つものであり、 $1 \cdot 2$ が該当する。底部内面には、渦巻状のロクロ目が観察できる。 2 つ目は、 1 に比べて精良な胎土を持ち、器面も滑らかに仕上げられているもので、 $3 \cdot 4$ が該当する。器形は、体・底部境が明瞭になっている。

遺物の時期は、『越後阿賀北地域の古代土器様相』[春日ほか2004]の編年のⅣ~Ⅴ期と考える。

2) 中近世陶磁器・土師質土器 (図版9・10-5~49・図版44)

5~7は白磁である。5は椀底部で、釉調は緑白色で高台以下は無釉となっている。6は皿底部で、釉 は薄く、細かい貫入が入り、腰部以下無釉となっている。削り高台であり、見込に目跡がみられる。7 は小杯で、釉調は灰白色で薄く、腰部以下無釉となっている。年代は5・6が12世紀、7が15世紀後 半である。8~20は青磁である。8・9は椀体部で、内面に画花文がみられる。釉調は8がオリーブ灰 色、9は緑色となっている。10は椀底部で、貫入が入り、また被熱し変色している。釉は、畳付を超え て高台内面途中までかかっている。年代は12世紀後半~13世紀初頭である。11は椀口縁部で、外面に 鎬蓮弁文がみられる。12 は椀体部で、釉はやや厚く、外面に鎬蓮弁文がみられる。釉調は 11・12 ともに 緑灰色となっており、年代は 13 世紀後半である。13・14 は椀体部で、13 には内面に画花文がみられ、釉 調は緑色・緑灰色となっている。年代は14世紀末葉と推定する。15は椀口縁部で、口縁は膨らみ、やや 外反している。釉調は、緑色となっている。16 ~ 18 は椀体部であり、釉調は 16・17 が黄緑色、18 が緑 灰色となっている。19は椀の体~底部で、外面に片切彫の蓮弁がみられ、また見込にスタンプ文が施さ れる。釉調は緑色であり、全面に施釉後外底の釉を輪状に削り取っている。これらの年代は15世紀前半 である。20 は椀体部であり、外面に細線の線描蓮弁文、内面に線描の文様が施される。釉調は青緑色で、 年代は 15 世紀後半と推定する。21 ~ 23 は青花で、すべて皿となっている。21 は見込の重圏線内に植物 の葉をモチーフにした文様が描かれ、高台内は鉋による削痕が付く。22 は見込に「寿」と推定した字が 描かれ、高台内は鉋による削痕が付く。23は前二者と比較して、釉がくすみ、また胎土も灰白色となる。 見込の重圏線内に植物をモチーフにした文様が描かれ、また断面には漆が付着している。これらの時期 は、16世紀後半と考える。24は中国産の天目茶椀で、胎土は堅くしまっている。釉は二重掛けされてお り、2回目の釉が厚くなっている。また断面には漆が付着しており、漆継が行われていたと推定した。25 は壺の底部であり、現状では釉は観察できない。底部は内側に向かってやや凹み、接地面は底部外周の幅

2 cm ほどである。本資料は、胎内市江上館で出土した黄褐色釉陶器「水澤 1993a・b、1997b」に類する ものと推測する。24・25の年代は、15世紀代である。26は朝鮮半島産の雑釉皿で、見込に現状で3か所 の胎土目痕が付く。年代は、15世紀後半である。27・28は瀬戸美濃焼である。27は天目茶椀で、釉は厚く、 高台は鉄錆で化粧掛けされている。高台は削り高台となっており、一部外面が面取りされている。28 は 縁釉小皿で、緑色の釉が付く。これらは古瀬戸後期様式と思われ、27 は 15 世紀前半、28 が 15 世紀中頃 である。29 は頸~肩部の破片であり、壺と推測した。胎土は灰色を呈し、黒褐色釉が外面および内面頸 部まで掛けられている。産地は不明であるが、年代は 15 世紀代と考える。30 ~ 43 は珠洲焼である。30 ~36 は甕体部で、外面に叩き目痕が付く。これらの叩き目は、深く鋭利なものと幅広く浅いものがあり、 複数時期が含まれている可能性を示す。また 30 は断面に、31 は表面・断面に磨痕が確認できるため、砥 石に転用されたものである。37・38は片口鉢の口縁~体部片であり、共に現状では卸目は確認できない。 口縁形状は、37が円頭状、38が外面部分に面を形成している。これらの時期は、13世紀前半の珠洲Ⅱ期 である。39 は鉢胴部で、内面に 1 単位(幅 2 cm) 10 本の卸目が付く。時期は 13 世紀後半の珠洲Ⅲ期である。 40・41 は鉢口縁部で、口縁部内端に櫛目波状文帯がめぐっている。時期は15世紀前半の珠洲 V 期である。 42 は鉢体部で、内面に 1 単位(幅 2.9cm 以上)10 本以上の卸目が付く。焼きしめはやや甘く、色調は黄灰 色を呈する。43 は鉢体部で、内面はよく磨耗している。44 は越前焼の甕体部で、底部に近い部分と推定 する。45・46 は土師質土器である。46 は低平な小皿で、外面には煤が付着している。45 は底部片で、ロ クロ成形回転糸切りで製作されている。

47~49 は近世の陶磁器である。47・48 は、肥前系磁器皿である。共に見込に文様が描かれ、高台には砂目が付着している。49 は唐津焼の皿で、内面は底面から段を持って立ち上がる。灰釉が掛けられ、見込には砂目痕が付く。高台は高台脇との区分が明瞭ではなく、高さも低くなっている。時期は 49 が 17 世紀前半、47・48 は 17 世紀前半から中頃である。

3) 木 製 品

P21 (図版 10-50 · 図版 44)

50 は礎板で、現状は楕円形を呈しており、長さ 25.95cm、幅 18.75cm、厚さ 3.05cm である。木取りは板目である。断面は非常に緩やかな弧状を呈する。柱の圧痕は確認できない。

表採 (図版 10-51・図版 44)

51 は礎板の可能性が高く、現状は半月状を呈しており、長さ 24.1cm、幅 8.05cm、厚さ 2.1cm である。 木取りは板目である。左側面は年輪にあわせるよう切断されているが、当時の加工痕であるかは不明である。

4) 銭 貨(図版 10-52~55・図版 44)

52 は天禧通寳で初鋳年は 1017 年、53 は嘉祐通寳で 1056 年、54 は元祐通寳で 1086 年、55 は元符通寳で 1098 年となっている。 $52 \cdot 55$ は 5C 区から、 $53 \cdot 54$ は 9A 区から出土している。 $53 \cdot 54$ は張り付いた状態で出土した。裏面はいずれも無文である。

4 自然科学分析

A 松蔭東遺跡における放射性炭素年代測定

1) はじめに

松蔭東遺跡は海岸砂丘と牧目集落が位置する自然堤防にはさまれた沖積地に立地し、古代・中世の可能性が高い遺構が検出された。本遺跡の掘立柱建物と建物関連のピットより検出された試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。試料の調製は山形、瀬谷、Lomtatidze、Jorjolianiが、測定は小林、丹生、伊藤が行い、本文は伊藤、孔が作成した。樹種同定は行っていないが、材の形状は野村が観察を行った。

2) 試料と方法

測定試料は、掘立柱建物 (SB11のP7) の柱根 (PLD-6790) と P21・表土から出土した礎板 (PLD-6791・6792) である。いずれも生材の広葉樹であり、最外年輪以外の部分の1年輪分を測定した。試料の情報、調製データは第2表のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクト AMS:NEC 製 1.5SDH)を用いて測定した。 得られた 14 C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 14 C 年代、暦年代を算出した。

測定番号	遺跡データ	試料データ	前 処 理
PLD-6790	松蔭東遺跡 位置:13B グリッド 遺構:SB11 P7 資料 No.: 1 (柱根)	試料の種類:生材(環孔材:1年輪分) 試料の性状:最外以外部位不明 状態:wet カビ:無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 1.2N, 水酸化ナトリウム 1N, 塩酸 1.2N)
PLD-6791 (遺物番号 50)	松蔭東遺跡 位置:8D グリッド 遺構:P21 資料 No.:2(礎板)	試料の種類:生材(環孔材:1 年輪分) 試料の性状:最外以外部位不明 状態:wet カビ:無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 1.2N, 水酸化ナトリウム 1N, 塩酸 1.2N)
PLD-6792 (遺物番号 51)	松蔭東遺跡 位置:7Eグリッド 層位:- 資料 No.:3 (礎板)	試料の種類:生材(環孔材:1年輪分) 試料の性状:最外以外部位不明 状態:wet カビ:無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 1.2N, 水酸化ナトリウム 1N, 塩酸 1.2N)

第2表 松蔭東遺跡 測定試料および処理

3) 結果

第3表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比(δ ¹³C)と、同位体分別効果の補正を行って 暦年較正に用いた ¹⁴C 年代、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ¹⁴C 年代、1 ¹⁴C 年代を暦年代に 較正した年代範囲を、第8図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値と誤差を 丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記 載した。

 14 C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 14 C 年代(yrBP)の算出には、 14 C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した 14 C 年代誤差(\pm 1 σ)は、測定の統計 誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の 14 C 年代がその 14 C 年代誤差内に入る確率が 68.2%である ことを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の 14 C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された 14 C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14 C 濃度の変動、および半減期の違い $(^{14}$ C の半減期 5730 ± 40年)を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

 14 C 年代の暦年較正には OxCal3.10(較正曲線データ:INTCAL04)を使用した。なお、 1 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された 14 C 年代誤差に相当する 68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ 暦年代範囲は 95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は 14 C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

加卢桑里	δ ¹³ C	曆年較正用年代	¹⁴ C 年代	¹⁴ C 年代を暦年代に較正した年代範囲		
測定番号	(‰)	$(yrBP \pm 1 \sigma)$	$(yrBP \pm 1 \sigma)$	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲	
PLD-6790	- 28.2 ± 0.30	835 ± 22	835 ± 20	1175AD (64.7%) 1225AD 1230AD (2.2%) 1240AD 1245AD (1.3%) 1250AD	1165AD (95.4%) 1260AD	
PLD-6791	- 24.20 ± 0.24	823 ± 21	825 ± 20	1210AD (68.2%) 1260AD	<u>1175AD (95.4%) 1265AD</u>	
PLD-6792	- 25.09 ± 0.23	821 ± 22	820 ± 20	<u>1210AD (68.2%) 1260AD</u>	1170AD (95.4%) 1265AD	

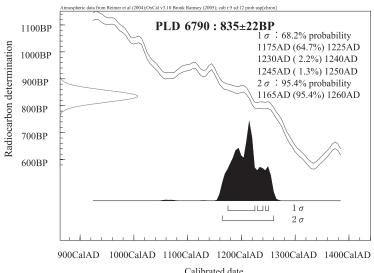
第3表 松蔭東遺跡 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

4)考察

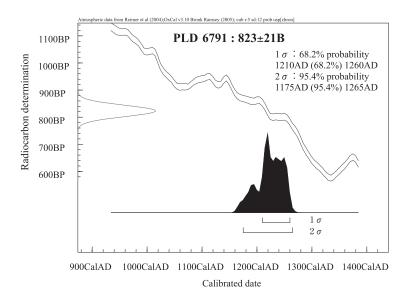
試料について、同位体分別効果の補正および暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

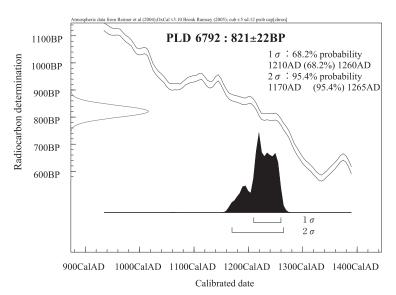
SB11 の P7 から出土した柱根(PLD-6790)の暦年較正年代は、 1 σ (68.2% の確率)で確率の高い年代範囲をみると、1175-1225calAD(64.7%)、 2 σ (95.4%の確率)で 1165-1260calAD(95.4%)の年代範囲に含まれた。掘立柱建物の想定年代は 8 世紀後半~ 9 世紀中頃であるが、 2 σ の年代範囲でみると 12 世紀中頃~ 13 世紀中頃の年代範囲が得られた。

P21・表土から出土した礎板 (PLD-6791・6792) の暦年較正年代は、2点ともに1 σ の確率で1210-1260calAD(68.2%)、2 σ の確率で1170-1265calAD(95.4%)の年代範囲に含まれた。2 σ の確率でみると、12世紀後半~13世紀中頃の年代範囲であり、柱根とほぼ同時期の年代範囲の確率が高いことが示された。



Calibrated date





第9図 松蔭東遺跡 暦年較正結果

5 ま と め

松蔭東遺跡では本発掘調査によって掘立柱建物やピットを検出し、それに付随する可能性が高い井戸も 検出した。時期は、放射性炭素年代測定の結果中世前半と想定されている。

遺物は古代~近代のものが出土しているが、中世が中心となっている。中世の遺物は、破片資料が多いが、 12 世紀~ 13 世紀後半(Ⅱ期) と 14 世紀末~ 15 世紀後半(Ⅲ期) および 16 世紀後半以降(Ⅲ期) の 3 時期 に分けることが可能である。 I 期の遺物は、白磁 $(5 \cdot 6)$ 、青磁 $(8 \sim 12)$ 、珠洲焼片口鉢 $(37 \sim 39)$ となっ ている。出土位置は 5B 区から 13C 区までと幅広いが、同時期と推定した掘立柱建物や礎板を伴うピット が位置するグリッドには出土していない。 Π 期の遺物は、白磁 (7)、青磁 $(13 \sim 20)$ 、輸入陶磁器 $(24 \sim 10)$ 26)、瀬戸美濃焼(27・28)、珠洲焼片口鉢(40・41)、越前焼(44)であり、土師質土器(45・46)もこの一 群に含まれると推定する。出土位置は、前群と同様に 4A 区から 12C 区まで幅広い。Ⅲ期の遺物は、青花 (21~23)、唐津焼(49)、肥前磁器(47·48)などである。出土位置は、他と同様に 6C 区から 12C 区となっ ている。これらの所有者は、不明な点が多いが、白磁や青磁などの輸入陶磁器などを持っていることから、 純然たる下層農民ではないと考える。特にI期では、素掘りの掘立柱建物のほかに礎板を持つ建物が存在 し、Ⅱ期では、青磁などの他に中国天目などが伴うことから、しかるべき階層が関わっていたと推測する。 本遺跡周辺の中世遺跡としては、北約 110m に田屋道遺跡、北東約 100m に牧目館跡、南約 450m に窪 田遺跡が存在し、また南約3kmの荒川右岸の自然堤防上には、西部遺跡が位置している。田屋道遺跡は、 掘立柱建物 18 棟、井戸 22 基、墓 1 基などの遺構が検出されており、遺物は白磁・青磁・珠洲焼・土師質 土器・漆器などとなっている。遺跡の時期は12世紀末~13世紀が中心となっている[大島2006]。牧目 館跡は、平成3年に調査が行われ、白磁・青磁・染付け(青花)などが出土し、15世紀~16世紀に中心 を持つ色部氏に関連した館跡と推定されている「田辺 1992]。窪田遺跡は、掘立柱建物 6 棟、井戸 23 基、 旧河川4本などの遺構が検出されており、年代測定によって古墳末~古代前半・中世・近世の集落跡とさ れている [前川 2006a・b]。西部遺跡は、平成 16~18年にかけて調査が行われ、古代から中世・近世に 渡る遺跡であることが判明している「折原はか2005」。中世の遺構は12世紀中頃~後半、13世紀初頭前後 ~前半、15世紀前半~後半の3時期に分けられ、14世紀代に断絶の時期があるとされている。遺物は、 中国輸入陶磁器・珠洲焼・常滑焼・瀬戸美濃焼などとなっている。

これらの遺跡と本遺跡を時期ごとにみていくと、以下のようになる。本遺跡の I 期は牧目館跡を除く各遺跡において、多少の前後関係はみられるものの、集落が形成されており、なんらかの関係があったものと推測する。特に田屋道遺跡とは近接した位置にあり、密接に関連していた可能性も指摘できる。 II 期は、本遺跡で遺物がもっとも充実した時期であり、また北東に位置する牧目館跡においても中心の時期である。このことから本遺跡の II 期は、牧目館に関連した遺跡であったと推測するが、この時期の遺構がなく、詳細は不明である。 II 期は、田屋道遺跡を除く各遺跡で遺構・遺物がみられ、特に窪田遺跡では集落が形成される。しかし本遺跡では遺構が検出できず、また慶長 2 (1597) 年作成の「瀬波郡絵図」では本遺跡と考えられる部分には建物などがみられないことから、集落としては利用されていなかったと推定する。

第Ⅳ章 中曽根遺跡

概 要 1

遺跡の概要

本遺跡は、荒川左岸の海岸砂丘背後の後背湿地内に立地する。時 代および性格は微高地に立地する弥生時代および古代の集落であ る。遺構は掘立柱建物や土坑、溝、自然流路などからなり、河川沿 いに営まれた古代の一般的集落と考える。遺物は須恵器・土師器が 中心であり、時期は8~11世紀初頭が主体となっている。また平 成17年度本発掘調査(以下、17年度調査)で検出した弥生時代の遺 構は、今回は確認できず、遺物も土器が2点出土したのみであった。 なお平成18年度本発掘調査面積は、2,294㎡を測る。

グリッドの設定 В

グリッドは、17年度調査で設定したものを採用し、東方向のみ 延長した。基点は遺跡の南西部分に作り、X = 236250.211、Y = 80681.207の座標とした。南北軸は真北より16°23′42″東偏し ている。大グリッドは 10m 四方であり、名称は東西方向を算用数 字、南北方向をアルファベットの大文字として、両者の組み合わせ で「1A区」などと表し、グリッドを示す杭はグリッド南西隅に設 定した。また小グリッドは大グリッドを 2 m 四方に 25 等分して 1 ~ 25 の算用数字で表し、南西隅を1、北東隅を25 とした。表記は 大グリッド表示に続けて、「1A10」のように付して呼称した。

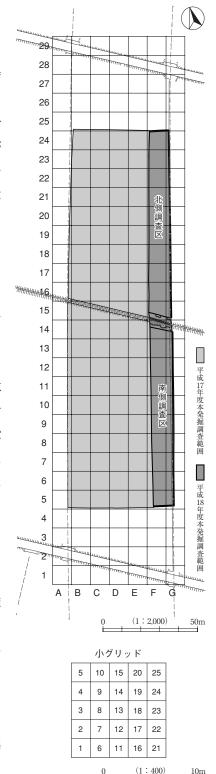
C基本層序

基本層序は、遺構確認面の下位(Ⅳ層)までは17年度調査と同 様である。しかし南側・北側調査区に各1か所設定した堆積状況確 認トレンチでは、17年度調査基本層序とそれぞれ土層が異なって おり、また湧水標高にも違いがみられた。そのためⅣ層以下につい ては、個別に記載することとした。なおⅠ層の上位に盛土層がある が、これは日沿道工事に伴うものである。

以下順番に記していく。

オリーブ黒色土層 (5Y3/2)。しまりやや強く、粘性やや弱 I層 い。小円礫 (2~10mm) を含む。耕作土。

灰オリーブ色シルト層 (7.5Y4/2)。しまり強く、粘性やや 第10 図 中曽根遺跡 グリッド設定図 Ⅱ層



弱い。炭化物 (1~3 mm) を含む。耕作土。

灰オリーブ色 シルト層 (7.5Y4/2)。しまり強く、粘性やや弱い。耕作土とIV層の混合土。 Ⅲ層

IV層 灰色シルト層 (5Y6/1)。しまり強く、粘性やや弱い。褐灰色シルト $(10 \sim 20 \text{mm})$ を微量に含む。

基本層序 1 (南側調査区)

灰オリーブ色シルト層 (7.5Y6/2)。しまりやや強く、粘性やや弱い。黒色粒 (1 mm) を微量含む。 V層

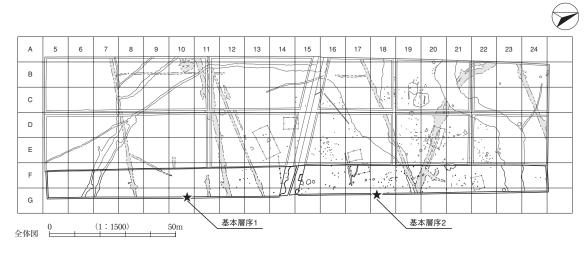
VI層 灰色砂質シルト層 (10Y5/1)。しまり弱く、粘性弱い。

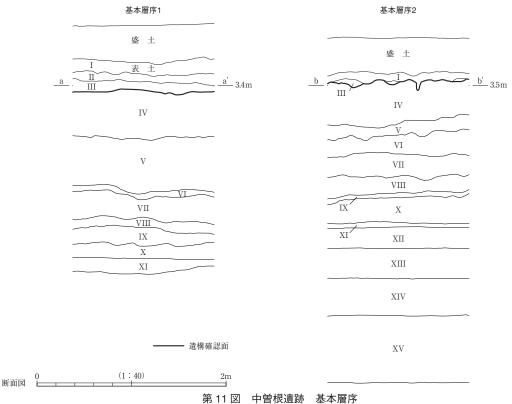
灰色シルト層 (10Y5/1)。しまり弱く、粘性強い。 Ⅷ層

オリーブ灰色シルト層 (5GY5/1)。しまり弱く、粘性強い。黒色粒 (1 mm) を微量含む。 Ⅷ層

灰色シルト層(10Y4/1)。しまり弱く、粘性やや強い。 IX層

灰オリーブ色シルト層(7.5Y4/2)。しまり強く、粘性強い。木片を多く含む。 X層





X I 層 灰色シルト層 (10Y4/1)。しまり弱く、粘性やや強い。木片を中量含む。この下層 (砂層) より湧水がみられる。

基本層序 2 (北側調査区)

- V層 暗オリーブ灰色砂質シルト層(2.5GY4/1)。しまり強く、粘性やや強い。
- Ⅵ層 暗オリーブ灰色シルト層(2.5GY4/1)。しまりやや強く、粘性強い。
- Ⅲ層 緑灰色砂質シルト層 (10GY5/1)。しまり強く、粘性強い。
- ™層 暗オリーブ灰色シルト層(2.5GY4/1)。しまりやや弱く、粘性やや強い。極細砂粒を少量含む。
- IX層 暗オリーブ灰色シルト層 (2.5GY4/1)。しまりやや弱く、粘性強い。砂粒を少量含む。
- X層 暗オリーブ灰色シルト層 (2.5GY4/1)。しまりやや弱く、粘性強い。極細砂粒を少量含む。
- XI層 オリーブ灰色砂質シルト層 (5GY5/1)。しまりやや弱く、粘性強い。
- X Ⅱ層 灰色シルト層 (10Y4/1)。しまりやや弱く、粘性強い。粗砂粒を少量含む。
- X Ⅲ層 灰色粘質シルト層 (7.5Y4/1)。しまり弱く、粘性強い。
- X IV層 黒褐色粘質シルト層 (2.5Y3/2)。しまり弱く、粘性強い。
- X V層 灰色砂層 (7.5Y4/1)。湧水がみられる。

2 遺 構

A 遺構の概要

中曽根遺跡は平成 18 年度本発掘調査において、掘立柱建物 2 棟、柱穴列 2 列、井戸 2 基、土坑 6 基、ピット 104 基、溝 4 条、性格不明遺構 4 基の遺構と自然流路を 2 条検出した。このうち掘立柱建物 1 基・柱穴列 1 列・溝 2 条・性格不明遺構 1 基・自然流路 2 条は 17 年度調査区から連続している。これらは古代の遺構で放射性炭素年代測定や遺物から 8 ~ 11 世紀初頭が中心時期と推測する。

遺構はSA5とSB366の間に多く存在し、12F・G区より南側およびSR2より北側では遺構がほとんど構築されていない。ピットは18F、21F区において集中して検出し、掘り込みの深いものも存在することから掘立柱建物を構成するものが含まれている可能性がある。掘立柱建物は2棟検出し、それぞれ北側調査区からとなっている。井戸は2基検出し、規模は17年度検出のものと比較するとやや小形であるが、形状や覆土の堆積状況から井戸と認定した。土坑は不整形のものが大半であり、規模も17年度と比較すると小形のものが中心となっている。これらの遺構の分布は、前回調査と同様、周辺と比較して標高のやや高い部分に選地しているが、規則性などはみられず調査区内に散在している。

なお17年度検出した弥生時代中期末~後期前半の遺構は、今回検出できなかった。

B 記述の方法

本遺跡で検出した遺構は掘立柱建物、柱穴列、井戸、土坑、溝、性格不明遺構、ピットで、そのほかに自然流路がある。それぞれ「SB」、「SA」、「SE」、「SK」、「SD」、「SX」、「P」、「SR」の略号とした。遺構番号は時代・種別に関係なくすべて通し番号とし、遺構略号の後に付した。

遺構番号は17年度に1から270まで使用しているため、271から付した。17年度調査区と今年度調査区に連続して、同一と判明した遺構は、同じ遺構番号を使用した。また調査後に同一の掘立柱建物を構成することが判明したピットは、若い番号を掘立柱建物の番号としてそれ以外は欠番とした。また掘立柱建

物の柱穴は、「SB106-P1」のように番号を付した。

検出した遺構は極力報告する方針としたが、ピットに関しては代表的なものを紹介することとし、その ほかは分割図などに掲載するに留めた。また17年度および今年度の調査区に連続して検出した遺構は、 規模など新たに判明した点があることから、改めて記述することとした。

なお遺構個別の記載方法に関しては、第Ⅲ章2Bを参照願いたい。

C遺構各説

1) 掘立柱建物・柱穴列・ピット

SB106 · SD334 (図版 16 · 46 · 52)

SB106·SD334 は、共に 17F 区に位置する。SB106 は桁行 3 間(約7.03m)、梁間 2 間(約3.61m)の側柱建物で、面積は約 25.5 ㎡である。遺構範囲内には SD375 が存在する。主軸方向は N-5°-W である。柱間寸法は桁行方向が $1.72 \sim 2.62$ m で、南に向かうほど間隔が広がる。梁行方向は $1.76 \sim 1.83$ m で、間隔はほぼ一定している。柱掘形は径 $16 \sim 37$ cm の円形および楕円形を呈し、深さ $18 \sim 76$ cm である。断面形は概ね U 字状であるが、P2 が漏斗状、P4 が階段状になっている。西側約 2 m のところに昨年確認した SB50 があり、主軸方向や梁間の規模・桁行・梁行の柱間寸法がほぼ同一であることから、なんらかの関連性が窺える。P1・3・4・8・9 から柱根を検出したが、P1 は柱根が土壌化しており、取り上げることができなかった。樹種同定の結果 P3 はクワ属、P9 はサクラ属であった。P3 も腐食が激しく形状を確認することはできなかったが、そのほかはすべて丸材を使用している。柱根と柱穴の関係は、B 類に該当する。遺物は P6 から墨書土器(2)が出土している。P4・8 の柱根に関して放射性炭素年代測定を行い、8 世紀後半~9 世紀後半、7 世紀後半~9 世紀前半という結果が得られた(第 \mathbb{N} 章 4 B 参照)。

SD334 は SB106 から約 60cm 南に位置する。平面形は東西方向へ直線的に走る。主軸方向は N-81 ~ 94°-W である。昨年度の調査区で確認した SD12 とは開渠によって切られているが、主軸方向がほぼ一緒であることから同一の遺構と考える。検出面での全長は 7.92m である。幅は $0.35 \sim 0.64$ m と一定しない。深さは $9 \sim 12$ cm であり、断面形は台形状を呈す。 覆土は地点により、単層および 2 層に分層される。遺物は、土師器椀($20 \cdot 21$)や土師器甕口縁部(22)、墨書土器(19)が出土している。

SB366 (図版 17・47)

SB366 は、21F、22F・G区に位置する。遺構中央部にP7が存在しており、それを桁行とした場合と、建物の中心に位置する柱穴とした場合の二通りの解釈ができる。そのためこの2つの構造について記述することにする。

はじめに側柱建物として考えた場合、桁行 2 間 (約 4.43m)、梁間 1 間 (約 2.61m) で、面積は約 11.7 ㎡である。 主軸方向は N-5°-E である。平面形は、桁行中央の柱穴がやや外側に張り出す形状を示す。柱間寸法は 桁行方向で $2.09 \sim 2.35$ m、梁行方向で $2.46 \sim 2.61$ m であり、全体にややばらつきがみられる。

次に中心に位置する柱穴として考えた場合、桁行 2 間(約 5.04m)、梁間 2 間(約 4.29m)で、面積は約 $21.5 \,\mathrm{m}^2$ である。主軸方向は $N-85^\circ$ -W である。平面形は桁行、梁間の中央の柱穴がやや外側に張り出す形状を示す。柱間寸法は桁行方向で $2.18 \sim 2.61 \,\mathrm{m}$ 、梁行方向で $2.09 \sim 4.29 \,\mathrm{m}$ であり、こちらも全体にややばらつきがみられる。

柱穴は、円形および楕円形の掘形を呈し、径は $12\sim19$ cm である。本遺跡で検出した他の掘立柱建物 に比べると小規模である。深さは $12\sim22$ cm で、断面形は概ね U 字状を呈すが、P1 のみ箱状である。柱

根は検出できなかった。

SA5 (図版 17·48)

 $14E \cdot F$ 区に位置する。今回の調査では、昨年度に確認した $P1 \cdot 2$ に続く 4 基の柱穴を検出した。 6 基の柱穴は直線的に東西方向に並ぶ。ピット間隔は $1.7 \sim 2.4$ m と非常に不規則であり、東側の方が狭くなっている。全長は 10.74m であり、主軸方向は $N-88^\circ$ -W を測る。柱掘形は径 $26 \sim 42$ cm で、円形・楕円形・万形・長方形を呈している。柱根はすべての柱穴から検出し、樹種同定の結果サクラ属・クリであった。木取りは P3 が丸材、 $P1 \cdot 2 \cdot 4 \cdot 5 \cdot 6$ が割材を使用している。割材には外面を加工した形跡がみられたが、丸材のほうは確認できなかった。掘形の埋土は、概ね灰色土および灰オリーブ色土となっている。柱根と柱穴の関係は、B 類に該当する。遺物は出土していない。

SA397 (図版 17·48·49)

15F 区に位置し、約 50cm 東側に SX278 が隣接している。2 基の柱穴が東西方向に 2.13m の間隔で並んでおり、主軸方向は N-81°-W である。P1 が方形で長軸 26cm、短軸 23cm、深さ 54cm、断面形は漏斗状、P2 が円形で長径 34cm、短径 30cm、深さ 51cm、断面形は同じく漏斗状を呈す。共に丸材の柱根で、西側に約 50°傾いた状態で検出した。樹種同定の結果 P1 はサクラ属であった。掘形の埋土は、灰色土である。柱根と柱穴の関係は、B 類に該当する。遺物は出土していない。なお P2 の柱根に関して放射性炭素年代測定を行い、暦年較正用年代で 8 世紀後半~ 9 世紀後半という結果が得られた(第V章 4 B 参照)。

P329 (図版 18・49)

16G3 区に位置するピットである。円形で径 18cm、深さ 21cm である。断面形は U 字状を呈す。 覆土 は炭化物を含んだ灰色土の単層である。遺物は、確認面下 8 cm のところで土師器椀 (3) が出土している。 P340 (図版 $18\cdot49$)

12F24 区に位置するピットである。楕円形で長径 26cm、短径 18cm である。深さは 8 cm で非常に浅い。 断面形は両壁に段のある弧状を呈す。覆土は 2 層に分層し、上層は炭化物を多量に含んでいる。共に褐灰 色土を主体としており、灰色シルトブロックを含む。遺物は、1 層から土師器椀(4)が出土している。

P345 (図版 18·49)

13F6 区に位置するピットである。楕円形で長径 20cm、短径 11cm、深さ 26cm である。断面形は U 字 状を呈し、垂直に立ち上がる東壁は底面との境界が明瞭である。径約 1.5cm の柱根を検出しており、樹種 同定の結果コナラ節であった。覆土は炭化物を中量含んだ単層である。

P354 (図版 18・49)

21F6 区に位置するピットである。本遺構の西側約 10cm のところに SX29 が隣接する。平面形は長方形で長軸 22cm、短軸 17cm、深さ 19cm であり、断面形は上部がややくびれた形を呈する袋状である。覆土は黄灰色土の単層であり、炭化物を多く含む。遺物は、確認面下約 4cm のところで須恵器瓶 (5) が出土した。

P376 (図版 18·49)

15G1 区に位置するピットである。円形で長径 54cm、短径 50cm、深さ 31cm であり、断面形は袋状となっている。クリ材の柱根を検出したが、腐食が進んでいる。規模は径 18cm 以上あったと思われる。覆土は炭化物を含み 2 層に分層した。掘形の埋土は灰色土を主体とし、少量の炭化物を含んでいる。遺物は、土師器細片が 2 点出土している。

P389 (図版 18·49)

14F14 区に位置するピットである。円形で長径 15cm、短径 14cm、深さ 23cm である。断面形は U 字状で、北壁は底面から急斜度に立ち上がり、確認面より 10cm のところでほぼ垂直になる。覆土は炭化物を含んだ単層である。柱根は樹種同定の結果サクラ属であったが、腐食が進んでおり観察が不可能であった。しかし柱痕から直径 13cm 程度の柱であったと推定する。

P395 (図版 18·50)

12F10 区に位置するピットである。円形で長径 13cm、短径 11cm、深さ 23cm であり、断面形は U字 状となっている。径 8 cm の非常に細い柱根が、約 30° 西に傾いた状態で検出した。樹種同定の結果サクラ属であった。覆土は黒褐色土の単層である。

P396 (図版 50)

18F21 区に位置するピットである。基本層序を確認するため、重機で掘削している際、検出した。底面標高は 2.51m であり、基本層序の III 層暗オリーブ灰色土から柱根が出土している。腐食が進み、広葉樹であることしか特定できなかったが、丸材であったと考える。掘形がないことと検出時の状況から、C 類であろう。

2) 井 戸

SE277 (図版 18·50)

15F19 区に位置する素掘りの井戸である。本遺構の南側に SX272 と SX278 がほぼ一直線状に存在している。平面形は円形で、確認面で径約 1.14m、底面は径約 0.5m である。深さは確認面より 0.82m であり、底面標高は 2.55m を測る。断面形は漏斗状を呈し、やや凹凸のある底面から東壁は少し外反、西壁は少し外側に膨らみながら立ち上がる。確認面下 $0.36\sim0.38$ m のところで約 50° 大きく外傾する。覆土は 10 層でレンズ状に堆積する。 $1\cdot6\cdot9$ 層が黒色系で、そのほかの層は灰色を主体とした覆土をしており、なかでも $8\cdot10$ 層は地山に類似している。また 4 層は炭化物を多量含む層である。掘削中湧水はみられなかった。遺物の多くは上部の層で出土しており、土師器椀($8\cdot9\cdot10\cdot11\cdot12$)、黒色土器(7)、須恵器甕の体部片(6)などとなっている。また付木(3 層)、斎串(6 層・83)などの木製品も数点出土している。

SE323 (図版 18·51)

23G2 区に位置する素掘りの井戸で、北側に SR2 が隣接している。平面形は径約 1.13m の円形で、底面は 0.33m の楕円形を呈する。底面は上方から見てやや東に位置する。深さは確認面より 0.74m 掘り込まれており、底面標高は 2.64m である。断面形は漏斗状を呈し、東壁は垂直に、西壁はやや歪な階段状から垂直に立ち上がる。確認面下 $0.16 \sim 0.30$ m のところで約 $35 \sim 40^\circ$ 大きく外傾する。覆土は 10 層に分層でき、そのうち $1 \sim 5$ 層はレンズ状に堆積する。 $1 \cdot 2 \cdot 6$ 層が黒色土で、そのほかの層は灰色を主体としている。掘削中湧水はみられなかった。遺物は、土師器椀(13)が 10 層から出土したほか、黒色土器の口縁部が 2 点みられるが、細片であるため図化できなかった。

3) 土 坑

SK281 (図版 18·51)

17F19・20 区に位置する不整長方形の土坑であり、本遺構の北側に SK282 が隣接している。長軸 0.79m、短軸 0.60m、深さ 18cm である。主軸方向は N-47°-W である。断面形は箱状を呈し、やや丸み

のある底面からほぼ垂直に立ち上がる。覆土は灰色土を主体とし、4層に分層した。レンズ状に堆積しており、すべての層に炭化物を含む。遺物は、黒色土器の椀(14)・鉢(15)が出土している。

SK282 (図版 18·51)

18F16 区に位置する楕円形の土坑である。本遺構の西側に P396 が隣接している。長径 0.81m、短径 0.62m、深さ 21cm である。主軸方向は N-29°-W である。断面形は台形状を呈し、中央部分がややくぼんだ凹凸のある底面をもつ。 覆土は 3 層で、炭化物を多量に含む黒褐色土の 2 層が、炭化物を少量含んだ灰色土の 1・3 層に挟まれるように堆積している。遺物は出土していない。

SK331 (図版 18·51)

16F23 区に位置する楕円形の土坑である。長径 0.62m、短径 0.45m、深さ 13cm である。主軸方向は N-24°-W である。断面形は台形状を呈す。覆土は炭化物を含む 3 層で、レンズ状に堆積する。遺物は、土師器 8 点、黒色土器が 5 点出土しているが、すべて細片であり図化できるものはない。

SK338 (図版 16·51)

17F12 区に位置する円形の土坑である。本遺構の西に SB106 が隣接し、その柱穴である P6 に切られている。直径 0.54m、深さ 40cm である。断面形は V 字状を呈し、凹凸のある壁面は、西側はほぼ垂直に、東側は緩やかに開き、それから急斜度に立ち上がる。覆土は炭化物を少量含んだ単層である。遺物は出土していない。

SK339 (図版 19·51)

17F17 区に位置する楕円形の土坑である。長径 0.55m、短径 0.38m、深さ 26cm である。主軸方向は N-67°-W である。断面形は半円状で、上部がやや外反しながら立ち上がる。覆土は灰オリーブ色土の単層で炭化物を含む。遺物は、土師器椀 (16) が覆土上部から出土している。

SK382 (図版 19·52)

19F15 区に位置する円形の土坑である。北側上部が攪乱によって切られている。本遺構の南には SR1 が隣接している。直径 0.58m、深さ 38cm である。断面形は U 字状を呈し、南壁は外傾しながら大きく開く。 覆土は 6 層で、基本的にレンズ状に堆積する。遺物は、須恵器無台杯 (17)、土師器の細片が 3 点出土している。

4) 溝

SD2 (図版 15·19·52)

6F・G、7F区に存在する溝である。平面形は調査区外の南東側からやや弧を描くように北西方向に走り、主軸方向は N-41 \sim 63°-W である。本遺構の北側には SD3 が並走している。調査区内での全長は 11.6m であり、西端はそのまま昨年度の調査区で確認された SD2 に続く。全長は合わせて 70.8m である。幅は確認面で $0.6 \sim 2.26$ m と非常に数値に開きがある。深さは $7 \sim 14$ cm と一定せず、ほぼ中央付近が一番深くなっている。断面形は弧状を呈し、凹凸のある底面から緩やかに立ち上がる。覆土は地点により単層および 2 層で、遺物は出土していない。

SD3 (図版 15·19·52)

7F・G 区に存在する溝である。平面形は調査区外の南東側から北西方向へ直線的に走り、主軸方向は N-58°-W である。調査区内での全長は 11.3m であり、西端はそのまま昨年度の調査区で確認した SD3 に続く。全長は合わせて 130.8m である。幅は確認面で $0.6 \sim 1.64$ m と非常に不規則である。深さは $7 \sim$

12cm で一定しない。断面形は底面が非常に歪な弧状を呈し、北側の方が深く落ち込みそこから南へと緩やかに開く。覆土は2層で、炭化物を含んでいる。遺物は多くないが、土師器椀(18)や須恵器の細片が出土している。

SD375 (図版 13·19·52)

17F 区に存在する。本遺構は SB106 内に位置し、調査区外北西側から孤を描くように南に向かって走る。 主軸方向は N-36 \sim 64° -W である。全長は 9.14m であるが、深さが 4 \sim 9 cm と非常に浅いことから削 平を受けている。一部でその形跡が確認できないものの、17F21・22 区で検出された遺構と主軸方向がほ ほー緒であることから同一のものとして計測した。 さらに痕跡は窺えないが、平面形から SD334 と交差 すると考えられる。幅は $0.22 \sim 0.36$ m を測り、北西側に向かってやや細くなるものの一定している。 覆 土は灰色土を主体とした単層である。遺物は出土していない。

5) 性格不明遺構

SX29 (図版 19·53)

20F5、21F1・2・6・7区において検出した遺構である。西側を 17 年度に調査しており、中央付近を開 渠により切られているが、今回の調査で遺構の全体を確認することができた。平面形は不定形を呈し、長 軸 4.76m、短軸 2.84m、深さは 17cm である。主軸方向は N-10°-E である。断面形は弧状で、南壁は底面との境界が明瞭で、ほぼ平坦な底面から緩やかに立ち上がる。覆土は 2 層で、昨年度の $1 \cdot 3$ 層に相当 する。遺物は出土していない。

SX272 (図版 20·50·53)

15F18・19・23・24区において検出した遺構である。本遺構の南北にはSX278とSE277が位置する。平面形は不定形を呈し、長軸 2.08m、短軸 1.79m、深さ 5 cm である。主軸方向はN-36°-W である。断面形は弧状で、凹凸のある底面から非常に緩やかに立ち上がる。覆土は単層で、炭化物を微量含んだ灰色土となっている。遺物は、遺構の中央付近から漆器の盤が出土している。ほかに土師器椀(27・28・29)や黒色土器(26)、須恵器無台杯(23)・甕(24・25)、羽口(71)、用途不明の石製品(72)、礫など、計 421点出土しているが、大半は細片である。出土遺物の状況などから、廃棄遺構であった可能性が考えられる。SX278(図版 20・50・53)

15F17・22 区において検出した遺構であるが、農業用水路で半分程破壊されている。南北 1.4m 以上、東西 1.35m 以上を測る不定形の遺構で、深さは 10cm である。断面形は北壁に落ち込みがある弧状を呈す。 覆土は灰色土を主体とし、炭化物を微量に含んだ単層である。遺物は、土師器椀(34・35・36・37・38・39・40)・小甕(41)、黒色土器(32・33)、須恵器杯(31)・甕(30)、砥石(73)などの破片が、計 455 点出土した。SX272 と同様、出土遺物の状況から廃棄遺構と考える。

SX394 (図版 20·53)

19F4 区において検出した遺構である。本遺構の南側には SR1 が隣接している。平面形は楕円形を呈し、 長径 0.37m、短径 0.24m、深さ 6 cm である。主軸方向は N-50°-E である。断面形は弧状で、東壁がやや 段を持ち立ち上がる。覆土は炭化物層で、黒色シルトブロックを少量含んでいる。遺物は出土していない。

6) 自然流路

SR1 (図版 13·20·54)

19F・G区にかけて、東西に直線的に走る川跡である。本遺構は、その大部分が攪乱によって破壊されている。調査区内での全長は 11.3m であり、昨年度の調査部分を合わせると 59.8m となる。確認できる部分で、幅は $1.8 \sim 2.9$ m、深さは $13 \sim 16$ cm である。攪乱のため断面形は詳しく観察できないが、昨年と同様、弧状を呈するものと考えた。覆土は灰色土を主体とした 2 層である。遺物は、黒色土器($47\cdot48$)や土師器甕($49\cdot50$)・鍋(51)、須恵器無台杯($42\cdot43$)・蓋(44)・壺もしくは瓶($45\cdot46$)などが、破片で計 279 点出土した。

SR2 (図版 12·20·54)

23・24F・G区にかけて、東西に直線的に走る川跡である。調査区内での全長は10.44mで、昨年度の調査部分を合わせると62.94mとなる。13 層下面を川底とする河川の時期は古代で、川の幅は広いところで8.56m、狭いところで6.34mであり、深さは1.23mとなっている。14~18 層がそれ以前の河川で、深さ1.5m以上である。古代の河川の断面形は孤状を呈し、やや凹凸のある底面から、南壁は緩やかに立ち上がるのに対し、北壁は確認面下0.58mのところで約20°大きく外傾する。覆土は18 層でレンズ状に堆積し、7~9 層が11・12 層に落ち込んで入る。3 層が昨年の2 層、10 層が20 層、12 層が22 層と対応する。これをふまえた土層観察より、1~4 層が昨年の1~6 層でSR2が埋没する段階で主に遺物が含まれる層、5~9 層が昨年の7~17 層で遺跡が形成された当時の川底および川岸で、若干の遺物が含まれる層、10~13 層が昨年の18~26 層でSR2 に水流がある段階で遺跡が形成された時期よりやや古い土器が出土した層、そして14~18 層がそれ以前の時代の河川堆積層であると考える。遺物は、土師器椀(56・57・58・59)・有台椀(60)・皿(61)・甕(62・63・64)・鍋(65)・器種不明(66)、須恵器無台杯(53・54・55)・有台杯(52)など、細片も含め計324 点出土した。遺物は主に中央から北側の1~11 層で出土し、特に3・4・6・11 層には集中していた。

3 遺 物

A 遺物の概要

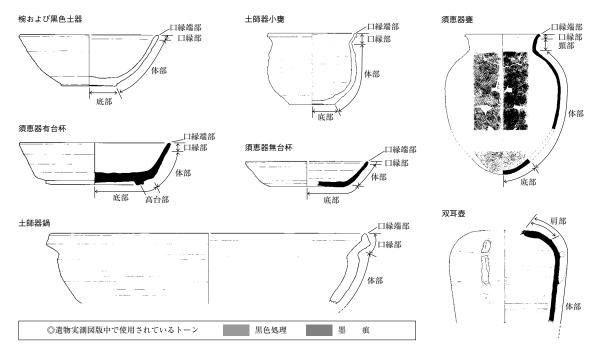
遺物は、古代を中心に弥生時代から近世・近代まで幅広い時代のものが浅箱(54 × 33 × 10cm)で 11 箱と木製品 25 点が出土している。弥生時代の遺物は土器破片 2 点のみで、17 年度調査で弥生時代遺物包含層とした IV 層上位からの出土である。中心となる古代の遺物は、包含層が削平されており、遺構または耕作土からの出土である。なお耕作土からは、中世・近世・近代の遺物と共に出土している。

古代の遺物は須恵器・土師器・木製品・土製品・石製品であり、木製品の中には井戸出土の斎串や性格 不明遺構出土の漆器盤が含まれている。

中世の遺物は青磁・青花であり、近世の遺物は17世紀代の陶磁器類がややまとまってみられる。

B 記述の方法

遺物の記述は弥生時代、古代、そのほかの時代に分けて行うこととした。古代の遺物の記載は、土器、 土製品、石製品、木製品、建築材の順に行い、その中で遺構出土のものから遺構外出土と続けた。



第 12 図 中曽根遺跡 古代土器の部位名称と凡例

遺構出土の遺物は、極力抽出する方針とした。なお SR1 を壊している近現代の溝から出土した遺物は、 もともと SR1 に含まれていた可能性が高いと推測し、SR1 の遺物として扱うこととした。

なお各器種の部位名称・遺物図版のスクリーントーンの使用例は、第12図の通りである。

C遺物各説

1) 弥生時代 (図版 21-1・図版 55)

1 は甕の頸・胴部の破片である。胎土は黄灰色を呈し、長石・小砂利が含まれている。LR の縄文が横位に施され、内面は部分的に剥落する。17 年度報告遺物 No.10 に胎土・文様など類似しており、東北系の弥生時代後期ころの土器と推定する。

2) 古 代

土器の分類

土器の分類は、17年度報告書の基準を踏襲することとし、第13図に示した。なお須恵器有台杯・杯蓋は、今回出土数が少ないため分類していない。また図示および記載していない類に関しては、今回出土していないものである。

須恵器無台杯

- B類 器壁が厚く、口径に比して浅身な一群であり、底部から屈折して直線的に広がる口縁部を持つB1 類(図版22-53)と平たい底部から大きく開く体部を有するB3類(図版22-54)に細分した。
- C類 器壁が薄く、口径に比して浅身な一群(図版 21-43)。

土師器椀

B類 底部と体部の境が凹まない一群であり、体部~口縁部にかけて丸みを帯びる B 1 類 (図版 21-19)、体部~口縁部が直線的な B 2 類 (図版 21-35)、体部が丸みを帯びて立ち上がり、口縁部が外反する

B 4 類 (図版 21-4) に細分した。

C類 底部と体部の境が凹む一群であり、体部~口縁部にかけて丸みを帯びる C 1 類 (図版 21-20)、体部 は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部が外反する C 3 類 (図版 22-56) に細分した。

E類 高台を有する椀 (図版 22-60)。

土師器甕

A類 口径に比して器高が高い一群。長甕 (図版 21-50)。

C類 口径・器高共に小さい一群。小甕 (図版 21-41)。

E類 底部が横に広がり、底外面に砂痕または木葉痕が残るものなど、東北地方の影響を受けたと推測した一群(図版 22-62・63)。

遺構出土土器

SB106-P6 (図版 21-2・図版 55)

2 は土師器椀の口縁部片である。口縁はやや外反し、外面に墨書がみられるが、内容は不明である。 P329 (図版 21-3・図版 55)

3は土師器椀B類である。全体に摩滅が激しいが、底部に回転糸切り痕が付く。

P340 (図版 21-4 · 図版 55)

4 は土師器械B4類で、他と比較して小振りとなっている。摩滅しており底部の切り離し痕は確認でき

第13図 中曽根遺跡 器種分類

ない。

P354 (図版 21-5 · 図版 55)

5は須恵器壺または瓶の肩~体部片と推定でき、外面には自然釉がかかる。

SE277 (図版 21-6 ~ 12 · 図版 55)

6は須恵器甕の体部片である。調整は、外面が格子叩き、内面が同心円当て具痕となっている。7は黒色土器である。胎土は精良であり、雲母を少量含む。外面は横位のミガキが施され、また内面は口縁部付近に横位のミガキ、体部に縦位のミガキが施された後、黒色処理を行っている。8~12は土師器椀である。8・9は、共にC3類である。底部中央付近に焼成後穿孔されたと考えられる痕跡があり、井戸廃棄に伴う祭祀に利用されたとも推測する。10は口縁~体部にかけての破片であり、やや不明瞭であるが、体・底部境付近に段がみられることから、C類と推測した。体部外面に調整による明瞭な浅いくぼみが付き、そこから口縁はやや外反している。11はC3類であるが、ほかと比較して低平な形状を成し、器壁も厚めである。12は胎土や残存している部分から、11に類似する。

SE323 (図版 21-13 · 図版 55)

13 は土師器椀B2類である。胎土は粗く、石英・長石などの小砂利を含み、器壁も厚めである。

SK281 (図版 21-14・15、図版 55)

14 は黒色土器椀の口縁~体部片である。口縁は外反せず立ち上がり、内面および外面口縁部に黒色処理が施されている。15 は黒色土器の体部片である。外面は横方向のケズリが、また内面は黒色処理が施される。器厚などから、器形は鉢と推定する。

SK339 (図版 21-16 · 図版 55)

16 は土師器椀の体~底部片であるが、二次焼成を受け、調整等は不明である。

SK382 (図版 21-17 · 図版 55)

17 は須恵器無台杯の口縁~体部片である。口縁は肥厚して内湾している。重ね焼痕が付く。

SD3 (図版 21-18 · 図版 55)

18 は現存部分から土師器椀B1類と推定した。全体に摩滅が進み、詳細は不明である。

SD334 (図版 21-19 ~ 22 · 図版 55)

 $19\sim21$ は土師器椀であり、 $19\cdot21$ はB 1 類、20 はC 1 類となる。19 は外面体部下半にケズリが施される。また体部外面に倒位で墨書されているが、内容は不明である。20 は器面の剥落が進んでいるが、体部・底部境に明瞭な段を持つ。22 は土師器甕 C 類の口縁部で、外面は二次焼成を受け、部分的に剥落している。SX272(図版 $21\cdot23\sim29\cdot$ 図版 55)

23~25 は須恵器である。23 は無台杯の口縁~体部片で、直線的に立ち上がり、重ね焼痕が付く。24 は甕の口縁~頸部である。口縁部は外反しており、端部は外側に張り出している。25 は甕体部片である。外面は斜め方向の平行叩きを行い、その後カキ目を施している。内面は同心円当て具痕が付く。26 は黒色土器の底部である。27~29 は土師器椀である。27 はC類であり、底部に回転糸切り痕が付く。28・29 は底部片で、うち 29 はC類である。全体に摩滅が進み、また胎土に長石などの小砂利を多く含んでいる。SX278 (図版 21-30~41・図版 55)

30 は須恵器甕体部片である。外面は斜め方向の平行叩き、その後カキ目を施している。内面は同心円当て具痕が付く。SX272 出土の 25 と同一個体の可能性があるが、接合関係がないため個別に掲載した。31 は須恵器杯の体部片で、内面に漆と推測する物質が付着している。32 は黒色土器であり、内外面とも

黒色処理が施されている。器壁は薄く、口縁部はやや外反する。33 は黒色土器底部である。長石を少量含む精良な胎土である。34~40 は土師器椀である。34 は口縁~体部片で、口縁部が若干外反する形状をなす。35 はB2類であり、底部に回転糸切痕が付く。36 は口縁~体部片である。口縁は外反し、薄手で堅緻な焼成となっている。37~40 は底部を中心とした破片であるが、それぞれ異なった要素がみられる。37 は体部・底部境に段を持つ。38 は比較的薄手であり、体部下端に長さ 27mm、幅 3 mm ほどのヘラ状工具を押し付けた痕が観察される。40 は緩やかな立ち上がりとなっている。41 は土師器甕 C 類の底部であり、胎土は石英・長石などを多く含む。

SR1 (図版 21-42 ~ 51 · 図版 55)

42 は須恵器無台杯B 3 類である。焼成は良好で、口縁部に重ね焼き痕が付く。43 は須恵器無台杯C類の体~底部片である。器壁は薄く、焼成も非常に良好であるが、胎土に植物が含まれていたと思われる痕跡が見られる。44 は須恵器蓋で、調整は内外面ともナデ調整となっている。45 は須恵器壺または瓶の体部片である。外面には自然釉がかかるが、摩滅が進んでいる。また内面はロクロ痕が顕著である。46 は須恵器壺または瓶の体~底部片である。底部には高台が付き、外面はケズリ後ヨコナデが施されている。内面は立ち上がり部に指頭痕が付く。47・48 は黒色土器である。47 は口縁~体部片、また 48 は体~底部片であり、共に外面は風化が進み、詳細は不明である。胎土や風化状態から、同一個体の可能性がある。49 は土師器甕C類の体~底部で、胎土は石英・長石・雲母を多く含む。50 は土師器甕A類の口縁~体部片である。器壁は薄く、またゆがみもみられ、実測図は実体より口径が大きくなっている可能性がある。51 は土師器鍋の口縁~体部片である。

SR2 (図版 22-52 ~ 66 · 図版 55 · 56)

52 は須恵器有台杯である。口縁は直線的に立ち上がり、高台は低く外下方に広がる形態である。底部には回転へラ切り痕が残り、高台は底部切り離し後付けられている。53~55 は須恵器無台杯である。53 はB1類で、丸底を呈する。焼成は良好で、内外面に重ね焼き痕が観察される。54・55 はB3類で、底部に回転へラ切り痕が残る。54 はやや丸みを帯びた底部を持ち、重ね焼き痕が付く。55 は黒斑が顕著で、体部外面には「石」の文字が横位に墨書されている。56~59 は土師器椀である。56 はC3類で、部分的に摩滅が進んでいる。57・58 は共にB類の体~底部片で、57 は精良な胎土の小形の底部である。59 はC類で、雲母を微量含む。60 は土師器椀E類で、高台は高く外下方に広がる形態である。胎土は、石英・長石を少量含んでいる。61 は土師器皿の体~底部片で、径が大きく薄い底部から体部へ緩やかに立ち上がる形状を呈す。底部は切り離し後にヘラ調整され、内面は赤彩される。62・63 は土師器甕E類である。62 は中央がくぼみ、外側に張り出す形状の底部を持ち、木葉痕および外周に砂痕が付く。54 は土師器甕C類の底部片で、外面に炭化物が付着しており、また内面底部にはロクロ痕が顕著である。65 は土師器鍋であり、下部に外面は平行叩き、内面は同心円当て具痕が付く。66 は土師器の器種不明底部で、厚い丸底を呈する。胎土は粗く長石などの砂利を含んでおり、二次焼成も受けている。製塩土器のような器種とも考えたが、底部だけであり、詳細は不明である。

遺構外土器 (図版 22-67 ~ 70 · 図版 56)

67 は須恵器瓶の口縁~頸部片である。焼成はやや不良であり、端部は摩滅している。北側調査区 15F 区出土。68 は須恵器小瓶で頸部以上を欠損している。肩部を中心に自然釉が付き、調整はヨコナデ中心で、体部下半のみ横方向のケズリとなっている。胎土は粗く、石英・長石が含まれている。北側調査区 15G 区出土であり、出土状況から浅い遺構の底部付近にあったものと推定する。69 は須恵器甕の頸部片で、2 条の横位の沈線付近に 3 本 1 単位の波状文を 2 組施している。一部摩滅しており、また内面には発泡したガラス状物質が固着している。北側調査区 18F 区出土。70 は土師器椀E類であり、胎土は粗く、石英・長石などを多く含んでいる。北側調査区 23F 区出土。

土製品・石製品 (図版 22-71 ~ 73・図版 56)

71 は SX272 出土の羽口の破片である。外面は被熱が進み、スラグが付着している。72 は SX272 出土の不明石製品である。形状はやや先端のすぼまる柱状であり、断面は不整七角形を呈する。各面は研磨されており、上面には縦方向の擦痕が付く。材質は凝灰岩である。73 は SX278 出土の手持ち砥石である。使用の痕跡は複数面に渡るが、特に正面が顕著である。また左側面には、斜め方向の浅い筋状の磨痕が付く。材質は流紋岩である。

木製品・建築材

SB106 (図版 22-74~76 · 図版 56)

SB106では9基中5基から柱根を検出した。昨年度の調査で確認したP1は、腐食が進み土壌化しており、詳細は明らかでない。P3から出土した柱根はクワ属であるが、遺存状況が非常に悪く中心部が腐食によって消失しており、径・断面・側面の詳細は不明である。74はP4から出土しており、径34cmである。遺存状況は良好であり、底面の加工は3面で構成される。75はP8から出土しており、径38cmである。76はP9から出土したサクラ属の柱根で、径42cmである。底面は共に2面で構成される。また腐食によるものか断定はできないが、P3出土の柱根と75は形状が楕円形を呈している。柱根はいずれも丸材を使用しており、側面に加工した痕跡は確認できなかった。

SA5 (図版 22-77~80·図版 56)

SA5では今年度の調査区において 4 基の柱穴すべてで柱根を検出した。77 は P3 から出土したサクラ属の丸材で、径 33cm である。底面の加工は 2 面で構成され、うち一面は底面の 3/4 ほどとなる。側面も平坦な面を有しているため、加工されていると思われるが、腐食が進んでおり詳細は明らかでない。78~80 は芯外しのクリの割材である。78 は P4 から出土しており、幅 15.9cm、厚さ 14.6cm である。断面は六角形で、側面も平坦な面を有していることから加工材と推測するが、腐食が進んでおり詳細は明らかでない。底面の加工は 3 面以上で構成される。79 は P5 から出土しており、幅 15.3cm、厚さ 15.1cm である。側面は 1/3 が腐食によって消失しているが、平坦な面を有していることから加工材と推測する。底面の加工は 1 面の可能性がある。80 は P6 から出土しており、幅 13.7cm、厚さ 15cm である。側面は平坦な面を有しており、加工していると思われるが、腐食が進んでいて詳細は明らかでない。底面の加工は 1 面の可能性がある。本遺構は 6 基の柱穴から構成しているが、昨年度の調査で検出した P1・2 の柱根を含め、丸材を使用しているのは 77 だけであった。

SA397 (図版 23-81 · 82 · 図版 56)

SA397 は両柱穴において柱根を検出した。81・82 は共に丸材である。底面加工は81が2面で、82が3面以上で構成される。81はP1から出土した径27cmのサクラ属の柱根で、遺存状況は非常に良好である。82はP2から出土しており、やや湾曲した形状を呈す。芯部分が腐食により円孔になっている。径は37cmである。どちらも側面に加工された痕跡は確認できなかった。

SE277 (図版 23-83 · 図版 56)

83 は斎串で、スギを使用している。長さ 17.5cm、幅 2.65cm、厚さ 0.6cm を測る。木取りは板目である。 正面の中央付近に約 3.5mm の間隔で 3 条の傷痕が付く。上部は約 50°の角度で圭頭状に加工してある。 下部は欠損しており詳細は明らかでない。墨痕などは確認できない。

3) その他の時代 (図版 23-84~90・図版 56)

84 は青磁椀の体部である。釉調は緑色で、時期は 15 世紀代である。85 は青花で、見込には重圏線内に植物をモチーフにした文様が描かれている。外面は腰部に界線および蓮弁と推定する文様が描かれている。高台は砂目痕がみられ、高台内には鉋により削られている。時期は 16 世紀後半である。86 は珠洲焼の片口鉢であり、内面に卸目が付く。87 は磁器皿で高台畳付部分を含め、全面に施釉されている。見込には3 か所の砂目痕が残り、高台内は兜巾が付く。なお端部は、細かく打ち割られている。時期は、17 世紀前半と考える。88 は肥前系青磁釉の皿底部であり、内面には浅い沈線による文様が施される。高台内は釉剥ぎされ、露体部には鉄錆が塗られている。時期は 17 世紀中頃~後半である。89・90 は唐津焼の皿である。89 の内面は底面から段を持って立ち上がっている。灰釉が掛けられ、見込には胎土目痕が 2 か所残る。90 は見込に砂目痕が 4 か所残り、高台内は兜巾が付く。時期は、共に 17 世紀前半である。

4 自然科学分析

A 中曽根遺跡出土木製品の樹種同定

1) はじめに

中曽根遺跡は、新潟県岩船郡荒川町にあり、海岸砂丘背後の後背湿地内の微高地に位置する。本遺跡は 弥生時代中期末から後期初頭、奈良・平安時代の遺構・遺物が発見されている。ここでは、中曽根遺跡の 奈良・平安時代にあたる SE277 から出土した斎串と、SB106 (P3・P9)・SA5 (P4・P5・P6)・SA397P1・ P345・P376・P389・P395・P396 から出土した柱根の樹種同定結果を報告する。

2) 方 法

材組織の切片採取では、片刃の剃刀を用いて材の横断面(木口)・接線断面(板目)・放射断面(柾目)の 3方向を薄くそぎ取ってスライドガラスの上に並べ、ガムクロラールで封入し永久プレパラートを作成した。作成したプレパラートは光学顕微鏡下で観察した。同定を行った試料のうち、各分類群を代表する試料については写真図版(第14図~第15図)を添付し、その材組織を結果に記載した。なお、作成されたプレパラートは(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団に保存されている。

3) 結果と考察

同定された樹種の一覧を第4表に示した。

樹種同定の結果、13 試料のうち、針葉樹ではスギ、広葉樹ではコナラ属コナラ亜属コナラ節 (以下コナラ節)・クリ・クワ属・サクラ属の計 5 分類群が同定された。このうち保存状態が悪いため、同定を行うことができなかった広葉樹が 1 試料 (No.16) 認められた。

次に、本遺跡で検出された樹種について検討する。No.4の斎串はスギであった。柱根についてみると、複数種の広葉樹材が用いられており、サクラ属がもっとも多く5試料、次にクリが4試料、コナラ節・クワ属・不明広葉樹が各1試料同定された。クリ・サクラ属ともに材の保存性は良いとされており、とくにクリは耐朽性が高く、現在でも土木用の杭、橋梁、家屋の土台などの建築材として用いられている[平井1996]。このことから当時、クリとサクラ属を建築材に適した材として選択的に用いたことが考えられる。同時に、今回の樹種同定で検出された樹種は、向陽地に多く生育するサクラ属やクワ属、それに雑木林を構成する代表的な樹種であるクリやコナラ節であったことから、当時、遺跡周辺において疎開した植生が成立していたことを示唆している。

次に同定された樹種の記載を行う。

(1) スギ Cryptomeria japonica L.fil.D.Don スギ科 (第14図 1a-1c No.4)

放射組織はすべて放射柔細胞によって構成され $2\sim15$ 細胞高になる。放射柔細胞の分野壁孔は孔口の大きく開いたスギ型で、1 分野に $2\sim3$ 個存在する。スギは高さ $30\sim40$ m の常緑高木となり、本州・四国・九州 (屋久島)の主として太平洋側に分布し、自生状態では山地の沢沿いに多く生育する。材は比較的軽軟で切削などの加工は容易であり、乾燥も容易で割裂性が大きい。

(2) コナラ属コナラ亜属コナラ節 Quercus subgen. Quercus sect. Prinus ブナ科 (第14図 2a-2c No.12)

大型の道管が年輪界で一列に並び、それ以外の部分では径を減じた壁の薄い角張った道管が配列する環 孔材。放射組織は同性の単列および集合放射組織から構成される。道管の穿孔は単穿孔であり、放射組織 と道管の壁孔は柵状となる。ミズナラの材は広葉樹材のうちでは重硬な方であり、切削などの加工はやや 困難で割れが生じやすい。コナラはミズナラよりも重硬とされ、加工しにくく乾燥で割れが生じやすい。

(3) クリ Castanea crenata Sieb.et Zucc. ブナ科 (第14図 3a-3c No.8)

大型の道管が年輪界で一列に並び、それ以外の部分では径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材。放射組織は単列で同性である。道管の穿孔は単穿孔であり、放射組織と道管の壁孔は柵状である。材は耐朽性が強く、水湿に耐え、保存性が極めて高い。クリは北海道(石狩・日高地方以南)・本州・四国・九州の丘陵から山地に分布する落葉高木で高さ 20m ほどになる。

(4) クワ属 Morus クワ科 (第15図 4a-4c No.5)

大型の道管が年輪界において並ぶ環孔材である。道管は孔圏部において単独あるいは 2、 3 個複合し、孔圏外では小塊状に複合して分布する。放射組織は紡錘形で $1\sim6$ 細胞幅となり主に平伏細胞から構成されるが、上下端には直立細胞が見られる。道管の穿孔は単穿孔であり、壁孔は交互壁孔となる。小道管にはらせん肥厚が存在する。クワ属は高さ $3\sim10$ m になる落葉低木。クワ属には自生種としてケグワ、マグワ、ヤマグワなど 4 種がある。

(5) サクラ属 Prunus バラ科 (第15図 5a-5c No.11)

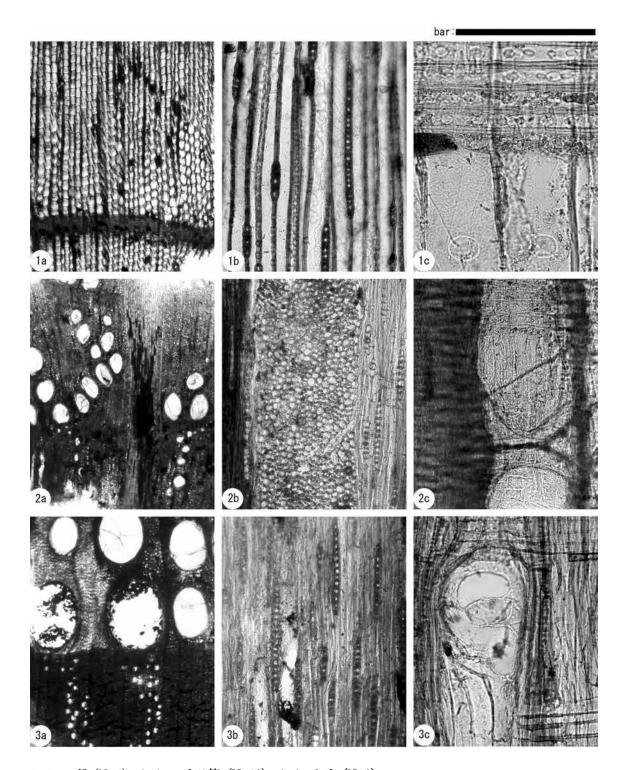
小型の道管が散在する散孔材。年輪界で道管は並ぶ傾向がありやや環孔性を示している。放射組織はほぼ同性で $1 \sim 4$ 細胞幅、道管には交互壁孔とらせん肥厚を伴い、道管は単穿孔である。日本にはモモやウメなど 22 種があり、そのうち 15 種が自生する。主なものにウワミズザクラ、ヤマザクラなどがある。落葉小高木~落葉高木で比較的向陽地を好む樹種である。材は耐朽、保存性が高く、光沢美がある。

(6) 不明広葉樹 Pored wood (第15図 6a-6c No.16)

大型の道管が年輪界において並ぶ環孔材である。孔圏外では小道管が数個放射方向に連なり散在する。 放射組織は同性で1~3列となる。道管は単穿孔、壁孔には交互壁孔が発達する。

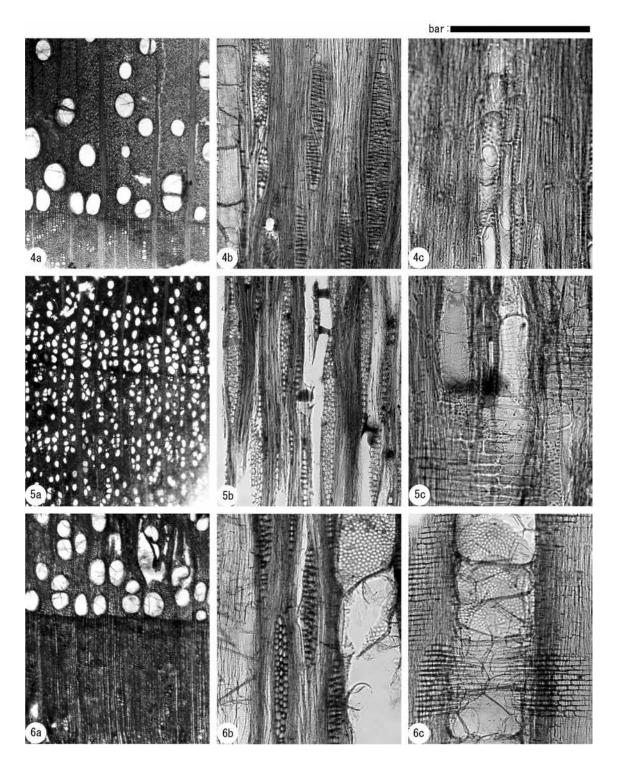
No.	資料	樹 種	遺構名	層位	検出グリッド
4	斎 串	スギ	SE277	6層	15F グリッド
5	柱 根	クワ属	SB106 P3		17F グリッド
6	柱根	サクラ属	SB106 P9		17F グリッド
7	柱根	サクラ属	SA5 P3		14F グリッド
8	柱根	ク リ	SA5 P4		14F グリッド
9	柱根	ク リ	SA5 P5		14F グリッド
10	柱根	ク リ	SA5 P6		14F グリッド
11	柱根	サクラ属	SA397 P1		15F グリッド
12	柱根	コナラ節	P345		13F グリッド
13	柱根	ク リ	P376		15G グリッド
14	柱根	サクラ属	P389		14F グリッド
15	柱根	サクラ属	P395		18F グリッド
16	柱根	不明広葉樹	P396		12F グリッド

第4表 中曽根遺跡 出土木製品の樹種同定結果



1a-1c: スギ (No.4) 2a-2c: コナラ節 (No.12) 3a-3c: クリ (No.8) a: 横断面 b: 接線断面 c: 放射断面 Scale bar= スギ a:1.0mm, b:0.4mm, c:0.1mm コナラ節・クリ a:1.0mm, b:0.4mm, c:0.2mm

第 14 図 中曽根遺跡 出土木製品の材組織の光学顕微鏡写真 (1)



4a-4c: クワ属(No.5) 5a-5c: サクラ属(No.11)6a-6c: 不明広葉樹(No.16) a: 横断面 b: 接線断面 c: 放射断面 Scale bar=a:1.0mm, b:0.4mm, c:0.2mm

第15図 中曽根遺跡 出土木製品の材組織の光学顕微鏡写真(2)

B 中曽根遺跡における放射性炭素年代測定

1) はじめに

中曽根遺跡は海岸砂丘背後の後背湿地内の微高地に位置し、弥生時代と奈良・平安時代の遺構・遺物が 発見された。

ここでは奈良・平安時代の遺構より検出された試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。試料の調製は山形、瀬谷、Lomtatidze、Jorjolianiが、測定は小林、丹生、伊藤が行い、本文は伊藤、孔が作成した。樹種同定は行っていないが、測定した材については野村が形状観察を行った。

2) 試料と方法

測定試料は、すべて生材で、掘立柱建物(SB106のP4、P8)の柱根(PLD-6793・6794)と柱列(SA397のP2)の柱根(PLD-6795)である。試料の形状を観察したところ、試料は3点とも広葉樹の環孔材もしくは散孔材である。SB106の2点は最外年輪以外の部位不明で、SA397のP2は最外年輪以外の部位であるが、材の組織学的な観察から樹皮近い部分と判断された。また、形状観察時に木材組織を観察したところ、試料は3点とも広葉樹の環孔材もしくは散孔材であった。試料の情報、調製データは第5表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計(バレオ・ラボ、コンバクトAMS: NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。

得られた ¹⁴C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C 年代、暦年代を算出した。

測定番号	遺跡データ	試料データ	前 処 理
PLD-6793 (遺物番号 74)	中曽根遺跡 位置:17F グリッド 遺構:SB106 P4 資料 No.:1(柱根)	試料の種類:生材 (環孔材:2年輪分) 試料の性状:最外以外部位不明 状態:wet カビ:無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 1.2N, 水酸化ナトリウム 1N, 塩酸 1.2N)
PLD-6794 (遺物番号 75)	中曽根遺跡 位置:17F グリッド 遺構:SB106 P8 資料 No.:2(柱根)	試料の種類:生材(散孔材:1年輪分未満) 試料の性状:最外以外部位不明 状態:wet カビ:無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 1.2N, 水酸化ナトリウム 1N, 塩酸 1.2N)
PLD-6795 (遺物番号 82)	中曽根遺跡 位置:15F グリッド 遺構:SA397 P2 資料 No.:3(柱根)	試料の種類:生材(散孔材:1年輪分: 小径木、推定半径2cm) 試料の性状:最外以外最外年輪近い部分 状態:wet カビ:無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 1.2N, 水酸化ナトリウム 1N, 塩酸 1.2N)

第5表 中曽根遺跡 測定試料および処理

3)結果

第6表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比(δ ¹³C)と、同位体分別効果の補正を行って 暦年較正に用いた ¹⁴C 年代、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ¹⁴C 年代、1 ¹⁴C 年代を暦年代に 較正した年代範囲を、第 16 図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値と誤差 を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために 記載した。

 14 C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 14 C 年代(yrBP)の算出には、 14 C の半減期 5568 年を使用した。また、付記した 14 C 年代誤差(14 C の は、測定の統計

誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の 14 C 年代がその 14 C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の 14 C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された 14 C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14 C 濃度の変動、および半減期の違い $(^{14}$ C の半減期 5730 ± 40 年)を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

 14 C 年代の暦年較正には OxCal3.10(較正曲線データ:INTCAL04)を使用した。なお、 1 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された 14 C 年代誤差に相当する 68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ 暦年代範囲は 95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は 14 C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

測定番号	δ ¹³ C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1 σ)	¹⁴ C 年代 (yrBP ± 1 σ)	14C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
PLD-6793	- 28.08 ± 0.23	1224 ± 22	1225 ± 20	720AD (9.8%) 740AD 770AD (58.4%) 870AD	690AD (19.7%) 750AD 760AD (75.7%) 890AD
PLD-6794	- 26.64 ± 0.23	1255 ± 21	1255 ± 20	690AD (57.5%) 750AD 760AD (10.7%) 775AD	670AD (94.3%) 820AD 840AD (1.1%) 860AD
PLD-6795	- 27.28 ± 0.23	1233 ± 22	1235 ± 20	710AD (25.9%) 750AD 760AD (33.8%) 820AD 840AD (8.4%) 860AD	690AD (35.3%) 750AD 760AD (60.1%) 880AD

第6表 中曽根遺跡 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

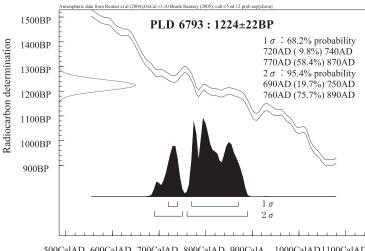
4)考察

試料について、同位体分別効果の補正および暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率 の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

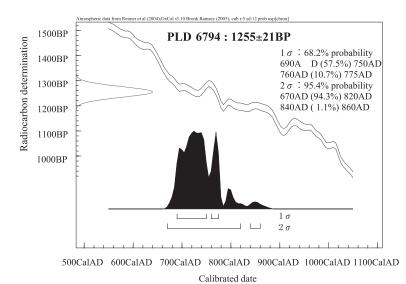
SB106 の P4 の柱根(PLD-6793)の暦年較正年代は、 1 σ (68.2%の確率)で確率の高い範囲をみると 770-870calAD (58.4%)、 2 σ (95.4%の確率)で 760-890calAD (75.7%) の年代範囲が得られた。

SB106 の P8 の柱根(PLD-6794)の暦年較正年代は、同様に 1 σ の確率で 690-750calAD(57.5%)、 2 σ の確率で 670-820calAD(94.3%)の年代範囲が得られた。 2 σ の年代範囲でみると、P4 は 8 世紀後半~ 9 世紀後半、P8 は 7 世紀後半~ 9 世紀前半に伐採された可能性が高い炭化材である。

SA397 の P2 の 柱 根 (PLD-6795) の 暦 年 較 正 年 代 は、 1 σ の 確 率 で 760-820calAD (33.8 %)、710-750calAD (25.9%)、2 σ の確率で 760-880calAD (60.1%) の年代範囲が得られた。P7 は、2 σ の高い確率の年代範囲でみると、8 世紀後半~9 世紀後半に伐採された可能性が高い炭化材である。



500CalAD 600CalAD 700CalAD 800CalAD 900CalA 1000CalAD1100CalAD Calibrated date



500CalAD 600CalAD 700CalAD 800CalAD 900CalAD 1000CalAD1100CalAD Calibrated date

第 16 図 中曽根遺跡 暦年較正結果

5 ま と め

中曽根遺跡は、平成 17・18 年度の 2 年にわたって本発掘調査を行い、17 年度に関しては報告書を刊行している [青木_{ほか} 2006]。また 18 年度の本発掘調査の成果も、ほぼ 17 年度の成果を裏付ける結果となっている。そこでここでは、本年度調査した各遺構について、出土した須恵器杯と土師器椀を中心に時期をみていき、合わせて 17 年度検出遺構との関係を考えていく。なお編年は、『越後阿賀北地域の古代土器様相』 [春日_{ほか} 2004] を参考にすることとした。

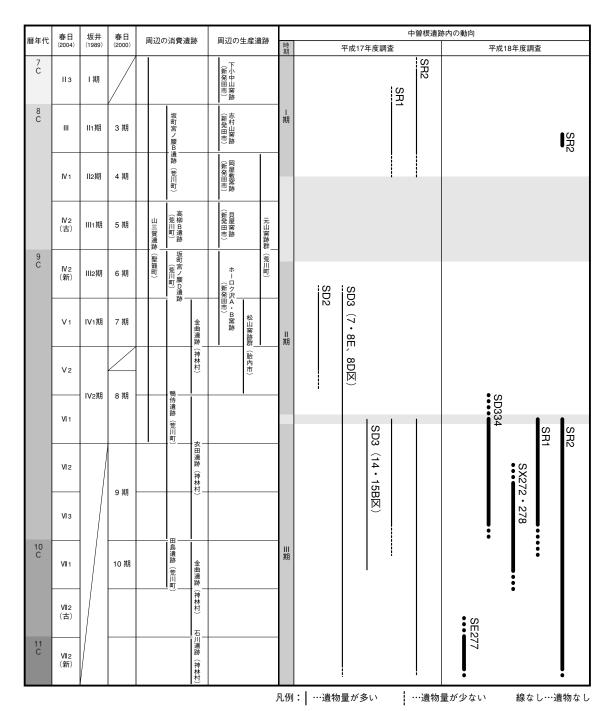
17 年度に出土した遺物の時期は Π 3 期~ Π 2 期であり、その中で 8 世紀後半~ 9 世紀初頭(Π 2 (古) 期)に空白期間がみられる。遺物の分布は Π 3 期~ Π 1 期(中曽根 Π 期)では北側調査区の SR1・2 に中心が、 Π 2 (新) 期~ Π 1 期(中曽根 Π 期)では南側調査区の Π 7・8D・E 区に中心が、 Π 1 期~ Π 2 期(中曽根 Π 期)では Π 3 ~ 24 区に中心がみられる。

遺物各説で分類した各類の前後関係に関しては、17年度報告書第 \mathbb{W} 章2Bに従うこととする。今回の調査では須恵器杯は出土した数が少なく、有台杯1点と無台杯B1類1点、B3類3点、C類1点などとなっている。これらの須恵器の時期は、有台杯が \mathbb{W} 1期、無台杯B1類下限が \mathbb{W} 1期、B3類が \mathbb{W} 2 \mathbb{W} 1期、 \mathbb{W} 3期と推定する。土師器椀は、 \mathbb{W} 3期、 \mathbb{W} 4期、 \mathbb{W} 52類・ \mathbb{W} 63類・ \mathbb{W} 7 類に類を確認した。そのうち \mathbb{W} 7 を通じてみられ、有台椀である \mathbb{W} 8 期に属すると考えることができる。また \mathbb{W} 9 3類のうちで器高が低いものは、 \mathbb{W} 9 (新)期に下る可能性が指摘されている [松田 2006]。以上のことを踏まえて、今年度検出した遺構をみていくこととする。

遺物が比較的まとまっている遺構としては、SE277、SD334、SX272・278 および SR1・2 がある。SE277 は土師器椀C 3 類が中心となっており、11 のような器高が低いものが含まれることから № 2 (新) 期前後と推定できる。SD334 は、土師器椀 3 点のうち 2 点が B 1 類であり、その点から № 期と推測する。SX272・278 は同一個体と推定した須恵器甕が出土しており、ほぼ同時期と考えている。共に破片資料が多いが、SX278 出土の土師器椀 B 2 類(35)の存在などから № 期後半~ № 1 期前後と推定しておく。SR1 は須恵器無台杯 B 3 類・C 類および黒色土器が出土しており、須恵器有台杯がみられない点を除き、17 年度の様相と合致しており、 № 期が中心であるとすることができる。SR2 は須恵器有台杯、無台杯 B 1・3 類、土師器椀 B・C 3・E 類がみられ、17 年度の様相と合致している。また SE323 は、器高が低い土師器椀が出土していることから、 № 期後半~ № 1 期と考えることができる。これらの遺構の時期を整理すると、SE277・323、SD334、SX272・278、SR1 が中曽根 Ⅲ 期にあたり、SR2 は中曽根 Ⅰ・Ⅲ 期の両時期の遺物がみられる。なお 17 年度中曽根 Ⅱ 期とした時期の遺物は、今回出土しなかった。

これらの遺構の配置を 17 年度本発掘調査に合わせてみていくと、中曽根 I 期は 17 年度 SR1 と 2 に中心があり、今回の調査においても、SR1 では確認できなかったが、SR2 から当該期の遺物が出土しており、昨年度の傾向を大きく変更するものではない。SE277 などが含まれる中曽根 \blacksquare 期は、17 年度 $13 \sim 24$ 区を中心にして東側へ広がる様相がみられ、今回検出した遺構もその範囲に含まれることから同様の傾向と言えよう。

これらの調査の成果から、中曽根遺跡は17年度報告書で述べたように、古代におけるごく一般的な農 民層の集落とすることができる。



第 17 図 中曽根遺跡における遺構の変遷

第 V 章 大館跡

1 概 要

A 遺跡の概要

大館跡は新潟県北部の村上市に所在し、天神岡集落の東側に位置する。調査地点の周辺には水田地帯が広がり、門前川の支流である小谷川が北側を廻る。大館跡は1辺約100mの郭をもつ館跡であり、北側の独立丘陵も館の縄張りに取り込まれている。館の周囲を巡る土塁は東側と南側の一部で現在でも目視でき、北側ではその独立丘陵を利用した土塁が確認できる。土塁の外側には堀を廻らせていたと考えられ、館の北側を流れる小谷川も堀の役目を果たしていた可能性がある。大館は古くから中世の館跡と考えられてきたが、文献資料はほとんど残っておらず、本格的な調査は今回が初めてである。周辺の地名では、館ノ内・庄作・馬場などが残っており、館の名残を窺わせる。「大館の東に隣接する小丘陵には、かなりの規模の伽藍と寺田を有する、文岩寺という寺院の存在した痕跡」があるといわれ [村上市1999]、城郭のように武備への配慮も見られる。また、「中世の三面川は、天神岡のすぐわきを流れ、この付近で各方面からの河川が三面川に合流して」おり、「天神岡の北隣りには四日市が立地し、河川交通を利用した物資の集散地を掌握するのに、大館は絶好の位置」であったといわれている [村上市前場]。周辺には中世城郭として、南西に村上城の前身である本庄城、西に上杉謙信による本庄攻めの陣城である下渡嶋城、北に本庄氏の居城である猿沢城、北東に鮎川氏の居城である大葉沢城、東に本庄攻めのため上杉謙信の命で造られた笹平城などがあり、大館跡の館主を探る上でも興味深い。

今回は大館跡の北東部を調査し、土塁や堀など館の防御施設が明らかになった。出土した遺物のうち、館に関連する遺物は13~16世紀のものである。また下層からは、土坑、ピットなどを検出し、縄文時代前期末~中期後半、弥生時代中期後半~後期前半の土器・石器が出土した。調査平面積は1,270 ㎡、調査



第18図 大館跡周辺の地名

延面積は1,535 ㎡ (上層1,270 ㎡ + 下層265 ㎡) である。

B グリッドの設定

グリッドは遺跡の南西部分に任意に基点を作り、グリッドの南北のラインが本線に沿うように設定した。また、今後の調査を視野に入れ、18 年度試掘確認調査範囲をグリッド内に包含するようにしている。基点(1A 杭)は、X=247731.894、Y=88186.490 の座標とした。南北軸は真北より 16°5'0" 東偏している。グリッドは 10m 四方であり、名称は東西方向を算用数字、南北方向をアルファベットの大文字として、両者の組み合わせで「1A 区」などとして表した。



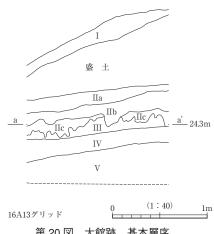
C 調査の方法

大館跡は調査前から土塁 1 や土塁 2 の高まりが観察できたため、これを基準とする 1 m 幅のトレンチを設定し、遺構の断面確認から行った(図版 25 参照)。東西に伸びる土塁 1 に対し、垂直に走るトレンチを南北トレンチ、平行するトレンチを東西トレンチとした。また便宜上、調査区は中央を東西に走る空堀

1とそれに接する土塁2の間を境にして北側を1区、南側を2区とした。トレンチは遺構の規模を把握で きるように任意に設定し、最終的に南北トレンチを7本、東西トレンチを9本設定している。下層の調査 は、下記のⅡ層の掘削から始めた。このⅡ層は縄文・弥生時代の遺物包含層となっており、平面的に調査 を行った。遺構の確認はⅢ層上面で行い、プランを半裁することによって遺構か、攪乱かを判断した。

D 基本層序

調査区は土塁1などが築かれている丘陵と、堀1などが掘 り込まれている低地がある。低地は堀1および攪乱により観 察が難しい状態であり、丘陵上の層序のみを記すこととし た。地表下約2mの範囲で、I~V層の5枚の土層を確認 した。 I 層は現地表面を形成する表土で、基本層序確認地 点ではその下に土塁を形成する盛土層がある。Ⅱ層は縄文・ 弥生時代の遺物を包含しており、Ⅱa層、Ⅱb層、Ⅱc層 の3層に細分した。Ⅲ~V層は基盤層であるが、地点によっ ては礫層や、灰白色土層の基盤層も確認した。なお低地部は、 耕作土の下に灰黄褐色土が存在する。



第20図 大館跡 基本層序

以下、基本層序を記していく。

- 褐色土(10YR4/4)。しまり弱く、粘性やや弱い。砂利・小石を微量、黄褐色土ブロック(3~5 I 層 mm)を微量、炭化物(1~3mm)を微量含む。表土。
- Ⅱ a 層 黒褐色土 (10YR2/3)。しまりやや弱く、粘性やや弱い。炭化物 (1~3 mm) を微量含む。中世期 の表土。
- Ⅱ b 層 黒褐色土 (10YR2/2)。しまりやや弱く、粘性やや弱い。炭化物 (1~3 mm) を微量含む。
- Ⅱ c 層 暗褐色土 (10YR3/4)。しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化物 (1~3 mm) を微量、褐色土を微 量含む。
- Ⅲ層 褐色土(10YR4/4)。しまりやや強く、粘性やや強い。暗褐色土を少量含む。基盤層。
- IV層 褐色土 (7.5YR4/6)。しまりやや強く、粘性やや強い。基盤層。
- 明褐色土 (7.5YR5/6)。しまりやや強く、粘性やや強い。基盤層。 V層

2 潰 構

A 遺構の概要

今回は、大館跡の北東部の調査を行った。検出した遺構は、中世は土塁2基、堀3条、縄文・弥生時代 は土坑3基、ピット35基、性格不明遺構1基、そのほかの時代は土坑1基、性格不明遺構2基である。

中世の遺構であるが、調査前より丘陵部で東西方向に延びる土塁の高まりが確認できた(以下、「土塁1」)。 ここに垂直にトレンチを設定し、土塁の断面確認を試みた。その結果、丘陵上のもともとの地形に2~3 mの盛土をすることによって土塁を築いていることが判明した。その北側には溝状の掘り込みが見られ、 底面に水抜きの溝を確認できたことから空堀とした(以下、「空堀1」)。空堀1は土塁1と平行しており、 堀底面から土塁1の頂上部までは約8mの高低差がある。更に北側に空堀1と平行するように、空堀1

と小谷川に挟まれて「コ」の字状に土塁が構築されていることが判明した(以下、「土塁2」)。この土塁には1m前後の盛土が見られる。また、土塁2に挟まれる部分に掘り込みが確認でき、形状などから空堀とした(以下、「空堀2」)。土塁1から空堀1に続く斜面にはII層が帯状に確認できる。土塁2の盛土下に基盤層が現れていることから、土塁1の北側は、もともとの自然丘陵を開削していることがわかった。調査区の東側に目を移すと、空堀1が土塁1の東側に回りこんでいる。ここでも土塁1と空堀1の間に切岸が見られる。東側の土塁1頂上部と空堀1底部の高低差は約13mであった。土塁2の東側では部分的に階段状の掘り込みが見られ、こちらは標高などから空堀とは言い切れないので堀とした(以下、「堀1」)。この堀は調査区東側を南北方向に伸び、16C・D区の境界辺りで空堀1が合流する。

次に縄文・弥生時代の遺構であるが、土塁1と空堀1の間から切岸によって既に半裁された状態でフラスコ状土坑を検出した(SK1001)。土塁1と空堀1の間にⅡ層が帯状に確認できることは既述のとおりだが、その下面から1.2m ほど下が底面となっている。また、調査区南側斜面の切り株の根元で、底部から胴部にかけての縄文土器が正位の状態で出土した。時期は前期末の大木6式に比定できる。切り株を取り除き周囲の確認を行ったところ、不整形なプランが確認できたが、遺構の性格は不明である(SX1002)。Ⅱ層は遺物包含層であり、石器を中心とした遺物が出土した。数少ない土器からその年代を推測すると、縄文時代前期末から中期後半および、弥生時代中期後半から後期前半である。Ⅲ層上面からは2基の土坑と35基のピットを検出したが、およそ前述の2つの時期に該当するものと考える。

そのほかの時代の遺構としては、空堀2の覆土を掘り込んで作られた土坑を確認した(以下、「土坑1」)。 覆土中から獣骨が出土したが、頭部・腰部・脚部のみであった。頭部を南に向け、副葬品の出土はない。 土坑1の主軸は空堀2を意識していないため、完全に空堀2が埋まった後に掘られたものと考えられる。 また、丘陵の東側に性格不明遺構を2基検出した。1つは盛土層からの掘り込みが確認できるため中世の 遺構と考えたが、形状が特異なため性格不明遺構とした(SX2)。もう一つは斜面地をテラス状に掘り込ん でおり、土塁との新旧関係は不明である。こちらも不整形なため、性格不明遺構とした(SX3)。

検出した遺構のうち、重要と思われるものは各説で詳述する。

B 記述の方法

本遺跡から検出した遺構種別の略号は、土坑を「SK」、性格不明遺構を「SX」、ピットを「P」とした。 縄文・弥生時代の遺構は上層の遺構と区別し、1001から通し番号を付している。呼称は略号と通し番 号を組み合わせて、「SK1001」などとした。

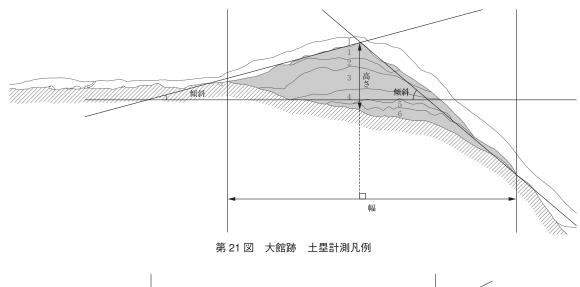
遺構の記載は、中世と縄文・弥生時代、そのほかの時代に分けてそれぞれ記述した。中世は、土塁、空堀・堀、縄文・弥生時代は土坑(SK)、ピット(P)、性格不明遺構(SX)、そのほかの時代は土坑、性格不明遺構(SX)の順で記述した。遺構の計測値は最大残存値または復元値とし、以下のようにした。

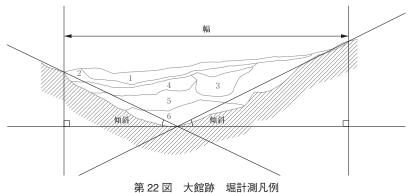
十塁

全長は確認できる最長の距離とし、途中で角度が変わるものは変換点ごとに計測してそれらを合計した数値を表した。軸方向は真北からの東西方向への角度とし、角度が変わるごとに表した。高さは盛土形成面から土塁の最上部までを計測し、傾斜は盛土の開始位置と肩の部分を直線で結んだ線の角度を計測した。また、土塁の幅は盛土の基底部を計測している。

空堀・堀

全長は確認できる最長の距離とし、途中で角度が変わるものは変換点ごとに計測してそれらを合計した





数値を表した。軸方向は真北からの東西方向への角度とし、角度が変わるごとに表した。深さは堀の上場から一番深い部分を計測し、傾斜は上場と下場を直線で結んだ線の角度を計測した。

ピット・土坑・性格不明遺構

規模の記述は円形、楕円形については径(長径・短径)を用い、方形そのほか不定形のものについては長軸・ 短軸として最大値を表している。深さについては、遺構確認面からの最深部を計測している。また長軸を 主軸と仮定して、真北からの東西方向の角度で表した。

本文中で使用している用語として「切岸」「法面」があるが、切岸は普請で切り落とした斜面のこととし、法面は人工の斜面のこととした[金子2005]。

C遺構各説

1) 中世の遺構

土塁 1 (図版 25・27・59・60)

 塁1の北側と東側に切岸が見られることから、当時の自然丘陵に手を加えていることがわかる。また、II 層上面には全面に炭化物が確認でき、これは土塁構築前に野焼きを行ったためと推測する。盛土のしまりが弱いことから、土を盛る際に版築などが行われていないと考える。土の盛り方の特徴として、北側・南側に土留め用の土を最初に盛り、その間に土を入れている様子が2区南北トレンチ2の断面から窺える。土塁1の北側斜面は断ち切られたようになっており、盛土完了後に削って整形した面と判断した。この際に自然丘陵も切岸したものと考える。遺物はII 層より数点出土しており、古いものでは頂上付近で出土した珠洲焼(14)が14世紀頃、新しいものでは同じく頂上付近出土の瀬戸美濃焼(2)が15世紀後半である。他にも16A区から唐津焼(時期不明)、熈寧元寳(17)などが出土した。

土塁 2 (図版 25・28・60・61)

土塁 2 は土塁 1 の北側に、平面形が「コ」の字状で断面形がかまぼこ状に構築されている。調査区内の全長は37mを測る。土塁 1 のように II 層などは確認できず、基盤層の上に盛土がされている。断面を観察すると、基盤層の上に暗褐色土や黒褐色土が見られるところがあるが、礫などが大量に混ざっており、2 区で観察できるような II 層とは異なるため盛土と判断した。土塁 2 の南側では、土塁 2 の標高最上部が21.9m、空堀 1 の底部が19.7m で高低差が2.2m ある。土塁 2 の東側では、土塁 2 の標高最上部が21.2m、堀 1 の底部が15.2m であり、その高低差が5.9m、傾斜が39°を測る。北側は土塁 2 の立ち上がりは確認できるものの、小谷川の改修によって一部が崩落しており、土塁の全体形状までは確認できない。主軸方向は東西に伸びる土塁がN-69°-W、南北に伸びる土塁がN-24°-Eである。構築方法は土塁 1 ほど顕著には現れていないものの、土塁 2 の東側の部分では整地用の土(図版28 1 区東西トレンチ土塁 2、5・6 層)を東側に盛土してから、構築した様子が分かる。土塁 2 はすべてが盛土によるものではなく、南東隅の部分では削り出しによるものも確認できた。盛土部分は、土のしまりがそれほど強くないことから、版築の形跡は確認できなかった。遺物は出土していない。

空堀1 (図版25・28・60・61)

空堀1は土塁1に平行して東西に伸びており、断面は台形を呈している。調査区内の全長は31mである。土塁1と土塁2の間にあり、土塁の最上部と空堀1の底部の高低差は、土塁1と128mで土塁2と22mである。空堀1の上場の幅は、空堀1南北セクション1で3.2m、1区南北トレンチで2.4m、空堀1南北セクション2で3.1m、平均すると2.9mになる。基盤層を掘り込んで構築しているため、空堀の壁および底面は硬くしまっている。17C区で空堀1は土塁1に沿って南に向きを変えながら徐々に標高を下げ、16C・16D区付近で堀1に合流している。主軸方向は調査区西側でN-67°-W、東側でN-17°-Wである。空堀1南北セクション2では底部の標高が19m、堀1との合流部付近の底部では14.6m、高低差が4.4mある。底面から排水溝を検出したため、空堀であったと想定した。排水溝は空堀1西端では幅0.5m、深度0.2m、1区南北トレンチでは幅0.4m、深度0.2mである。東側では空堀自体の標高が下がるにつれ、排水溝も確認できなくなっている。空堀1の出土遺物は3点あり、1区南北トレンチ付近の覆土下層から出土した。この3点は同一個体と思われ、内2点は接合した。これらは珠洲焼片(9)であり、15世紀前半のものである。

空堀2 (図版25・28・61)

空堀2の断面形は幅広のU字状を呈し、東西方向に伸びている。調査区内の全長は6mである。空堀2は東側が土坑1の構築によって壊され、西側はすぐ調査区外となっており、確認できる範囲が少ない。 土坑1の東側は土塁2の盛土が存在するため、土坑1付近が空堀2の東端になる。高低差約0.7m、幅約 3m であり、規模は空堀 1 とほぼ同じくらいである。主軸方向は $N-76^{\circ}$ -W である。空堀 2 では排水溝は見つかっていない。遺構底面の標高および土層から、遺構の性格は空堀であると推定した。基盤層を掘り込んでおり、壁および底面は硬くしまっている。空堀 2 に伴う遺物は出土していない。

堀1 (図版 25・28・29・61)

堀1は断面形が台形状で、調査区東側を南北方向に伸びている。調査区内での全長は約23mである。一部攪乱されており、遺構の検出は難しい状態であった。調査中、雨が降ると水が溜まり、水がなくなるまで数日かかるほど水はけは悪い。堀1は中世段階で水もしくは泥などが溜まる状態であった可能性があるため、遺構の性格を空堀と区別して堀とした。標高を平均すると、上場が16.3mで底面が14.9mを測る。堀の深さは堀1東西セクション4で0.8mを測る。更に土塁2との高低差は5.9m、土塁1との高低差は12.8mもあり、土塁を際立たせている。主軸方向はN-25°-Eである。また、15・16D区で旧河川を検出しており、その旧河川が埋まった後に堀1が構築された様子が堀1東西セクション4で窺える。西側の立ち上がりは一部、階段状に整形されているのが確認できた。16D区で信楽焼の甕片(16)が出土しており、年代は15世紀である。

2) 縄文・弥生時代の遺構

SK1001 (図版 30·62)

SK1001 は土塁 1 と空堀 1 の間の斜面、17A 区で検出した。中世の遺構を構築する際の切岸によって、斜めに切られた状態での検出である。斜面には II 層の帯が走り、その下に土坑の断面が露呈していた。形状からフラスコ状土坑と考える。底面の直径は約 1.6m、II 層の下面から底面までの深さが約 1.9m を測る。底面の中央部には若干のくぼみが確認でき、土坑に上屋をかけるための柱穴である可能性がある。遺物は剥片が 1 点出土しているのみである。

SX1002 (図版 26·62)

SX1002 は 2 区の西端、丘陵の南側斜面で検出した。調査当初には大きな木の根があり、その根元から縄文土器 (18) が正位の状態で出土した。付近を精査した結果、縄文土器以外にも石錐や石錘、剥片などの石器がまとまって出土したため、竪穴住居を前提に調査した。遺構が調査区外まで延びており全体形状の把握まで到らなかったが、調査区内の形状は不整形である。風倒木痕の可能性が高く、遺物は流れ込んだものと考える。また出土遺物の時期幅は狭く、そのことから遺構の時期は縄文前期末前後と考える。

SK1003 (図版 30·62)

SK1003 は 16・17B 区にまたがった位置で検出した。平面形はほぼ円形で、断面形は台形状を呈す。長径は 1.22m、短径は 1.08m、深さは 22cm である。覆土は 2 層に分け、黒褐色土の下にややしまった暗褐色土が入り込んでいる。遺物は覆土から剥片が 2 点出土したのみである。遺構自体の時期は、覆土から縄文時代と考える。

SK1036 (図版 30·64)

SK1036 は 16A 区の斜面で検出した。平面形は楕円形で、長径 0.64m、短径 0.46m、深さ 22cm である。 底面は水平な台形状を呈す。 覆土は単層で、ややしまった暗褐色土になっている。 遺物は剥片のみである が、遺構の時期は覆土から縄文時代と考える。

ピット (図版 26・30・62 ~ 64)

Ⅲ層上面で検出されたピットは合計 35 基を数える。16A 区の平坦な部分からの検出が多い。平均す

ると 0.3m 前後の直径を測り、深さが $10\sim 20cm$ ほどのピットである。単層のものが多いが、 $P1004\cdot 1006\cdot 1027$ では 2 層に分けた。平面形は円形・楕円形を中心とし、方形を思わせるものが若干含まれている。これらのピットは大きく 2 つのグループに分類できた。覆土が黒褐色のグループと、しまりがやや強い暗褐色のグループである。基本層序の II 層は、 II a・II b層が黒褐色で II c 層が暗褐色になっている。つまり黒褐色のグループが上層で、暗褐色のグループが下層である。遺構の分布を見ると $P1009\cdot 1008\cdot 1016$ が約 1.15m の間隔、 $P1016\cdot 1012\cdot 1013$ が約 0.7m の間隔で配置されており、L 字状になっている。ピットの径も近似しており、何かの遺構を構成していた可能性もある。また、調査区の西側と東側にまとまったピット群があり、これらも何かの遺構を構成していた可能性がある。遺物はほとんど出土していない。

3) その他の時代の遺構

土坑1 (図版31・64)

土坑1は18・19B・C区にまたがった位置で検出した。南北トレンチ掘削中に獣骨が出土し、断面を精査したところ見つかった土坑である。覆土の観察より、一度に埋め戻されたと推測する。平面形は楕円形で、断面形は半円状を呈し、長径は2.4m、短径は1.7m、深さは1.2mである。出土した獣骨はウマと推定され、頭部・腰部・脚部の骨が確認できるが、そのほかの骨は発見できなかった。しかし四足動物の形状は保っており、頭を南東に向けている。空堀2が埋没した後に構築されているが、共伴遺物がないため詳しい時代は不明である。

SX2 (図版 31·64)

SX2 は 16B 区の東側で検出し、平面形が不整形をなすことから性格不明遺構とした。北側の円形の掘り込みと、南側の不整形の掘り込みからなり、横穴で 2 つが繋がっていた。北側だけを観察すると、長軸が 2.6m で短軸が 1.7m ある。南側と合わせると、東西方向に約 2.5m、南北方向に約 5m を測る。2 区東西トレンチで確認できた断面では、深さ 1.3m である。調査時には土塁の下から平面プランを検出したが、断面を観察すると盛土中から掘り込まれていることから、土塁の構築時に作られたことになる。遺物は弥生土器 (48)、剥片が出土している。

SX3 (図版 31·64)

SX3 は 15C 区付近で検出した。平面形は不整形をなし、性格不明遺構とした。斜面をテラス状に掘り込んでいるようにも見えるが、木の根の攪乱によって全体および掘り込み面を把握することは困難であった。 規模は長軸約 2.9m、深さ約 0.5m であり、断面形は台形状を呈する。主軸方向は N-25°-E である。出土遺物はない。

3 遺 物

A 遺物の概要

大館跡は中世の遺物が18点、縄文・弥生時代の遺物が1,098点出土した。内訳では、中世の遺物は陶磁器17点、銭貨1点、縄文・弥生時代の遺物は土器275点、石器638点、礫185点である。出土層位は、中世の遺物がほぼ表土からの出土で、縄文・弥生時代の遺物がⅡ層からの出土である。中世の遺物は15世紀を主体に13世紀から16世紀のものが出土している。縄文時代の土器は前期末~中期後半の型式が断続的に出土しており、弥生時代の土器は後期東北系の天王山式が多く、次いで中期の小松式など北陸系の

土器、宇津ノ台式など東北系の土器が出土している。

B 記述の方法

遺物の記述は、中世、縄文・弥生時代に大別し、更に縄文・弥生時代は縄文土器、弥生土器、石器に分けて記述することとした。中世の遺物および縄文・弥生土器はそれぞれ記述しており、石器は器種ごとに記述している。

中世の遺物の年代については、珠洲焼は吉岡康暢氏の編年区分[吉岡 1994]に、瀬戸美濃焼は藤澤良 祐氏の編年区分[藤澤 2005]に従った。

C遺物各説

1) 中世の遺物 (図版 32・33-1~17・図版 65)

1 は青磁の盤で貫乳が入り、釉はやや厚い。体部内面には一単位 7 条、幅 18mm のごく浅い縦方向の 沈線が付く。 2 ~ 4 は瀬戸美濃焼で、すべて古瀬戸後期様式(14 世紀後半~15 世紀末)である。 2 ・ 3 は 肩部および体部片で、壺の同一個体と推測する。外面に鉄釉が施される。 4 は筒形容器の体部で、外面に 鉄釉が施される。時期は、古瀬戸後期様式 IV 期と考える。 5 ~ 14 は珠洲焼である。 5 は壺 R 種の体部下 半で、内外面にタール状物質が付着している。 6 ・ 7 は甕の口縁~肩部である。 6 は平直な方頭状、 7 は 円頭状の口縁部となっており、頸部は「く」の字状に屈曲している。時期は、口縁形状などから V 期と推定する。 8 ~ 13 は甕の体部である。 8 は外面に横方向の叩き痕が付くことから、頸部に近い部分と推定する。 9 ~ 12 は外面に斜め方向の叩き痕がみられ、そのうち 12 の断面には漆が付着している。 9 は叩き目が粗く、また焼成も不良で色調はにぶい黄色となっている。 13 は体部下半で、斜めおよび横方向の叩き痕が付く。 14 は片口鉢で、内面に一単位 11 条、幅 30mm 以上の卸目が施され、また炭化物が付着している。時期は、IV 期前半と推定する。 15 は越前焼の甕口縁部で、口唇部および口縁部内面に濃緑自然釉が付く。時期は、IV 期前半と推定する。 16 は信楽焼の甕体部下半で、外面に指頭痕が残る。 17 は 原変で、初鋳年は 1068 年である。正面は一部摩滅しているが文字は読み取れる。裏面は無文である。

2) 縄文土器(図版33-18~27・図版65)

今回、縄文土器が約50点出土しており、そのうち報告に堪えるものは10点ほどであった。器種はすべて深鉢であり、時期は前期末および中期後半に該当する。胴~底部にかけての資料が1点出土している以外は、すべて口縁から胴部の破片資料である。

18 は深鉢であり、胴〜底部にかけての部位のみ、15A 区の SX1002 の覆土中から出土した。いわゆる金魚鉢形を呈するもので、地文は縄文 RL 原体を横位に転がして施文されている。網代痕は確認できなかった。底径は 10.8cm であり、胎土は 3 mm 以下の石英・長石を少量含んでいる。大木 6 式期並行と考える。19 は深鉢の口縁〜頸部破片であり、16A 区から出土した。器形は胴部から頸部にかけて膨らみを持ち、口縁部で外反するもので波状口縁が確認できる。口縁部に幅狭の無文帯が配置され、頸部の半裁竹管による爪形文により胴部と区画されている。胴部の地文は縄文 RL 原体を横位に転がして施文している。胎土はやや粗く、石英・長石・雲母を少量含んでいる。18 と同一個体の可能性が高い。20 は深鉢の頸部破片であり、15A 区の SX1002 の覆土中から出土した。19 と同様の半裁竹管による爪形文が施され、胴部には横歯状工具による縦の沈線が連続して施されている。胎土はやや粗く、3mm 以下の石英・長石・雲母

を少量含んでいる。21 は深鉢の胴部破片であり、16B区の P1026付近から出土した。地文は縄文 RL原 体を横位に転がして施文している。胎土はやや粗く、金雲母を少量含んでいる。22 は深鉢の胴部破片で あり、17B 区の P1004 の南側から出土した。地文は縄文 LR 原体を斜めに転がして施文している。胎土は やや粗く、金雲母を少量含んでいる。23 は深鉢の胴部破片であり、17B 区から出土した。縄文 RL 原体を 斜めに転がして施文している。胎土はやや粗く、3mm以下の石英・長石を少量含んでいる。24は深鉢 の胴部破片であり、16B区から出土した。地文は横位に結束のない羽状縄文を施している。胎土はやや密で、 石英·長石·雲母を少量含んでいる。25 は深鉢の頸部破片であり、16A 区から出土した。頸部から外反し、 そのまま口縁部は開いた器形になろう。微隆帯が横位、斜位に廻っている。また、一部沈線が観察できる が、文様までは把握できない。胎土は粗く、長石・雲母・小砂利を少量含む。26 は深鉢の口縁部破片で あり、16B 区で出土した。27 と同じ場所で出土したこともあり、同一個体の可能性が高い。無文帯の口 縁部に幅広の沈線によって文様が描かれ、縄文が充填されている。 原体は縄文 RL で、横位に転がしている。 口縁部の突起の立ち上がりが確認でき、おそらく4単位の突起を持っている個体と思われる。胎土はやや 密で 1 mm 以下の石英・長石・雲母を含んでいる。27 は深鉢の口縁部破片であり、16B 区から出土した。 口縁部に無文帯が横位に巡り、その下は幅広の沈線によって楕円状の文様が描かれている。沈線の内側に は縄文 RL 原体を横位に転がしたものが充填され、磨り消されている。胎土はやや密で、1mm 以下の石英・ 長石・雲母を微量含んでいる。大木 10 式期並行のものと考える。また、同一個体と思われる破片が同じ 場所から多数出土したが、接合できなかった。

3) 弥 生 土 器 (図版 33-28 ~ 57 · 図版 65 · 66)

今回、弥生土器で報告に堪えうる個体は30点ある。遺物包含層からの出土であり、天王山式、小松式、宇津ノ台式などが出土している。器種は甕が多く、そのほか壺や鉢、高杯などがあるが、器形が復元できるような土器は出土していない。時期は弥生中期後半から後期前半である。以下、特徴的なもののみ抜粋し、詳述する。

28 は甕の口縁~胴部にかけての破片で、16A 区から出土した。口唇部には沈線で斜めに刻まれており、胴部にも沈線が巡る。内面はヨコナデにより整形されている。天王山式並行のもので、ほかにも 29・31~35 などが同時期とできよう。29 も甕の口縁~胴部にかけての破片で、16B 区から出土した。口縁部には内外面にキザミが施され、外面は口縁部をヨコハケで、頸部からはタテハケにより調整されている。内面は口唇部直下に沈線が横位に廻り、その下はヨコナデによって整形されている。34 は 29 と出土地点も近く同一個体である可能性がある。30 は甕の口縁部破片で外側へ大きく反っている。16A 区から出土した。内面に羽状縄文が施され、外面にはタテハケが確認できる。小松式などの北陸地方の影響を受けた東北系の土器である。31 は 17B 区から出土し、甕の口縁部破片と推定した。内外面ともにナデ調整のみであるが、胎土に金雲母を多く含んでいる点で特徴的である。同じように胎土に金雲母を含むものに 32・33・35 がある。32 はおそらく甕の胴部破片で、外面は重菱形文、内面はナデによって調整されている。33 は鉢の口縁部の可能性がある。外面は横位に沈線が廻り、その上から縄文 LR 原体を横位に転がして施文している。内面はナデによって調整されている。35 は甕の胴部破片である。外面には斜位の沈線が付き、内面はナデによって調整されている。32・33・35 は吹り加部を出たいる。

36 は甕の口縁部破片で、17B 区から出土した。口唇部は横位の縄文 LR 原体が施文されており、外面はタテハケ、内面はヨコハケで、小松式と考える。小松式と考えた土器はほかにも $37\sim40$ などがある。 $37\sim40$ などがある。

は甕の口縁部破片であり、16B 区から出土した。外面はタテハケ、内面は斜行短線文が反転した状態で2 段巡っている。38 は甕の口縁部であり、16B 区と17B 区から出土したものが接合した。外面は口縁部に ヨコナデ、頸部以下はタテハケで調整され、内面には2段の刺突が施されている。39 は甕の口縁部であり、 16B 区から出土した。口唇部に横位の沈線が巡り、外面はナデ、内面は斜行短線文が2段付く。また、外面には炭化物が付着する。40 は15B 区から出土し、甕の頸部と推定する。外面はタテハケ、内面はヨコハケの調整である。胎土は、36 には金雲母が含まれるが、37・39・40 は含まない。

41・42 は宇津ノ台式である。41 は 16B 区から出土し、甕の胴部と推定する。外面は沈線が横位と斜位に確認でき、また縄文 LR 原体を斜めに回転させて施文している。また、沈線の接点付近には刺突文が施されている。内面はナデによって調整されている。42 は 16B 区から出土し、甕もしくは壺の胴部破片と推定する。断面が屈曲しているため、胴部張り出しの部分か、肩の部分にあたる。外面は沈線が横位に巡り、内面はナデによって調整されている。胎土は 41 が密なのに対し、42 は粗く、対象的である。

北陸系統と考えた土器は $43 \sim 47$ である。43 は甕の口縁部破片であり、16B 区から出土した。外面にはハケで斜めになでたような調整が行われ、内面はナデ調整である。44 は甕の胴部破片であり、16B 区から出土した。外面はタテハケ、内面はヨコハケにより調整されている。45 は甕頸~胴部で、17A 区から出土した。外面は縦や横位にハケ目が施され、内面はヨコハケおよび櫛状工具により横位に沈線が巡っている。胎土は密で金雲母が含まれる。 $46\cdot 47$ は甕の胴部破片であり、外面はタテハケ、内面はナデにより調整されている。46 が 16A 区、47 が 17B 区の出土である。

型式までは特定できないが、中期後半から後期前半の範疇に収められるものに 48・49 がある。48 は蓋であり、SX2 の覆土より出土した。外面には上向きの短弧線が施され、内面はナデにより調整されている。直径は 4.2cm を測る。49 は甕の胴部であり、16B 区から出土した。外面は縄文 RL 原体を縦や横に転がして施文しており、内面はナデによって調整されているが、ところどころに指頭痕が残る。そのほか、注目されるものは 39 と同様に炭化物の付着している土器で、50・51 である。両方とも外面は縄文 RL 原体を縦位に転がして施文しており、内面はナデによる調整が行われている。また、外面の地文を埋めるように炭化物が付着している。この 2 点も型式の特定には至っていない。

4) 石 器

大館跡の石器は総数 638 点出土した。その石器組成は、石鏃 15 点、石錐 4 点、石槍 2 点、石匙 1 点、 箆状石器 2 点、不定形石器 16 点、石核 10 点、剥片・砕片 548 点、磨製石斧 2 点、石錘 4 点、砥石 1 点、 台石 1 点、磨石類 32 点である。以下、器種ごとに図示した遺物を基に記述する。

石鏃(図版 34-58 ~ 72·図版 66)

石鏃はその基部の形状によって分類した。 $58 \sim 65$ は基部を有茎にするもので有茎石鏃(凸基石鏃)となる。石鏃全体の中、有茎石鏃は約 6 割を占めている。中茎の逆刺の形状は抉りの浅いもの $58 \sim 60$ と、長軸に対し垂直近くまで深い抉りを入れているもの $61 \sim 63$ とがある。身の形状は $58 \sim 60 \cdot 65$ のような幅が細いものと、 $61 \sim 64$ のような比較的幅のあるものがある。64 の身の縁辺は鋸歯状の調整が施されている。有茎石鏃の法量をみると器幅は $6 \sim 15$ mm の範囲に、器長は $19 \sim 38$ mm までバラエティがあるが、器長をみると 23mm 以下の極小のもの($58 \sim 61$)、 $26 \sim 30$ mm までの中型のもの($62 \sim 64$)、30mm 以上の大型のもの(65)が存在する。使用石材は頁岩が 5 点($59 \sim 62 \cdot 65$)、半透明の頁岩が 2 点($58 \cdot 63$)、鉄石英(赤)が 1 点(64)である。 $66 \sim 69$ は基部が平らになる平基石鏃である。67 は水平なものであり、 $66 \cdot 68 \cdot 69$

は斜行した基部となっている。67の形状は明確さを欠くが五角形をなしている。69は左右非対称形であり、 簡単な調整が周縁にみられるのみである。この平基石鏃は器長と器幅の長幅比が有茎石鏃より低い値を示 している。石材はすべて頁岩で66・67は乳白色の頁岩である。70は基部が凹状に抉れる凹基石鏃である。 石材は珪化度の強い頁岩である。71・72は石鏃の先端部の破損品で基部の形状は不明である。石材は共 に頁岩である。

石錐 (図版 34-73 ~ 76・図版 66)

ここでは二次加工の調整により錐部が作出されているものを石錐とし、すべて使用による磨耗痕が付いている。73・74 は上端につまみ部をもつもので、75・76 はつまみをもたない。73 は正面右上端を欠損するが左右に嘴状に尖っている。凹基石鏃の転用の可能性がある。74・76 は1 面に折断面を残すが、その折断面から調整剥離が施されている。石材はすべて頁岩である。

石槍 (図版 34-77·78、図版 66)

77 は上下を欠損するもので全体の形状を復元できない。78 はほぼ完形であるが、基部下端を僅かに欠損する。裏面下部中央に素材面を残し、横長で厚手の剥片を用いていることが窺える。正面は厚手の剥片のため、稜をもつ。石材は共に頁岩である。

石匙 (図版 34-79・図版 66)

先端を欠損し、本来の形状を復元できない。裏面に素材面を残し、幅広の大きな剥片を素材としている。 つまみ部は調整加工により丁寧に作出されている。石材は頁岩である。

箆状石器(図版 34-80·81、図版 66)

80 は基部側の半分を欠損する。先端の刃部正面には丁寧な平坦剥離の調整が施されている。石材は鉄石英(黄玉)である。81 は完形品で正裏全体に丁寧な調整加工がなされている。刃部は片刃状に作出され、刃部の平面形状は緩やかな弧状を呈す。基部は尖基となる。正裏の中央稜線上に磨耗痕が付く。長さ147.1mmと大型品で、石材は頁岩である。

不定形石器 (図版 35-82 ~ 97・図版 66・67)

二次的な調整加工の剥離や微細な剥離が付くものを一括して不定形石器とした。「削器」、「抉入石器」、「両面加工石器」、「二次加工のある剥片」、「微細剥離痕のある剥片」等と呼称されている [鈴木 1996]。82・83 は抉入石器と呼称されるもので、縦長剥片の一側縁に二次加工によりノッチ状の抉り部をもつ。84~88・90・91 は微細な剥離痕が付くもので、84・85・88・90~92 は剥片の側面に、86・87 は剥片の先端部に微細な剥離痕が付く。93 は剥片先端を尖らす調整が施される。89・94~97 は両面加工の石器である。89・97 は石槍の欠損品または未成品と推定した。94・96 は相対する面からの加撃による剥離がみられることから、両極石器と推定した。石材はすべて頁岩である。

石核 (図版 36-98 ~ 108・図版 67)

98 は原石のまま持ち込まれたもので加工痕はない。99 ~ 101 は小型の原石に一回だけ加撃された剥離痕をもつものである。そのほかは残核になる。 $103\cdot104$ の残核は舟形状の断面三角形を呈している。三角形の一側面を中心に横に打点を移動しながら連続した剥片剥離を行っている。 $105\cdot106$ はサイコロ状の残核で、 $102\cdot107\cdot108$ は扁平な残核の形状を呈している。石材は $102\cdot105$ が鉄石英(赤石)、106 が黒曜石、そのほかは頁岩である。

磨製石斧 (図版 36-109・110・図版 67)

刃部は2点とも蛤刃で平面は緩やかな弧状を呈している。横断面形は楕円形となり、明確な側面の稜が

形成されていない。石材は共に輝緑岩である。

石錘(図版 37-111 ~ 114・図版 67)

 $111\cdot 112$ は完形品で、 $113\cdot 114$ は大半を欠損する。共に $8\sim 10$ cm 前後の大きな扁平な礫を利用し、その長軸の相対するか所に打ち欠きによるくぼみを作出している。112 は極端に抉られ凹状になっている。石材は 112 が頁岩、そのほかが凝灰岩である。

砥石 (図版 37-115・図版 67)

115 は正面の左側の一部を欠損する。12、3cmの扁平な円礫を用いている。正裏共に凹面が付く。石材は凝灰岩である。

台石 (図版 37-116・図版 67)

平面は楕円形を呈し、正面は凸面をなし、裏面は平坦である。石材はアプライトである。

磨石類 (図版 37-117 ~ 122・図版 67)

磨石、敲石、凹石と呼称される一群で、磨き痕、敲き痕、凹み痕等は複合して併用される場合が多く、細かな分類ができないため一括して磨石類とした。117・118 は細長い棒状の礫を利用したもので、その先端に敲き痕が付く。119~122 は平面楕円形の礫の正面に凹み痕をもつものである。119・120 は正裏ともに明確な凹み痕をもっている。121 は正面に明確な凹み痕をもち、裏面は明確さを欠いている。122 は断面三角形を呈し、上半部を欠損する。正面のみ凹み痕が付き、裏面にはもたない。石材は118・119 が 閃緑岩、121 が石英班岩、そのほかが凝灰岩である。

4 自然科学分析

A 大館跡における放射性炭素年代測定

1) はじめに

村上市天神岡地区に所在している大館跡では、土塁や空堀などの遺構が確認された。土塁の表土では 14世紀~16世紀頃の遺物が出土し、土塁の下では縄文時代の遺物包含層が確認された。ここでは、土塁 1より検出された試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。試料 の調製は山形、瀬谷、Lomtatidze、Jorjolianiが、測定は小林、丹生、伊藤が行い、本文は伊藤、孔が作成した。樹種同定は行っていないが、測定した材の形状は野村が観察を行った。

2) 試料と方法

測定試料は、土塁1のII層上面に含まれていた炭化物である。 2点とも炭化材の針葉樹であり、炭化物 A (PLD-6796) は最外年輪から 4年輪分を測定した。炭化物 B (PLD-6797) は最外年輪以外の部分不明の 1年輪分を測定した。測定試料の情報、調製データは第 7表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS:NEC 製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた 14C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、14C 年代、暦年代を算出した。

測定番号	遺跡データ	試料データ	前 処 理	
PLD-6796	大館跡 遺構:土塁 1 層位: II 層上面 資料 No.:1 (炭化物 A)	試料の種類:炭化材(針葉樹:4 年輪分) 試料の性状:最外年輪 状態:wet カビ:無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 1.2N, 水酸化ナトリウム 1N, 塩酸 1.2N)	
PLD-6797	大館跡 遺構:土塁 1 層位:Ⅱ層上面 資料 No.:2(炭化物 B)	試料の種類:炭化材(針葉樹:1 年輪分) 試料の性状:最外年輪以外部位不明 状態:wet カビ:無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 1.2N, 水酸化ナトリウム 1N, 塩酸 1.2N)	

第7表 大館跡 測定試料および処理

3)結果

第8表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比(δ ¹³C)と、同位体分別効果の補正を行って 暦年較正に用いた ¹⁴C 年代、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ¹⁴C 年代、1 ¹⁴C 年代を暦年代に 較正した年代範囲を、第23図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値と誤差 を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために 記載した。

 14 C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 14 C 年代(yrBP)の算出には、 14 C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した 14 C 年代誤差(\pm 1 σ)は、測定の統計 誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の 14 C 年代がその 14 C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の ¹⁴C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ¹⁴C 年代に対し、過去の

宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14 C 濃度の変動、および半減期の違い(14 C の半減期 5730 ± 40年)を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

 14 C 年代の暦年較正には OxCal3.10(較正曲線データ:INTCAL04)を使用した。なお、 1 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された 14 C 年代誤差に相当する 68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ 暦年代範囲は 95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は 14 C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

測定番号	δ ¹³ C	暦年較正用年代	14C 年代	14C 年代を暦年代に較正した年代範囲					
側足留力	(‰) (yrBP ± 1 a		$(yrBP \pm 1 \sigma)$	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲				
PLD-6796	- 25.33 ± 0.23	660 ± 21	660 ± 20	1285AD (32.9%) 1305AD 1360AD (35.3%) 1385AD	1280AD (47.0%) 1320AD 1350AD (48.4%) 1390AD				
PLD-6797	- 24.80 ± 0.24	820 ± 21	820 ± 20	1210AD (68.2%) 1255AD	1175AD (95.4%) 1265AD				

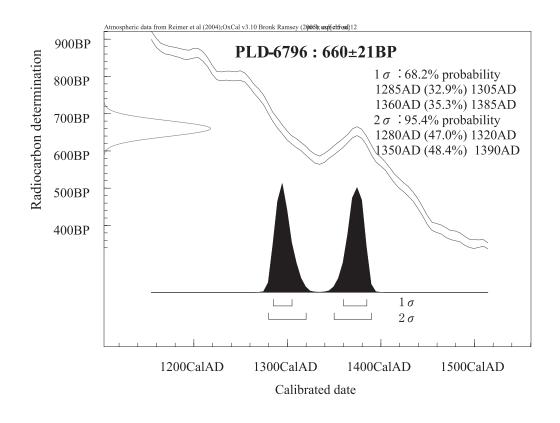
第8表 大館跡 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

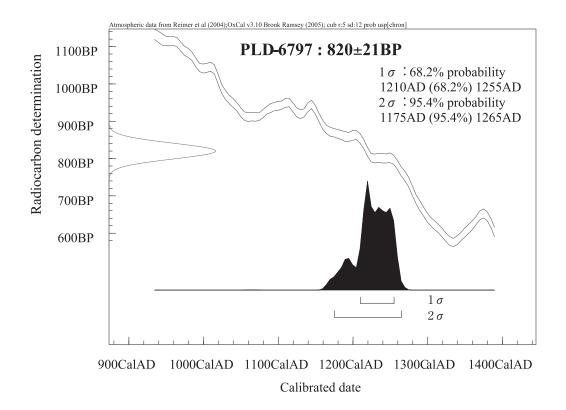
4)考察

試料について、同位体分別効果の補正および暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率 の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

土塁 1 で検出された炭化物 A(PLD-6796)の暦年較正年代は、 1 σ (68.2%の確率)で 1360-1385calAD(35.3%)、1285-1305(32.9%)、 2 σ (95.4%の確率)で 1350-1390calAD(48.4%)、1280-1320calAD(47.0%)の年代範囲が得られた。炭化物 B(PLD-6797)の暦年較正年代は、 1 σ の確率で 1210-1255calAD(68.2%)、 2 σ の確率で 1175-1265calAD(95.4%)の年代範囲が得られた。

炭化物 $A\cdot B$ は、同一層からの出土であるが、測定された年代は 14 C 年代で 160 年の差があった。測定 試料が樹木の場合、年輪の内側を測定するほど古い年代を示すという古木効果を考慮する必要がある。そのため最外年輪を測定した炭化物 A は 2σ で見ると、13世紀後半~ 14世紀末に伐採もしくは枯死した 確率が高い炭化材である。





第23 図 大館跡 暦年較正結果

5 ま と め

A 中 世

1) 遺 構

今回の調査により中世の遺構は土塁2基・空堀2条・堀1条を検出した。遺物は主に表土(I層)から、 15世紀を主体に13~16世紀にかけての陶磁器類17点、初鋳年が1068年の銭貨1点が出土している。 Ⅱ層上面で炭化物が広範囲に分布していたことから、当時の草木を焼き払い、自然丘陵の北側を掘削しな がら、その土を盛土に利用して土塁1を築いたものと考える。土塁1は最初北側に土を盛ることにより土 留めの役割を果たし、その後中央に土を盛った様子が断面から読み取れた。盛土にしまりがないことから 版築などの作業は行われておらず、短期間の工事を要求されたためそれをする余裕がなかったのか、強度 よりも視覚的圧力をかけることに重点が置かれていた可能性がある。土塁1の最上部と空堀1の底部の高 低差は 7.9m を測り、見る者を今でも圧倒するのがそう考えた理由の一つである。空堀 1 の底面からは排 水溝を検出し、調査区東側で空堀1と堀1が合流していることから、堀1へ排水していたのであろう。東 西に伸びる空堀 1 の北側には土塁 2 が築かれ、土塁 2 最上部と空堀 1 底部の高低差は 2.2m を測る。土塁 2は「コ」の字状に築かれ、間に空堀2を挟んでいる。土塁2は、土塁1のようにⅡ層上ではなく基盤層 上に直接築かれていることから、1区に存在した丘陵はⅡ層ごと大きく削られてしまったものと推測する。 丘陵の北側を掘削した土は土塁1の構築に利用されたと推定できることから、土塁2は土塁1の後に構築 されたことになる。また遺構の規模から、空堀1・2の排土を利用して盛土をしたと推測できる。土塁2 の北側では土塁の立ち上がりは確認できたが、小谷川の河川改修で破壊されているため、土塁の形状は確 認できていない。明治23年の地籍図では小谷川の旧流路が現在よりも北側を流れており、それ以外現在 とほぼ変わらず、中世においても同様であったと考えられ、小谷川も堀として機能していたことが推測さ れる。よって館の北側は土塁と、堀が3つずつ、交互に巡って機能していたと考える。一方、東側は土塁 と堀1の2つの施設によって防御されていたと推定する。堀1は検出位置および今年度の試掘確認調査の 結果などと照らし合わせてみると、館の外周を取り囲むように構築されていた可能性がある。調査区南端 では一部盛土層(図版272区 南北トレンチ1)が確認でき、虎口などの施設に伴う遺構の可能性も考えら れる。どちらにしても北側の大規模な防御施設に対し、館の南側はそれほどの防御施設の痕跡がない。後 世の開発により壊されてしまったのか、今後の調査結果が待たれる次第である。

2) 構築年代および構築者

大館跡は一辺約 100 m (一町) 四方の方形居館と推定され、限られた面積での調査であったが、 $13 \sim 16$ 世紀の遺物が出土し、そのなかでも 15 世紀代が主体になることが判明した。また土塁 1 直下で検出した炭化物は放射性炭素年代測定によって、13 世紀後半~ 14 世紀末の結果がでている。新潟県内の方形居館は、成立が 14 世紀以降と考えられており、また明確に土塁・堀をめぐらすものは 15 世紀以降であり、そして 16 世紀には衰退に向かうとされている [坂井 1997・伊藤 2002]。このことから、大館跡は 14 世紀以降に成立し、15 世紀に主体があったと考えることができる。ただし今回の調査区で検出した土塁および空掘に関しては、その規模などから時期が異なる可能性が指摘されており、その点について考えていくこととする。

まず新潟県北部を中心に14世紀~16世紀の歴史背景をみていく。14世紀代は全国的に南北朝の争乱

が勃発しており、当地域では瀬波郡で戦闘がみられるほか、出羽方面から南朝勢力が小泉庄に乱入している。15世紀代は、前半に1423年に越後国内で応永の大乱が起きており、本庄氏・色部氏などの揚北衆も戦闘に参加している。また隣国の関東では永享の乱・結城合戦などが勃発し、以後戦乱状態となっている。後半では、1467年に京都を中心に応仁の乱が勃発しているが、越後国においては目立った争乱はみられない。15世紀末になると、本庄氏が度々越後国守護上杉氏に反乱を起こすようになり、以後本庄繁長の乱まで続く。16世紀代の早い段階で本庄城(後の村上城)が築城されたと考えられ、以後本庄氏の居城となったと推定される。1590年に本庄繁長が上杉家中を追放され、直江兼続弟の大国実頼が本庄領を知行している「村上市 2000」。

以上のことから構築時期を考えていく。14世紀代は南北朝の争乱があるが、方形居館の変遷から、この時期に大規模な土塁などを構築した可能性は低いと考える。ただし年代測定の結果から、丘陵上に何らかの施設が築かれていたと考えたい。15世紀代であるが、越後国内において応永の大乱が勃発するなど、緊張状態であったと推定される。その点から土塁などの防御施設を構築したと考えることも可能であり、出土遺物の中心時期とも合致する。しかし防御施設構築にかかる土木量などから、これより後に構築されたとする見方もある。15世紀末以降であるが、出土遺物の量から館自体は衰退に向かっていたと思われる。しかし遺構のまとめで述べているように、土塁1は版築を用いてない点から、時間的余裕がなく構築したか、また視覚的圧力をかけるために構築されたと推測でき、15世紀末以降の小泉庄をめぐる戦乱や支配者交代に伴う権力誇示によって構築された可能性も残っている。

大館跡は小泉庄本庄に位置し、当地域で最大規模の方形居館となる。このことから構築者は小泉庄本庄 内の有力者とすることができ、本庄氏または鮎川氏が考えられる。本庄氏は鎌倉時代に小泉庄の地頭職を 得て、勢力を伸ばした一族である。一方鮎川氏は、当初小泉庄内の一領主であったものが、その後本庄氏 に対抗できる勢力になったと考えられる。鮎川氏の活動は、文献上で15世紀後半から確認することができ、 勢力伸張の時期はこの前後と推測できる。これらのことから、大館跡の成立したと考える14世紀において、 当地域では本庄氏が最大の有力者であったとすることができ、大館跡成立には本庄氏が深く関わっていた と考えられる。

このように今回検出した土塁などの防御施設は、15世紀以降に構築され、またその構築者は本庄氏の 可能性が高いと考える。

B 縄文・弥生時代

1) 遺構について

下層での検出遺構は土坑 3 基、ピット 35 基、性格不明遺構 1 基の合計 39 基であり、遺物は土器、石器など合計 1,098 点が出土した。出土土器は大きく 2 時期に分かれ、一つが縄文時代前期末~中期後半で、もう一つが弥生時代中期後半~後期前半である。遺構の覆土も、ややしまった暗褐色の一群と黒褐色土の一群、褐色土の P1032 に分かれる。暗褐色土の一群は P1004~ 1007・1010・1011・1017~ 1019・1021・1024・1026・1028・1030・1031・1034・1038・1039の 18 基となり、黒褐色土の一群は、P1008・1009・1012~ 1016・1020・1022・1023・1025・1027・1029・1033・1035・1037の 16 基である。基本層序と照らし合わせると、ややしまった暗褐色土層は II c 層となり、包含層の中では下位に位置する。このことから暗褐色土層の一群が縄文時代前期末~中期後半の遺構であると推測する。同じように SK1003・SK1036を見ると、共にややしまった暗褐色土が主体になるため縄文時代の遺構であろう。黒褐色土の一群には覆

土のしまりなどから縄文時代と弥生時代の遺構が混在していると思われるが、明確に判別はできない。ピットの配置を見ると、P1009・1008・1016 が約 1.2m の間隔、P1016・1012・1013 が約 0.7m の間隔で分布しているが、その他では規則性はみられなかった。

このように丘陵上にピットが散漫にみられる。縄文時代前期から中期には明確な炉跡が検出されず、矮小なピットで構成される簡易な構造の主柱 5 本形式の平地住居が存在し[品田 1996]、縄文時代では丘陵上にそのような施設があった可能性を考える。

2) 下層出土の石器について

下層は、出土土器から縄文時代前期末葉~中期後半と弥生時代中期後葉~後期前葉の2時期に分かれる。このことから、出土石器もどちらかの時期に該当するものと考えるが、石器の形態で明確に分別できない。縄文時代に伴うと考えたものは箆状石器(80・81)、石錘(111~114)である。そのほかは両時代に伴ってもよいものである。出土地点や出土層位をみると石器の分布は丘陵頂部の平坦面の包含層に多くが出土している。また、南斜面のSX1002の覆土およびその周辺でも出土している。頂部の平坦面は遺構や土器から縄文時代と弥生時代が混在し、南斜面のSX1002周辺は縄文時代の石器が中心になると考える。石器は I 層の黒褐色土より出土し、II 層は土色の若干の違いにより II a、II b、II c 層に3分した。本遺跡では II a、II b 層より石器が出土しているが、その出土層位から縄文時代と弥生時代とを分別することはできなかった。以下、器種別にみてみよう。

有茎石鏃は、村上市滝ノ前遺跡 [石田_{ほか}2006] など周辺遺跡の調査例から、すべて弥生時代に所属するものと思われる。有茎石鏃は丘陵頂部の平坦面全体に分布している。平基石鏃、凹基石鏃は縄文時代に所属するものと考えたい。分布は平坦面のみならず斜面まで広く分布している。石材は半透明の頁岩と呼ばれるものが弥生時代の有茎石鏃に限られてみられた。石錐の73 は、錐部と考えた部分の磨耗から石錐とした。出土地も南斜面のSX1002で、縄文時代に所属すると考えられる。74~76 は両時代に属す可能性がある。石槍は弥生時代では類例が少なく、縄文時代の所産と考えたい。石匙が1点出土したが両時期に存在し所属時期が不明である。石箆は縄文時代の所産であり、丘陵頂部平坦面の西端で出土した。不定形石器中、82・83の抉入石器は斜面から出土し、縄文時代に所属しよう。そのほかは所属時期が不明である。磨製石斧の2点は、出土地点が弥生土器の方が多く出土している頂部平坦面東であり、弥生時代の所産の可能性が強い。石錘は頂部平坦面から斜面にかけて出土し、縄文時代の所産である。磨石類は両時代に属す可能性がある。石核、剥片、砕片の出土をみると明らかにこの遺跡で石器製作を行ったことが窺える。石核の99~102・106 の小型のものが頂部平坦面西側で集中して出土している。石材は頁岩、鉄石英(赤玉)、黒曜石で、頁岩にもバラエティがあり、石材利用の豊富さから弥生時代的な様相が強い [石丸_{ほか}2003]。

要約

松蔭東遺跡

- 1 松蔭東遺跡は岩船郡神林村大字牧目字松蔭 1292 ほかに所在する。遺跡は、砂丘列背後の後背湿地内 の微高地に立地し、この微高地は荒川支流によって作られた自然堤防と考える。
- 2 本発掘調査は日本海沿岸東北自動車道の建設に伴い、平成 18 年度に実施した。調査面積は 3,416 ㎡ である。
- 3 検出した遺構は、掘立柱建物 1 棟、柱穴列 1 列、井戸 2 基、土坑 5 基、溝 6 条、性格不明遺構 1 基、ピット 13 基である。このうち掘立柱建物と礎板を検出したピットは、放射性炭素年代測定によって 12 世紀中頃~13 世紀中頃に構築されたと推定でき、井戸も遺構分布からこの時期と想定する。
- 4 出土した遺物は、古代が須恵器などで、時期は8世紀後半~9世紀前半である。中世の遺物は12世紀~16世紀後半までのもので、珠洲焼などのほかに白磁・青磁や中国天目といった輸入陶磁器類も存在する。近世の遺物は、唐津焼や肥前系磁器などが出土しており、時期は17世紀代である。
- 5 本遺跡は中世が中心で、遺構・遺物の分布から隣接する田屋道遺跡・牧目館跡に密接に関連していた と考えられる。

中曽根遺跡

- 1 中曽根遺跡は岩船郡荒川町大字金屋字中曽根 725 ほかに所在する。遺跡は、砂丘列背後の後背湿地内 の微高地に立地する。
- 2 本発掘調査は日本海沿岸東北自動車道の建設に伴い、平成17・18年度に実施した。本報告書は18年 度に実施した調査に係るものである。18年度の調査面積は2.294㎡である。
- 3 調査の結果、古代の遺構を検出した。遺物包含層は削平されていたが、弥生時代・古代・中世・近世 の遺物が出土した。
- 4 検出した遺構は、掘立柱建物 2 棟、柱穴列 2 列、井戸 2 基、土坑 6 基、溝 4 条、性格不明遺構 4 基、ピット 104 基および古代の自然流路 2 条である。このうち 1 基の性格不明遺構から、漆器盤が出土した。
- 5 弥生時代の遺物は同一個体の土器 2 点で、弥生時代後期の東北系土器と推測する。古代の遺物は須恵器・土師器・土製品・石製品・木製品であり、土器の時期はⅣ~Ⅲ期 [春日 2004] 中心となっている。 そのほかの時代の遺物は、中世では青磁・珠洲焼、近世では 17 世紀代の肥前系磁器や唐津焼が出土した。
- 6 樹種同定の結果、SE277 出土の斎串はスギであり、掘立柱建物や柱穴列・ピット検出の柱根はサクラ 属・クリを主体にクワ・コナラ属などを使用している。また放射性炭素年代測定の結果、SB106 は 7 世 紀後半~9世紀後半、SA397 は 8 世紀後半~9世紀後半に構築されたと考える。
- 7 18年度の調査成果は、17年度の成果を裏付けるものであり、本遺跡は古代のごく一般的な農民層の集落であったと考えられる。

大館跡

- 1 大館跡は村上市大字天神岡字大館ほかに所在する。遺跡は1辺約100m(1町)の館跡であり、館の 縄張りに独立丘陵を取り込んでいる。
- 2 本発掘調査は日本海沿岸東北自動車道の建設に伴い、平成18年度に実施した。調査は大館跡の北東

部分に当たり、独立丘陵と低地部からなる。調査の延べ面積は1,535 ㎡である。

- 3 調査の結果、中世と縄文・弥生時代および時期不明の遺構を検出した。遺物は中世と縄文・弥生時代のもので、中世の遺物は主に表土からの出土であった。縄文・弥生時代の遺物は、主に独立丘陵の土塁下の遺物包含層から出土した。
- 4 中世の遺構は、土塁2基、堀3条である。土塁2基・堀2条は独立丘陵上に構築され、堀1条は低地 に構築されている。また独立丘陵の北側半分は、中世において普請がなされ、旧地形が大きく改変され ている。これらは、主に館北側に対しての防御施設となっている。
- 5 中世の遺物は珠洲焼主体で、時期は 15 世紀を中心に 13 世紀後半~ 16 世紀前半のものである。
- 6 縄文・弥生時代の遺構は独立丘陵上に分布し、土坑3基、ピット35基、性格不明遺構1基を検出した。 土坑のうち1基は、フラスコ状土坑である。ピットは矮小なものが主体で、また覆土から2群に分けた。
- 7 縄文・弥生時代の遺物は、土器・石器・礫となっており、その中で石器が主体を占めている。土器は、 縄文時代前期末~中期後半、弥生時代中期後半~後期前半のものである。石器は、石鏃・石錐・箆状石 器・磨製石斧・石錘などである。
- 8 土塁構築前の野焼き痕と考えた土塁1下面の炭化物は、放射性炭素年代測定の結果、13世紀後半~ 14世紀末の数値が出ている。
- 9 大館跡は15世紀を中心にした館と考えられ、今回調査した土塁などの防御施設は15世紀以降に構築されたと推測する。

引用・参考文献

青木 学ほか	2006	『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 168 集 中曽根遺跡』新潟県教育委員会 (財) 新潟県埋蔵文 化財調査事業団
青山宏夫	1994	「荒川保と奥山庄の境界について」『人文地理』 第46巻 第3号 人文地理学会
荒川隆史けか		『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 133 集 青田遺跡』 新潟県教育委員会 (財) 新潟県埋蔵文化
元川性 欠ほか	2004	时調查事業団
プロウム	9000	
石田守之ほか	2006	「村上市滝ノ前遺跡出土の石器と土製品について」『三面川流域の考古学 第5号』 奥三面を考
オト和 ず	2222	
石丸和正ほか	2003	「新潟県岩船郡域における弥生時代中期~後期にかけての様相―村上市砂山遺跡・滝ノ前遺跡を
/m → = = to 1.0		中心に一」『三面川流域の考古学 第2号』 奥三面を考える会
伊藤啓雄	2002	「中世越後の城館と寺院」『第 15 回 北陸中世考古学研究会資料集 中世北陸の城館と寺院』 北
I m & I.		陸中世考古学研究会
上田秀夫	1982	「14~16世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究』 No.2 日本貿易陶磁研究会
大島秀俊	2007	「田屋道遺跡(神林村)」『第14回遺跡発掘調査報告会資料』 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業
		団
荻野正博	1983	「越後国中世庄園の成立」『新潟史学』 第 16 号 新潟史学会
小野正敏	1982	「15、16 世紀の染付椀、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』 No.2 日本貿易陶磁研究会
折井 敦ほか	2005	「遺跡の位置と環境」『新潟県埋蔵文化財報告書 第 147 集 昼塚遺跡 I ・江添遺跡』 新潟県教育
		委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
折井 敦	2006	「道下遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成 17 年度』 財団法人新潟県埋蔵文化財調査
		事業団
折原洋一ほか	2005	『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 148 集 西部遺跡 I 』 新潟県教育委員会 (財)新潟県埋蔵文
		化財調查事業団
春日真実ほか	2004	『越後阿賀北地域の古代土器様相』 新潟古代土器研究会
金子拓男	1996	「大化元年『越国奏上』についての検討」『越と古代の北陸』 名著出版
金子拓男	2002	「村上城跡の遺構からみた中世の村上要害」『新潟考古』 第13号 新潟県考古学会
金子拓男	2003	「中世村上要害に関する追考」『新潟考古』 第 14 号 新潟県考古学会
金子拓男	2005	『神林村「平林館」と「城下町」とされる「平林」について』『新潟考古』 第16号 新潟県考古学会
鴨井幸彦	2000	「応用地質・沖積平野の特徴」『新潟県地質図説明書』(2000 年版)新潟県商工労働部商工振興課
小林正之ほか	2006	「遺跡の環境」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 161 集 沢田遺跡Ⅱ・桜林遺跡』 新潟県教育委
		員会 (財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
坂井秀弥	1993	「古代越後の環境・生産力・特性」『新潟県考古学談話会会報』 第12号 新潟県考古学談話会
坂井秀弥	1995	「古代越後平野の環境・交通・官衙」『木簡研究』 第十七号 木簡学会
坂井秀弥	1997	「第5章第5節 中世集落の展開と城館の動向」『中・近世の北陸―考古学が語る社会史―』 桂
34,1,3044		書房
塩原知人ほか	2000	『大関上野遺跡・山崎遺跡』 新潟県村上市教育委員会
塩原知人ほか		『村上市文化財報告書 高平遺跡』 新潟県村上市教育委員会
品田高志ほか		『柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第23 屁振坂-柏崎市向陽町―屁振坂遺跡発掘調査報告書―』
11 11 14 14 16 1/2 //·	1000	柏崎市教育委員会
鈴木俊成	1996	『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第72集 清水上遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会 (財) 新潟県埋蔵
3/1/1/2/2/	1330	文化財調查事業団
滝沢規郎ほか	2002	『朝日村文化財報告書 第 22 集 元屋敷遺跡Ⅱ (上段)』 新潟県朝日村教育委員会 新潟県
		『神林村埋蔵文化財報告書 第4 牧目館跡発掘調査報告書』新潟県神林村教育委員会
田辺早苗	1992	『神林村埋蔵文化財報告 第 5 八幡山遺跡発掘調査報告書』 新潟県岩船郡神林村教育委員会
田辺早苗	1994	『神林村埋蔵文化財報告 第10 城田遺跡光掘詢箕報告書』 利為県石船郡神林村教育委員会
田辺早苗ほか		
田辺早苗ほか		『神林村埋蔵文化財調査報告書 第 11 里本庄遺跡群』 新潟県神林村教育委員会
田辺早苗ほか	2002	『神林村埋蔵文化財調査報告書 第 19 桃川遺跡群』 神林村教育委員会

田辺早苗 はか 2005 『神林村埋蔵文化財調査報告書 第22 平林城跡確認調査概報Ⅱ』 新潟県神林村教育委員会 実 2006 「中部北遺跡 | 『埋文にいがた』 No.56 (財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団 富樫秀之ほか 2002 『朝日村文化財報告書 第21集 アチヤ平遺跡上段』 新潟県朝日村教育委員会・新潟県 新潟古砂丘グループ 1974 「新潟砂丘と人類遺跡-新潟砂丘の形成史 I-」『第四紀研究』第13巻 第2号 日本第 四紀学会 藤澤良祐 2005 「瀬戸系(施釉陶器生産技術の伝播)」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相~生産技術の展開と 編年~』 全国シンポジウム「中世窯業の諸相~生産技術の展開と編年~」実行委員会 前川雅夫 2006a 『窪田遺跡現地説明会資料』 (財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団・国際航業株式会社 「窪田遺跡」『埋文にいがた』 No.57 (財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団 前川雅夫 2006b 「第Ⅲ章第2節 B 中曽根遺跡出土の古代土器の編年的位置づけ~食膳具を中心に」『新潟県埋蔵 松田重治 2006 文化財調查報告書 第168集 中曽根遺跡』新潟県教育委員会 (財)新潟県埋蔵文化財調査事 水澤幸一 『中条町埋蔵文化財調査報告 第2集 江上館跡 I 』 新潟県中条町教育委員会 1993a 水澤幸一 1993b 『中条町埋蔵文化財調査報告 第6集 江上館跡Ⅱ』 新潟県中条町教育委員会 水澤幸一 1997a 『中条町埋蔵文化財調査報告 第 12 集 下町·坊城遺跡 Ⅱ』 新潟県中条町教育委員会 『中条町埋蔵文化財調査報告 第13集 江上館跡V』 新潟県中条町教育委員会 水澤幸一 1997b 『中条町埋蔵文化財調査報告 第32集 韋駄天山遺跡』 新潟県中条町教育委員会 水澤幸一 2004 『中条町埋蔵文化財調査報告書 第 33 集 下町・坊城遺跡 VI』 新潟県中条町教育委員会 水澤幸一 2005a 水澤幸一 2005b 「奥山荘政所条遺跡群の展開」 『中世の城館と集散地』 高志書院 『村上市史 通史編 1 原始・古代・中世』 新潟県村上市 村上市 1999 村上市 2000 『村上市史 別編 絵図・地図、年表』 新潟県村上市 「14~16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』 No.2 日本貿易陶磁研究会 森田 勉 1982 山本信夫 2000 『大宰府条坊跡 X V - 陶磁器分類編-』 太宰府市教育委員会 山本信夫 「貿易陶磁中世前期(11 ~ 14 世紀前半)編年」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相~生産技術

横山勝栄ほか 1987 『新潟県中世城館跡等分布調査報告書』 新潟県教育委員会

吉井雅勇 2002 『荒川町埋蔵文化財調査報告 第9集 馬場館跡 I』 新潟県荒川町教育委員会

吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文間

米沢 康 1980 「大宝二年の越中国四郡分割をめぐって」『信濃』 第32巻 第6号 信濃史学会

渡邊裕之ほか 2003 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 127 集 道端遺跡Ⅱ』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文

の展開と編年~』 全国シンポジウム「中世窯業の諸相~生産技術の展開と編年~」実行委員会

化財調査事業団

渡邊裕之 2006 「野地遺跡」 『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成 17 年度』 財団法人新潟県埋蔵文化財調 査事業団

自然科学分析引用・参考文献

樹種同定

平井信二 1996 『木の大百科』642 p 朝倉書店

放射性炭素年代測定

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon Calibration and Analysis of Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program, Radio carbon, 37, 425-430.

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon OxCal, Radiocarbon, 43, 355-363.

中村俊夫 2000 「放射性炭素年代測定の基礎」『日本先史時代の ¹⁴C 年代』 3-20.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H, Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Culter, K. B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Ramsey, C.B., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J. R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) Int Cal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.

松蔭東遺跡 遺構観察表

掘立柱建物

遺構 No.	<i>ナ</i> .	7位(桁行)	棹	 造	床面積	桁	行	梁間	
SB11		N14° E	2 間以上×	2間、側柱式	11.475 m²	東 286 cm以上、	西 317 cm以上	北 — 、南 388 cm	
構成ピット	位置	柱	平面形	平面規模	断面形	深 さ (cm)	底面標高 (m)	ピット間隔	
P1	13B3	ナシ	円形	29 × 25 cm	U 字状	24	1.16	P1-P4	147 cm
P4	13B3	ナシ	円形	19 × 18 cm	U字状	23	1.18	P4-P5	170 cm
P5	13B4	ナシ	楕円形	30 × 25 cm	半円状	19	1.18	P5-P6	383 cm
P6	13B14	ナシ	円形	27 × 24 cm	U 字状	27	1.05	P6-P7	152 cm
P7	13B13	残存	円形	22 × 20 cm	半円状	17	1.14	P7-P3	134 cm
P3	13B13	ナシ	楕円形	31 × 23 cm	V 字状	22	1.12	P3-P2	208 cm
P2	13B8	ナシ	円形	27 × 23 cm	U 字状	26	1.11	P2-P1	181 cm

柱穴列

構成ピット	位 置	柱	平面形	平面規模	断面形	深 さ (cm)	底面標高 (m)	ピット間	隔
SA6P1	13B17	ナシ	円形	32 × 28 cm	U 字状	21	1.16	P1-P2	157 cm
SA6P2	13B16	ナシ	方形	23 × 22 cm	半円状	13	1.26	P2-P3	137 cm
SA6P3	13B16	ナシ	楕円形	24 × 19 cm	半円状	10	1.26	P3-P4	95 cm
SA6P4	12B20	ナシ	方形	26 × 24 cm	U 字状	19	1.16	_	_

ピット

遺構名	位 置	柱	平面形	平面規模	断面形	深 さ (cm)	底面標高 (m)	ピット間	間隔
P9	6B6 · 12	ナシ	円形	46 × 42 cm	弧状	13	1.14	_	_
P15	13A22	ナシ	楕円形	32 × 24 cm	V 字状	31	1.08	_	_
P18	13A22	ナシ	円形	27 × 25 cm	V 字状	28	1.10	_	_
P21	8D23 · 24	礎板残存	楕円形	45 × 33 cm	弧状	7	1.09	_	_
P34	7D20	ナシ	長方形	31 × 25 cm	半円状	16	1.06	_	_
P36	4D20、5D16	ナシ	長方形	69 × 47 cm	U 字状	61	0.75	_	_

井戸

	遺構名 調査区		グリッド	平面形	断面形	規模(m)			主軸方位	覆 土
,			クリット	十山形	附組形	長軸 (長径)	短軸 (短径)	深さ	土州万江	復工
	SE10	西	13A21 · 22、13B1 · 2	円形	漏斗状	1.26	1.23	1.52	_	6
	SE22	東	8E4	楕円形	箱状	1.25	0.86	0.61	_	4

土坑

遺構名	調査区	グリッド	平面形	断面形		規模(m)		主軸方位	覆土
退悟石	調重区	2991	十回形 断回形		長軸 (長径)	短軸 (短径)	深さ	土棚刀址	復 上
SK12	西	6A6 · 11	楕円形	弧状	0.68	0.48	0.23	N25° E	3
SK19	東	6C14 · 19	円形	箱状	0.52	0.47	0.19	N75° W	1
SK25	東	9C17 · 18	長方形	台形状	2.85	0.95	0.20	N30° E	1
SK32	西	7B16	円形	台形状	0.50	0.48	0.10	N81° E	1
SK33	東	7D20 · 25	円形	台形状	0.52	0.51	0.17	N63° E	2

溝

/丹									
遺構名	調査区	グリッド	形態	断面形		規 模 (m)		主軸方位	覆土
退阱石	神筆区	2991	形態	断曲形	検出長	帽	深さ	土棚刀1位	覆 土
SD13	西	12B	弧状	弧状	3.30	$0.34 \sim 0.68$	$0.09 \sim 0.20$	$N6 \sim 17^{\circ}$ E	$1 \sim 2$
SD16	西	12A	緩い蛇行	弧状	7.10	0.16 ~ 0.38	0.06 ~ 0.10	N86° E, N52 ~ 63° W	1
SD20	東	4C	直線的	弧状	8.92	$0.70 \sim 1.14$	$0.08 \sim 0.14$	N42° E	$1 \sim 5$
SD24	西	9A • B	直線的	弧状	18.34	$0.32 \sim 0.52$	$0.04 \sim 0.13$	N60° W	1~2
SD31	東	8C、9C · D	蛇行	弧状	10.12	0.20 ~ 0.65	0.10 ~ 0.13	N51° W, N54 ~ 57° E	1~2
SD35	東	7D	-	弧状	0.39	0.25	0.14	N65° W	3

性格不明遺構

遺構名	調査区	杏豆 グリッド		断面形		規 模 (m)		主軸方位	覆 土
退得石	阿宜丘	2991	平面形	西田カシ	長軸 (長径)	短軸 (短径)	深さ	土軸万位	復 上
SX5	西	13B1 · 2 · 6 · 7	長方形	W 字状	1.30	0.57	0.10	N53° W	2

松蔭東遺跡 遺物観察表

土器観察表

報告	出土位置	種 別	器 種	残存部位	残存	法	量(ci	n)	胎士	色	調	焼成	調	整	備考
No.	田工匠	1里 かり	ful 135.	72/17 HP IV.	率	口径	底径	器高	加工	外面	内面	NENX	外 面	内 面	THE TO
1	12C20 · 26	須恵器	無台杯	体~底部	_		9.3	(3.0)	粗・石英、長 石を多量含む	灰白	灰白	やや 不良	底部回転ヘラ切り	底部渦巻状 のロクロ目	
2	13A17、 13B7	須恵器	無台杯	体~底部	_		8.9	(1.7)	粗・石英、長 石を多量含む	灰白	灰白	やや 不良	底部回転ヘラ切り	底部渦巻状 のロクロ目	
3	12B20	須恵器	無台杯	底部	_		9.1	(1.5)	やや密・長石 を少量含む	灰	灰	良	底部回転ヘラ切り	底部渦巻状 のロクロ目	
4	13B21	須恵器	無台杯	体~底部	_	_	<7.4>	(2.3)	やや密・長石 を少量含む	灰	灰	良	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	

陶磁器観察表(1)

1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	後半 W四半期 3C 初 後半	内田 · 画化又
5 SC6 白磁 検 底部 - <7.40 (200) 灰白 緑白 磁器質 1:	後半 W四半期 3C 初 W四半期 3C 初 W四半期 3C 初 後半 後半	腰部以下無釉 内面:目痕有 削り高台 腰部以下無釉 内面:画花文
6 12A14 白麻 Ⅲ 底部	後半 W四半期 3C 初 W四半期 3C 初 W四半期 3C 初 後半 後半	腰部以下無釉 内面:目痕有 削り高台 腰部以下無釉 内面:画花文
7 表土 白 白 白 日 日 日 日 日 日 日	W四半期 3C 初 W四半期 3C 初 W四半期 3C 初 後半 後半	腰部以下無釉
8 6C18 青磁 楠 体部 - - - - - - 12C 第1 ~ ~ 15 9 7A20 青磁 楠 体部 - - - - - 12C 第1 ~ ~ 15 10 12C5 青磁 楠 旅部 - - - - - - 12C 第1 ~ ~ 15 11 6C10 青磁 楠 広部 -	W四半期 3C 初 W四半期 3C 初 W四半期 3C 初 後半 後半	内面:画花文
8 0.18 育飯 報 体部 一 一 一 展 オリーフ族 ~1:22 第 9 7A20 青磁 稿 体部 一 一 一 展録 122 第 ~1:22 第 ~1:22 第 ~1:23 区 株 ~1:22 第 ~1:24 長辰 ○13 区 株 ~1:25 株 ~1:26 未 ○13 区 株 ○14 日 株 ○14 日 株 ○15 区 株 ○14 日 株 ○15 区 株 <td< td=""><td>3C 初 IV四半期 3C 初 IV四半期 3C 初 後半</td><td>内田 · 画化又</td></td<>	3C 初 IV四半期 3C 初 IV四半期 3C 初 後半	内田 · 画化又
9	3C 初 IV 四半期 3C 初 後半 後半	内面:画#: 立
10 12C5 Free 76	3C 初 後半 後半	内面:画花文
12 9.14 青磁 椀 体部 一 一 灰白 緑灰 13C 13 6C6 青磁 椀 休部 一 一 灰 緑灰 144 14 10.121 青磁 椀 休部 一 一 灰 緑灰 144 15 4.25 青磁 椀 休部 一 一 灰 緑灰 15C 16 12C9 青磁 椀 休部 一 一 灰 緑灰 15C 17 6C2 青磁 椀 休部 一 一 灰 黄緑 15C 18 5B19 青磁 椀 休部 一 一 灰 黄緑 15C 19 10C9 青磁 椀 休部 一 一 灰 黄緑 15C 20 5B24 青磁 椀 休部 一 一 一 一 斤白 青緑 15C 21 7.15 青花 皿 底部 一 ←6.60 (0.95) 白 透明釉 堅 16C 22 11C9 青花 皿 底部 一 一 一 白 透明釉 堅 16C 23 12C4 青花 皿 底部 一 一 一 一 一 一 長那 長郎 上 24 12C18 中国天目 椀 休部 一 一 一 一 一 一 一 反	後半	被熱
13 6C6 青磁 椀 体部 一 一 灰 緑灰 144 10A21 青磁 椀 体部 一 一 灰白 緑灰 144 10A21 青磁 椀 体部 一 一 灰白 緑灰 144 155 4A25 青磁 椀 口縁部 一 一 灰 緑灰 15C 15C		外面:鎬蓮弁文
14	7.末	外面:鎬蓮弁文
15	J 115	内面:画花文
16 12C9 青磁 椀 休部 一 一 一 灰 緑灰 15C 17 6C2 青磁 椀 休部 一 一 一 灰 黄緑 15C 18 5B19 青磁 椀 休部 一 一 灰 黄緑 15C 19 10C9 青磁 椀 休部 一 一 灰 黄緑 15C 19 10C9 青磁 椀 休部 一 一 灰 一 灰白 青緑 15C 20 5B24 青磁 椀 休部 一 一 一 灰白 青緑 15C 21 7A15 青花 Ⅲ 底部 一 <6.60> (0.95) 白 透明釉 堅 16C 22 11C9 青花 Ⅲ 底部 一 一 一 白 透明釉 堅 16C 23 12C4 青花 Ⅲ 底部 一 ~ 一 白	C末	
17 6C2 青磁 椀 体部 一 一 灰 黄緑 15C 18 5B19 青磁 椀 体部 一 一 灰 黄緑 15C 19 10C9 青磁 椀 体部 一 一 灰 黄緑 15C 20 5B24 青磁 椀 体部 一 一 灰白 青緑 15C 21 7A15 青花 皿 底部 一 <6.60> (0.95) 白 透明釉 堅 16C 22 11C9 青花 皿 底部 一 一 白 透明釉 堅 16C 23 12C4 青花 皿 底部 一 <7.10> (2.10) 灰白 〈すんだ透明 食 16C 24 12C18 中国天目 椀 体部 一 一 白 灰 黒褐色釉の上に黒色釉 上 上 上 上 上 上 上 上 上 上 上 上 上 上 上 上 上 上	前半	口縁端反
18 5B19 青磁 椀 体部 一 一 灰 黄緑 15C 19 10C9 青磁 椀 体本 ← 水 ← ル ← 水 ← ル ← 水 ← ル	前半	
19 10C9 青磁 椀 体~底部 — <6.00> (3.30) 灰白 緑 15C 20 5B24 青磁 椀 体部 — — — 灰白 青緑 15C 21 7A15 青花 皿 底部 — <6.60> (0.95) 白 透明釉 堅 16C 22 11C9 青花 皿 底部 — — — 白 透明釉 堅 16C 23 12C4 青花 皿 底部 — <7.10> (2.10) 灰白 〈すんだ透明 良 16C 24 12C18 中国天目 椀 体部 — — 白灰 黒褐色釉の上に黒色釉 良 15C 25 11A16 陶器 壺 底部 — <20.80> (4.40) 褐灰 上 (黒色釉の上に黒色釉 良 15C 26 12C10 朝鮮 皿 体~底部 — 4.20 (1.95) 灰 透明釉 良 15C 27 11B6 瀬戸美濃焼 天日茶碗 底部 — <4.50> (1.50) 白 黒色釉の上に 東色釉の上に 東色細の上に 東色細の	前半	被熱か
20 5B24 青磁 椀 倅部 — — — — — — — — — — — — — — — — — —	前半	被熱か
21 7A15 青花 皿 底部 - <660> (0.95) 白 透明釉 堅 16C 22 11C9 青花 皿 底部 - <-10>(2.10) 灰白 〈すんだ透明 和 良 16C 23 12C4 青花 皿 底部 - <7.10>(2.10) 灰白 〈すんだ透明 和 良 16C 24 12C18 中国天目 椀 体部 - <-10	前半	外面:鎬蓮弁文 見込:スタンプ文
22 11C9 青花 皿 底部 白 透明釉 堅 16C 23 12C4 青花 皿 底部 - <7.10> (2.10) 灰白 〈すんだ透明 良 16C 24 12C18 中国天目 椀 体部 - - 白灰 黒褐色釉の上に黒色釉 堅 15C 25 11A16 陶器 壺 底部 - <20.80> (4.40) 褐灰	後半	外面: 鎬蓮弁文 内面: 線描の文様
23 12C4 青花 Ⅲ 底部 — <7.10> (2.10) 灰白 くすんだ透明 良 16C 24 12C18 中国天目 椀 体部 — 一 白灰 黒褐色釉の上 に黒色釉 堅 1:	後半	見込:植物の葉の文様 高台内鉋による削痕 高台砂目
23 12C4 育化	後半	見込:「寿」 高台内鉋による削痕 高台砂目
24 12C18 中国大日	後半	見込:植物の文様 漆付着
26 12C10 朝鮮 皿 体~底部 — 4.20 (1.95) 灰 透明釉 良 15C 27 11B6 瀬戸美濃焼 天目茶椀 底部 — <4.50> (1.50) 白 黒色釉の上に 茶色釉 良 15C 28 11C20 瀬戸美濃焼 小皿 口縁~底部 <11.6> — (2.20) 灰白 緑 堅 15C 29 12C18 陶器 並 頸~肩部 — — 灰 黒褐 良 11 30 5C9 洋洲性 瀬 体部 — — 外面: 灰赤 白	5C	中国産 漆継 釉二重掛け
27 11B6 瀬戸美濃焼 天日茶椀 底部 - <4.50> (1.50) 白 黒色釉の上に 茂色釉 良 15C 28 11C20 瀬戸美濃焼 小皿 口縁~底部 <11.6> - (2.20) 灰白 緑 堅 15C 29 12C18 陶器 壺 頸~肩部 -	5C	
27 1186 瀬戸美巌焼 大日系幌 底部 - <4.50> (1.50) 日 茶色釉 艮 15C 28 11C20 瀬戸美巌焼 小皿 口縁~底部 <11.6> - (2.20) 灰白 緑 堅 15C 29 12C18 陶器 壺 頭~肩部 -	後半	見込胎土目3
29 12C18 陶器 童 頭~肩部 — — 灰 黒褐 良 1:	前半	釉厚い 古瀬戸後期様式 高台鉄錆つけ 削り高台
20 50	中頃	古瀬戸後期様式 緑釉小皿
	5C	産地不明
		外面叩き目幅広 外面は赤みを帯びる 断面に磨痕有→砥石に転用
6B11、 31 7B20、 珠洲焼 甕 体部 — — — — — — — — — — — — — — — — — —		珠洲 V 期か 外面:叩き 表・断面に磨痕有→砥石に 転用
32 6C9·14 珠洲焼 甕 体部 — — 灰 良		外面:叩き
33 9D22 珠洲焼 甕 体部 — — 外面: 暗灰 内面: 灰		外面:叩き
34 9C20 珠洲焼 甕 体部 — — 灰 良		珠洲 V 期か 外面:叩き
35 9C7 珠洲焼 甕 体部 — — 灰 良		珠洲V期か 外面:叩き
36 9C2 珠洲焼 甕 体部 — — 灰 良		外面:叩き
37 (6B13、7 B6·7 珠洲焼 片口鉢 口縁~体部 <40.8> - (8.30) 灰白 堅 13C		珠洲Ⅱ期
38 5B19、	前半	珠洲Ⅱ期
39 13C7 珠洲焼 片口鉢 体部 — — 灰 良 13C	前半	珠洲Ⅲ期

陶磁器観察表(2)

אאן נשיין	11日 世元 示 200	(2)										
報告	出土位置	種 別	器種	残存部位	_	去 量 (cm		胎土・	色調・釉調	焼成	推定年代	備考
No.	DI JUNE	135 30	1111 1255	/- A 11 HP III.	口径	底 径	器高	断面色調	Sira intira	794794	31E/C 1 14	PIN 5
40	4B22	珠洲焼	片口鉢	口縁部	<34.5>	_	(3.40)	灰		良	15C 前半	珠洲 V 期 口縁部内端:櫛目波状文帯
41	表土	珠洲焼	片口鉢	口縁部	<28.2>		(2.70)	灰		良	15C 前半	珠洲V期 口縁部内端:櫛目波状文帯
42	10B21	珠洲燒	片口鉢	体部	_	_	_	黄灰		不良		卸目単位 (2.9 cm以上) 10 本 以上
43	13B14	珠洲焼	片口鉢	体部	_	_	_	灰		良		内面磨耗
44	9B9	越前焼	魙	体部	_	_	_	内:灰 外:にぶい橙		良		
45	11C1	土師質 土器	Ш	底部	_	_	_	浅黄		普通	中世	ロクロ成形 回転糸切
46	9B21	土師質 土器	Ш	口縁~底部	_	<9.75>	1.05	黒褐		不良	中世	外面煤付着
47	5B20、 6C19	磁器	Ш	体~底部	_	<6.20>	(1.75)	灰	やや青みがかっ た透明釉	良	17C 前半~中頃	高台砂目 見込:文様 肥前
48	6C19	磁器	Ш	体~底部	_	<6.00>	(2.10)	灰白	くすんだ透明釉	良	17C 前半~中頃	高台砂目 見込:文様 肥前
49	6B2	陶器	Ш	口縁~底部	<11.8>	<4.45>	3.50	灰白	外面:褐色 内面:(釉) オリーブ灰色	良	17C 前半	ロクロ成形 高台 削り高台 砂目痕1か所 灰釉 唐津

木製品観察表

. 1 . 2	HH E/0//											
報告	器種	Ł	出土位置			法 量 (cm)		遺存状況	木取り	樹種	放射性炭素 年代測定	備考
No.	D	グリッド	遺構	層位	長さ	幅	厚 み	退什伙优	不取り	1四 1里	$(yrBP \pm 1 \sigma)$	加 专
	柱根	13B13	SB11P7	-	ı	-	-				835 ± 22	腐食により観察不可能、 未実測
50	礎板	8D23	P21	-	25.95	18.75	3.05	ほぼ完形	板目		823 ± 21	
51	礎板	7E	表採	-	24.10	8.05	2.10		板目		821 ± 22	

銭貨観察表

報告	No. 種別	99. ££	出土	位置		法	量		初鋳年	王朝名	備考
No.		調査区	グリッド	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)	初新牛	工初石	7	
52	銭貨	天禧通寶	西区南側	5C	2.39	2.37	0.12	2.78	1017	北宋	楷書
53	銭貨	嘉祐通寶	西区東側	9A	2.41	2.43	0.12	2.83	1056	北宋	楷書
54	銭貨	元祐通寳	西区東側	9A	2.45	2.43	0.12	3.61	1086	北宋	篆書
55	銭貨	元符通寳	西区南側	5C	2.34	2.36	0.13	2.33	1098	北宋	篆書

中曽根遺跡 遺構観察表掘立柱建物

遺構 No.	方位	7. (桁行)	棹	造	床面積	桁	行	梁間	1
SB106	N	5° W	3 間× 2	間、側柱式	25.466 m²	東 703 cm、	西 684 cm	北 354 cm、南	₹ 361 cm
構成ピット	位 置	柱	平面形	平面規模	断面形	深 さ (cm)	底面標高 (m)	ピット間	1隔
P1	17F5	残存	円形	28 × 26 cm	U 字状	40	2.92	P1-P2	180 cm
P2	17F5	ナシ	円形	22 × 21 cm	漏斗状	49	2.86	P2-P3	176 cm
Р3	17F10	残存	円形	21 × 20 cm	U 字状	41	2.93	P3-P4	196 cm
P4	17F9 · 14	残存	円形	36 × 31 cm	階段状	76	2.61	P4-P5	246 cm
P5	17F13	ナシ	楕円形	22 × 16 cm	U 字状	18	3.21	P5-P6	262 cm
P6	17F12	ナシ	楕円形	25 × 34 cm	U 字状	40	2.95	P6-P7	183 cm
P7	17F7	ナシ	円形	37 × 32 cm	U 字状	39	3.00	P7-P8	176 cm
P8	17F1 · 2	残存	円形	29 × 25 cm	U 字状	51	2.87	P8-P9	514 cm
P9	17F4	残存	_	_	_	_	2.30	P9-P1	172 cm

遺構 No.	方位	7. (桁行)	棹		床面積	桁	行	梁間	3
SB366	N5° E		2 間×1	間、側柱式	11.698 m²	東 427 cm、西 443 cm		北 261 cm、南 246	
構成ピット	位 置	柱	平面形	平面規模	断面形	深 さ (cm)	底面標高 (m)	ピット間	隔
P1	22G1	ナシ	円形	18 × 18 cm	箱状	16	3.25	P1-P367	246 cm
P367	22F21	ナシ	円形	14 × 12 cm	U 字状	12	3.24	P367-P7	212 cm
P7	22F17	ナシ	楕円形	17 × 13 cm	U 字状	20	3.18	P7-P4	235 ст
P4	22F18	ナシ	円形	15 × 13 cm	U 字状	20	3.19	P4-P3	261 cm
Р3	22F23	ナシ	楕円形	19 × 14 cm	U 字状	22	3.19	P3-P8	218 cm
P8	22G2	ナシ	楕円形	16 × 13 cm	U字状	12	3.28	P8-P1	209 cm

遺構 No.	方位	7. (桁行)	棹	 造	床面積	桁	行	梁間	1
SB366	N	85° W	2間×2間、総柱式		21.508 m²	北 479 cm、南 504 cm		東 427 cm、西 429 cm	
構成ピット	位 置	柱	平面形	平面規模	断面形	深 さ (cm)	底面標高 (m)	ピット間	隔
P1	22G1	ナシ	円形	18 × 18 cm	箱状	16	3.25	P1-P367	246 cm
P367	22F21	ナシ	円形	14 × 12 cm	U 字状	12	3.25	P367-P6	258 ст
P6	21F15	ナシ	円形	18 × 17 cm	U 字状	17	3.16	P6-P5	429 cm
P5	22F12 · 13	ナシ	円形	15 × 14 cm	U 字状	14	3.28	P5-P4	218 cm
P4	22F18	ナシ	円形	15 × 13 cm	U 字状	20	3.19	P4-P3	261 cm
P3	22F23	ナシ	楕円形	19 × 14 cm	U 字状	22	3.19	P3-P8	218 cm
P8	22G2	ナシ	楕円形	16 × 13 cm	U 字状	12	3.28	P8-P1	209 cm
P7	22F17	ナシ	楕円形	17 × 13 cm	U 字状	20	3.18	_	_

柱穴列

構成ピット	位 置	柱	平面形	平面規模	断面形	深 さ (cm)	底面標高 (m)	ピット間	隔
SA5P1	14E17	残存	円形	30 × 28 cm	U 字状	44	2.94	P1-P2	240 ст
SA5P2	14E22 · 14F2	残存	円形	38 × 28 cm	U 字状	40	3.01	P2-P3	232 ст
SA5P3	14F7 · 8	残存	楕円形	42 × 33 cm	漏斗状	47	2.93	P3-P4	195 ст
SA5P4	14F13	残存	長方形	38 × 30 cm	U 字状	56	2.81	P4-P5	170 cm
SA5P5	14F13 · 18	残存	円形	31 × 28 cm	漏斗状	48	2.84	P5-P6	214 cm
SA5P6	14F18 · 23	残存	方形	30 × 26 cm	漏斗状	53	2.87	_	_

構成ピット	位 置	柱	平面形	平面規模	断面形	深 さ (cm)	底面標高 (m)	ピット間	隔
SA397P1	15F12	残存	方形	26 × 23 cm	漏斗状	54	2.72	P1-P2	213 ст
SA397P2	15F17	残存	円形	34 × 30 cm	漏斗状	51	2.74	_	_

ピット

遺構名	位 置	柱	平面形	平面規模	断面形	深 さ (cm)	底面標高 (m)	ピット間	隔
P329	16G3	ナシ	円形	18 × 18 cm	U 字状	21	3.190	_	_
P340	12F24	ナシ	楕円形	26 × 18 cm	弧状	8	3.240	_	_
P345	13F6	残存	楕円形	20 × 11 cm	U 字状	26	3.090	_	
P354	21F6	ナシ	長方形	22 × 17 cm	袋状	19	3.210	_	_
P376	15G1	残存	円形	54 × 50 cm	袋状	31	3.000	_	_
P389	14F14	残存	円形	15 × 14 cm	U 字状	23	3.050	_	_
P395	12F10	残存	円形	13 × 11 cm	U字状	23	3.000	_	
P396	18F21	残存	_	_	_	_	2.515	_	_

井戸

遺構名	調査区	グリッド	平面形	断面形		規 模 (m)		主軸方位	覆 土
退得石	調重区	クリット	十回ル	関田ル	長軸 (長径)	短軸 (短径)	深さ	土相刀业	復 上
SE277	北	15F19	円形	漏斗状	1.14	1.13	0.82	_	10
SE323	北	23G2	円形	漏斗状	1.13	1.11	0.74	_	10

土坑

<u> </u>									
遺構名	調査区	グリッド	平面形	断面形		規 模 (m)		主軸方位	覆土
退得石	胸主区	2991	十山ル	関田が	長軸 (長径)	短軸 (短径)	深さ	土棚万位	78 上
SK281	北	17F19 · 20	長方形	箱状	0.79	0.60	0.18	N47° W	4
SK282	北	18F16	楕円形	台形状	0.81	0.62	0.21	N29° W	3
SK331	北	16F23	楕円形	台形状	0.62	0.45	0.13	N24° W	3
SK338	北	17F12	円形	V 字状	0.54	_	0.40	_	1
SK339	北	17F17	楕円形	半円状	0.55	0.38	0.26	N67° W	1
SK382	北	19F15	円形	U字状	0.58	_	0.38	_	6

浦									
遺構名	調査区グリッド		形態	断面形		規 模 (m)		主軸方位	覆土
退得石	阿正区	2991	ルタと思	関田が	検出長	幅	深さ	土棚刀区	72 上
SD2	南	6F · G、7F	弧状	弧状	11.6	$0.60 \sim 2.26$	$0.07 \sim 0.14$	$N41 \sim 63^{\circ} W$	$1 \sim 2$
SD3	南	7 F • G	直線的	弧状	11.3	$0.60 \sim 1.64$	$0.07 \sim 0.12$	N58° W	2
SD334	北	17F	直線的	台形状	7.92	$0.35 \sim 0.64$	$0.09 \sim 0.12$	$N81 \sim 94^{\circ} W$	$1 \sim 2$
SD375	ik.	17F	弧状	弧状	9.14	$0.22 \sim 0.36$	$0.04 \sim 0.09$	N36 ~ 64° W	1

性格不明遺構

1-14 1 73/-									
遺構名	調査区	グリッド	平面形	断面形		規 模 (m)		主軸方位	覆土
起冊石	阿且匹	2971	一曲ル		長軸 (長径)	短軸 (短径)	深さ	土軸力区	1及 上
SX29	北	20F5、21F1 · 2 · 6 · 7	不定形	弧状	4.76	2.84	0.17	N10° E	3
SX272	北	15F18 · 19 · 23 · 24	不定形	弧状	2.08	1.79	0.05	N36° W	1
SX278	北	15F17 · 22	不定形	弧状	1.4 以上	1.35 以上	0.10	_	1
SX394	北	19F4	楕円形	弧状	0.37	0.24	0.06	N50° E	1

自然流路

遺構名	調査区	グリッド	形態	断面形		規 模 (m)		主軸方位	覆土
退帶石	胸主区	2991	ルル	附田川	長軸 (長径)	短軸 (短径)	深さ	土棚刀址	78 上
SR1	北	19F • G	直線的	弧状	11.30	1.80 ~ 2.90	0.13 ~ 0.16	_	2
SR2	北	23 · 24F · G	直線的	漏斗状	10.44	6.34 ~ 8.56	1.23	_	18

177	\$	l	1	残存率	沃	(cm)	-	鱼		l	湖 朧		l
出土位置	単	脚	ر	(x/36)	口 径	底 径	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	外面	内面	免疫	外面	内面	二 二 二 一 二 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
遺構外	弥生土器	影	頸・胴部	ı		I	- やや密・長石、小砂利を含む	黄灰	灰黄	山	縄文 LR (横位)	不明	
SB106P6	工師器	椀	出縁口	1	Ι	Ι	- やや密・長石微量含む	にぶい黄橙	浅黄	頁	ヨコナデ	ヨコナデ	審
P329	上節器	黎	体~底部	ı	I	<6.20>	(2.15) 密・長石、海綿骨針微量含む	犂	浅黄橙	不良	底部回転糸切り	不明	
P340	上節器	潔	口縁~底部	27	10.50	<5.60>	2.90 密・長石、雲母微量含む	にぶい樹	にぶい種	不良	底部不明		
P354	須恵器	崩 or 衡	肩~体部	ı		Ι	- 密・長石少量含む	緑灰	灰白	型	H L L L L L L L L L L L L L L L L L L L	アナロロ	外面自然釉
SE277	須恵器	影	体部	ı		I	- やや粗・長石少量含む	暗青灰	及	山	格子状叩き	同心円当て具痕	
SE277	黒色土器	潔	口縁~体部	4	<11.80>	Ι	(3.05) やや密・長石微量、雲母少量含む	にぶい黄橙	斷	中	ニガキ	ミガキ	
SE277	上声器	潔	口縁~底部	12	<11.70>	<6.10>	3.20 密・石英、雲母微量、石英少量含む	犂	浅黄橙	不良	不明、底部不明	不明	底部穿孔有
SE277	上節器	潔	口縁~底部	21	11.20	<5.80>	3.25 密・石英、長石中量、雲母微量含む	犂	浅黄橙	不良		不明	底部穿孔有
SE277	上節器	潔	口縁~体部	8	<10.90>		(3.10) 密・石英、長石、雲母を少量含む	にぶい黄橙	にぶい褐	頁	ヨコナデ	ヨコナデ	
SE277	上節器	缩	口縁~体部	4	<11.40>	<00.9>	2.60 やや密・石英、長石少量合む	浅黄橙	浅黄橙	山	ヨコナデ、底部回転糸切り	ヨコナデ	
SE277	上節器	潔	体~底部	ı	I	<6.40>	(2.20) 密・石英、長石少量、雲母微量含む	灰白	明褐灰	やや不良	ヨコナデ、底部回転糸切り	ヨコナデ	
SE323	上電器	麹	口縁~体部	21	11.60	09:9	3.20 相・石英、長石中量、雲母微量、小砂利少量含む	灰白	浅黄橙	卓	ヨコナデ、底部回転糸切り	₹ 十 □ □	
SK281	黒色土器	缩	口縁~体部	ı		I	― 密・雲母ごく微量含む	灰白	H	卓	口縁部ミガキ、下半ヨコナデ	ドガキ	
SK281	黒色土器	繊	体部	ı			- やや密・石英、長石少量含む	にぶい黄橙	斷	用和	ケズリ	ココナル	
SK339	上声器	缩	体~底部	ı		<5.20>	(1.40) 密・長石微量含む	浅黄橙	にぶい黄橙	不良	大明	不明	二次焼成
SK382	須恵器	無合杯	口縁~体部	22	<11.60>	I	(1.70) やや粗・長石微量含む	明オリーブ灰	展	型	ヨコナデ	ココナル	重ね焼き痕
SD3	上節器	椀	口縁~体部	3	<11.20>	Ι	(2.80) やや密・石英、長石微量合む	浅黄橙	灰白	不良	不明	不明	
SD334	計量	露	口縁~底部	1	<13.30>	6.20	4.65 密・石英、長石含む	灰白	浅黄橙	型	ョコナデ、ケズリ、 底部回転糸切り	↓ 十 □ □	細
SD334	上町器	潔	口縁~底部	11	<13.60>	5.40	5.00 密・海綿骨針微量	浅黄橙	灰白	不良	ヨコナデ、底部回転糸切り	ココナジ	内外面剥落
SD334	上節器	椀	口縁~体部	2	<14.90>	Τ	(4.70) やや粗・長石ごく微量含む	浅黄橙	浅黄橙	不良	ヨコナデ	ヨコナデ	
SD334	上節器	影	口縁部	ı	I	Ι	一 密・石英、長石少量合む	浅黄橙	灰黄	不良	ヨコナデ	ヨコナデ	二次焼成
SX272	須恵器	無台杯	口縁~体部	2	<10.80>	Τ	(2.10) やや密・長石少量含む	灰	灰	更是	ヨコナデ	ヨコナデ	重ね焼き痕
SX272	須恵器	凝	口縁~頸部	3	<23.80>	I	(5.50) 密・長石少量含む	青灰	灰	百	ヨコナデ	ヨコナデ	
SX272	須恵器	罴	体部		Τ	Τ	一 密・石英、長石少量含む	晴青灰	灰	山	平行叩き→カキ目	同心円当て具痕	
SX272	黒色土器	宛	底部	I		<6.10>	(1.05) 密・長石微量含む	浅黄橙	毗	やや不良	不明		
SX272	上声器	宛	体~底部	ı	Ι	<7.00>	(3.15) 密・石英中量、海綿骨針を微量含む	灰黄	にぶい黄橙	山	ョコナデ、底部回転糸切り	ヨコナデ	
SX272	上師器	椀	底部	I	I	6.20	(1.10) 密・石英、長石微量、小砂利少量含む	類	塑	やや不良	底部回転糸切り	ョコナデ	
SX272	中野器	椀	底部	ı	Ι	2.60	(2.00) 密・石英、長石、小砂利、赤褐色粒多量(2.00) 量含む	浅黄橙	にぶい橙	やや不良	不明	不明	
SX278	須恵器	影	体部	I	I	Ι	一 密・石英微量、長石少量合む	青黒	灰	山	平行叩き→カキ目	同心円当て具痕	
SX278	須恵器	林	体部	1		Ι	一 普通・長石少量、雲母微量含む	灰黄	灰	やや不良	ヨコナデ	ヨコナデ	漆物質付着
SX278	黒色土器	黎	口縁~体部	2	<12.80>	I	(1.80) 密・石英、長石微量含む	置	빼	山	ミガキ	ミガキ	
SX278	黒色土器	椀	底部	I	I	<5.40>	(0.90) やや密・石英、長石、雲母少量合む	灰白	暗灰	育みみ	不明		
SX278	上前器	潔	口縁~体部	2	<15.40>		(3.80) 密・雲母、海綿骨針微量含む	灰白	浅黄橙	山	ヨコナデ	ヨコナズ	
SX278	上管器	潔	口縁~底部	12	<12.90>	<5.00>	4.30 密・長石、海綿骨針微量含む	灰白	灰白	用和	ヨコナデ、底部回転糸切り	HILT	
SX278	上前器	黎	口縁~体部	c	<19.70>		(9-90) 後・万म小中少む	特角	草井、(大 *)	-1	11	i	- H # 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1
					/TE:10/	_	ロート コート 一川 (のでき)	(%)	11分かば回回	Ľ	トトフロ	ヨコナナ	旬のお敷した 御中]

_	#	116	推存如件	残存率	批	量 (cm)	_		卸	鰮			撥	
H	[加	戏任即见	(9E/x)	四	底 径	超	H H	外面	内面	説及	外面	内面	属
38 SX278	上節器	椀	体~底部		Ι	5.50	(1.85)	密・海綿骨針微量含む	にぶい黄橙	灰白	阜	ョコナデ、底部回転糸切り	ヨコナデ	工具痕有
39 SX278	上節器	椀	体~底部	I	Ι	<4.90>	(1.20)	密・海綿骨針を少量含む	浅黄橙	にぶい黄橙	户	ヨコナデ、底部回転糸切り	ヨコナデ	
40 SX278	上師器	椀	体~底部		Ι	<6.30>	(2.00)	密・石英、長石ごく微量、雲母少量	浅黄橙	灰白	良	ヨコナデ	ヨコナデ	
41 SX278	工師器	器	底部		Ι	<00.9>	(2.00)	密・石英、長石多量、雲母微量含む	にぶい橙	浅黄橙	不良	不明、底部不明	不明	
42 SR1	須恵器	無台杯	口縁~底部	4	<11.80>	<7.00>	2.45	やや密・長石少量含む	逐	展	型	ヨコナデ、底面回転ヘラ切り	ココナチ	重ね焼き痕
43 SR1	須恵器	無台杯	体~底部			<7.10>	(1.40)	密・長石少量含む	送	展	户	ヨコナデ、底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	
44 SR1	須恵器	湘	本部	1	1	1		密・石英ごく微量、長石少量含む	厥	明オリーブ灰	判細	ヨコナデ	ヨコナデ	
45 SR1	須恵器	樹 or 衡	体部	I			Î	密・長石少量含む	暗灰	展	型	ヨコナデ	ヨコナデ	外面自然釉
46 SR1	須恵器	樹 or 黃	体~底部	ı		<11.60>	(2.80)	やや粗・石英中量、長石微量含む	逐	展	型	ケズリ→ヨコナデ	ヨコナデ、指頭痕	
47 SR1	黒色土器	強	口縁~体部	2	<15.00>		(4.30)	密・長石微量含む	明褐灰	噩	不良	不明	ミガキ	48 と同一個体の可能性有
48 SR1	黒色土器	- 椀	体~底部			<6.20>	(2.20)	密・雲母微量含む	橙	黑	やや不良	不明	ミガキ	47 と同一個体の可能性有
SR1	上師器	嶽	体~底部	I	Ι	06'9	(1.75)	密・石英、長石多量、小砂利少量、雲 母、海綿骨針微量含む	浅黄橙	灰黄褐	やや不良	ョコナデ、底部回転糸切り	ヨコナデ	
SR1	上節器	罴	口縁~体部	4	<30.40>	Ι	(3.90)	密・雲母微量、赤褐色粒少量含む	浅黄橙	灰白	不良	不明	不明	
51 SR1	上町器	ෂ	口縁~体部	3	<30.90>		(6.95)	密・長石、小砂利少量、雲母微量含む	浅黄	犂	型	ココナデ	ヨコナデ	
SR2	須恵器	有台杯	口縁~底部	14	<14.60>	09.6	4.10	やや密・長石少量含む	青灰	灰	貞	ョコナデ、底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	高台盤状圧痕
SR2	須恵器	無合杯	口緣~底部	6	<12.20>	<9.40>	3.90	やや密・長石少量含む	灰	展	良	ョコナデ、底部回転ヘラ切り→ ナデ	# T T E	昨年度 162 に類似 重ね焼き痕
SR2	須恵器	無台杯	口緣~底部	27	11.70	7.40	3.10	密・長石少量含む	青灰	オリーブ灰	剰細	ヨコナデ、底部回転ヘラ切り	ヨコナギ	重ね焼き痕
SR2	須恵器	無心体	口緣~底部	27	12.10	7.20	3.10	やや密・長石微量含む	展	ヌ	型	ヨコナデ、底部回転ヘラ切り	田山子大	墨書「石」 黒斑多数 重ね焼き痕
SR2	上節器	潔	口縁~底部	25	12.60	5.80	3.80	密・長石、雲母を微量含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	单	ヨコナデ、底面回転糸切り	ヨコナデ	
SR2	上節器	黎	体~底部	ı		4.60	(1.55)	密・長石微量、雲母中量含む	にぶい黄橙	浅黄橙	車	ョコナデ、底部回転糸切り	ヨコナデ	
58 SR2	工師器	缩	体一底部	I		5.50	(2.10)	密・雲母ごく微量含む	浅黄橙	にぶい黄褐	頁	ヨコナデ、底部回転糸切り	ヨコナデ	外面スス付着 磨耗すすむ
59 SR2	上節器	椀	体~底部	I	Ι	5.60	(1.35)	密・雲母微量含む	にぶい黄橙	にぶい黄褐	やや不良	ョコナデ、底部回転糸切り	ヨコナデ	内面一部剥落
60 SR2	上町器	有台椀	体~底部	I		<7.20>	(2.40)	密・石英、長石少量含む	褐灰	灰黄褐	やや良	ココナデ	ヨコナデ	
SR2	上節器	Ш	体~底部			<10.40>	(1.55)	密・長石ごく微量含む	にぶい黄橙	浅黄橙	不良	不明、底部ヘラ調整	ヨコナデ	内面赤彩
SR2	出盤	影	底部	ı		<7.00>	(2.20)	やや密・石英、長石、雲母少量含む	にぶい黄橙	灰黄褐	型	ヨコナデ	ハケ目	東北系 底外面砂痕、木葉痕
SR2	上野銀	崇	体~底部	ı	ı	<10.0>	(08.9)	やや粗・石英、長石、中量含む	にぶい荷	にぶい黄橋	型	ハケ目、指頭痕	不明	東北系 底外面砂痕
SR2	上師器	素	底部	ı	I	<5.80>	(1.80)	やや密・石英、長石中量含む	褐灰	灰黄褐	型	ョコナデ、底部回転糸切り	ョコナデ 底部「の」の字状のロクロ痕	二次焼成 外面炭化物付着
SR2	上節器	緩	口縁~体部	1	<28.80>	I	(08.6)	やや粗・石英、長石、小砂利中量、雲 母微量含む	極	にぶい黄橙	やや不良	平行叩き目	同心円当て具痕	
SR2	上野部	不明	成部					やや粗・長石、雲母微量、小砂利中量 含む	にぶい橙	浅黄橙	やや不良	*+	î\ \	二次焼成
15F	須恵器	兼	口縁~頸部	1	<1.06>	Ι	(3.70)	やや粗・長石微量含む	灰	青灰	やや不良	ヨコナデ	ヨコナデ	
15G	須恵器	小瓶	体~底部	ı	I	<00.9>	(8.85)	やや粗・石英、長石中量含む	青灰	展	型	ヨコナデ、体部下半ケズリ 底部回転ヘラ切り	ヨコナデ	肩部自然釉
18F	須恵器	楽	類部	ı	I	I	Ī	密・長石少量含む	青灰	展	草	ヨコナデ、沈線 (2条)、波状文	ヨコナデ	内面発泡したガラス状物質 固着
23F	出	有台桅	底部	ı	I	<7.80>	(1.55)	やや粗・長石多量、石英少量、小砂利 少量含む	にぶい黄橙	灰黄	卓	ヨコナボ	不明	

土製品観察表

報告 No.	器種	出土	位置		法 量		A 湖	備老
TKH NO.	谷 性	グリッド	遺構	長さ (cm)	幅 (cm)	重量 (g)	色 調	7/H 45
71	羽口	15F	SX272	3.05	2.50	5.20	にぶい橙 (7.5YR7/4)	外面被熱、スラグ付着

石製品観察表

報告 No.	器種	出土	位置		法 量		T ++	備考
報音 No.	谷 性	グリッド゛	遺構	長さ (cm)	幅 (cm)	重量 (g)	41 11	7用 考
72	不明	15F	SX272	5.10	2.43	29.90	凝灰岩	上面に擦痕
73	砥石	15F	SX278	11.75	5.95	399.80	流紋岩	右側面に磨痕

木製品観察表

11.74		_										
報告 No.	器種	グリッド	出土位置 遺 構	層位	長 さ	· 量(cr	厚 み	遺存状況	木取り	樹 種	放射性炭素 年代測定 (yrBP ± 1 σ)	備考
	柱根	17F5	SB106P1	-	-	-	-					腐食により観察不可能、 未実測
	柱根	17F10	SB106P3	-	-	-	-		丸材	クワ属		腐食により観察不可能、 未実測
74	柱根	17F9 · 14	SB106P4	-	64.0	9.60	-	上端部欠	丸材		1224 ± 22	端部3面加工
75	柱根	17F1 · 2	SB106P8	-	48.5	13.30	-	上端部欠	丸材		1255 ± 21	端部2面加工
76	柱根	17F4	SB106P9	-	85.8	13.50	-	上端部欠、側面一部欠	丸材	サクラ属		端部2面加工
77	柱根	14F7 · 8	SA5P3	-	38.2	10.60	-	上端部欠、側面一部欠	丸材	サクラ属		端部2面加工
78	柱根	14F13	SA5P4	-	61.7	15.90	14.6	上端部欠	割材	クリ		端部3面加工
79	柱根	14F13 · 18	SA5P5	-	41.5	15.30	15.1	上端部欠、下端一部欠、 側面一部欠	割材	クリ		端部1面加工
80	柱根	14F18 · 23	SA5P6	-	53.2	13.70	15.0	上端部欠、側面一部欠	割材	クリ		端部1面加工
81	柱根	15F12	SA397P1	-	57.0	8.40	-	上端部欠	丸材	サクラ属		端部2面加工
82	柱根	15F17	SA397P2	-	50.5	13.80	-	上端部欠、芯部分欠	丸材		1233 ± 22	端部3面加工
	柱根	13F6	P345	-	-	-	-			コナラ属		腐食により観察不可能、 未実測
	柱根	15G1	P376	-	-	-	_			クリ		腐食により観察不可能、 未実測
	柱根	14F14	P389	-	-	-	-			サクラ属		腐食により観察不可能、 未実測
	柱根	12F10	P395	-	-	_	-		丸材	サクラ属		腐食により観察不可能、 未実測
	柱根	18F21	P396	-	_		-		丸材	不明広葉樹		腐食により観察不可能、 未実測
83	斎串	15F19	SE277	6層	17.5	2.65	0.6	下部欠	板目	スギ		表面に3条の傷痕

陶磁器観察表

1 - 2	111 E/07(2/											
報告 No.	出土位置	種 別	器 種	残存部位	口径	法量(cm 底径	器 高	胎土・ 断面色調	色調・釉調	焼成	推定年代	備考
84	16F	青磁	椀	体部	_	_	_	灰白	緑	良	15C	
85	南区	青花	Ш	底部	_	<11.80>	<1.25>	白	透明釉	良	16C 後半	高台:砂目 高台内放射状鉋痕 見込:植物の文様 外面:腰部に界線および蓮弁文
86	10G	珠洲焼	片口鉢	体部	_	_	_	灰白		良		卸目単位 4 条(幅 9 mm)
87	表土	磁器	Ш	底部	_	3.20	(1.25)	灰白	灰白	良	17C 前半	高台:削り高台、砂目痕有 高台内兜巾 見込:砂目痕3か所
88	15F	青磁	Ш	底部	_	<11.90>	(2.80)	灰	オリーブ灰	良	17C 中頃~後半	高台内釉剥ぎ 露体部:鉄錆 肥前系
89	表土	陶器	Ш	口縁~底部	<12.30>	<3.80>	2.80	灰 外面:灰黄褐 内面:オリーブ灰	灰釉	良	17C 前半	高台:削り高台 見込:胎土目痕2か所 唐津
90	表土	陶器	Ш	体~底部	_	<4.60>	(1.40)	褐灰 外面:にぶい褐 内面:灰オリーブ	灰釉	良	17C 前半	高台:削り高台 高台内兜巾 見込:砂目痕4か所 唐津

大館跡 遺構観察表

縄文・弥生時代遺構観察表

遺構名	グリッド	平面形	断面形		規 模 (m)		主軸方位	覆土
退冊石	2991	十四ル	图图形	長軸 (長径)	短軸 (短径)	深さ	土軸万世	復 丄
SK1001	17A	楕円形	袋状	1.58	_	1.86	-	7
SX1002	15A	楕円形	台形状	_	-	-	-	_
SK1003	16B • 17B	円形	台形状	1.22	1.08	0.22	-	2
SK1036	16A	楕円形	台形状	0.64	0.46	0.22	N11° E	1
P1004	17B	円形	台形状	0.54	0.50	0.14	-	2
P1005	16A	楕円形	V 円状	0.29	0.23	0.30	N49° E	1
P1006	16B	円形	U 字状	0.26	0.24	0.18	-	2
P1007	16B	楕円形	U 字状	0.23	0.19	0.14	-	1
P1008	16B	円形	台形状	0.22	0.21	0.08	-	1
P1009	16B	円形	箱状	0.24	0.21	0.20	-	1
P1010	16B	円形	U 字状	0.26	0.20	0.14	-	1
P1011	16B	円形	弧状	0.22	0.22	0.09	-	1
P1012	16B	円形	箱状	0.25	0.24	0.16	-	1
P1013	16B	円形	箱状	0.20	0.18	0.12	-	1
P1014	16B	方形	台形状	0.22	0.18	0.14	-	1
P1015	16B	楕円形	V円状	0.38	0.32	0.14	N23° W	1
P1016	16B	楕円形	半円状	0.29	0.24	0.18	N60° W	1
P1017	16B	楕円形	台形状	0.22	0.16	0.13	N87° E	1
P1018	16B	円形	弧状	0.25	0.23	0.09	-	1
P1019	17B	楕円形	U 字状	0.24	0.18	0.24	N12° E	1
P1020	16B	方形	台形状	0.18	0.15	0.07	-	1
P1021	16A	円形	U 字状	0.21	0.20	0.26	-	1
P1022	16B	方形	U 字状	0.18	0.15	0.22	-	1
P1023	16A	方形	台形状	0.22	0.19	0.07	-	1
P1024	16A	円形	台形状	0.21	0.18	0.10	-	1
P1025	16B	楕円形	U 字状	0.18	0.14	0.18	-	1
P1026	16B	楕円形	台形状	0.32	0.22	0.07	N14° E	1
P1027	16A	円形	弧状	0.28	0.25	0.10	-	2
P1028	16A	楕円形	台形状	0.40	0.32	0.09	N25° E	1
P1029	16B	円形	V 円状	0.17	0.13	0.12	-	1
P1030	16A	円形	半円状	0.29	0.27	0.10	-	1
P1031	16A	-	箱状	0.22	-	0.11	-	1
P1032	16A	楕円形	箱状	0.45	0.30	0.06	N58° W	1
P1033	16A	楕円形	弧状	0.30	0.24	0.10	N47° W	1
P1034	16A	楕円形	U 字状	0.24	0.14	0.18	N83° W	1
P1035	16B	楕円形	箱状	0.20	0.15	0.12	-	1
P1037	16A	円形	弧状	0.23	0.21	0.06	-	1
P1038	15A	楕円形	V円状	0.28	0.18	0.14	N27° E	1
P1039	17B	楕円形	U字状	0.18	0.12	_	N62° W	-

大館跡 遺物観察表 中世陶磁器観察表

I PHU HAA	I I PHI PAATH EULYK YA											
4R 4F. N.E.	盡分士巾	111	999 1161	2. 1. 2. 2. 2. 2. 2. 2. 2. 2. 2. 2. 2. 2. 2.		法 量 (cm)		14.4.2.1.2.1.4.1.4.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1	四十零 一回 27	祖	11	74: SEP
#K□ INO.	田工工匠			が名け一郎区	口径	底 径	報					
1	15B 表土	新春	離	口縁~体部	<56.6>	I	(3.8)	灭	オリープ灰			内面:1単位7条 (18 mm) の沈線有
2	空堀1下層	瀬戸美濃焼	榈	海岸				褐灰	鉄釉	Ą	14C後半~15C末	3と同一個体 古瀬戸後期様式
3	2区表土	瀬戸美濃焼	榈	本 部		I	ı	暗灰黄	鉄釉	型	14C後半~15C末	2と同一個体 古瀬戸後期様式
4	16B 表土	瀬戸美濃焼	筒形容器	体部		ļ		暗灰黄	鉄釉	Ą	14C後半~15C末	古瀬戸後期様式IV期
2	15B 表土	珠宝紫	壺R種	本 部		I	ı	灭		型		内外面:タール状物質付着
9	15B	珠宝烧	影	口縁~肩部	<43.3>	ļ	(11.2)	外面:黄灰 内面:灰		Ą	珠洲V期	
7	15A 表土	珠宝烧	影	口縁~肩部	<44.2>	I	(8.0)	丞		型	珠洲V期	
8	16C 搅乱	珠洲焼	影	体部	I	I	ļ	丞		Ą		外面:平行叩き
6	空堀1下層	珠光焼	影	体部	I	I	ı	無いない		不良		外面:平行叩き
10	16A 表土	珠洲焼	影	体部		ļ	ļ	黄灰		Ą		外面:平行叩き 内面:指頭痕
11	16B 表土	珠洲焼	影	体部		I	I	黄灰		卓		外面:平行叩き 内面:指頭痕
12	工業 ESI	珠洲焼	影	体部		I	1	外面:灰 内面:暗灰		百	珠洲V期?	外面:平行叩き 内面:指頭痕 断面に漆付着。
13	2区表土	珠洲焼	影	体部		I	1	灰		卓		外面:平行叩き
14	王拏 V91	珠洲焼	片口鉢	体部	1	-	I	灰オリープ		百	珠洲IV期前半 (14C)	内面:卸目単位11条(30m以上)、炭化物付着 外面:平行叩き
15	工排区 7	越前焼	影	口縁部	<38.5>	-	(6.2)	灰黄	暗灰	户	16C 前半	口唇・口縁部内面:濃緑自然釉
91	掘 1	信楽焼	影	体部	1	I	1	送	整	山	15C	外面: 指頭痕

1	X
死田死	ル 二 世
띩	148
1	
世化	X

	樂		大木6以	18 と同一個体か?							大木 10 式	26 と同一個体
	泰	内面	なし	なし	な	かん	なし	な	なし	な	かん	なって
	鱧	外面	縄文 RL (横位)	縄文 RL (横位)、爪形文	櫛掻き(縦位)、爪形文	縄文RL (横位)	組文LR(縦位)	縄文 RL (斜位)	羽状縄文(横位)結束なし	隆帯(横、斜位)、沈線	沈線(幅広)、縄文RL(横位)	沈線(幅広)、縄文 RL(横位)
	祖	70C/X	可	型	型	型	型	型	可	やや不良	やや不良	やや不良
	鯛	内面	褐灰	褐灰	灰黄褐	灰黄褐	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐灰	にぶい黄橙	にぶい黄橙	にぶい黄橙
	色	外 面	にぶい黄褐	灰黄褐	にぶい黄橙	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐灰	にぶい褐	にぶい褐	にぶい黄橙	にぶい黄橙
	4		やや粗・3 mm以下の石英、長石を少量 含む。	やや粗・1 m以下の石英、長石、雲母を少量含む。	やや粗・3 m以下の石英、長石、雲母を少量含む。	やや粗・1 m以下の長石、雲母を少量含む。	やや粗・1 m以下の長石、雲母を少量含む。	やや粗・3 m以下の石英、長石を少量含む。	やや密・1 m以下の石英、長石、雲母を少量含む。	祖・長石、雲母、小砂利を少量含む。	やや密・1 mm以下の石英、長石、雲母を微量含む。	やや密・1 m以下の石英、長石、雲母な 8号令**
		報	(9.40)	ı	ı	ı	ı	ı	-	ı	ı	ı
	(m) 喜 :	底 径	10.80	ı	ı	ı	ı	ı	I	ı	ı	ı
	法	口 倭	1	ı	ı	1	ı	ı	ı	1	1	1
	旅行如此	ንጂተታ በኮ በዶ	胴~底部	口緣~類部	類部	洞部	胴部	胴部	胴部	類部	一	口縁部
	35		紫	紫	然	為账	米米	然	深鉢	然	為账	深幹
観祭表	110		縄文土器	組文上器	組文上器	組文上器	縄文土器	組文上器	組文土器	組文上器	組文上器	縄文土器
縄又時代土器観祭表	由分十日	HTKE	SX1002	16A	SX1002	16B	17B	17B	16B	16A	16B	16B
種区	報告	No.	18	19	20	21	22	23	24	22	36	27

半		ود	た,34と同一個体		4.2	وہ	4.2	た、29 と同一個体	ود			小松式(終末期)	5番、小松式		其	短	في	43	**	40	252	中期後半~後期前半	5~後期	樂	樂			2前後			
		天王山武	天王山武、	小松叶	天王山式	天王山式	天王山式	天王山式、	天王山式	小松式	小松叶	小松式	炭化物付着、	小松式	字津ノ台式	字準ノ合式	北陸系統	北陸系統	北陸系統	北陸系統	北陸系統	中期後半	中期後半~後期	炭化物付着	炭化物付着			天王山式前後			
	内 面	计十二日	ロ唇部:キザミ、 口縁部:沈線 (横位)、ヨコナデ	羽状縄文	14	<u>ሉ</u> ተ	14	沈線 (横位)、ナデ	ナナ	ハケ (横位)	斜行短線文(2段、反転)、ナデ	刺突文 (2段)	斜行短線文 (2段)	ハケ (横位)	ナナ	γ. 1	*	ハケ (横位)	ハケ(横位)、沈線	ハケ (斜位)、ナデ (横位)	14	<u>፟</u>	ナデ、指頭痕	<u>*</u> +	î. ↑	14	ナナ	*+	ナナ	ナナ	
調整	外面	口唇部:沈線(斜位)、 胴部:沈線(斜位もしくは横位)	口唇部:キザミ、口縁部:ハケ(横位)、 類部:ハケ(縦位)	ハケ (縦位)	大大	重菱形文	沈線(横位)、縄文LR(横位)	口唇部:キザミ、ハケ (横位)	沈線 (斜位)	口唇部:縄文LR (横位)、ハケ (縦位)	ハケ (縦位)	口縁部:ヨコナデ、 類部:ハケ (縦位)	口唇部:沈線(横位)、ナデ	ハケ (縦位)、ナデ	沈線(横位・斜位)、 縄文LR(斜位)、刺突文	沈線(横位)	ハケ (斜位)	ハケ (縦位)	ハケ (縦、横位)	ハケ (縦位)	ハケ (縦位)	短弧線(上向)、ナデ	縄文RL (縦、斜位)	組文 RL (統位)	組文RL(統位)	指頭痕	平行沈線(横位)	ナナ	₹ 十	縄文 RL (横位)、ハケ (横位)	
台生	ADDING.	興	臣	理	理和	型	卓	良	山	最通	風	不良	不良	良	風	類細	興場	普通	卓	最通	山	景	無	更和	やや不良	用	甲杂	埋御	東東	山	
調	内面	浅黄橙	貆	にぶい黄橙	灰黄褐	褐灰	にぶい黄橙	にぶい黄褐	褐灰	にぶい黄橙	灰黄褐色	明褐	にぶい黄橙	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐灰	垒	明褐	褐灰	置	灰黄褐	にぶい黄橙	灰黄褐	灰黄褐	にぶい黄橙	黄灰	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰黄褐	褐灰	
伊	外面	浅黄	にぶい黄橙	にぶい黄褐色	灰黄褐	灰黄褐	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰黄褐	にぶい黄褐	明赤褐色	暗褐	黄橙	にぶい黄橙	浅黄橙	灰黄褐	塑	網	にぶい黄橙	にぶい橙	にぶい黄褐	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰黄褐	にぶい黄橙	範	にぶい黄橙	にぶい黄橙	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
₹ +		やや密・石英、長石を少量含む。	やや密・石英、長石を中量含む。	やや粗・石英、長石を少量含む。	やや密・石英、長石、雲母を中量含む。	やや粗・雲母を中量、石英、長石を少量含む。	密・石英、長石、雲母を少量含む。	やや密・石英、長石を微量含む。	密・石英、長石を少量含む。	密・石英、長石、雲母を少量含む。	やや密・石英、長石を微量含む。	やや粗・長石を少量含む。	やや密・石英、長石を中量含む。	やや粗・石英、長石を少量含む。	答・長石を中量合む。	やや粗・石英、長石を中量、雲母を微量含む。	やや密・石英、長石、雲母、小砂利を 中量含む。	やや密・石英、長石を少量含む。	密・雲母を中量、長石を少量含む。	やや粗・石英、長石を微量含む。	やや粗・石英、長石を中量含む。	やや粗・石英、長石、雲母を少量含む。	やや粗・長石を少量、雲母、小砂利を 微量含む。	やや密・長石を少量、雲母を微量含む。	やや粗・長石、雲母を微量含む。	密・石英、長石を少量、雲母を微量含む。	やや密・石英を微量、長石を少量含む。	やや粗・石英、長石を少量含む。	やや密・石英、長石、雲母を少量含む。	やや密・石英、長石を少量含む。	
	器	I	ı	1	1	ı	1	ı	1	Ι	I	(3.15)	1	1	I	ı	ı	1	1	1	1	(4.35)	ı	ı	1	(2.30)	1	(2.45)	ı	1	
量 (cm)	底 径	ı	ı	1	1	ı	1	ı	ı	1	ı	1	1	ı	ı	ı	1	-	ı	ı	ı	ı	ı	1	1	<6.40>	1	<4.80>	1	1	
铁	口 径	ı	ı	1	1	ı	1	ı	ı	1	ı	<18.20>	1	1	ı	ı	1	-	ı	1	1	撮部分 4.20	ı	1	1	1	1	ı	ı	1	
雅存如桥	74.TF IIP III.	口縁~胴部	口緣~胴部	日縁部	日縁部	胴部	日縁部	口縁部	胴部	口縁部	胴部	□ 総 記	日縁部	頸部	1月 1	編制	日縁部	胴部	頸~胴船	胴部 (下部)	胴部	一 一 一 一 一	胴部5	胴部	胴部	底部	類部	底部	胴部	胴部	
招		影	影	崇	崇	影	* 3	影	崇	器	影	潮	崇	影	影	兴 Or 問	**	影	影	影	影	湘	影	影	崇	影	()	小高杯	不明	影	-
## DI		弥生土器	弥生土器	弥生土器	弥生土器	弥生土器	弥生土器	弥生土器	弥生土器	弥生土器	弥生土器	弥生土器	弥生土器	弥生土器	弥生土器	弥生土器	弥生土器	弥生土器	弥生土器	弥生土器	弥生土器	弥生土器	弥生土器	弥生土器	弥生土器	弥生土器	弥生土器	弥生土器	弥生土器	弥生土器	
田十七田		16A	16B	16A	17B	16B	16B	16B	16B	17B	16B	16 · 17B	16B	15B	16B	16B	16B	16B	17A	16A	17B	SX2	16B	17A	17B	16B	17A	17A	16A	17B	
_	No.	88	63	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	84	49	20	51	25	23	54	22	99	

縄文・弥生時代石器観察表

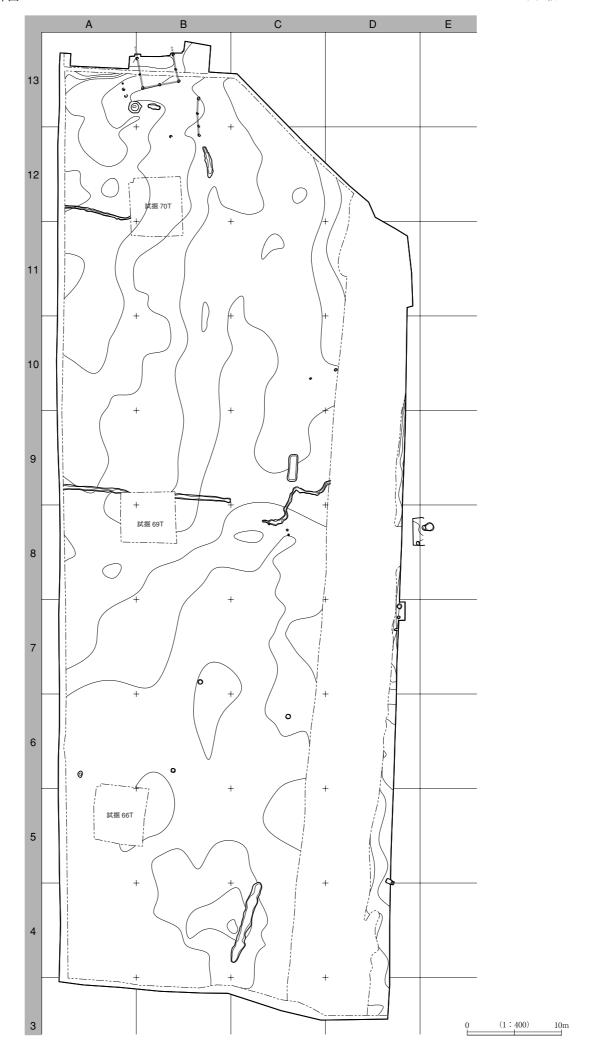
報告 No.	出土位置	出土層位	器 種	石 材	長 さ (mm)	幅 (mm)	量 厚さ(皿)	重 量 (g)	欠 損
58	16A	Ⅱ層	石鏃	頁岩	18.7	8.9	3.1	0.29	完形
59	17A	Ⅱ層	石鏃	頁岩	20.1	18.6	3.5	0.37	完形
60	17B	Ⅱ層	石鏃	頁岩	22.9	6.8	3.5	0.45	完形
61	16B	Ⅱ層	石鏃	頁岩	(20.6)	(11.6)	3.8	0.56	基部
62	17B	Ⅱ層	石鏃	頁岩	29.5	16.0	7.6	1.25	完形
63	17B	Ⅱ層	石鏃	頁岩	(25.5)	15.6	4.8	1.01	基部
64	16B	Ⅱ層	石鏃	鉄石英 (赤玉)	(23.6)	25.6	6.7	2.06	先端・基部
65	17B	Ⅱ層	石鏃	頁岩	37.4	11.6	4.3	1.17	完形
66	17B	Ⅱ層	石鏃	頁岩	(30.9)	17.0	4.7	1.28	先端
67	17B	Ⅱ層	石鏃	頁岩	23.8	15.9	5.4	1.21	完形
68	15B	Ⅱ層	石鏃	頁岩	21.5	16.6	3.3	1.00	完形
69	17B	Ⅱ層	石鏃	頁岩	(18.5)	13.4	4.4	0.70	先端
70	16A	Ⅱ層	石鏃	頁岩	31.4	18.5	3.8	1.63	完形
71	16B	Ⅱ層	石鏃	頁岩	(20.0)	(10.7)	4.9	0.64	基部
72	17B	Ⅱ層	石鏃	頁岩	(18.0)	(8.8)	(3.8)	0.30	基部
73	15B	Ⅱ層	石錐	頁岩	26.8	(14.3)	3.7	0.79	基部
74	16B	Ⅱ層	石錐	頁岩	30.2	14.2	5.6	1.65	完形
75	16B	Ⅱ層	石錐	頁岩	33.6	9.0	6.0	1.58	完形
76	16B	Ⅱ層	石錐	頁岩	32.4	8.0	5.6	1.11	完形
77	17B	Ⅱ層	石槍	頁岩	(20.5)	(30.6)	9.0	4.70	先端・基部
78	16A	Ⅱ層	石槍	頁岩	(92.5)	22.0	13.7	21.01	基部
79	16B	Ⅱ層	石匙	頁岩	(44.8)	(38.3)	19.0	18.24	刃部
80	16B	Ⅱ層	箆状石器	鉄石英 (黄玉)	(75.2)	52.6	23.7	99.00	基部
81	17A	Ⅱ層	箆状石器	頁岩	147.1	49.0	23.5	160.00	完形
82	SX2	Ⅱ層	不定形石器	頁岩	58.9	30.3	9.7	43.45	完形
83	16A	II層	不定形石器	頁岩	83.0	30.2	11.0	16.70	完形
84	16B	II層	不定形石器	頁岩	78.2	51.0	21.8	41.09	完形
85	17A	II層	不定形石器	頁岩	64.4	36.5	7.2	13.24	完形
86	15A	II層	不定形石器	頁岩	56.5	42.3	10.6	21.08	完形
87	16A	Ⅱ層	不定形石器	頁岩	50.1	46.7	13.4	21.12	完形
88	16B	Ⅱ層	不定形石器	頁岩	89.1	81.7	20.4	88.54	完形
89	16A	II層	不定形石器	頁岩	(70.6)	(27.4)	(26.5)	21.92	左半
90	16A	Ⅱ層	不定形石器	頁岩	74.1	87.0	21.4	72.14	完形
91	15A	II層	不定形石器	頁岩	(45.0)	23.4	10.3	9.75	上半
92	15A	II層	不定形石器	頁岩	28.0	25.0	7.3	4.19	完形
93	16D	II層	不定形石器	頁岩	29.8	27.9	9.1	5.50	完形
94	16A	II層	不定形石器	頁岩	18.0	25.5	4.3	1.83	完形
95	17B	Ⅱ層	不定形石器	頁岩	(10.5)	(28.1)	5.5	1.31	上半
96	17A	II 層	不定形石器	頁岩	(18.5)	(14.9)	8.6	3.53	上半
97	16A	Ⅱ層	不定形石器	頁岩	(17.4)	(11.8)	(7.7)	0.89	上半
98	一括	表土	石核	頁岩	35.3	83.6	18.8	43.00	原石
99	16B	II 層	石核	頁岩	25.5	43.8	25.5	58.62	_
100	16B	II 層	石核	頁岩	17.4	50.2	50.8	41.59	_
101	16B	Ⅱ層	石核	頁岩	37.2	52.2	47.4	76.37	-
102	16B	Ⅱ層	石核	鉄石英 (赤玉)	35.6	45.5	14.3	21.59	-
103	16B	Ⅱ層	石核	頁岩	42.0	94.6	54.0	170.10	-
104	17A	Ⅱ層	石核	頁岩	21.5	56.4	30.8	29.56	-
105	16B	Ⅱ層	石核	鉄石英 (赤玉)	20.5	34.0	32.5	19.75	-
106	16B	Ⅱ層	石核	黒曜石	34.6	18.0	23.2	11.14	-
107	16A	Ⅱ層	石核	頁岩	54.6	64.8	23.4	60.64	-
108	16A	Ⅱ層	石核	頁岩	55.6	59.3	15.5	38.26	-
109	16B	Ⅱ層	磨製石斧	輝緑岩	(48.3)	47.4	29.6	75.81	基部
110	16B	Ⅱ層	磨製石斧	輝緑岩	87.0	51.2	28.6	209.00	完形
111	SX2	Ⅱ層	石錘	粗粒凝灰岩	103.2	76.2	18.8	213.00	完形
112	17B	Ⅱ層	石錘	頁岩	88.6	69.8	14.7	130.20	完形
113	16A	Ⅱ層	石錘	粗粒凝灰岩	(62.4)	(84.8)	22.8	103.30	*
114	16B	Ⅱ層	石錘	粗粒凝灰岩	(65.5)	(74.0)	23.6	96.80	*
115	16A	Ⅱ層	砥石	粗粒凝灰岩	79.6	(110.5)	22.0	192.50	左部分
116	16B	Ⅱ層	台石	アプライト	118.9	162.2	46.1	1393.00	完形
117	16A	Ⅱ層	磨石類	粗粒凝灰岩	(92.9)	63.2	48.1	458.00	上半
118	16B	Ⅱ層	磨石類	閃緑岩	136.9	49.2	59.8	426.00	完形
119	16A	Ⅱ層	磨石類	閃緑岩	109.2	89.2	41.8	526.00	完形
120	16B	Ⅱ層	磨石類	粗粒凝灰岩	144.1	72.3	37.9	422.00	完形
121	17A	Ⅱ層	磨石類	石英斑岩	(79.9)	65.1	30.0	239.00	上半
	P1004	Ⅱ層	磨石類	粗粒凝灰岩	(74.2)	58.9	30.9	131.50	上半

銭貨観察表

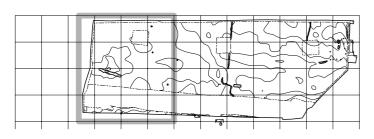
報告 No.	種 別	器 種	出土位置		法 量				初鋳年	王朝名	備考
				グリッド	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)	1/13対十-	工初石)HI 45
17	銭貨	熈寧元寶	2 🗵	16A	2.44	2.43	0.13	2.79	1068	北宋	楷書

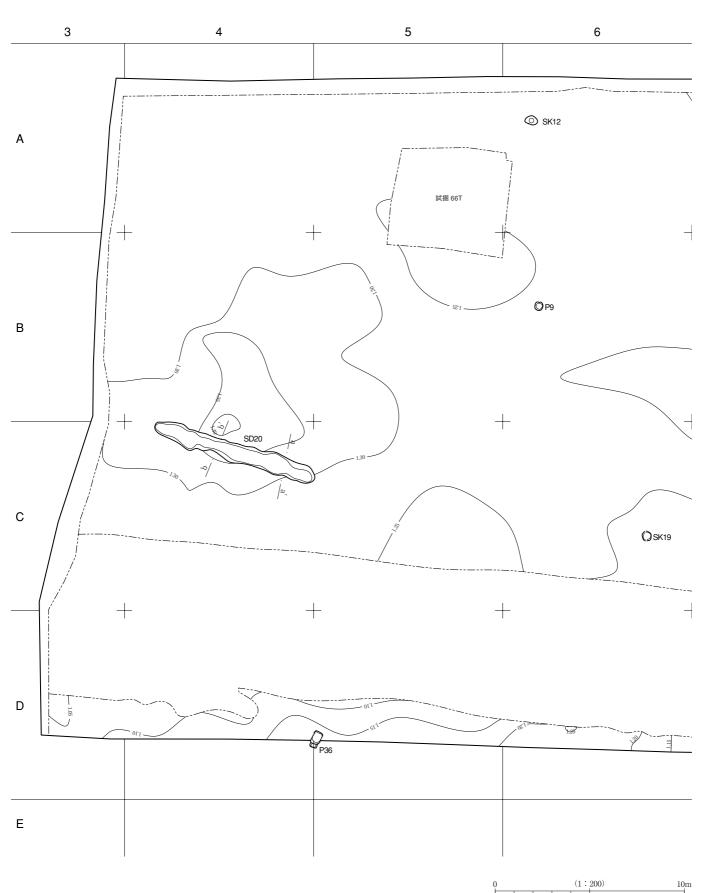
図 版

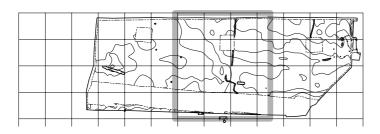






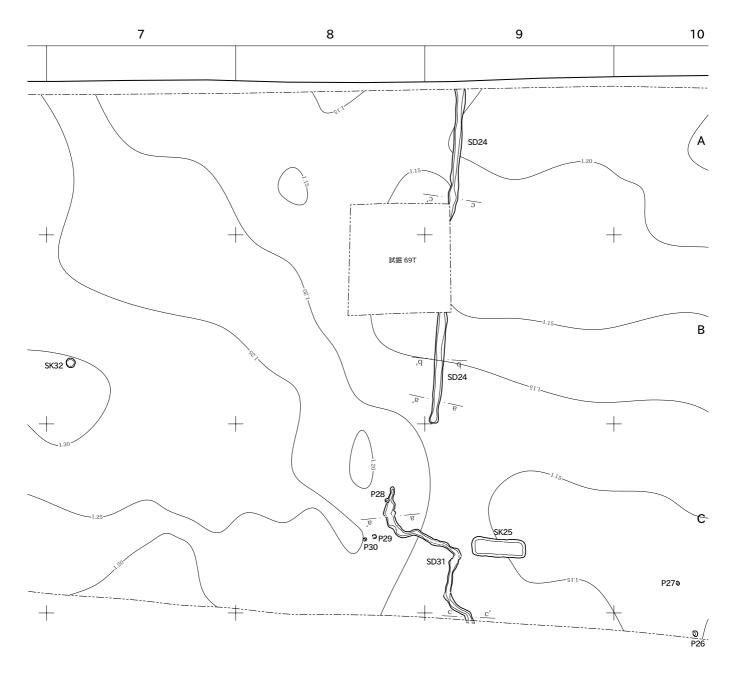


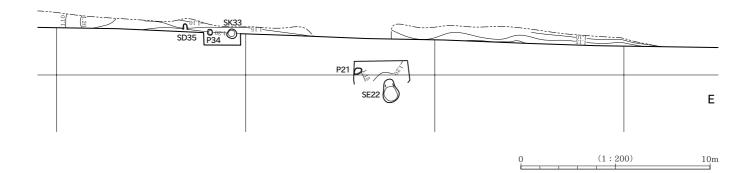




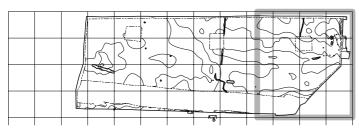


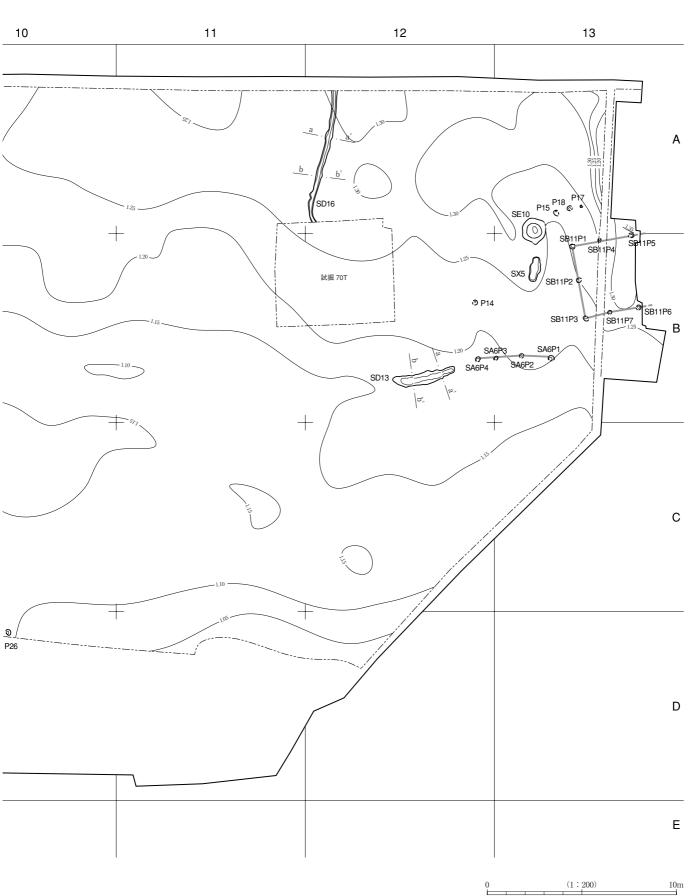
D

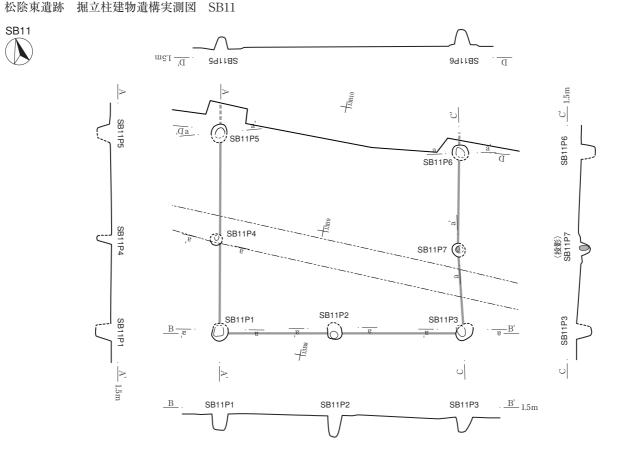


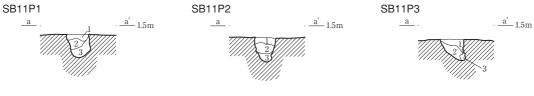














- 3. オリーブ黒色土(5Y3/1) しまり普通、粘性やや強い。炭化物($1\sim5\,\mathrm{mm}$)を微量、灰色シルトブロック($5\sim20\,\mathrm{mm}$)を含む。鉄分沈着。 2. オリーブ黒色土(7.5Y3/1) しまり普通、粘性強い。炭化物($1\sim5\,\mathrm{mm}$)、灰色シルトブロック($2\sim5\,\mathrm{mm}$)を微量含む。鉄分沈着。 3. オリーブ黒色土(5Y3/1) しまり普通、粘性強い。炭化物($1\sim5\,\mathrm{mm}$)を微量、灰色シルトブロック($10\sim20\,\mathrm{mm}$)を含む。鉄分沈着。

SB11P2

- 1. オリーブ黒色土 (5Y3/1) 2. オリーブ黒色土 (5Y3/2) 3. 灰色土 (5Y4/1) しまりやや強く、粘性強い。炭化物($1\sim15 mm$)を微量、灰色シルトプロック($5\sim20 mm$)を含む。鉄分沈着。しまり普通、粘性強い。炭化物($5\sim10 mm$)、灰色シルトプロック($5\sim10 mm$)、黒色砂質シルトプロック($5\sim30 mm$)を微量含む。鉄分沈着。しまりやや強く、粘性強い。炭化物($1\sim10 mm$)を微量、オリーブ黒色シルトプロック(100 mm)を含む。鉄分沈着。

- 3. オリーブ黒色土 (5Y3/1) しまりやや強く、粘性強い。 炭化物 (1~5 mm)を微量、灰オリーブ色砂質シルトブロック (5~20mm)、黒色砂質シルトブロック (10mm)を微量含む。 と、オリーブ黒色土 (5Y3/1) しまり普通、粘性強い。黒色シルトブロック (1~10mm)、灰オリーブ色砂質シルトブロック (10~30mm)を微量含む。 より・アロック (1~10mm) を微量含む。 しまり普通、粘性強い。オリーブ黒色シルトブロック (2~15mm)を微量含む。

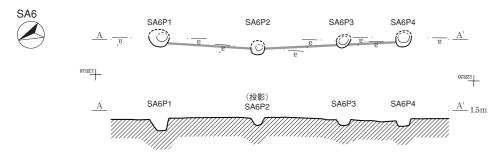
- 30-11 オリーブ黒色土(5Y3/1) しまり普通、粘性強い。炭化物(1 mm)を微量、黒色シルトブロック(10 mm)を微量、灰色砂質シルトブロック(5 mm)を含む。 2. オリーブ黒色土(5Y3/1) しまり普通、粘性強い。黒色シルトブロック(3 ~ 7 mm)を微量、灰色砂質シルトブロック(2 ~ 20 mm)を少量含む。

SB11P5 1. 黒褐色土 (2.5Y3/2) 2. 黒褐色土 (2.5Y3/2) しまり普通、粘性強い。灰オリーブ色砂質シルトブロック($5\sim10$ mm)を少量含む。しまり普通、粘性強い。灰オリーブ色砂質シルトブロック($7\sim40$ mm)を多量含む。

\$B11P6
1. 黄灰色土 (2.5Y4/1) しまり普通、粘性強い。暗灰黄色砂質シルトブロック (10~50mm) を多量含む。
2. 暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2) しまり普通、粘性強い。黒色シルトブロック (10~20mm) を少量含む。

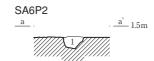
- 黒褐色土 (2.5Y3/1)
 こ 暗灰黄色砂質土 (2.5Y5/2)
 しまり普通、粘性強い。
 黒褐色シルトブロック (10~30mm) を含む。

平面図/エレベーション図 0 断面図 ____ 3m



SA6P1 <u>a</u> <u>a'</u> 1.5m

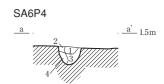
- 1. オリーブ黒色土 (5Y2/2) しまりやや強く、粘性強い。炭化物 (2 ~10mm)、灰オリーブ色シルトブロック (20mm)、黒色シルトブロック (15mm)
- (20mm) 表色シルトノロック (15mm) を微量含む。
 2. オリーブ黒色土 (5Y3/1) しまり普通、粘性強い。炭化物 (2 ~ 10mm) 、黒色シルトブロック (20mm) を微量含む。
 3. 灰色土 (75Y4/1)
- んしまり普通、粘性強い。黒色シルトブロック(2~15mm)、暗黄灰色シルトブロック(5~30mm)を含む。



1. オリーブ黒色土 (5Y3/1) しまりやや強く、粘性強い。炭化 物 (1 mm) 、黒色シルトブロッ ク (5~10mm) を微量、灰オリー ブ色シルトブロック (3~10mm) な合わ。 を含む。

SA6P3 <u>a'</u> 1.5m _a_

- オリーブ黒色土 (5Y3/1) しまりやや強く、粘性強い。炭 化物 (2~20mm) 、灰オリー ブ色シルトブロック (5 mm) 、 黒褐色シルトブロック (10mm)
- を微量含む。 オリーブ黒色土 (5Y3/1) しまり普通、粘性強い。オリー ブ黒色シルトブロック (10mm) を微量含む。



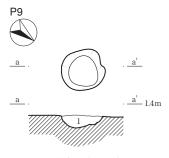
 黒褐色土 (2.5Y3/1) しまりやや強く、粘性強い。灰色シルトプロック (2~20mm)、黒色シルトプロック (5~15mm)、炭化物 (3 mm) を微量含む。

(3 mm) を微量含む。

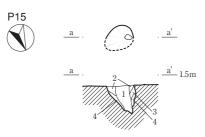
2. 黒褐色土 (2.5Y3/1) しまりやや強く、粘性強い。黒色シルトブロック (2~10mm)、灰色シルトブロック (1~5 mm)、炭化物 (1 mm) を微量含む。

3. オリーブ黒色土 (5Y3/1) しまり普通、粘性強い。炭化物 (5 mm)、灰オリーブ色シルトブロック (3~10mm)を微量含む。

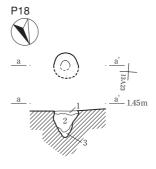
4. 暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2) しまり普通、粘性やや強い。黒色シルトブロック (2~10mm)を微量含す。



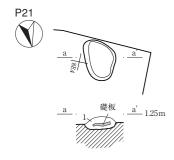
1. オリーブ黒色土 (7.5Y3/1) しまり普通、粘性強い。炭化物(5~ 10mm)、オリーブ灰色シルトブロッ ク(5~20mm)を微量含む。



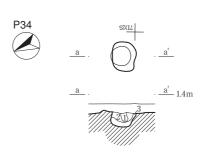
- ·ブ黒色土 (5Y3/1) しまり普通、粘性強い。炭化物 (1~8mm) を微量、 灰色シルトブロック (1~2mm) を少量含む。鉄
- 次色シルトプロック(1 Zhim) こン並出しる こ 分沈着。 オリーブ黒色土 (5Y3/1) しまり普通、粘性強い。黒色シルトブロック(3 ~10mm)、灰色シルトブロック(1~10mm)を
- を含む。鉄分沈着。 4. 灰オリーブ色土 (5Y5/2) しまり普通、粘性強い。炭化物(1~3mm) 微量を、 灰色シルトブロック(30mm)を含む。鉄分沈着。



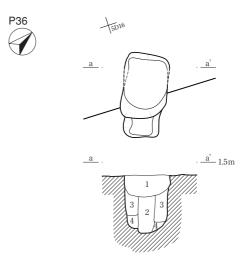
- 1. オリーブ黒色土 (5Y3/2) しまりやや強く、粘性強い。 炭化物 (1~5mm) 、灰オ リーブ色砂質シルト 円点
- リーブ色砂質シルトブロック(20~60mm)、黒色シルトブロック(10mm)を 機量含む。鉄分沈着。 オリーブ黒色土(5Y3/1)しまり普通、大田強い。黒ーロック(10mm)、灰オリーブ色シルトブロック(2~70mm)、ケラロック(2~70mm)を含む。鉄分光治 しまり普通、粘性強い。黒ーロック、10mm)を動き通、粘性強い。黒ーロック・(5分のm)を登む。鉄分光
- 10mm) を微量含む。鉄分 沈着。



1. 黒褐色土 (25Y3/1) しまり普通、粘性強い。炭化物 (1~ 5mm) 、灰色砂質シルトブロック (1 ~10mm) を微量含む。鉄分沈着。

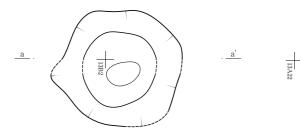


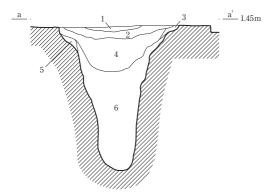
- 1. 灰オリーブ色砂質土 (5Y5/3)
- 20mm) を3-0。 黒褐色土 (25Y3/2) しまり普通、粘性強い。炭化物(0.5~1 mm)を 微量、オリーブ黒色シルトブロック(2~20mm) を含む。



- 灰褐色土 (7.5YR4/2) しまり普通、粘性やや強い。黄灰色シルトブロック(10mm)を少量 含む。 2. 黒褐色土 (2.5Y3/1)
- しまり普通、粘性やや強い。 オリーブ黒色土 (5Y3/1)
- しまり普通、粘性やや強い。灰色砂質シルトブロック (5 mm) を微
- 量含む。 黒色土 (2.5Y2/1) しまり普通、粘性普通。





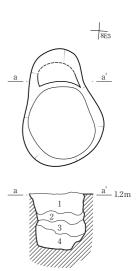


- 1. 黒褐色砂質土 (2.5Y3/2) しまり強く、粘性やや弱い。炭化物(0.5~20mm)、黄灰色シルトブロック(10~150mm) を多量、灰黄色砂質シルトブロック(1~20mm)を少量含む。
- しまり普通、粘性強い。炭化物(0.5~5 mm)、黄灰色砂質シルトブロック($1\sim\!10$ mm) を含む。 4. 黒褐色砂質土 (2.5Y3/2)
- 4. 素物已炒負上 12:513/2/2 しまり強く、粘性やや弱い。炭化物 (0.5~10mm) を微量含む。
 5. 黒褐色砂質土 (2.5Y3/2) しまり普通、粘性強い。炭化物 (0.5~2 mm) を少量、暗灰黄色砂質シルトブロック (3~20mm) を含む。
 6. 黒褐色砂質土 (2.5Y3/1) しまりやや弱く、粘性強い。炭化物 (1~3 mm) 、暗灰黄色砂質シルトブロック (1~20mm) を燃料会社、
- 20mm) を微量含む。

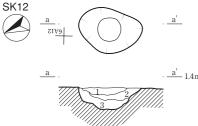
_a'

<u>a'</u> 1.35m

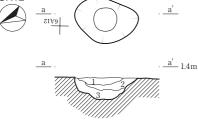




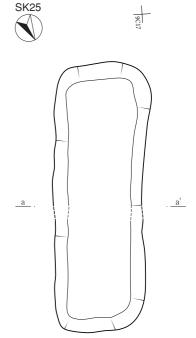
- 1. 黄灰色土 (2.5Y4/1) しまりやや強く、粘性やや強い。炭化物(1~10mm)、暗灰黄色砂質シルトブロック(2~15mm)を含む。鉄分沈着。
- 黄灰色土 (2574/1) しまり普通、粘性強い。炭化物 (2~10mm) を少量、暗灰黄色砂質 シルトプロック (20mm) 、黒色シルトプロック (20~40mm) を含む。

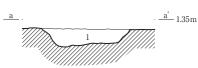


- 灰色土 (5Y4/1) しまり普通、粘性強い。灰オリーブ色砂質シルトブロック (5~40mm)、黒色シルトブロック (5~20mm)を微量含む。
 オリーブ黒色土 (5Y3/1) しまり普通、粘性強い。灰色シルトブロック (5~10mm)、灰オリーブ色砂質シルトブロック (5mm)、黒色シルトブロック (10mm)を微量含む。
- 3. 灰色土 (5Y4/1) しまり普通、粘性普通。灰オリーブ色砂質シルトブロック(15~60mm)、灰色シルトブロッ ク (10mm) を含む。



1. 黒褐色土 (2.5Y3/1) には15717 しまり普通、粘性強い。炭化物(1~10mm)、 黒色シルトプロック(5~20mm)を微量、灰 色砂質シルトプロック(5~50mm)を多量含む。





1. 黒褐色土 (2.5Y3/2) しまりやや強く、粘性普通。炭化物 (1~35mm) を少量含む。

(1:40)

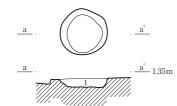
2m



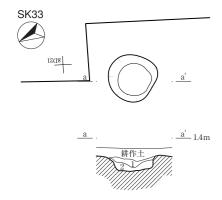
SK19

a

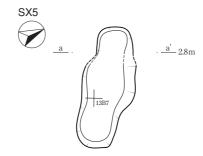
a

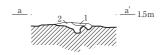


1. オリーブ黒色土 (5Y3/1) しまり普通 粘性強い。炭化物(1~3mm)を少量、 黒色シルトブロック(5~100mm)灰オリーブ色 砂質シルトブロック(5~80mm)を含む。



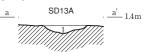
- 黒褐色土 (2.5Y3/1) 黒褐色工 (2313/1/ しまりやや強く、粘性やや強い。炭化物 (3 mm) を 徽量、灰オリーブ色砂質シルトブロック (5~20mm) を含む。
- 2. 暗灰黄色砂質土 (2.5Y5/2) しまり普通、粘性弱い。炭化物 (1 mm) を微量、黒 褐色シルトブロック (3 ~ 20 mm) を含む。



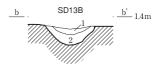


- 1. 黒褐色焼土 (2.5Y3/1) しまりやや強く、粘性弱い。炭化物(2 mm)を微量含む。鉄分沈着。
- オリーブ黒色砂質土 (5Y3/2) しまりやや強く、粘性普通。 炭化物(1~4 mm)を微量、灰オリーブ色シルトプロック(10~70mm)を含む。

SD13

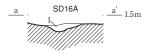


1. オリーブ黒色土 (5Y3/1) しまりやや強く、粘性強い。灰色シルトブ ロック (5~15mm)、黒色シルトブロッ ク (1~70mm)、木質 (1~10mm)を 微量含む。鉄分沈着。

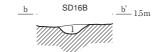


- 1. オリーブ黒色土 (5Y3/2) しまり普通、粘性強い。鉄分沈着。 2. オリーブ黒色土 (5Y3/2) しまり普通、粘性強い。炭化物 (2 mm) を微量、黒色シルトブロック (2 ~10mm) を少量、灰色シルトブロック (1~5 mm) を微量含む。

SD16

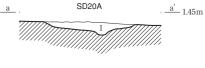


1. 黄灰色土 (2.5Y4/1) しまり普通、粘性強い。炭化物($1\sim 2$ mm)、黒色シルトブロック(5 mm)、灰オリーブ色シルトブロック($1\sim 3$ mm) を微量含む。鉄分沈着。



1. 黄灰色土 (2.5Y4/1) しまり普通、粘性強い。炭化物(1 mm)、 黒色シルトブロック(5 mm)を微量、灰 色シルトブロック (2~20mm) を少量含む。 鉄分沈着。

SD20



SD20B b <u>b'</u> 1.6m

SD20 第1セクション 1. 灰色土 (5Y4/1) しまりやや強く、粘性やや強い。炭化物 $(0.5\sim5~\mathrm{mm})$ を少量、灰オリーブ色砂質シルトブロック $(3\sim20\mathrm{mm})$ を含む。 鉄分沈着。

SD20 第2セクション 1. 黒褐色土 (2.5Y3/2)

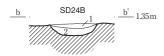
1. 無物色上 (2.513/2) しまりやや強く、粘性やや強い。炭化物 (10mm) を微量、灰黄色砂質シルトプロック (10mm) を微量含む。 2. オリーブ黒色土 (573/1) しまり普通、粘性強い。 3. 黄灰色土 (2.5Y4/1) しまり普通、粘性やや強い。 4. 黄灰色土 (2.5Y4/1) しまり普通、粘性強い。

- 5. 灰色土 (5Y4/1) しまり普通、粘性強い。黒褐色シルトブロック(10mm)を少量、灰オリーブ色砂質シルトブロック(10~25mm)を含む。

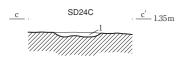
SD24



1. 黒褐色土 (2.5Y3/1) しまり強く、粘性やや強い。炭化物 (1~ 10mm) を微量、灰オリーブ色砂質シルト ブロック (20~150mm) を多量含む。

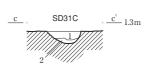


- 黒褐色土 (2.5Y3/1) しまりやや強く、粘性やや強い。黄灰色シルトプロック (20mm) を含む。
 黒褐色土 (25Y3/2)
- しまり普通、粘性強い。炭化物 (1~5 mm)を微量、暗灰黄色砂質シルトブロック (60mm) 、黄灰色シルトブロック (40mm) を含む。



1. 黒色土 (2.5Y2/1) しまり強く、粘性普通。 黄褐色砂質シルト ブロック(10~50mm)を多量含む。 SD31



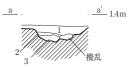


SD31 第1セクション

30501 新16ノフェン 1. オリーブ黒色土(5 Y3/2) しまりやや強く、粘性やや強い。黒色シルトブロック(10~20mm)を 少量、灰オリーブ色砂質シルトブロック(5~15mm)を含む。

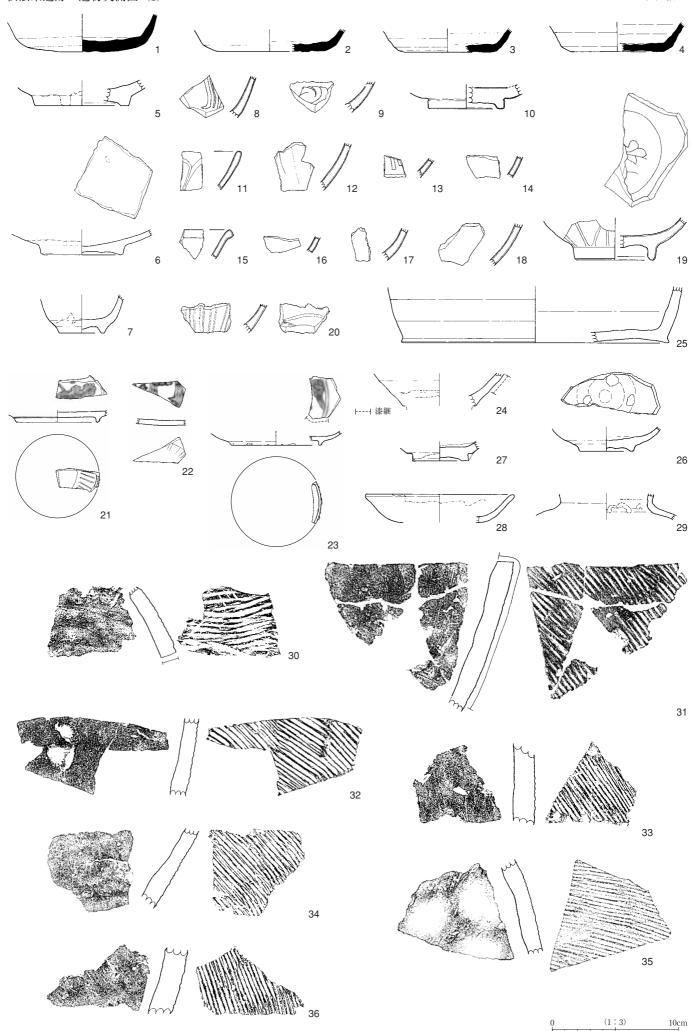
- SD31 第3セクション
 1. オリーブ黒色土 (5 Y3/2)
 しまりやや強く、粘性やや強い。炭化物 (1 ~ 2 mm) を微量、黒色シルトブロック (7 ~ 15 mm) を微量、灰オリーブ色砂質シルトブロック (5~25mm) を含む。 2. オリーブ黒色土 (5Y3/2)
- しまり普通、粘性強い。灰色砂質シルトブロック (20mm) を含む。

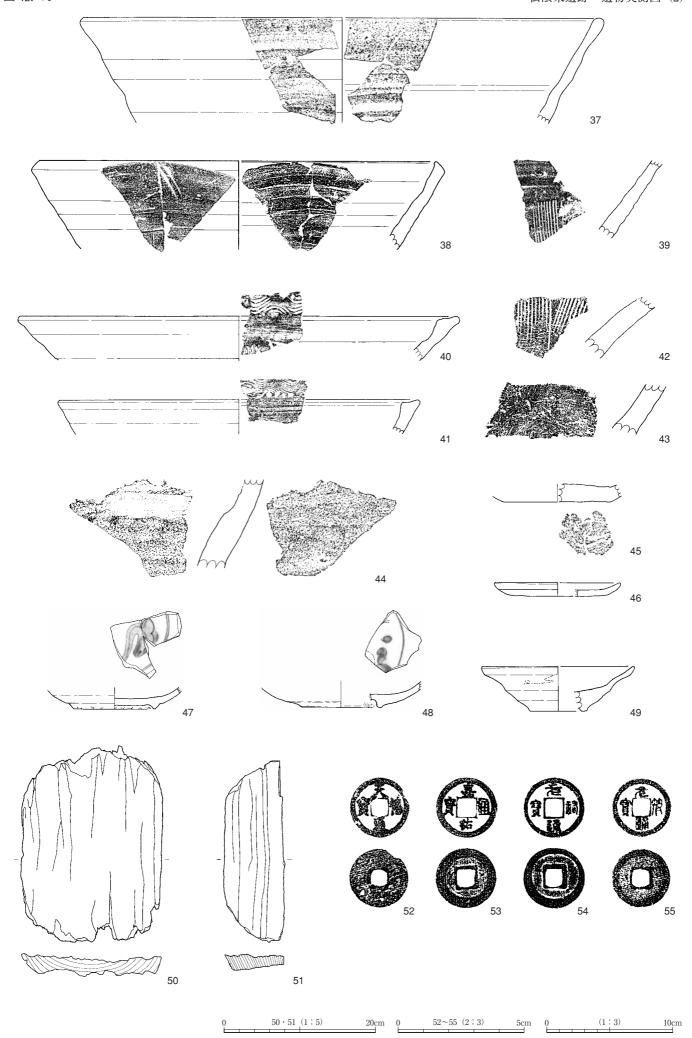
SD35

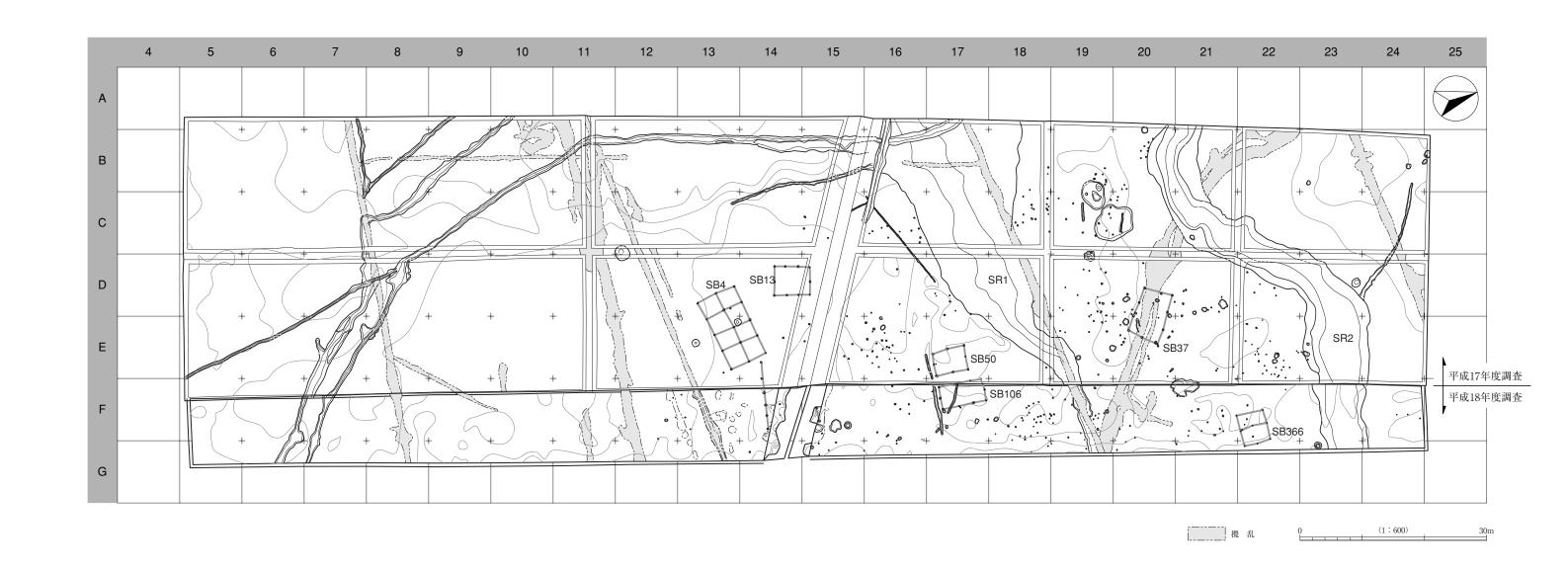


- 1. 黒褐色土 (2.5Y3/2)
- 上まり強く、粘性やや強い。
 黒褐色土 (2.5Y3/1) しまりやや強く、粘性やや強い。炭化物 (0.5~15mm) を微量含む。
 黒褐色土 (2.5Y3/1)
- しまり普通、粘性強い。灰オリーブ色砂質シルトブロック(10~40mm)を多量 含む。

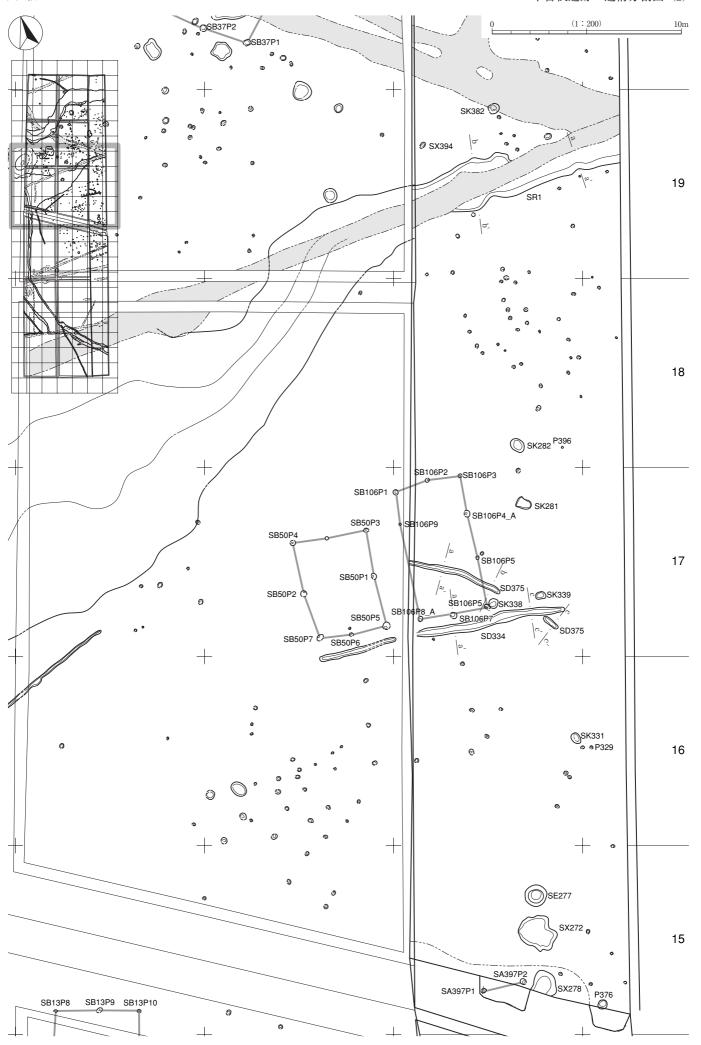
(1:40) 2m









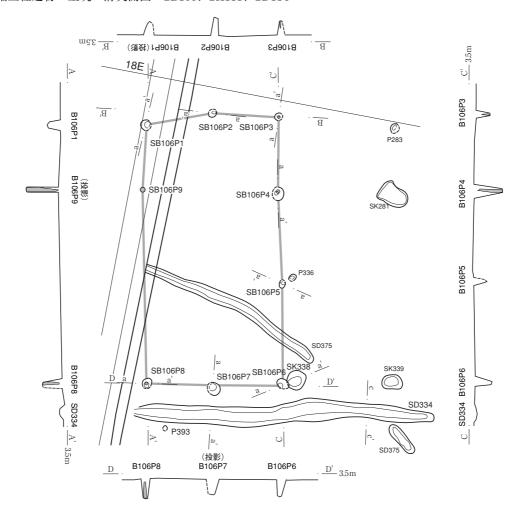


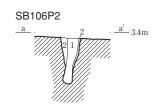
Е

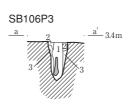
F

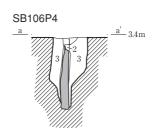
G

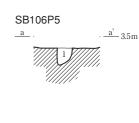




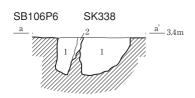


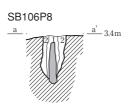


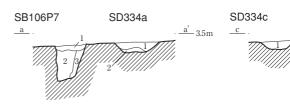




<u>c'</u> 3.4m







SB106P2

- 2. 黄灰色土 (2.5Y4/1) しまり普通、粘性強い。炭化物 (1~10mm) を少量、灰オリー ブ色シルトブロック (10~50mm) を中量、黒褐色シルトブロック (10~60mm) を
- 少量含む。
 2. 灰色土 (7.5Y5/1) しまり普通、粘性強い。炭化物 (5 mm) を微量、黄灰色シルトブロック (40mm) を微量含む。

SB106P3

- SB106P3

 1. 灰色土 (5Y4/1) しまり普通、粘性強い。炭化物 (0.5mm以下) を微量、灰オリーブ 色シルトブロック (10~40mm) を少量含む。

 2. 灰色土 (7.5Y5/1) しまり強く、粘性やや弱い。炭化物 (1 mm) を微量含む。

 3. 灰オリーブ色土 (7.5Y5/2) しまり普通、粘性強い。

SB106P4

- 1. 灰オリーブ色土 (5Y4/2) しまり強く、粘性やや強い。黒色シルトブロック (10~60mm)
- を多量含む。 2. オリーブ黒色土 (5Y3/2) しまり普通、粘性強い。灰色シルトブロック (10mm) を | 後受合む。| 3. 灰色土 (7.5Y5/1) しまり普通、粘性強い。黒褐色シルトプロック (20mm) を微量
- 会す。

SB106P5

- 1. 灰色土 (7.5Y5/1) しまり強く、粘性やや強い。炭化物 (1~30mm) を微量含む。 SB106P6
- 1. 灰色土 (7.5Y5/1) しまり普通、粘性強い。炭化物 (1~30mm) を少量、灰色シルトプロック (20~50mm) を中量含む。
 2. 灰色土 (7.5Y5/1) しまり普通、粘性強い。灰色シルトプロック (15mm) を中量含む。

SB106P7

SB106P8

- SB106P8 1. オリーブ黒色土 (5Y3/1) しまりやや強く、粘性やや強い。灰オリーブ色シルトブロック (10mm) を微量含む。 2. 灰色土 (5Y5/1) しまりやや強く、粘性やや強い。炭化物 (5~10mm) を微量、灰色シルトブロック (30~60mm) を少量含む。

1. 灰オリーブ色土 (7.5Y5/2) しまり普通、粘性強い。炭化物 (1~10mm) を少量、 灰色シルトブロックを少量含む。

- SD334 第1セクション 1. 黄灰色土 (2.5Y4/1) しまり強く、粘性やや弱い。炭化物 (0.5以下~20mm) を少量
- 含む。
 2. 灰オリーブ色土 (5Y5/2) しまりやや強く、粘性やや強い。灰色シルトブロック (40mm) を微量含む。 SD334 第3セクション

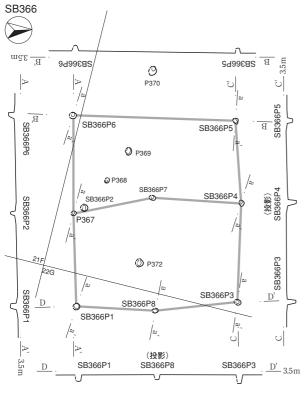
504 #35 ピノフョン 黄灰色土 (2574/1) と灰オリーブ色土 (575/2) が斑状に混ざる。しまりやや強く、 粘性強い。炭化物 (05以下~5 mm) を少量含む。

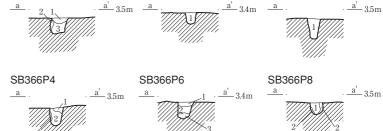
平面図/エレベーション図

平面図/エレベーション図 上

断面図

SB366P3



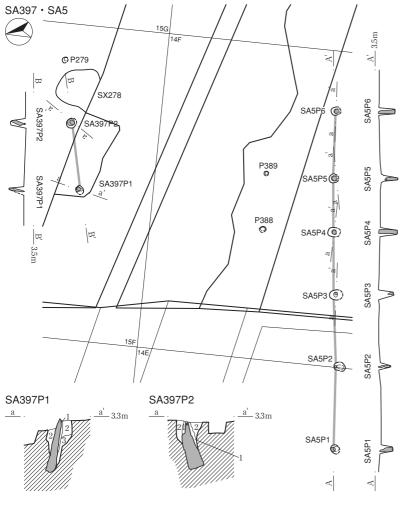


P367

SB366P1

SB366P1

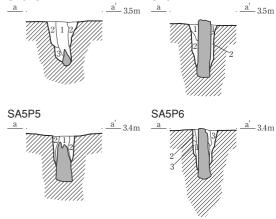
- 1. 灰オリーブ色土(5Y4/2)しまり普通、粘性普通。オリーブ黒色ブロック(0.5~1 mm)を少量含
- む。 2. オリーブ黒色土 (5Y3/1) しまり強く、粘性やや強い。炭化物 (1 mm) を微量、灰色シルトを斑 状に中量含む。
- 3. 灰オリーブ色土 (5Y5/2) しまりやや強く、粘性やや強い。炭化物 $(0.5 \sim 1 \, \mathrm{mm})$ を少量含む。 P367
- 1. 灰オリーブ色土(5Y4/2)しまり強く、粘性普通。炭化物を微量含む。
- 1. ボイソーフEL (いなり) 58366P3 1. オリーブ黒色土 (5Y3/1) しまり普通、粘性やや強い。炭化物 (1~5mm) を少量、灰色シルト (5~20mm) を中量含む。
- 1. 灰オリーブ色土(5Y5/2)しまりやや強く、粘性普通。炭化物(0.5mm)を微量、黒色シルトを斑 状に少量含む
- オリーブ黒色土 (5Y3/1) しまり強く、粘性強い。炭化物 (3~10mm) を少量、灰色シルトブロッ クを含む
- 灰オリーブ色土(5Y5/2)しまりやや強く、粘性やや強い。炭化物(0.5~1 mm)を少量含む。 SB366P6
- 1. 灰色土 (5Y5/1) しまり普通、粘性普通。炭化物 (1~5 mm) 、黒色シルト (5~20mm) を少量
- 含む。
 2. オリーブ黒色土 (5Y3/1) しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物 (0.5~2 mm) を微量、灰色シルト (10mm) を含む。
 3. 灰色土 (5Y5/1) しまりやや強く、粘性普通。オリーブ黒色ブロック (5~10mm) を少量含む。
- SB366P8
- オリーブ黒色土 (5Y3/2) しまり強く、粘性弱い。炭化物 (1~20mm) を少量、灰オリーブ色シ 1.



(1:120)

(1:40)

(1:100)



SA5P4

SA5P3

SA5P3

- 7. 灰色土 (5Y4/1) しまり強く、粘性弱い。黒褐色シルトプロック (10~200mm) を少量、炭化物 (1 mm) を微量含む。
 2. 灰色土 (7.5Y4/1) しまりやや強く、粘性やや強い。黄灰色シルトプロッ
- ク(30~70mm)を中量含む。
 (30~70mm)を中量含む。
 (30~70mm)を中量含む。
 (30~40mm)を少量含む。

- 3A374 1. 灰色土 (5Y4/1) しまり強く、粘性やや弱い。炭化物(1~10mm)を 微量、灰オリーブ色シルトブロック(10~100mm)を中量含む。 2. 灰色土 (75Y6/1) しまり強く、粘性弱い。灰色シルトブロック(10~20mm) を少量含む。

SA5P5

- 1. オリーブ黒色土 (5Y3/1) しまり強く、粘性やや強い。炭化物 (1 mm) を少量、灰オリーブ色シルトブロック (30~50mm) を少量含む。
 2. 灰色土 (75Y6/1) しまり強く、粘性弱い。黒色シルトブロック (20mm)
- を少量含む。

SA5P6

- オリーブ黒色土(5Y3/2)しまりやや強く、粘性やや強い。灰オリーブ

オリーノ黒色土 (SY3/2) しまりやや強く、粘性やや強い。灰オリーノ 色シルトブロック (20mm) を微量含む。 灰オリーブ色土 (7.5Y5/2) しまり強く、粘性弱い。灰色シルトブロック (100mm) が中央に入る。 灰オリーブ色土 (7.5Y5/2) しまり強く、粘性弱い。オリーブ黒色シルト ブロック (30mm) を微量含む。

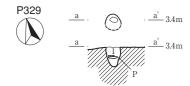
SA397P1

- 1. 黒褐色土 (2.5Y3/1) しまり普通、粘性強い。炭化物 (30mm) を微量、
- | 灰色シルトプロック (20~40mm) を少量含む。 2. 灰色土 (7.5Y4/1) しまり強く、粘性強い。黒色シルトプロック (40mm)
- を微量含む。

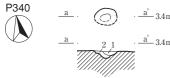
灰色土 (10Y5/1) しまり普通、粘性強い。

SA397P2

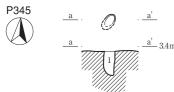
- SA397P2
 1. オリーブ黒色土 (5Y2/2) しまりやや強く、粘性やや強い。黒色シルトブロック (30mm) を微量含む。
 2. 灰色土 (7.5Y5/1) しまり強く、粘性やや強い。炭化物 (10mm) を微量、灰色シルトブロック (50~70mm) を中量含む。



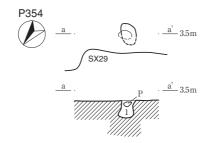
1. 灰色土 (7.5Y5/1) しまり普通、粘性強い。 炭化物 (0.5以下~5mm) を中量含む。



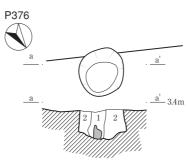
- 褐灰色土 (10YR4/1) しまり強く、粘性強い。 炭化物を多量、灰色シルトプロック (5~ 10mm)を少量含む。
 褐灰色土 (10YR5/1) しまりやや強く、粘性やや強い。灰色シルトプロック (10mm)を ないる。
- 微量含む。



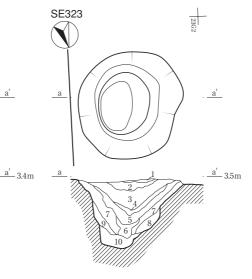
1. オリーブ黒色土 (5Y3/1) しまりやや強く、 粘性普通。炭化物を中量含む。



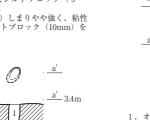
1. 黄灰色土 (2.5Y4/1) しまりやや強く、粘性 弱い。炭化物を多量含む。



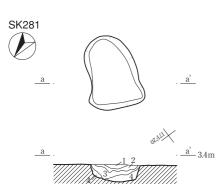
- オリーブ黒色土 (5Y3/1) しまりやや強く、 粘性強い。炭化物 (0.5以下~20mm) 、灰オ リーブ色シルトブロック (5~30mm) を少
- サーブモンルトプロック (5~30mm) を少量含む。 2. 灰色土 (7.5Y4/1) しまり普通、粘性強い。 炭化物 (1~10mm) を少量、黒褐色シルト ブロック (20~50mm) を中量含む。



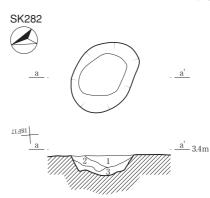
<u>a'</u> 3.4m <u>a'</u> 3.4 m



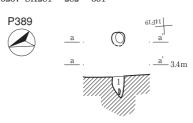
_a'



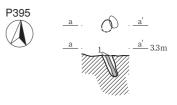
- 1. 灰色土 (5Y5/1) しまりやや強く、粘性強い。炭化物 (1 ~5 mm) を中量、オリーブ黒色シルトブロック (20mm)
- を含む。
 2. 灰色土 (5Y5/1) しまり普通、粘性強い。炭化物 (10mm) を多量、オリーブ黒色シルトブロック (20mm) を多量
- RODE (5Y5/1) しまり普通、粘性強い。炭化物 (1~20mm) を中量、灰色シルトプロックを斑状に含む。 灰色土 (5Y5/1) しまり普通、粘性強い。炭化物 (1~10mm) を微量含む。



- 灰色土 (7.5Y5/1) しまりやや強く、粘性強い。 炭化物 (1~3 mm) を少量、黄灰色シルトプロック (20~40mm) を少量含む。
 黒褐色土 (2.5Y3/2) しまり普通、粘性強い。炭化物 (0.5~30mm) を多量、灰色シルトプロック (20~70mm) を含む。
 灰色土 (7.5Y5/1) しまり普通、粘性強い。炭化物 (0.5~10mm) を少量、黄灰色シルトプロック (100mm) を多量含む。



1. 黒褐色土 (2.5Y3/2) しまり普通、粘性強い。炭 化物 (1~10mm) を少量、灰色シルトブロック (20~30mm) を少量含む。



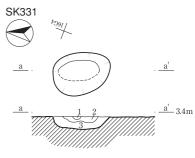
1. 黒褐色土 (2.5Y3/1) しまり普通、粘性弱い。灰 色シルトプロック (10mm) を微量含む。

- SE2//
 1. オリーブ黒色土 (5GY2/1) しまり強く、粘性普通。炭化物 (0.5 ~ 1 mm) を少量、灰色シルトブロック (1~10mm) を少量含む。
 2. 灰色土 (10Y4/1) しまり普通、粘性普通。炭化物 (1~5 mm) を少量含む。
 3. 灰色土 (10Y4/1) しまり普通、粘性やや強い。炭化物 (5~10mm) を微量、灰白色シルトブロックを斑状に中量含む。
- 4. 暗灰色土 (N3/0) しまり普通、粘性やや強い。炭化物 (0.5~30mm) を多量に含む。
- 5. 暗オリーブ灰色土 (5GY4/1) しまりやや強く、粘性強い。炭化物 (0.5~1 mm) を少量、灰白色シルトブロックを選状に少量含
- 6. オリーブ黒色土 (10Y3/1) しまり普通、粘性やや強い。炭化物 (1 ~10mm)を微量、灰白色シルトブロック (5 ~30mm)を少量含

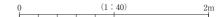
- 8. 灰色上 (1013) しょりやや弱く、粘性強い。灰色シルトブロックを選合と。 9. 黒色土 (N2/0) しまりやや弱く、粘性強い。灰色シルトブロック を選状に中量含む。 10. 灰色土 (10Y6/1) しまりやや弱く、粘性強い。炭化物 (05~1 mm) を微量、黒色土ブロック (1 mm) を微量含む。上層より砂質。

- SE323
 1. 黒色土 (N2/0) しまり強く、粘性弱い。灰色シルトブロック(1 ~ 5 mm)を少量含む。
 2. オリーブ黒色土 (5Y3/1) しまり強く、粘性普通。炭化物(0.5~10mm)を少量、灰色シルトブロック(1~3 mm)を少量含む。
 3. 灰色土 (5Y4/1) しまり普通、粘性強い。炭化物(1~15mm)を少量含む。
 4. 灰色土 (5Y4/1) しまり普通、粘性強い。灰・黄灰色シルトブロック(1~2 mm)を少量含む。
 4. 灰色土 (5Y4/1) しまり普通、粘性強い。灰・黄灰色シルトブロック(1~10mm)を中量、炭化物(1~5 mm)を少量含む。
 5. 灰色土 (7.5Y4/1) しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物(1~3 mm)を少量含む。
 6. オリーブ黒色土 (7.5Y2/2) しまり弱く、粘性非常に強い。炭化物(1~3 mm)を微量含む。
 7. 灰色土 (5Y5/1) しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物(5~10mm)を微量、暗灰色シルトを一部遊状に含む。
 8. 略灰黄色土 (2.5Y5/2) しまり普通、粘性やや強い。地山の砂粒を少量含む。

- 8・暗灰異色工 (2.513/2) しまり普通、粘性やや強い。地山の砂粒を中量、炭化物 (0.5~1 mm) を微量含む。
 10. 灰色土 (5Y5/1) しまり弱く、粘性強い。炭化物 (0.5~1 mm)

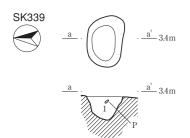


- 黒褐色土 (2.5Y3/2) しまりやや強く、粘性やや強い。炭化物 (0.5以下~20mm) を中量、灰色シルトプロック (40mm) を含む。
 灰色土 (5Y4/1) しまりやや強く、粘性やや強い。炭化物 (0.5以下~3 mm) を少量、黄灰色シルトプロック (30mm) を少量含む。
 灰色土 (5Y4/1) しまり普通、粘性強い。炭化物 (0.5以下~25mm) を中量、黄灰色シルトプロック (50mm) を中量、黄灰色シルトプロック (50mm) を中量、黄灰色シルトプロック (50mm) を中量会か。
- (50mm) を中量含む。

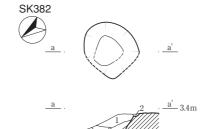


図版 19

中曽根遺跡 土坑・溝性格不明遺構実測図 SK339・382、SD2・3・375、SX29



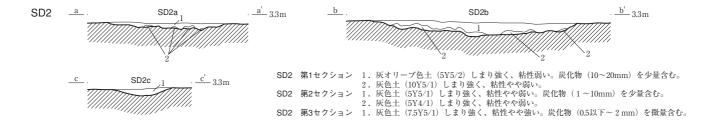
1. 灰オリーブ色土 (7.5Y5/2) しまりやや強く、粘性やや強い。炭化物(1~ 10mm)を中量含む。

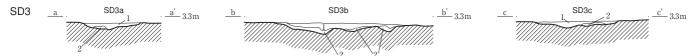


- 1. 黒色土 (5Y2/1)

- 3. 灰色土 (574/1) しまりやや強く、粘性やや強い。炭化物 (1~30mm) を微量、灰色 シルトブロック (10~180mm) を中量含む。
- 4. 黒褐色土 (2.5Y3/1)

- 5. 灰色工 (7315/1)
 しまり普通、粘性強い。暗灰色シルトブロック (50mm) を中量含む。
 6. オリーブ灰色土 (2.5GY5/1)
 しまり普通、粘性強い。炭化物 (30mm) を微量、黒色シルトブロック (1~5mm) を斑状に多量含む。



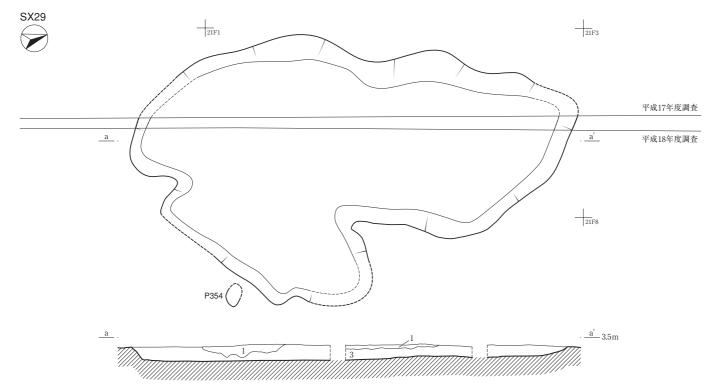


1. 灰色土 (5Y4/1) しまり強く、粘性やや弱い。炭化物 $(1\sim5 mm)$ を微量、灰色シルトプロック $(10\sim30 mm)$ を少量含む。2. 灰色土 (5Y4/1) しまり強く、粘性やや強い。炭化物 (3mm) を微量含む。1. 灰オリーブ色土 (5Y5/2) しまり強く、粘性やや弱い。炭化物 $(1\sim10 mm)$ を少量含む。 SD3 第1セクション

2. 灰色土 (7.5Y5/1) しまり強く、粘性やや弱い。炭化物 (5~10mm) を微量含む。 1. 灰オリーブ色土 (5Y4/2) しまり強く、粘性やや弱い。炭化物 (1~5 mm) を少量含む。 2. 灰色土 (7.5Y5/1) しまり強く、粘性やや弱い。炭化物 (1 mm) を微量含む。

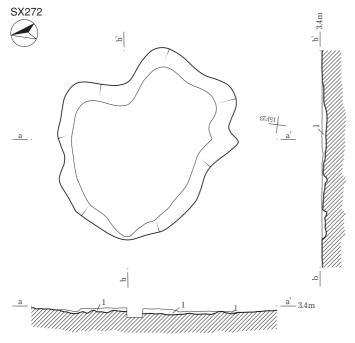
SD375b_1 SD375 _a_ - <u>b'</u> 3.4 m SD375c SD375a <u>a'</u> 3.4m b <u>c'</u> 3.4m

SD375 第1セクション 1. 灰色土 (7.5 Y5/1) しまり強く、粘性やや弱い。黒褐色シルトブロック (30 mm) を微量含む。 SD375 第2セクション 1. 灰色土 (7.5 Y5/1) しまり強く、粘性やや弱い。黒褐色シルトブロック (50 mm) を微量含む。 SD375 第3セクション 1. 灰オリーブ色土 (5 Y5/2) しまり強く、粘性やや弱い。オリーブ黒色シルトブロック $(10 \sim 60 mm)$ を中量含む。



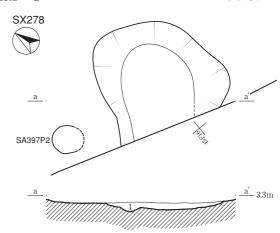
1. オリーブ灰色シルト (25GY5/1) しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化物 (1~20mm) を中量含む。 3. 灰色シルト (7.5Y5/1)

しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物 (1~10mm) を少量、オリーブ黒色シルト (5 mm) を微量含む。

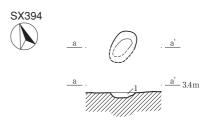


SX272 南北セクション
 1. 灰オリーブ色土 (7.5Y5/2)
 しまり強く、粘性弱い。炭化物 (1~30mm) を微量、灰オリーブ色シルトブロック (20~100mm) を中量含む。

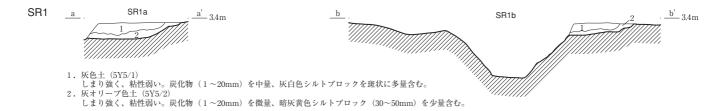
SX272 東西セクション1. 灰色土 (75Y5/1) しまり強く、粘性弱い。炭化物 (5 mm) を微量、灰色シルトプロック (20~100mm) を少量含む。



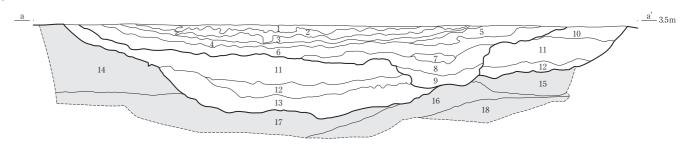
1. 灰色土 (7.5Y4/1)



1. 炭化物層 黒色シルトブロック (10~20mm) を少量含む。



SR₂



- 1. 黒褐色土 (2.5Y3/2) しまり強く、粘性やや強い。炭化物 (1~10mm) を中量、灰オ リーブ色シルトブロックを少量含む。 2. 黒褐色土 (2.5 Y3/1) しまりやや強く、粘性やや強い。炭化物 (1~20mm) を中量、
- 2. 素褐色土 (7.5YR2/1) しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物 (0.5~10mm) を東側では中量、灰黄色シルト (0.5~10mm) を微量含む。地点により混入物の量が変化す
- 4. 黒褐色砂質シルト (2.5Y3/2) しまり普通、粘性強い。炭化物 (1~30mm) を少量、
- 黒筒世の貝ンルト (2.515/2) しまり自地、和日に短い。 (5.1178) (1 05/11178) (2 05/1178) (5 05/1178 を中量含む

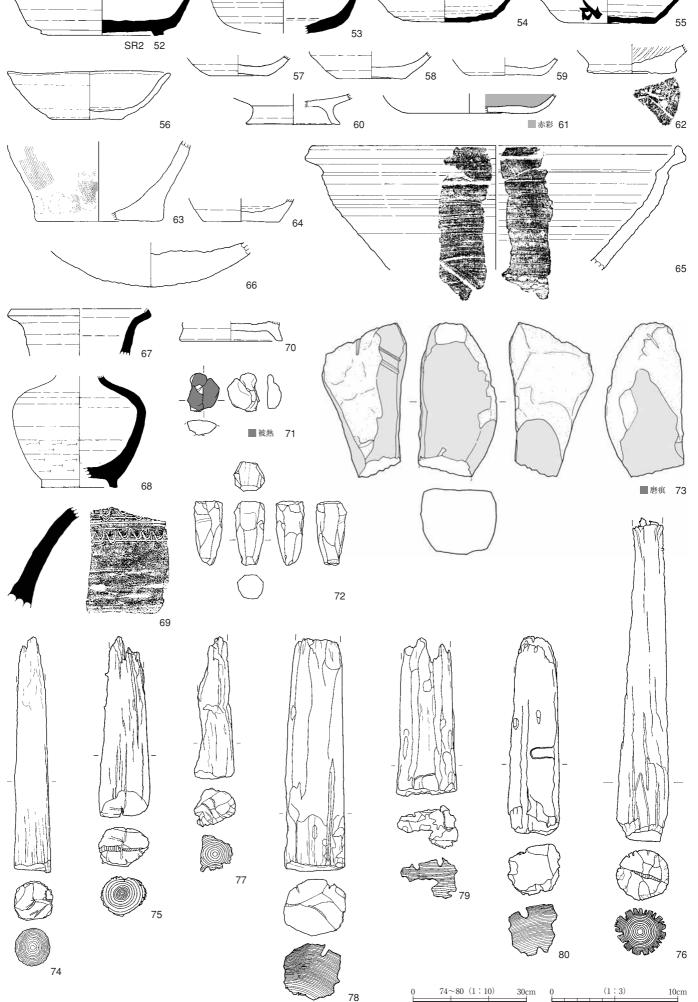
- ルトブロック (40~60mm) を少量、木の繊維を微量含む。

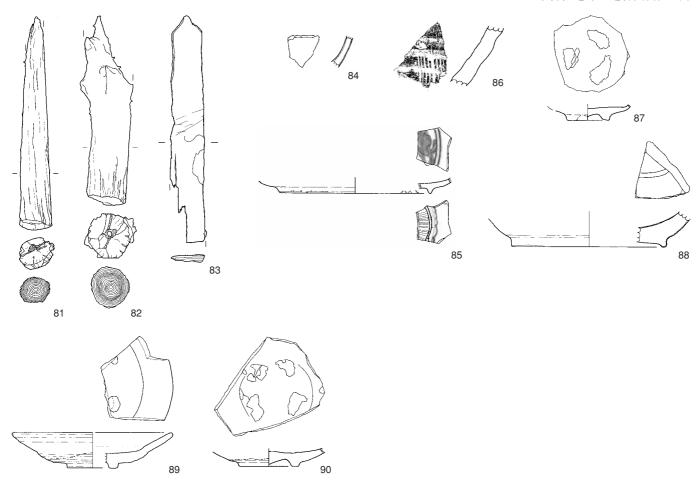
- 9. 灰色土に明黄褐色土と灰白色砂質シルトが混ざる (7.5Y5/1・10YR6/6・5Y7/1) しま

- べ弱く、粘性弱い。木片・繊維を多量含む。 灰色砂質シルト(10Y5/1)しまり普通、粘性弱い。黒褐色シルトブロック、灰オリーブ色砂質シルトを中量、木片・繊維を少量含む。

(1:3)

10cm

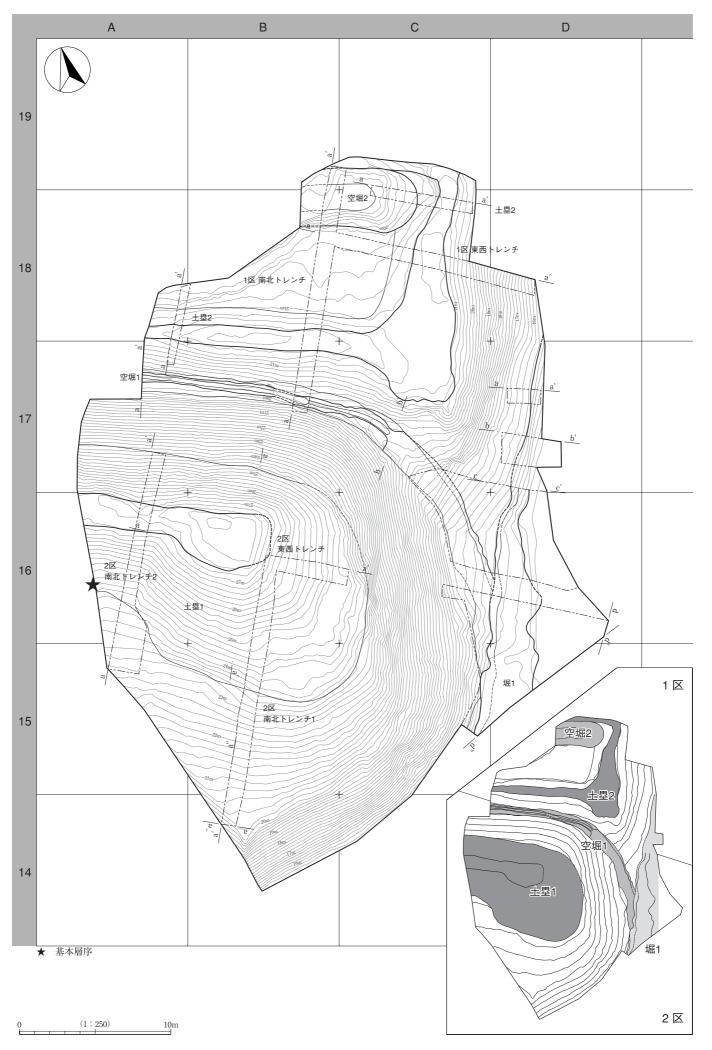




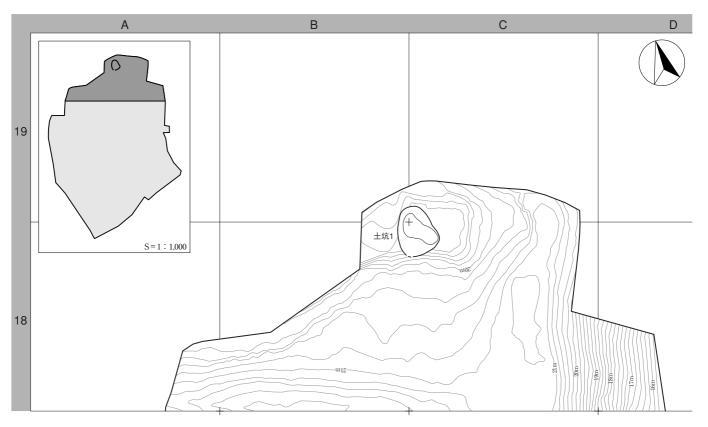


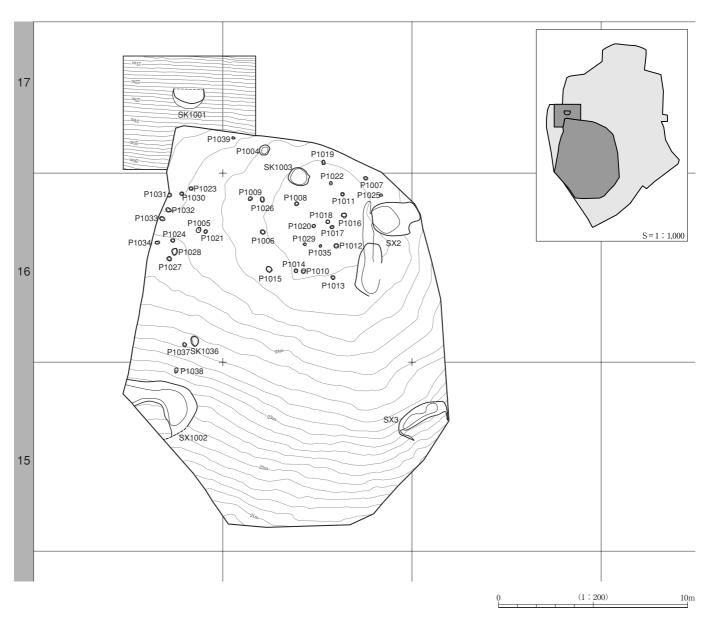


図版25 大館跡 調査区全体図(1)



大館跡 調査区全体図 (2) 図 版 26





土塁1

- 黄褐色土 (10Y R5/8) しまり弱く、粘性やや弱い。砂利・小石を少量、暗褐色土を微量含む。
 黄褐色土 (10Y R5/8)
- 10Y R5/8)
 しまり弱く、粘性やや弱い。暗褐色土を少量、砂利・小石を微量、灰白色土ブロックを含む。
 にぶい黄褐色土(10Y R5/4)
 しまりやや弱く、粘性やや弱い。暗褐色土を少量、砂利・小石を微量を含む。
 明黄褐色土(10Y R6/6)

- ・・ 308 (日本 AU) I NO(0) しまりやや弱く、粘性やや弱い。砂利・小石・灰白色土を少量、暗褐色土・黄褐色土を微量含む。 5. 黄褐色土 (10 Y R 5/8)
- 3. R NGLL (101 R3/9)しまり弱く、粘性弱い。砂粒を中量、砂利・小石を少量、暗褐色土を微量含む。6. 暗褐色土 (107 R3/4)

- ・ 黒陶巴工 (IUY KZ/2) しまりやや弱く、粘性やや弱い。砂利・小石を少量、砂粒・黄褐色土・褐色土を微量含む。
 8 にぶい黄褐色土 (10Y R5/4) しまりやや弱く、粘性やや弱い。砂利・小石・暗褐色土を微量を含む。
 9 ・暗褐色土 (10Y R3/4)
- しまりやや弱く、粘性やや弱い。砂利・小石を少量、黄褐色土を微量含む。 10. 暗褐色土 (10 Y R 3/4)
- しまりやや弱く、粘性やや弱い。砂利・小石・黄褐色土を微量含む。
- 11. 黒褐色土 (10Y R 2/2) しまりやや弱く、粘性やや弱い。砂利・小石・黄褐色土を微量含む。 12. 暗褐色土 (10Y R 3/3)
- しまりやや弱く、粘性やや弱い。砂利・小石・黄褐色土を微量含む。 13. 明黄褐色土 (10 Y R 6/6)
- 30 (1958 1951 1959) 1 (1958 1959) 1
- 14. 貝物已上(IDTR3/6) しまりやや強く、粘性弱い。砂利・小石を中量、黒褐色土を微量含む。 15. 黒褐色土(IOYR2/2)
- 101 K 2/2) しまりやや弱く、粘性やや弱い。砂利・小石・黄褐色土・褐色土を微量含む。 16. にぶい黄色土 (2.5 Y 6/3)
- 13. にかい 県巴上 (2310/3) しまりやや強く、粘性やや強い。砂利・小石・黄褐色土・黒褐色土・褐色土・灰白色土を微量含む。 17. 黒褐色土 (10Y R 2/2)
- ... 水内では、(101 K 2/2) しまりやや弱く、粘性やや弱い。砂利・小石を少量、黄褐色土ブロックを微量含む。 18. 黒褐色土 (10Y R 2/2)
- しまりやや弱く、粘性やや弱い。砂利・小石を微量含む。 19. 暗褐色土 (10Y R 3/4)
- 19. 暗褐色工 (10 Y R 3 / 4) しまりやや弱く、粘性やや弱い。黄褐色土・砂利・小石を微量含む。 20. 黒褐色土 (10 Y R 2 / 2) しまりやや弱く、粘性やや弱い。黄褐色土を微量含む。 21. 褐色土 (10 Y R 4 / 4)

- 21. 褐色工(101 K 4 4 4) しまりやや弱く、粘性やや弱い。砂利・小石を微量含む。 22. 暗褐色土(10 Y R 3 4 4)

- しまりやや弱く、粘性やや弱い。砂利・小石を多量、褐色土・灰白色土を微量含む。 24. 明黄褐色土 (10 Y R 6/6)

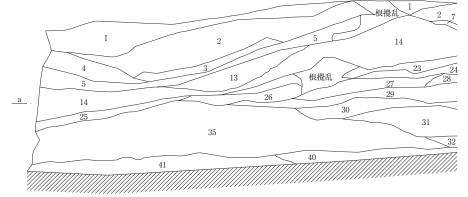
- しまりやや弱く、粘性弱い。砂利・小石を中量、暗褐色土を微量含む。 26. 黄褐色土 (10Y R 5/6)
- しまりやや弱く、粘性弱い。砂粒を中量、砂利・小石を少量含む。 27. 暗褐色土 (10 Y R 3/4)
- 27. 暗物色工 (10 Y R 3/4) しまりやや弱く、粘性やや弱い。黄褐色土を少量、砂利・小石・灰白色土ブロックを微量含む。 28. 褐色土 (10 Y R 4/6) しまりやや弱く、粘性やや弱い。砂利・小石・黄褐色土を微量含む。 29. 暗褐色土 (10 Y R 3/4)

- --- しまりやや弱く、粘性やや弱い。黄褐色土を中量、炭化物・砂利・小石を微量含む。 30. 明黄褐色土 (10 Y R 6/8)

- 30. 明黄褐色土 (10Y R6/8)
 しまりやや弱く、粘性弱い。黒褐色土・灰白色土プロックを微量含む。
 31. 黒褐色土 (10Y R2/2)
 しまりやや弱く、粘性やや弱い。砂利・小石を少量、砂粒・黄褐色土・褐色土を微量含む。
 32. 黒褐色土 (10Y R2/2)
 しまりやや弱く、粘性やや弱い。黄褐色土を微量含む。
 33. 褐色土 (10Y R4/4)
 しまりやや弱く、粘性やや弱い。砂利・小石を少量含む。
 34. 黄褐色土 (10Y R5/6)
 しまりやや強く、粘性弱い。砂利・小石を少量、灰白色土を微量含む。
 35. 褐色土 (10Y R3/4)
 しまりやや強く、粘性弱い。砂利・小石を少量、灰白色土を微量含む。
 36. にぶい黄褐色土 (10Y R5/4)
 しまりやや弱く、粘性やや強い。黄褐色土を中量含む。
 36. にぶい黄褐色土 (10Y R5/4)
 しまりやや弱く、粘性やや強い。黄褐色土を少量、砂利・小石・黒褐色土・灰白色土プロックを微量を含む。
- 量を含む。 37. 黒褐色土 (10 Y R 2/3)
- 37. 黒褐色土 (10 f k 2/3) しまりやや弱く、粘性やや弱い。炭化物・砂利・小石・灰白色土ブロックを微量含む。 38. にぶい黄褐色土 (10 f R 5/4) しまりやや弱く、粘性やや弱い。暗褐色土を少量、砂利・小石・黒褐色土を微量を含む。
- 39. 黄褐色土 (10 Y R 5/6) しまりやや強く、粘性弱い。砂利・小石・暗褐色土・灰白色土ブロックを微量含む。
- 40. 暗褐色土 (10YR3/4) しまりやや強く、粘性やや強い。砂利・小石を少量、黄褐色土を微量含む。
- 41. 褐色土 (10Y R 4/4)

- 41. 陽色上 (10 Y R 2/2) しまりやや弱く、粘性やや強い。黄褐色土を微量含む。 42. 黒褐色土 (10 Y R 2/2) しまりやや強く、粘性やや強い。黄褐色土を微量含む。
- 43. 黒褐色土 (10 Y R 2/2) しまりやや強く、粘性やや弱い。

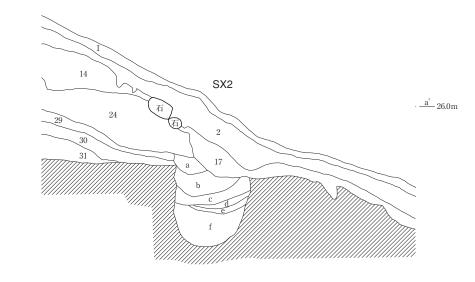
2区 東西トレンチ (土塁1・SX2)



a. 黄褐色土(10YR5/8)

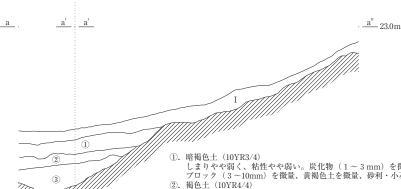
e. 黒褐色土 (10YR2/3)

- しまり弱く、粘性弱い。砂粒を中量、砂利・小石を少量、暗褐色土を微量含む。 b. 暗褐色土 (10YR3/3)
- 『福色工(101 K3/3/ しまりやや弱く、粘性やや弱い。黄褐色土を中量、砂利・小石を少量含む。
- c. 黒褐色土 (10YR2/3)
- しまりやや弱く、粘性やや強い。黒褐色土を微量、灰白色土を微量含む。
- よりやや弱く、粘性やや弱い。黄褐色土を微量、炭化物(1~3mm)を微量、砂利・小石を微量、灰白色土を微量含む。 f. 暗褐色土 (10YR3/4)
- しまりやや強く、粘性やや弱い。黄褐色土を中量、炭化物 (1~3mm)を微量、砂利・小石を微量、灰白色土を微量含む。



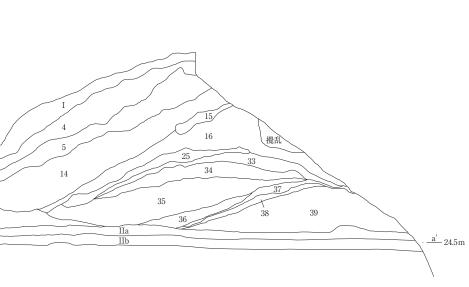
29

2区 南北トレンチ1 (盛土層)



- 『『韓三王(101183年) しまりやや弱く、粘性やや弱い。炭化物(1~3 mm)を微量、灰白色土 ブロック(3~10mm)を微量、黄褐色土を微量、砂利・小石を微量含む。
- 土を微量含む。

 ③. にぶい黄色土 (25Y6/3) しまりやや強く、粘性やや強い。粘土ブロック (5~20mm) を中量、黄褐色土ブロック (3~10mm) を微量含む。



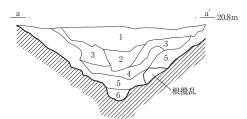
2区 南北トレンチ2(土塁1)

土塁1 南北セクション

a

1区 東西トレンチ 土塁2 <u>a'</u> 21.0m _a_ ----1. にぶい黄色土 (2.5Y 6/3) しまりやや強く、粘性やや強い。明黄褐色土を中量、橙色土を少量、砂利・小石を微量含む。 2. 明褐色土 (7.5YR 5/8) しまりやや強く、粘性やや強い。にぶい黄色土を中量、橙色土を少量、砂利・小石を微量含む。 3. 明黄褐色土 (10YR 6/6) しまりやや弱く、粘性弱い。砂利・小石を多量、にぶい黄色土を微量、橙色土を微量含む。 4. 褐色土 (10YR 4/4) しまりやや弱く、粘性やや弱い。にぶい黄色土を微量、砂利・小石を微量、明黄褐色土を微量含む。 5. 明責褐色土 (10YR 6/8) しまりやや弱く、粘性やや強い。にぶい黄色土を微量、暗褐色土を微量、砂利・小石を微量含む。 6. 暗褐色土 (10YR 3/4) しまりやや弱く、粘性やや弱い。砂利・小石を微量、明黄褐色土を微量含む。 1. 褐色土 (10YR4/6) 1. 内色上 (1011年76) しまり弱く、粘性やや弱い。砂利・小石を微量、灰白色土を微量含む。 2. にぶい黄色土 (2.5Y6/3) 堀 1 しまりやや弱く、粘性やや強い。褐色土を中量、砂利・小石を微量、明黄褐色土を微量含む。 3. 褐色土 (10YR4/6) しまりやや強く、粘性やや強い。明黄褐色土を少量、砂利・小石を微量、灰白色土を微量、 炭化物 (1~3 mm) を微量、赤褐色土を微量含む。 4. にぶい黄色土 (25Y6/3) しまりやや強く、粘性やや弱い。褐色土を中量、砂利・小石を微量、明黄褐色土を微量、 1区 南北トレンチ 土塁2 暗褐色土を微量含む。 5. 黄褐色土 (10YR5/6) しまりやや弱く、粘性やや強い。砂利・小石を微量含む。 空堀1 <u>a'</u> 21.1m 1. 褐色土 (10YR4/6) しまりやや弱く、粘性やや弱い。砂利・小石を微量、暗褐色土を微量、灰白色土を微量含む。 2. 褐色土 (10YR4/4) しまりやや弱く、粘性やや弱い。砂利・小石を微量含む。 空堀2 3. 褐色土 (10YR4/6 しまりやや弱く、粘性やや弱い。砂利・小石を微量、暗褐色土を微量、灰白色土を微量含む。 4. 褐色土 (10YR4/6) しまりやや強く、粘性やや弱い。砂利・小石を中量、黄褐色土を微量、暗褐色土を微量含む。 空歌1 1. 褐色土 (10YR4/4) しまりやや弱く、粘性やや弱い。砂利・小石を少量、黄褐色土を微量含む。 2. 黒褐色土 (10YR2/3) しまり弱く、粘性やや弱い。腐葉土を少量、暗褐色土を少量、砂利・小石を微量含む。 1. 黄褐色土 (10YR5/6) しまりやや弱く、粘性やや弱い。砂利・小石を少量、暗褐色土を微量、灰白色土を微量含む。 5. 黄褐色土 (10YR5/6) しまりやや弱く、粘性弱い。砂利・小石を多量、灰白色土を少量含む。 こ 場色士 (10YR4/6) しまりやや弱く、粘性やや弱い。砂利・小石を微量、灰白色土を微量、暗褐色土を微量含む。 6. 褐色土 (10YR4/6) しまりやや弱く、粘性弱い。砂利・小石を少量、灰白色土を微量、赤褐色土を微量含む。 3. 褐色土 (10YR4/4) しまりやや弱く、粘性やや弱い。砂利・小石を微量、灰白色土を微量、炭化物 (1~3 mm) を微量 3. 褐色土 (10YR4/4) しまりやや弱く、粘性やや弱い。砂利・小石を微量、灰白色土を微量、暗褐色土を微量含む。 含む。 (表土) 4. 黄褐色土 (10YR5/8) しまりやや弱く、粘性弱い。砂粒を微量、砂利・小石を微量、灰白色土を微量、暗褐色土を微量含む。 5. 褐色土 (10YR4/4) しまりやや弱く、粘性やや弱い。砂利・小石を微量、砂粒を微量、灰白色土を微量含む。 6. 褐色土 (10YR4/4) しまりやや弱く、粘性やや弱い。砂利・小石を微量、灰白色土を微量含む。 7. 褐色土 (10YR4/6) しまりやや弱く、粘性やや弱い。砂利・小石を中量、砂粒を微量、黄褐色土を微量含む。(砂利・小石の集中部分が上下に存在。)

空堀1 南北セクション1

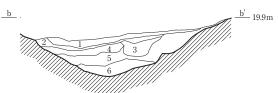


- 1. 黒褐色土 (10YR3/1) しまりやや弱く、粘性やや弱い。砂利・小石を中量、褐色土を中量含む。 2. 褐色土 (10YR4/4)

- 褐色土 (10YR4/4) しまりやや強く、粘性やや弱い。砂利・小石を少量含む。
 褐色土 (10YR4/6) しまりやや弱く、粘性やや弱い。砂利・小石を少量含む。
 暗褐色土 (10YR3/4) しまりやや強く、粘性やや弱い。砂利・小石を微量、砂粒を微量含む。
- 5. 暗褐色土 (10YR3/4)

- 5. 暗褐色土 (10YR3/4) しまりやや弱く、粘性やや弱い。黒褐色土を微量、砂利・小石を微量、灰白色土を微量含む。 6. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり強く、粘性やや弱い。砂利・小石を少量、砂粒を微量、灰白色土を微量、褐色土ブロック (5~10mm) を微量含む。

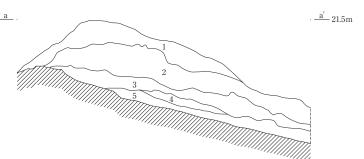
空堀1 南北セクション2



- 1. 橙色土 (7.5YR6/8)
- 位と上(7.51km/8) しまりやや強く、粘性弱い。暗褐色土を微量、黄褐色土ブロック(5~20mm)を微量、砂利・小石を微量、灰白色土を微量含む。
- 暗褐色土 (10YR3/4) しまりやや強く、粘性弱い。腐棄土を微量、砂利・小石を微量、黄褐色土を微量含む。
- 3. 黒褐色土 (10YR2/3) しまり弱く、粘性やや弱い。腐棄土を少量、暗褐色土を微量、砂利・小石を微量、黄褐色
- 土を微量含む。 4. 褐色土(10YR4/4)

- 5. 褐色土 (10YR4/6) しまりやや弱く、粘性やや強い。砂利・小石を微量、黄褐色土ブロック (5~10mm) を 徽量、灰白色土ブロック(5~10mm)を徽量、炭化物(3~5 mm)を徽量含む。6.暗褐色土(10YR3/4)
- 暗物 EL (101K3/4) しまりやや弱く、粘性やや強い。黄褐色土を微量、灰白色土ブロック(5~10mm)を微量、 黄褐色土ブロック(5~10mm)を微量含む。

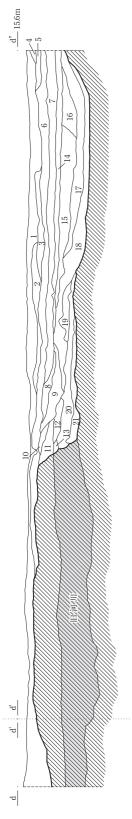
土塁2 南北セクション



- 1. 褐色土 (7.5YR4/4)
- 1・阿巴工 (7.31f44/4) しまりやや弱く、粘性弱い。砂利・小石を中量、砂粒を微量、明黄褐色土を微量含む。 2. 明黄褐色土 (10YR6/6)
- しまりやや弱く、粘性弱い。灰白色ブロック(5~20mm)を少量、砂利・小石を微量、砂粒を微量含む。
- 3. 明褐色土 (7.5YR5/8) しまりやや強く、粘性やや弱い。砂利・小石を微量、砂粒を微量含む。
- 4. 暗褐色土 (10YR3/3) しまりやや強く、粘性やや弱い。褐色土を微量、砂利・小石を微量含む。
- 褐色土 (10YR4/6) しまりやや弱く、粘性やや弱い。暗褐色土を微量、砂利・小石を微量含む。

(1:60)

堀1 東西セクション4



表土 黒褐色土(10YR3/1)耕作土

1. 22. 33. 37. 77. 10.

 \exists 12.

13. 灰黄褐色土 (10YR4/2)
 14. 灰黄褐色土 (10YR4/2)
 14. 灰黄褐色土 (10YR4/2)
 15. 万季や強く、粘性やや弱い。明黄褐色土ブロック (3~10mm) を微量、にぶい黄色土を微量合む。
 15. 万季や強く、粘性やや弱い。褐色土を微量、明黄褐色土を微量、砂利・小石を微量含む。
 15. 灰黄褐色土 (10YR4/2)
 15. 灰黄褐色土 (10YR4/2)
 15. 灰黄褐色土 (10YR4/2)
 16. 東土やや強く、粘性やや弱い。褐色土を微量、明黄褐色土を微量、砂利・小石を微量、炭化物 (1~3mm)を微量含む。

16.

17.

(こぶい資格色土 (10YRA/3) 排作土
 福格色土 (10YRA/3) 排作土
 福格色土 (10YRA/4) 排作土
 福色土 (10YRA/4) 排作土
 (こぶい資格色土 (10YRA/3) 排作土
 (こぶい資格色土 (10YRA/3) 排作土
 (こぶい資格色土 (10YRA/3) 排作土
 (こぶい資格色土 (10YRA/3) 排作土
 (こぶい資格色土 (10YRA/3)
 (こぶい資格色土 (10YRA/3)
 (こぶい資格色土 (10YRA/3)
 (こぶい資格色土 (10YRA/3)
 (こぶい資格色土 (10YRA/3)
 (こばい政格のでは、料性やや弱い。 褐色土を中量、にぶい黄色土を微量、褐灰色土を微量含む。
 (こぶい資格色土 (10YRA/3)
 (1) 秋度熱色土 (10YRA/3)
 (1) 秋度熱色土 (10YRA/2)
 (2) やや強く、料性やや弱い。 褐色土を微量、明黄褐色土を微量含む。
 (2) 秋月後色土 (10YRA/2)
 (2) 秋月後色土 (10YRA/2)
 (2) 秋月後色土 (10YRA/2)

19.

20.

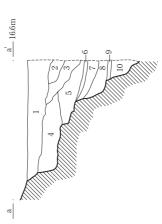
21.

堀1 東西セクション1

c'_ 16.5m

堀1 東西セクション3

盛土層 (時期不明)



2. 所為也十八分23人, 1. 其 9 やや弱く、熱性弱い。反白色土を少量、砂利・小石を微量、砂粒を微量含む。 3. 所屬色土(107K3人4) 1. 其 9 やや弱く、熱性等や。及白色土を少量、砂利・小石を微量、砂粒を微量含む。 4. 黄褐色土(25X5人4) 1. 其 9 やや弱く、粘性やや弱い。灰白色土を軟量、明黄褐色土を微量、暗褐色土を微量含む。 5. 褐色土(107K3人6) 5. 褐色土(107K4人6) 6. 明黄褐色土(107K3人6) 1. 其 9 やや弱く、熱性やや弱い。灰白色土を微量、明黄褐色土を微量、暗褐色土を微量含む。 6. 明黄褐色土(107K3人6) 1. 其 9 やや弱く、熱性やや弱い。灰白色土を微量、明黄褐色土を微量、暗褐色土を微量含む。 7. 黒褐色土(107K2人6) 7. 黒褐色土(107K2人6) 7. 黒褐色土(107K2人6) 1. 黒 10 やや弱く、粘性やや弱い。灰白色土を中量、褐色土を少量、暗褐色土を微量含む。 しまりやや弱く、粘性やや弱い。砂利・小石を微量、黒褐色土を微量、灰白色土を微量含む。

しまりやや弱く、粘性やや弱い。明黄褐色土を微量、砂利・小石を微量、灰白色土を微量含む 暗褐色土 (10YR3/4) ∞

しまりやや弱く、粘性やや弱い。明貴褐色土を微量、褐色土を微量含む。 黄褐色土(IOYRs/8) 6

しまりやや弱く、精性やや弱い。灰白色土を微量、明黄褐色土を微量、暗褐色土を微量含む。 にぶい黄褐色土(107R5/4) しまりやや弱く、粘性やや弱い。灰白色土を微量、暗褐色土を微量含む。



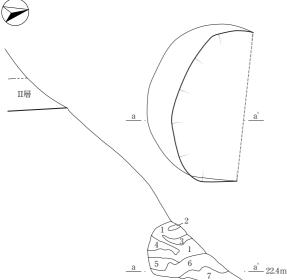




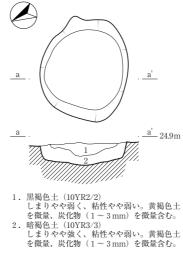
P1004

a

SK1001



SK1003



- 1. 黒褐色土 (10YR2/3) しまりやや弱く、粘性やや弱い。 黄 褐色土を微量、炭化物(1~3 mm) を微量含む。
- を微量含む。 2. 暗褐色土 (10YR3/3) しまりやや強く、粘性やや弱い。黄 褐色土を微量含む。 3. 明褐色土 (7.5YR5/6) しまりやや強く、粘性やや強い。暗 褐色土を微量含む。 (根攪乱)

a'

<u>a'</u> 24.7 m

暗褐色土 (10YR3/4)

しまりやや弱く、粘性やや弱い。黒褐色土を微量、炭化物(1~5 mm)を微量 含む

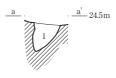
日も。 黄褐色土(10YR5/6) しまりやや弱く、粘性やや弱い。暗褐色土を微量、炭化物(1~5mm)を微量 含む。 5. 黄褐色土 (10YR5/6)

興物色上(101K2/5) しまりやや弱く、粘性やや弱い。暗褐色土を微量、黒褐色土を微量含む。 黒褐色土 (10YR2/3) しまりやや弱く、粘性やや強い。黄褐色土を少量、炭化物(1~5 mm)を微量、 赤褐色土を微量、シルトを微量含む。

示して (10YR2/2) 黒褐色土 (10YR2/2) しまりやや弱く、粘性やや強い。砂利・小石を微量、黄褐色土を微量、炭化物(1 ~5 mm)を微量含む。

P1005

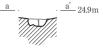


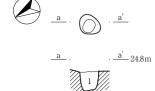


1. 黒褐色土 (10YR2/3) によりやや強く、粘性やや強い。炭 化物 (1~3 mm) を微量、黄褐色土 を微量含む。

P1008

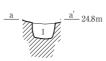






1. 黒褐色土 (10YR2/3) しまりやや弱く、粘性やや弱い。黄 褐色土を微量含む。





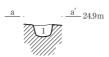
1. 黒褐色土 (10YR2/3) にありたや弱く、粘性やや弱い。炭化物 (1~3 mm) を微量、黄褐色土 を微量含む。

P1013

を微量含む。

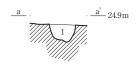


1. 暗褐色土 (10YR3/4) しまりやや弱く、粘性やや弱い。黄 褐色土を微量、炭化物 (1~3 mm)



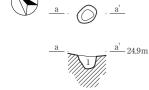
 黒褐色土 (10YR2/3) しまりやや弱く、粘性やや弱い。炭 化物 (1~5 mm) を微量、黄褐色土 を微量含む。





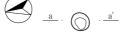
1. 黒褐色土 (10YR2/3) しまりやや弱く、粘性やや弱い。黄 褐色土を微量、炭化物 (1~3 mm) を微量含む。

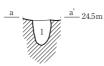
P1017



1. 暗褐色土 (10YR3/4) しまりやや弱く、粘性やや強い。黄 褐色土を微量、炭化物 (1~3 mm) を微量含む。

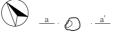
P1021

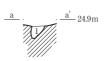




暗褐色土 (10YR3/4) しまりやや強く、粘性やや弱い。 黄褐色土を微量含む。

P1029





1. 黒褐色土 (10YR2/3) しまりやや弱く、粘性やや弱い。 黄褐色土を微量、炭化物(1~3 mm)を微量含む。

SK1036



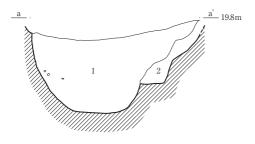


 暗褐色土 (10YR3/4) しまりやや強く、粘性やや弱い。 黄褐 色土を微量、炭化物 (1~3 mm) を微 量含む。

土坑1 南北セクション

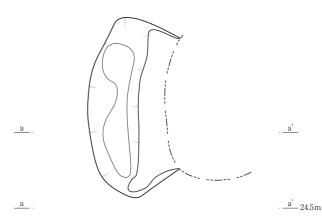


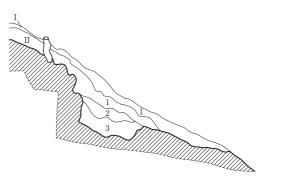




- 1. 褐色土 (10YR4/6) しまり弱く、粘性弱い。砂利・小石を中量、砂粒を微量、暗褐色土を 微量含む。 黄褐色土 (10YR5/6) しまりやや弱く、粘性弱い。砂利・小石を少量、砂粒を微量含む。



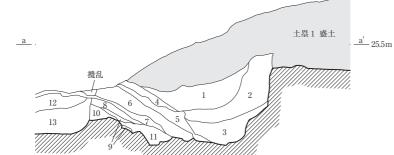




- 1. 暗褐色土 (10YR3/3)
- 暗物色工 (10) R(3/3)
 しまりやや強く、粘性やや弱い。黄褐色土を微量、明褐色土ブロック (3~5 mm)を微量、明黄褐色土を微量含む。
 褐色土 (10) R(4/6)
 しまりやや弱く、粘性やや弱い。にぶい黄色土ブロック (3~10 mm)を微量、炭化物 (1~3 mm)を微量、橙色土を微量含む。
 暗褐色土 (10) R(3/4)
 はりゃのなど、熱性のなどに、熱なりな響点によれる微量。四类組み上す。
- しまりやや弱く、粘性やや弱い。橙色土を微量、にぶい黄色土を微量、明黄褐色土 を微量含む。







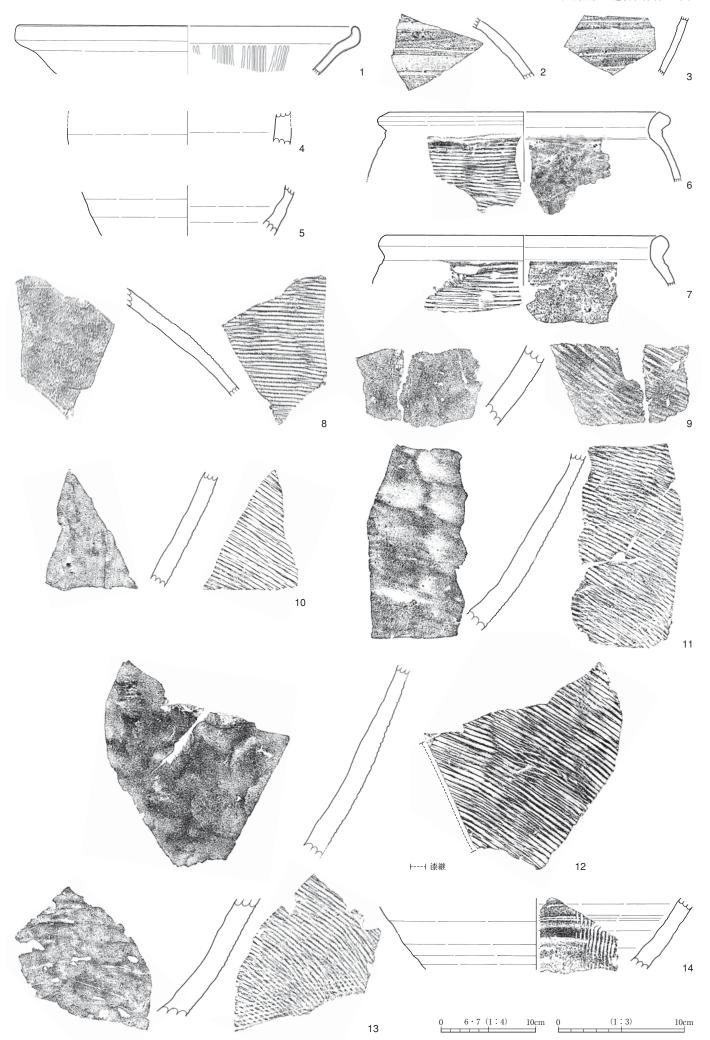
- 暗褐色土 (10YR3/4)
 しまりやや弱く、粘性やや弱い。砂利・小石を微量、炭化物 (1~3 mm)を微量、黄褐色土を微量含む。
 暗褐色土 (10YR3/3)
 しまりやや弱く、粘性やや弱い。黄褐色土を微量、砂利・小石を微量、黄褐色土ブロック (3~10mm)を微量含む。
 暗褐色土 (10YR3/4)
 しまりやや弱く、粘性やや弱い。砂利・小石を少量、黄褐色土を微量、黄褐色土ブロック (3~10mm)を微量、炭化物 (1~3 mm)を微量含む。
- 4. 褐色土 (10YR4/4)
 - NSEL (101K4/4) しまりやや強く、粘性やや弱い。黄褐色土を少量、砂利・小石を微量、 炭化物(1~3 mm)を微量含む。 明黄褐色土 (10YR6/6) しまりやや強く、粘性やや強い。にぶい黄色土を微量、橙色土を微量、 暗褐色土を微量含む。 田素組色土 (10YP6/6)

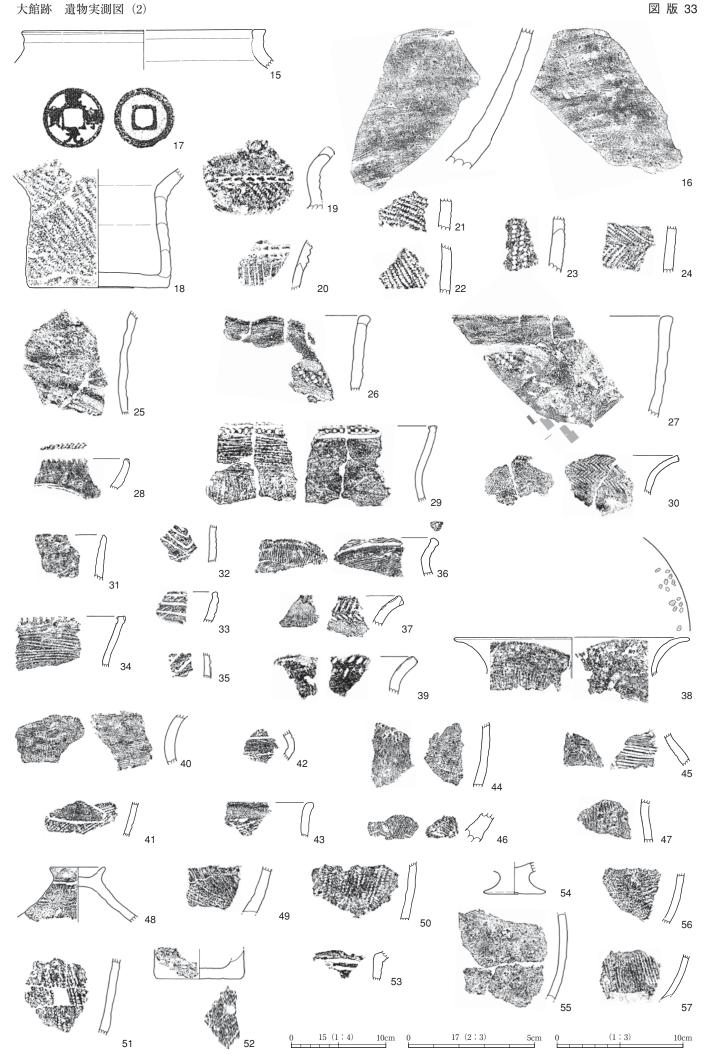
- 暗褐色土を敬量含む。
 明黄褐色土 (10YR6/6)しまりやや強く、粘性やや強い。にぶい黄色土を微量、黄褐色土プロック (3~10mm)を微量、黒褐色土を微量含む。黒褐色土 (10YR2/3)しまりやや弱く、粘性やや弱い。黄褐色土を少量、にぶい黄色土を微量、砂利・小石を微量含む。

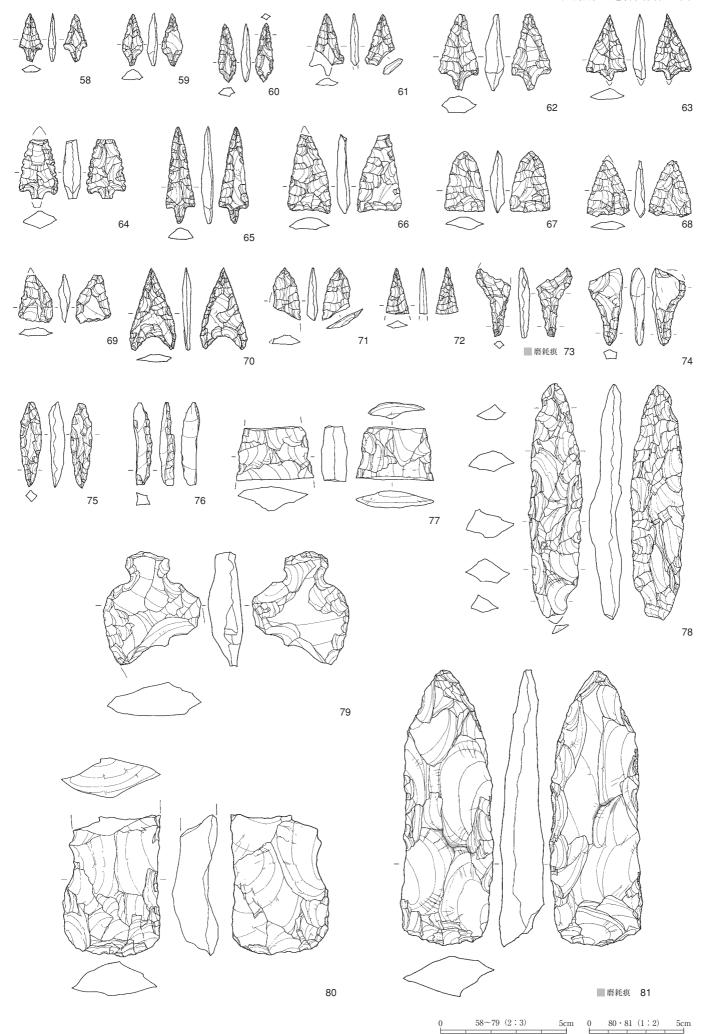
- (例刊・小石を献重さむ。 8 一巻色土 (75YR6/8) しまりやや弱く、粘性やや強い。にぶい黄色土ブロック(3~10mm)を中量、黒褐色土を微量、黄褐色土を微量含む。 9. 黒褐色土 (10YR2/3) しまりやや弱く、粘性やや弱い。黄褐色土を微量、にぶい黄色土を微量、 砂利・小石を微量含む。

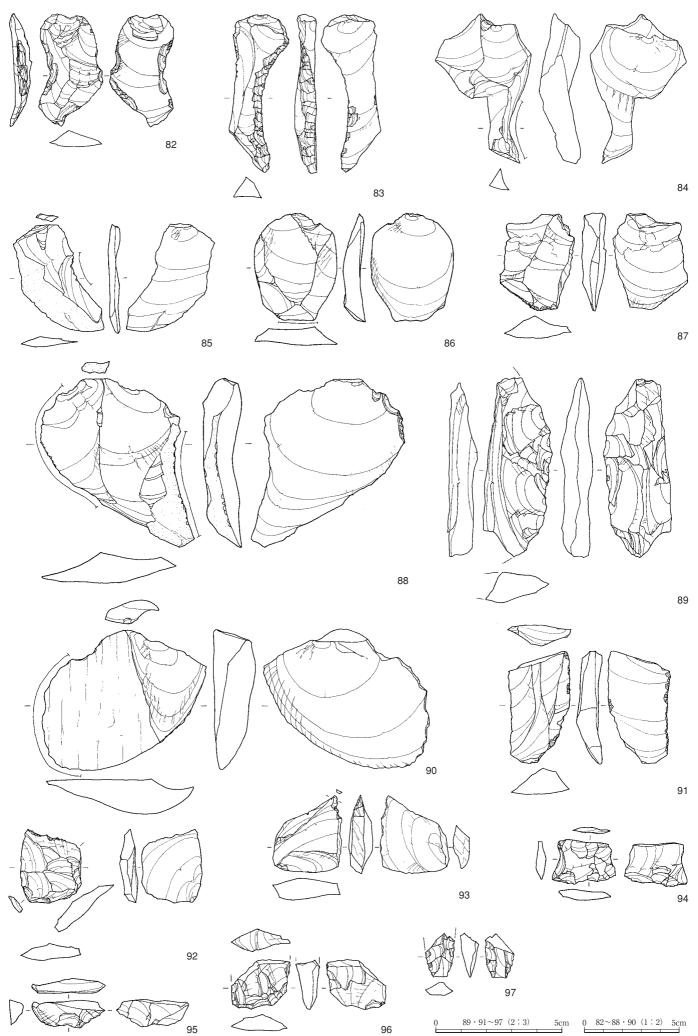
- 砂州・小石で飯重古む。
 10. 明黄褐色土 (10YR6/6)
 しまりやや強く、粘性やや強い。黄褐色土を少量、にぶい黄色土ブロック (3~10mm)を微量、炭化物 (1~3mm)を微量含む。
 11. 橙色土 (7.5YR6/6)

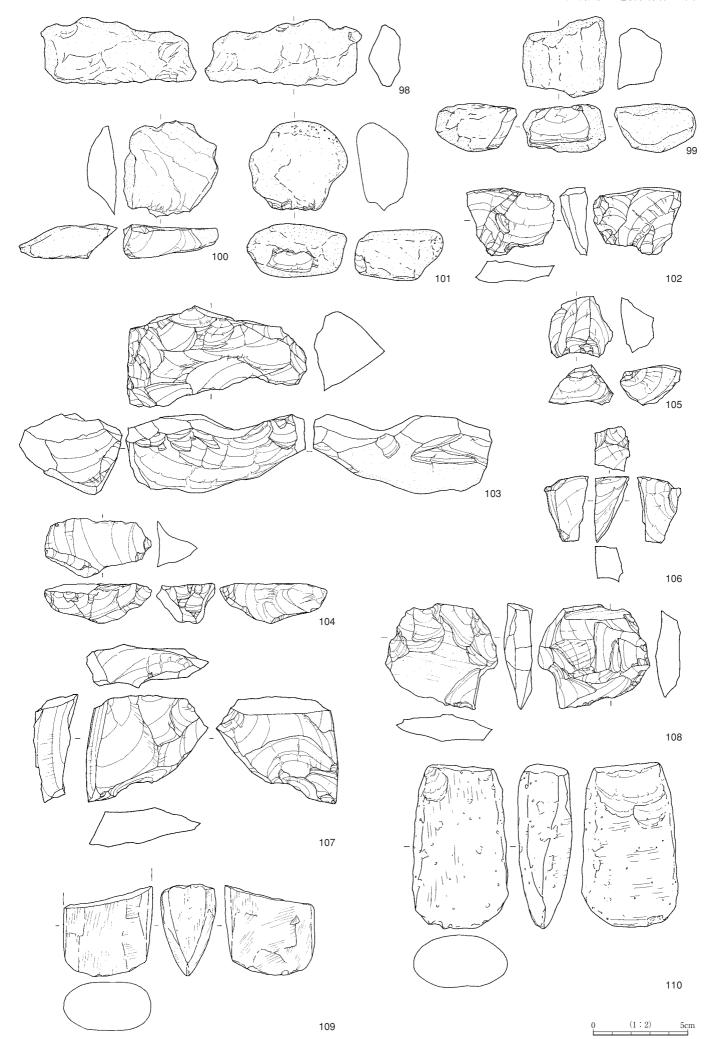
- 被色土 (7.5YR6/6)
 しまりやや強く、粘性やや強い。にぶい黄色土ブロック (3~20mm)を中量、黒褐色土を少量含む。
 明黄褐色土 (10YR6/8)
 しまり弱く、粘性やや弱い。暗褐色土を微量、にぶい黄色土ブロック (3~10mm)を微量、炭化物 (1~3mm)を微量含む。
 褐色土 (10YR4/4)
 しまりのおは、ませから起い、砂利・カエを微量、素褐色土を微量
 - しまりやや弱く、粘性やや弱い。砂利・小石を微量、黄褐色土を微量、炭化物($1\sim3\,\mathrm{mm}$)を微量含む。

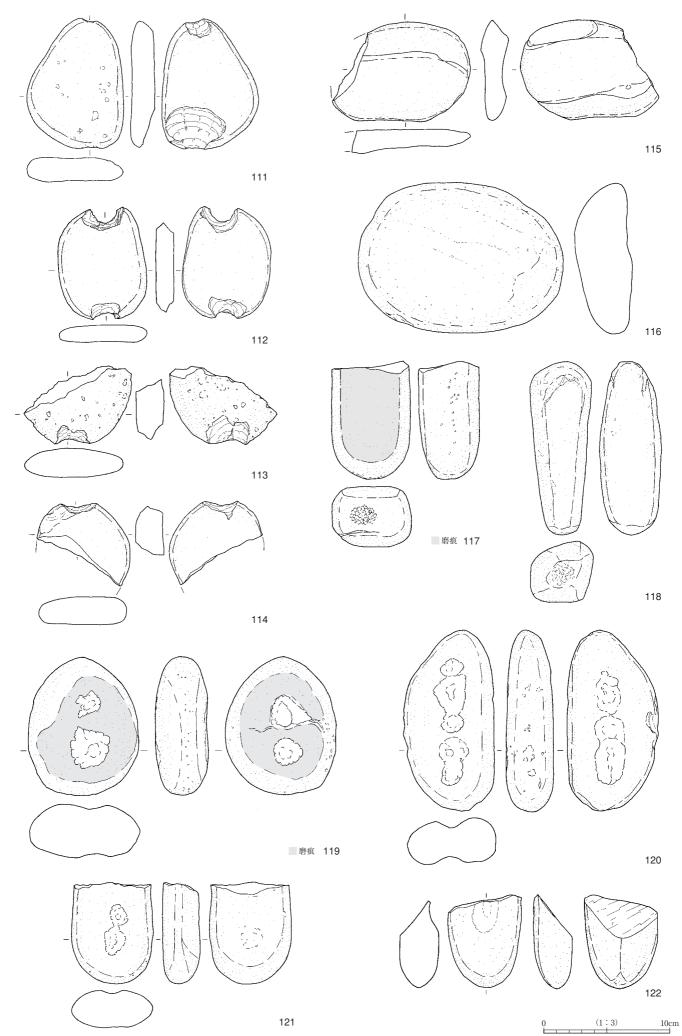














調査区全景(南西から牧目集落を望む)



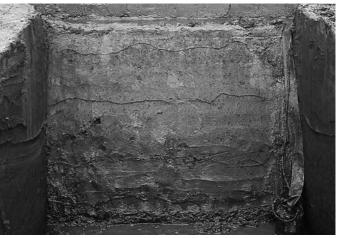
基本層序1上層(北から)



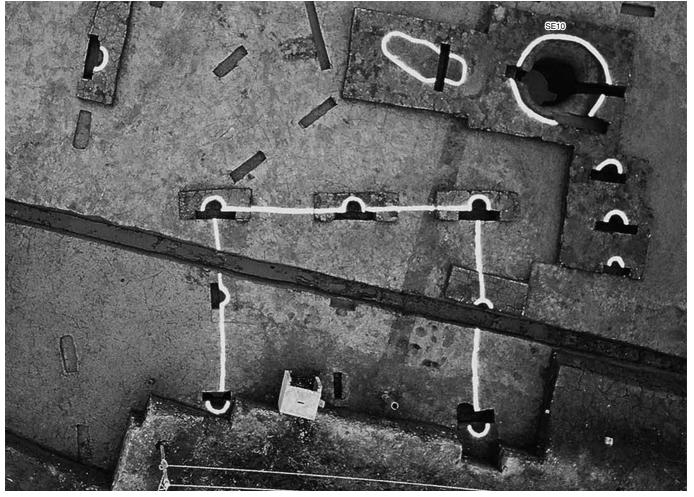
基本層序1下層(北から)



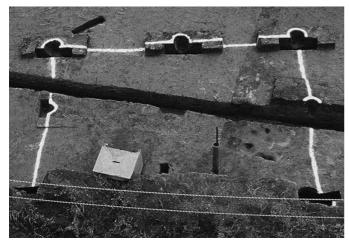
基本層序3上層(南から)



基本層序3下層(南から)



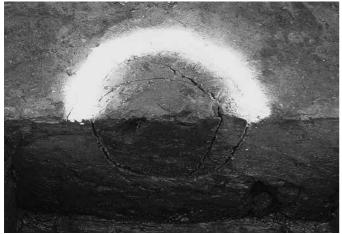
SB11周辺全景(北から)



SB11全景(北から)



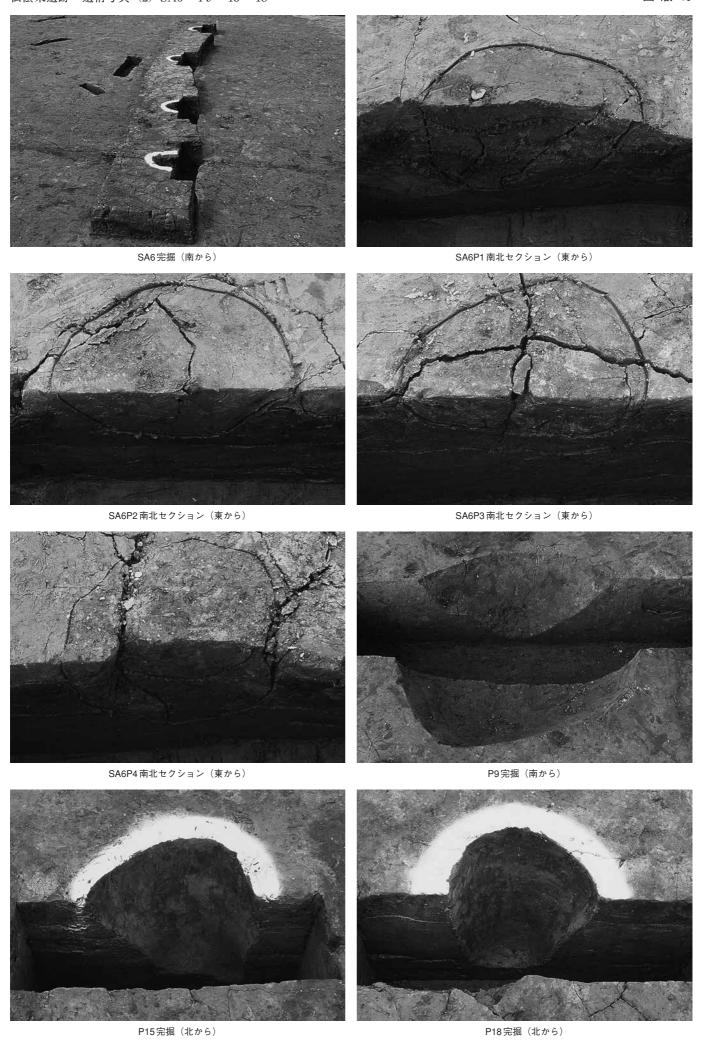
SB11P2遺物出土状況(北から)

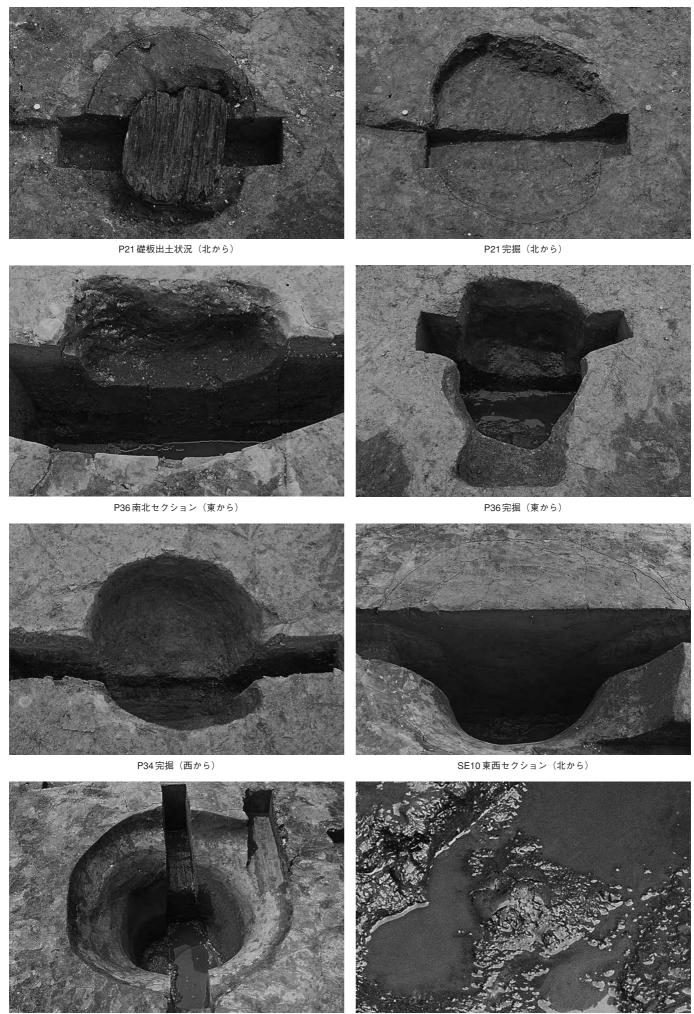


SB11P5東西セクション(南から)

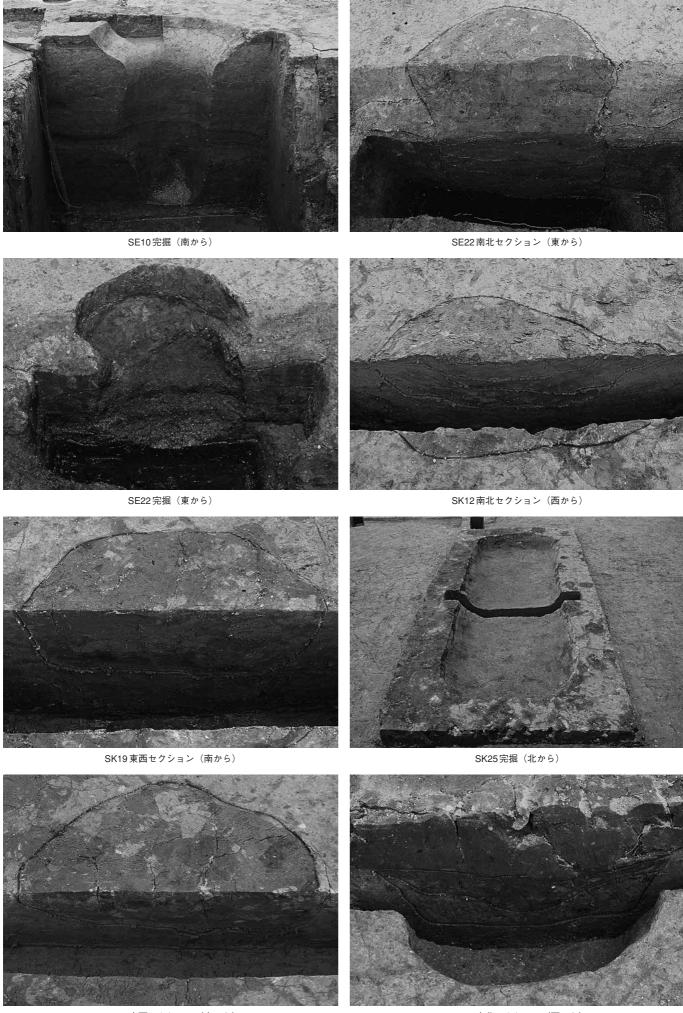


SB11P7南北セクション(東から)





 SE10 完掘(東から)
 SE10 ヒョウタン出土状況(南西から)



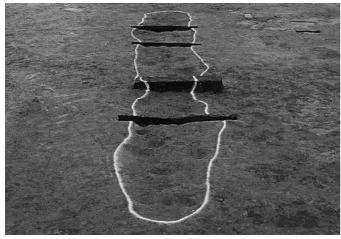
SK32 東西セクション(南から)

SK33南北セクション(西から)





SD16完掘(西から)



SD20 完掘(南から)



SD24 · SD31 完掘全景(東から)



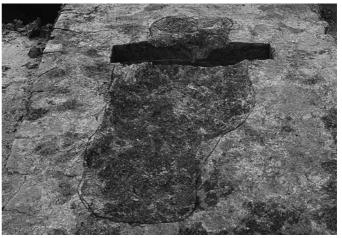
SD24b-b'セクション(西から)



SD31b-b'セクション(西から)

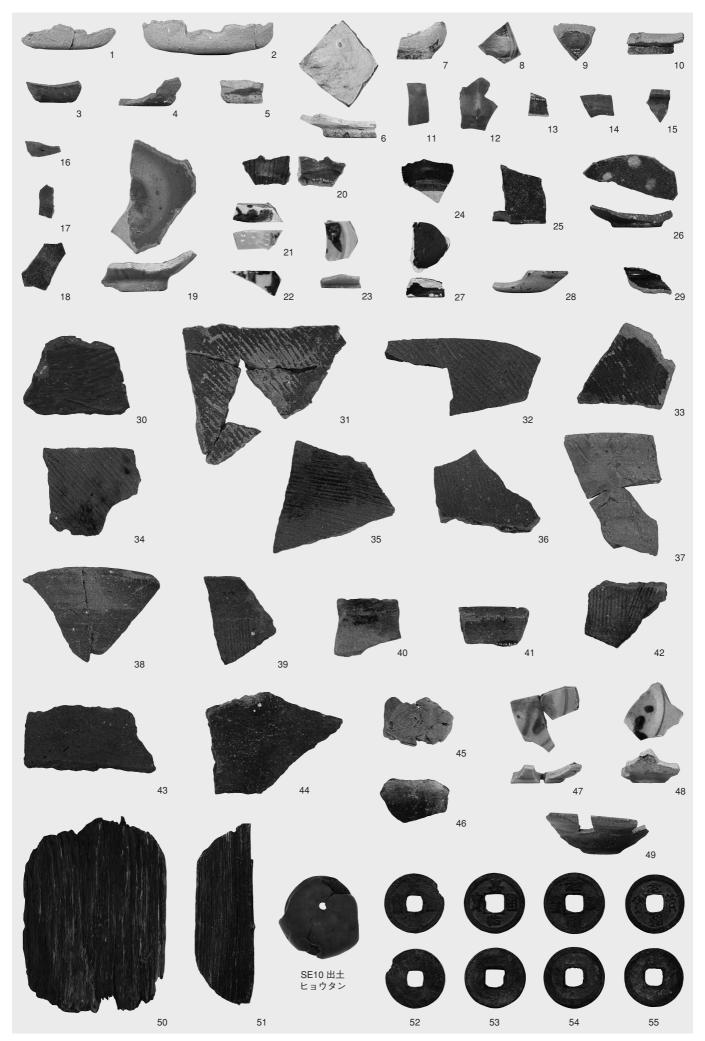


SD35 完掘(西から)



SX5完掘(東から)

松陰東遺跡 遺物写真 図 版 44





調査区全景(東から)



調査区全景(西から)



調査区全景(東から)



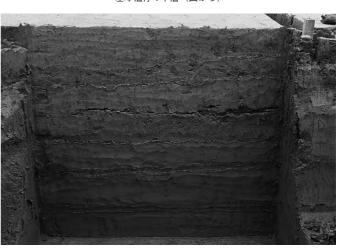
基本層序1上層(西から)



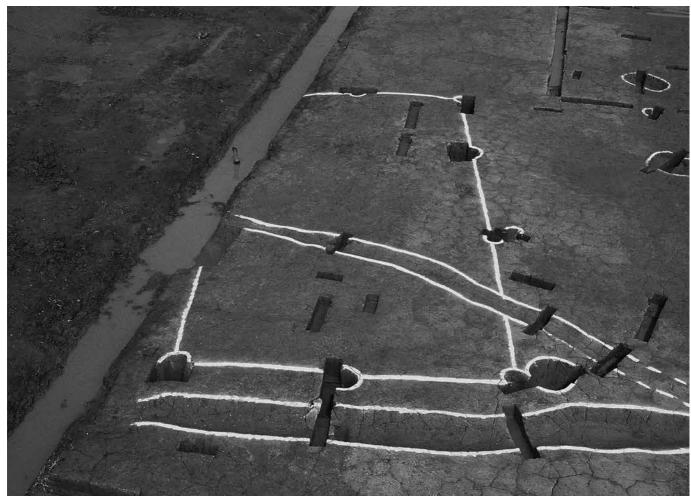
基本層序1下層(西から)



基本層序2上層(西から)



基本層序2下層(西から)



SB106全景(南から)



SB106全景(西から)



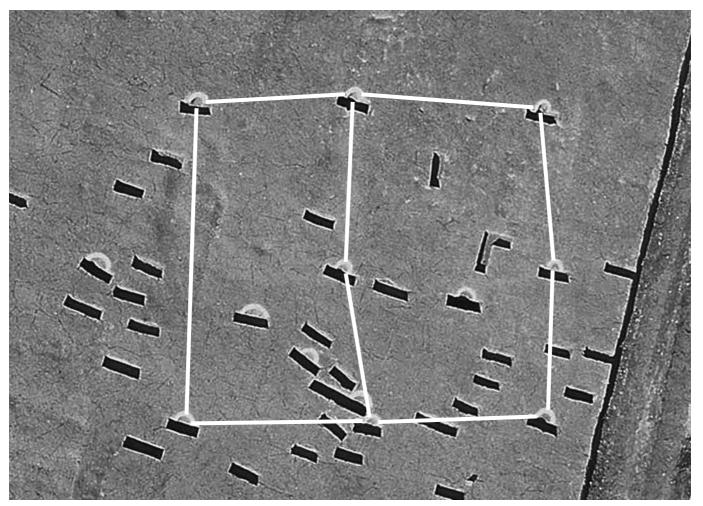
SB106P3南北セクション(東から)



SB106P4南北セクション(西から)



SB106P8東西セクション(南から)



SB366全景(南から)



SB366P1 東西セクション(南から)



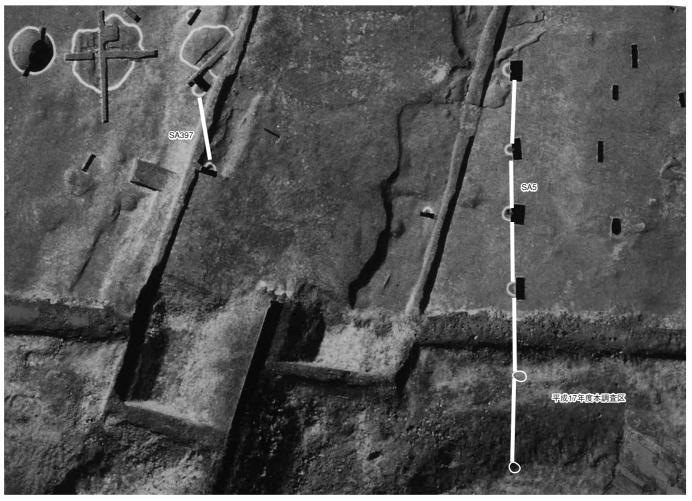
SB366P3 東西セクション(南から)



SB366P4東西セクション(南から)



SB366P6 東西セクション(南から)



SA5 · SA397全景 (西から)



SA5P3東西セクション(南から)



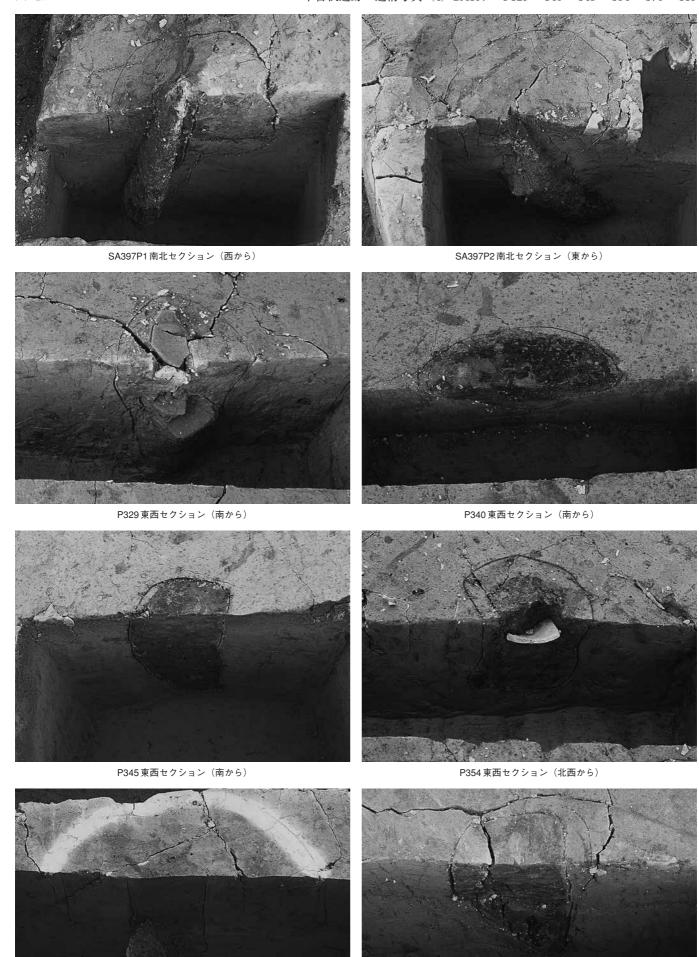
SA5P4東西セクション(南から)



SA5P5東西セクション(南から)

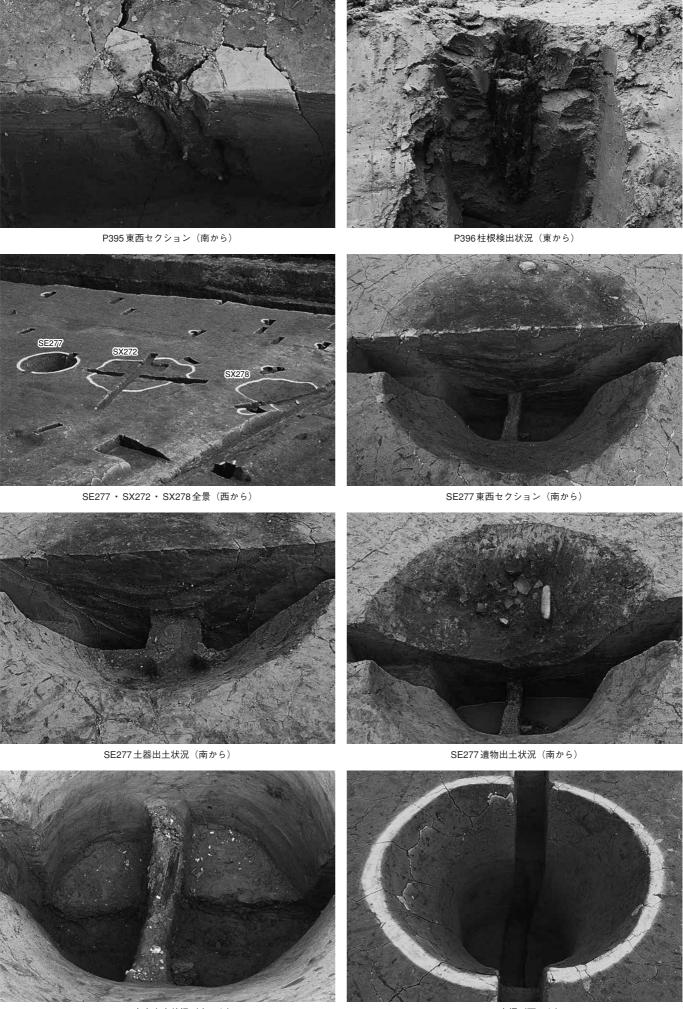


SA5P6東西セクション(南から)

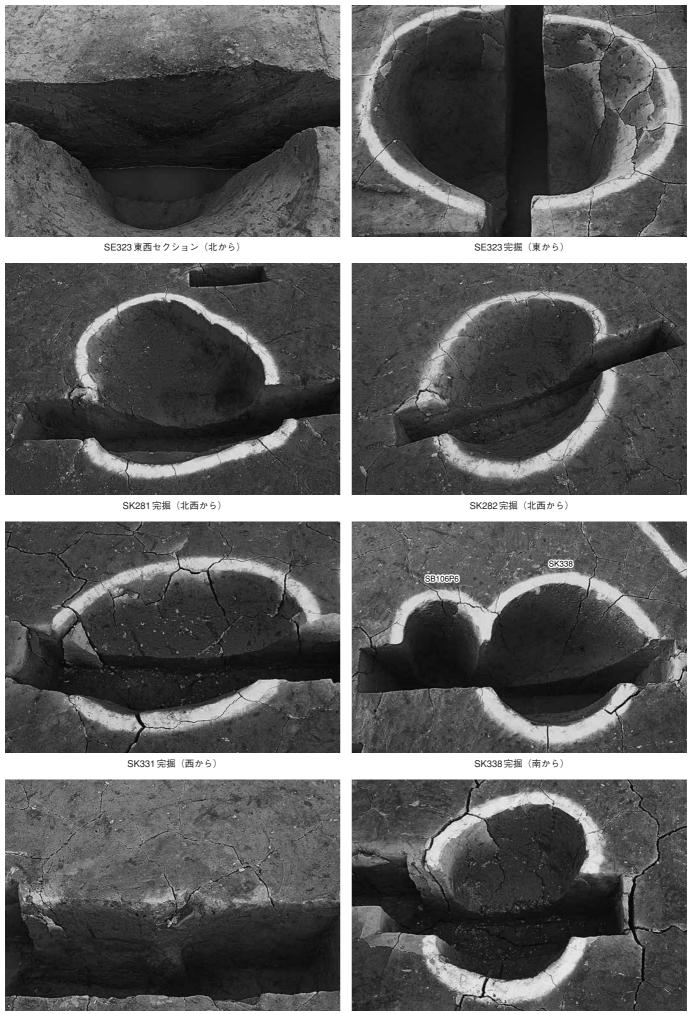


P376東西セクション(北から)

P389南北セクション(西から)



SE277斉串出土状況(南から) SE277完掘(西から)



SK339南北セクション(西から)

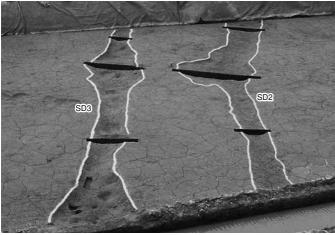
SK339 完掘(西から)



SK382南北セクション(西から)



SK382 完掘(西から)



SD2・SD3完掘全景(西から)



SD334 · SD375 完掘全景(西から)



SD334b-b'セクション(西から)



SD334 完掘(西から)



SD375b-b'セクション(西から)



SD375 完掘(西から)

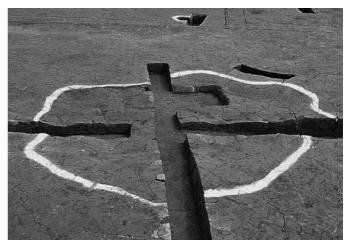




SX272東西セクション(南から)



SX272漆器出土状況(南東から)



SX272完掘全景(西から)



SX278遺物出土状況(南から)



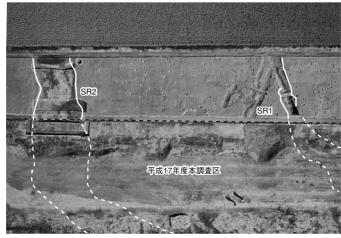
SX278東西セクション(南西から)



SX278 完掘全景(南西から)



SX394東西セクション(南から)



SR1・SR2 完掘全景(西から)



SR1a-a'セクション(西から)



SR1全景(西から)



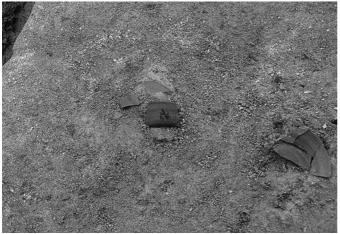
SR2南北セクション(西から)



作業風景



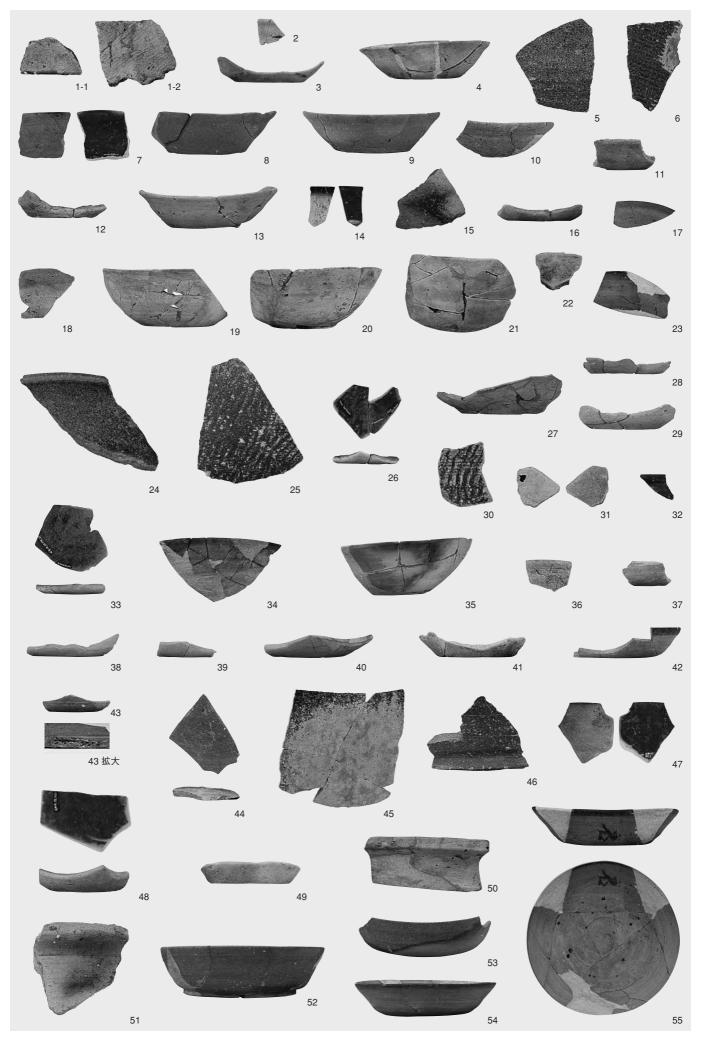
SR2遺物出土状況(南から)



SR2 墨書土器出土状況(北から)



SR2完掘(西から)



中曽根遺跡 遺物写真 (2) 図 版 56

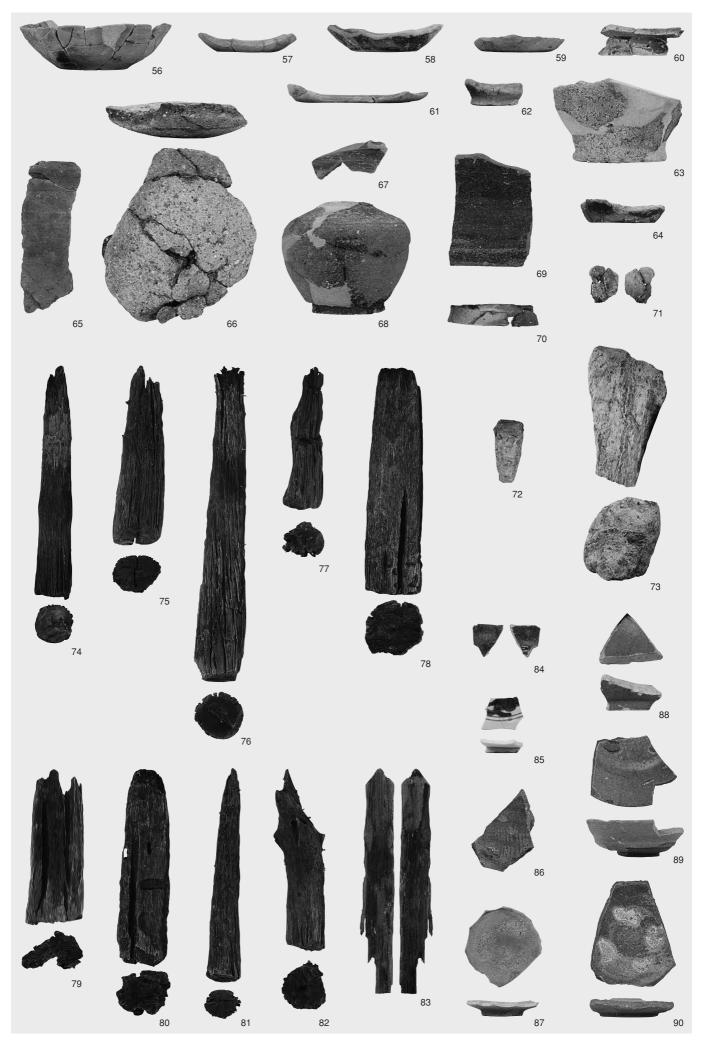


図 版 57 大館跡 全景 (1)

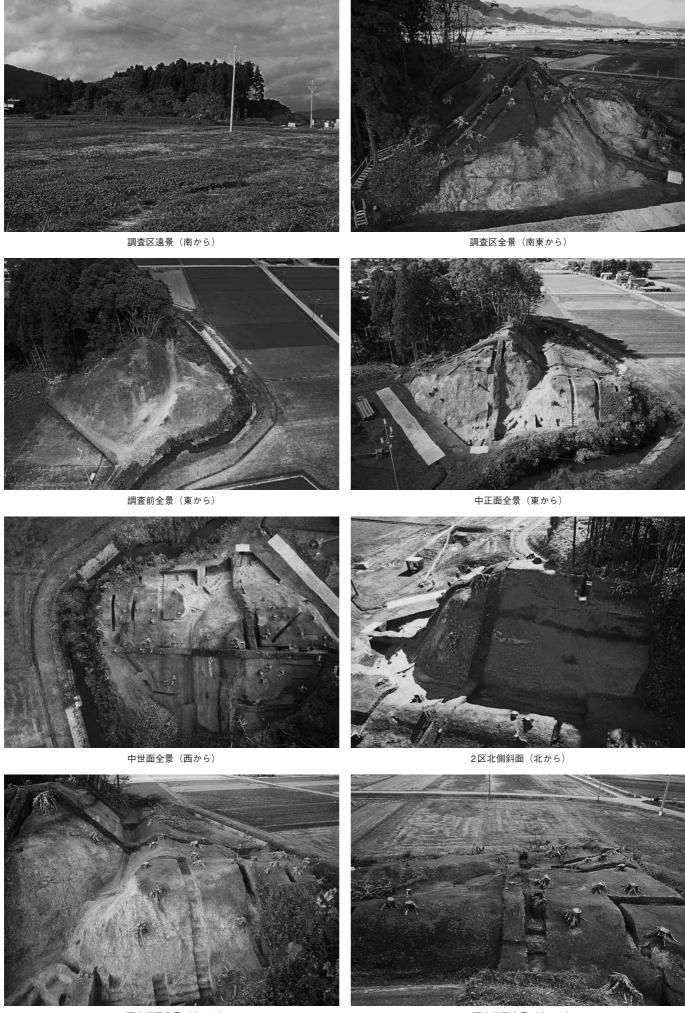


調査区全景(北東から村上城を望む)



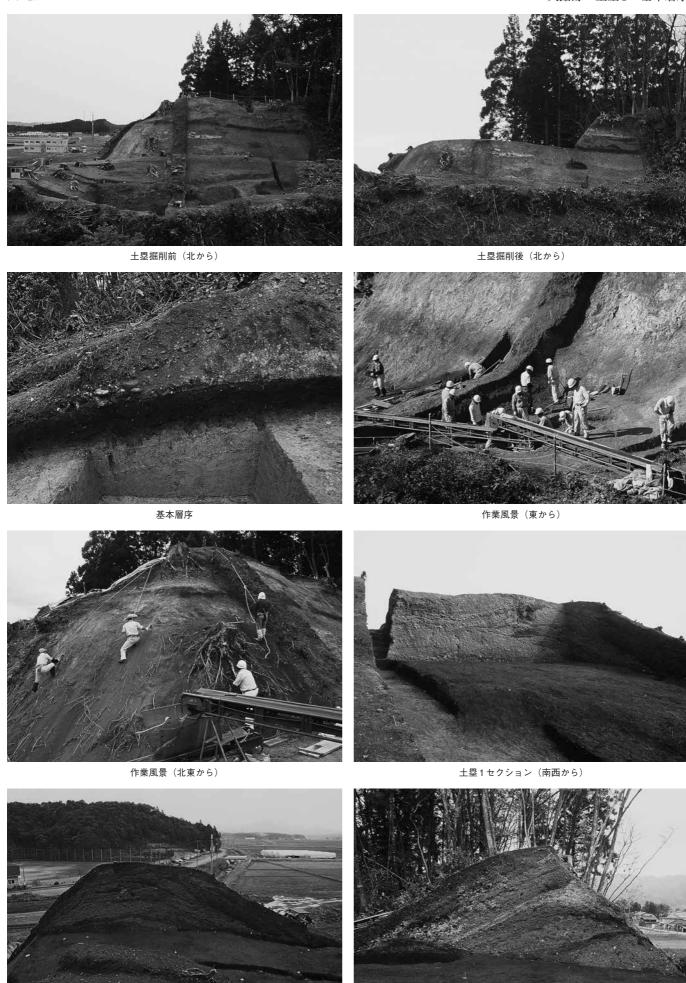
大館跡全景(南から)

大館跡 全景 (2) 図 版 58



1区中世面全景(東から) 1区中世面全景(南から)

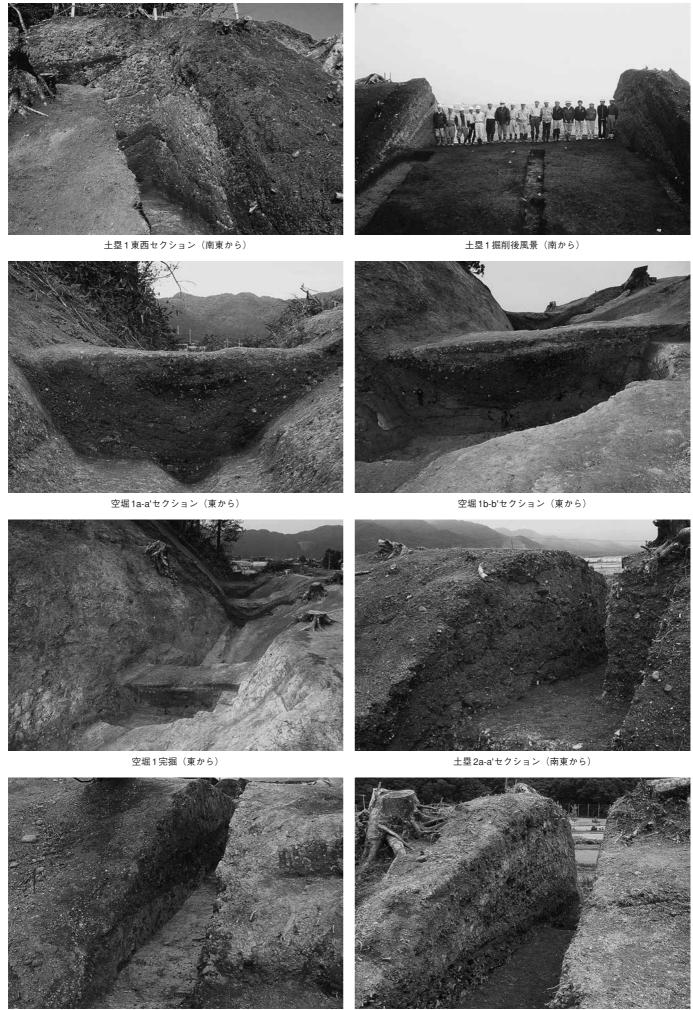
図 版 59 大館跡 土塁1·基本層序



土塁1南北セクション(西から)

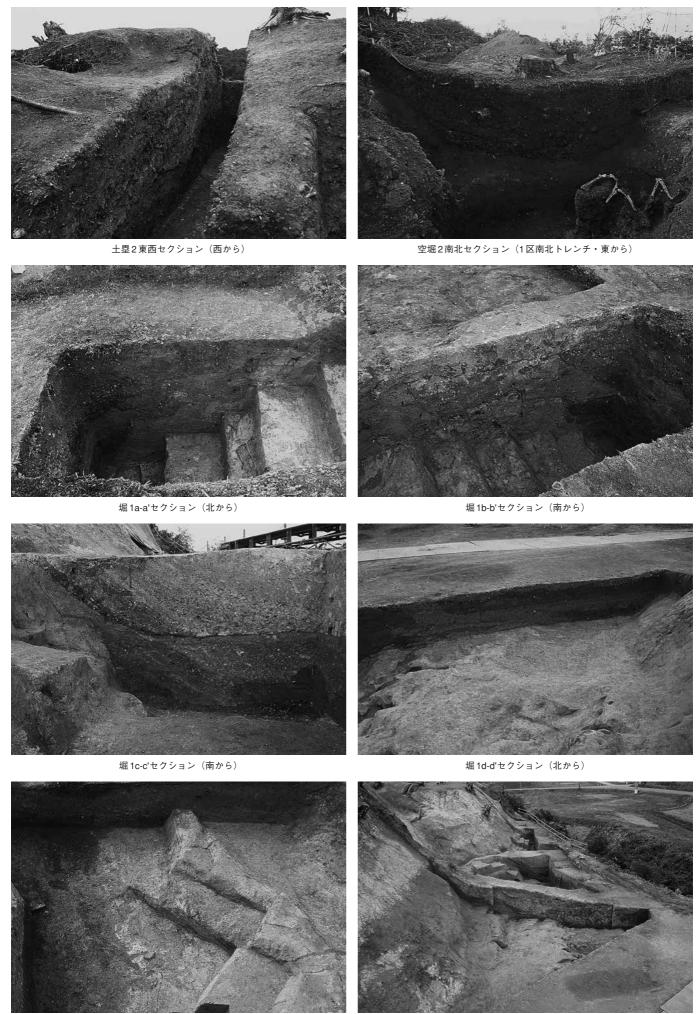
土塁1南北セクション(2区南北トレンチ2・東から)

大館跡 土塁1・2・空堀1



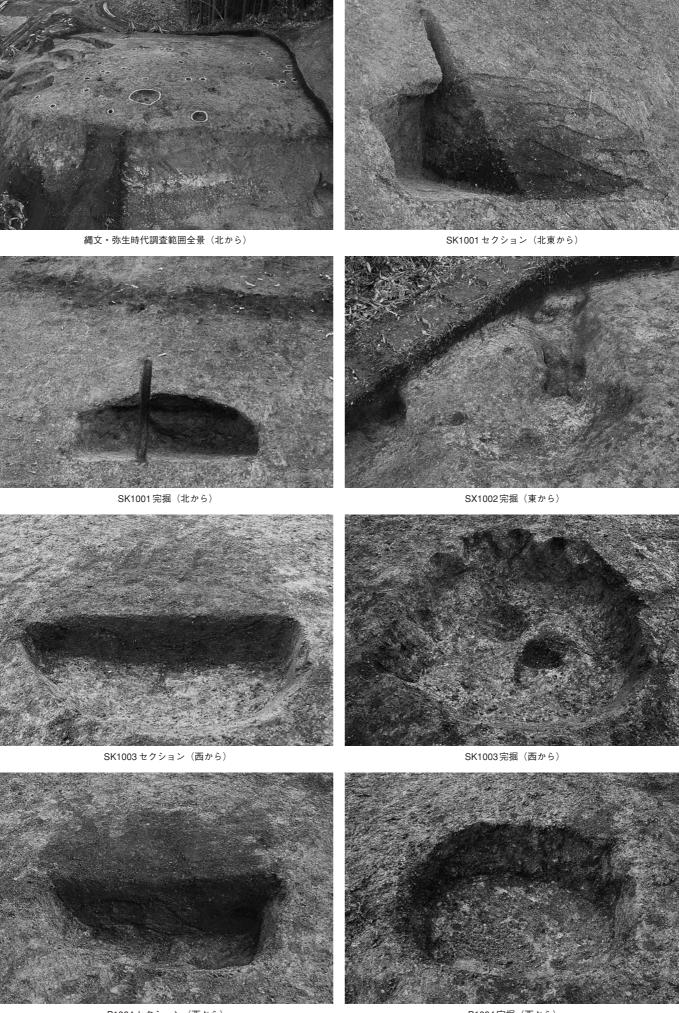
土塁2南北セクション(1区南北トレンチ・南東から)

土塁2東西セクション(1区東西トレンチ・西から)



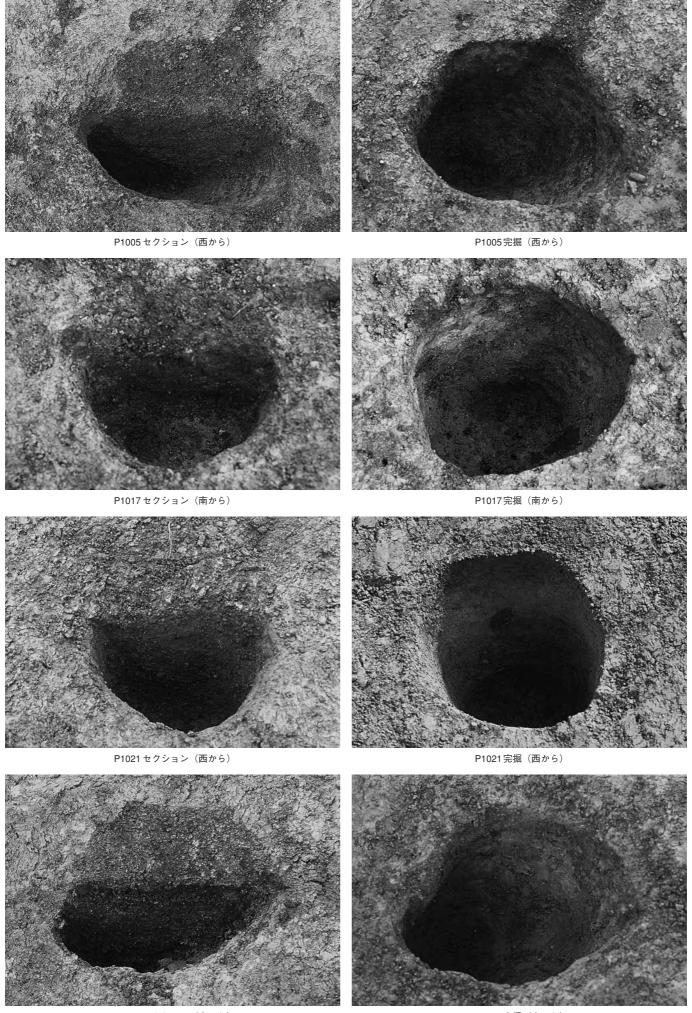
空堀1・堀2完掘(北から)

堀1完掘(南から)



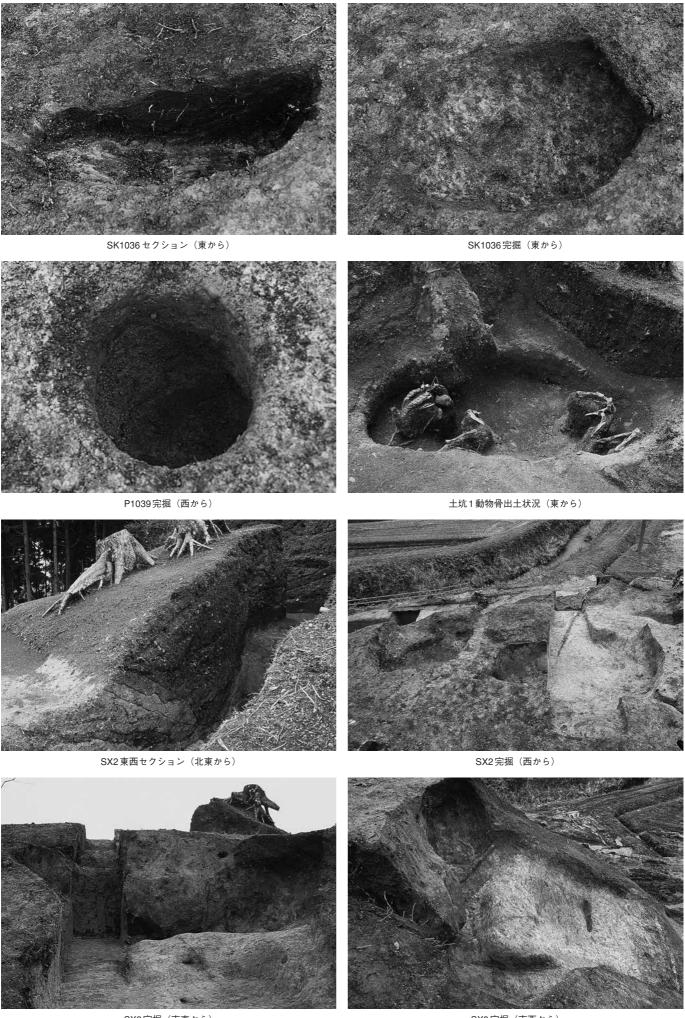
P1004セクション(西から)

P1004 完掘(西から)



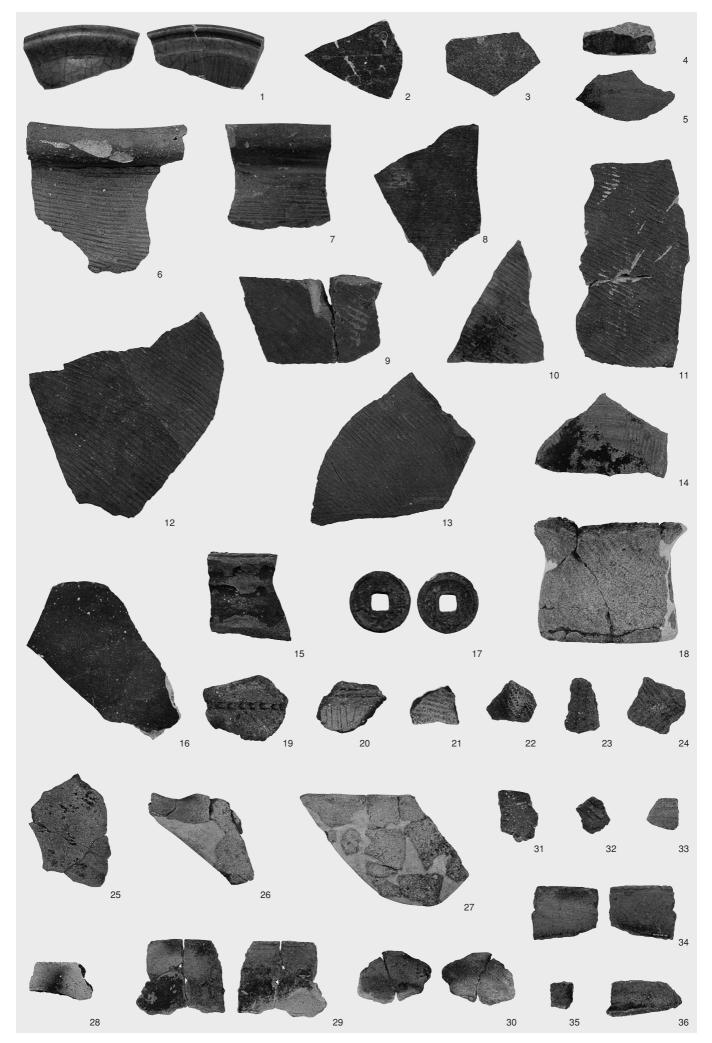
P1029セクション(南から)

P1029完掘(南から)

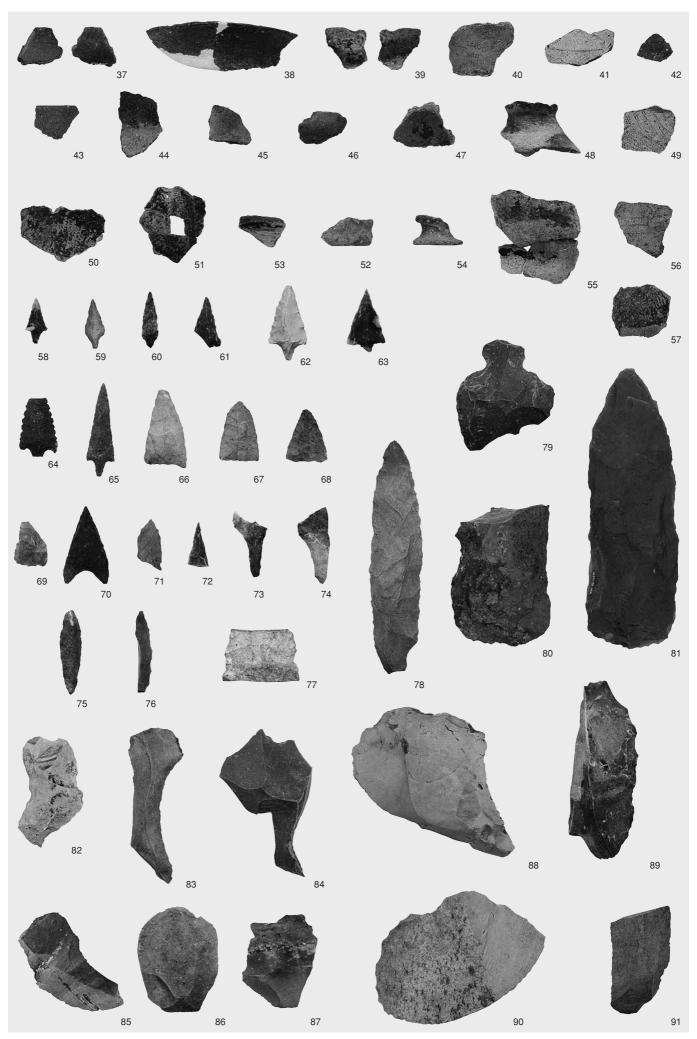


SX3完掘(南東から) SX3 完掘(南西から)

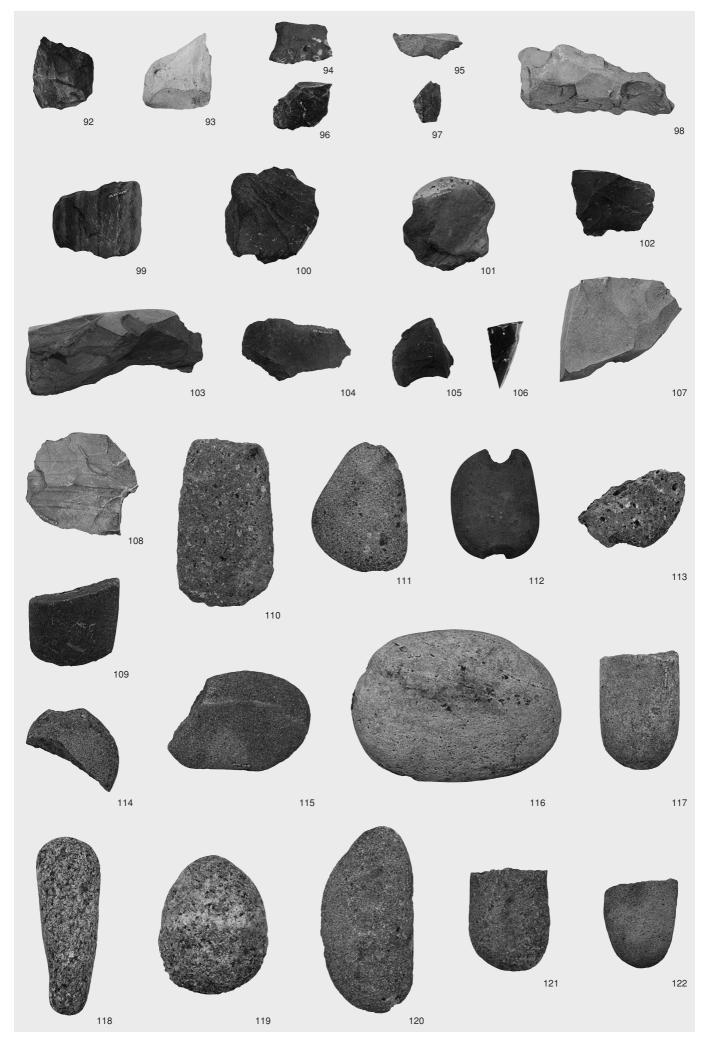
図 版 65 大館跡 遺物写真(1)



大館跡 遺物写真(2) 図版66



図版 67 大館跡 遺物写真(3)



報告書抄録

ふりがな	まつかげひがしいせき・なかそねいせき に・おおだてあと いち									
書 名	松蔭東遺跡・中曽根遺跡Ⅱ・大館跡I									
副書名	日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書									
卷 次	XXVI	XXVI								
シリーズ名	新潟県	上埋蔵文化財詞	周査報告	書						
シリーズ番号	第180	集								
編著者名	青木 学・松井政信・千喜良淳・北村和穂・佐野知美(以上 加藤建設株式会社) 小林紘一・丹生越子・伊藤 茂・山形秀樹・瀬谷 薫・Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・孔 智賢・ 野村敏江(以上株式会社パレオ・ラボ) 石川智紀(財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団)									
編集機関	財団法	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団・加藤建設株式会社								
所 在 地	〒956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津93番地1 電話 0250 (25) 3981 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒169-0072 東京都新宿区大久保1丁目10番8号 電話 03 (3209) 0311 加藤建設株式会社									
発行年月日	西暦20	008 (平成20)	年3月2	25日						
ふりがな所収遺跡	ふ	りがな 在 地	市町村	コード 遺跡番号	北緯。,,	東紹	調査期間	調査面 ㎡	積	調査原因
松蔭東遺跡	神林村 ^{まつかげ} 松蔭129	岩船郡 ^{らおおあざまきのめあざ} 大字牧目字 92ほか	15-58	3 226	38度 10分 07秒	139月 27分 09和	~20060707	3,	416m²	日本海沿岸 東北自動車道 建設
中曽根遺跡		岩船郡 ホ៵ぁぎゕなゃぁざ 大字金屋字	15-58	78	38度 09分 35秒	139 <u>5</u> 25 <i>5</i> 16₹	~20061011	2,	294 m²	日本海沿岸 東北自動車道 建設
おおだてあと 大館跡			15-21	2 57	38度 13分 46秒	139 305 294	~20061219	1,270㎡ (上層) 日本海沿岸 265㎡ (下層) 東北自動車流 建設		東北自動車道
所収遺跡名	種別	主な時代	t	主	な遺構		主な遺	 物		特記事項
松蔭東遺跡	集落	古代(9世紀	<u>I</u>)	掘立柱建物	(1棟)		須恵器 自然堤防上に立地		是防上に立地	
		中世		柱穴列(1列))		国産陶器 輸入陶磁器 する集落		 	
		(12~16世)	紀)	井戸 (2基)	土坑(5	基)	珠洲焼 中世土師器			
		近世		溝状遺構 (6) 性格不明遺構	• • • •		柱根 礎板 陶磁器 銭貨		-	
中曽根遺跡					弥生土器					
	集落			基)	土師器 須恵器 漆器 斎串 柱根 石製品 羽口		川辺に立地する集落			
		中世・近世 性格不明遺構 (4基				陶磁器				
大 館 跡	集落 縄文・弥生時代 ピッ 土坑		ピット(35基) 土坑(3基) 性格不明遺構(1基)			縄文土器 弥生土器 石器				
	城館跡	城館跡 中世				珠洲焼 陶磁器 銭貨	自然丘陵を利用した 防御施設			
		その他		土坑(1基) 性格不明遺構	掱(2基)					

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第180集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XXVI 松蔭東遺跡・中曽根遺跡II・大館跡I

平成20年3月24日 印刷 平成20年3月25日 発行

発 行 新潟県教育委員会

〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1

電話 025 (285) 5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1

電話 0250 (25) 3981 FAX 0250 (25) 3986

印刷·製本 八幡印刷株式会社

〒970-8026 いわき市平字田町82-13

電話 0246 (23) 1471

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第180集『松蔭東遺跡 中曽根遺跡 大館跡 I』 正誤表

77117971 ±7147241	10/11 With 12 10 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11	71 - 7 I E E 7 C E E E E E E E E E E E E E E E E					
頁	位置	誤	正				
抄録	松蔭東遺跡 北緯	38度10分07秒	38度10分18秒				
抄録	松蔭東遺跡 東経	139度27分09秒	139度26分59秒				
抄録	中曽根遺跡 北緯	38度09分35秒	38度07分47秒				
抄録	中曽根遺跡 東経	139度25分16秒	139度25分05秒				
抄録	大館跡 北緯	38度13分46秒	38度13分58秒				
抄録	大館跡 東経	139度30分29秒	139度30分18秒				